

博士論文

大学生における子どもへの関心と その関連要因および 子育ての社会化志向への影響

東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科
学校教育学専攻 教育方法論講座
扇原 貴志

主指導教員
首藤 敏元 教授

目次

はじめに 子どもを育む大人と若者を取り巻く現状	- 7 -
はじめに-1 晩婚化・晩産化・少子化	- 7 -
はじめに-2 今日の社会における子どもと子育て	- 7 -
はじめに-3 青年期後期の若者と子ども・子育て	- 9 -
はじめに-4 本論文の構成.....	- 10 -
第1章 子どもへの態度を巡る概念と先行研究	- 13 -
1-1 子どもへの関心を内包する従来の概念	- 13 -
1-2 子どもへの関心に焦点を当てる理由	- 15 -
1-3 想定される子どもへの関心の関連・規定要因	- 17 -
1-3-1 乳幼児との接触経験と接触時の感情	- 17 -
1-3-2 対児感情	- 18 -
1-3-3 子ども観	- 18 -
1-3-4 他者意識	- 19 -
1-3-5 次世代育成力	- 20 -
1-3-6 子育ての社会化志向	- 20 -
1-3-7 本研究で取り扱う概念のまとめと図式化.....	- 22 -
第2章 子どもへの態度の研究手法	- 23 -
2-1 質問紙法	- 23 -
2-1-1 質問紙法による養護性の測定	- 23 -
2-1-2 質問紙法による親準備性の測定	- 25 -
2-1-3 質問紙法による対児感情の測定	- 27 -
2-1-4 質問紙法による子ども観の測定	- 27 -
2-2 選好法・画像呈示法	- 29 -
2-3 観察法	- 32 -

2-4	文章記述法	- 34 -
2-5	面接法	- 35 -
2-6	IFEEL Pictures	- 36 -
2-7	映像呈示法	- 37 -
2-8	泣き声呈示法	- 38 -
2-9	海外における子どもへの態度の測定法のまとめ	- 40 -
2-10	先行研究での測定方法の長所と短所および総合的な有利さ	- 43 -
2-10-1	質問紙法の長所・短所	- 44 -
2-10-2	選好法・画像呈示法の長所・短所	- 44 -
2-10-3	観察法の長所・短所	- 44 -
2-10-4	文章記述法の長所・短所	- 45 -
2-10-5	面接法の長所・短所	- 45 -
2-10-6	IFEEL Pictures の長所・短所	- 45 -
2-10-7	映像呈示法の長所・短所	- 46 -
2-10-8	泣き声呈示法の長所・短所	- 46 -
2-11	本研究で用いる手法	- 46 -
第3章	子どもへの関心尺度の作成	- 48 -
3-1	問題と目的	- 48 -
3-2	予備調査：「子ども」の定義	- 48 -
3-2-1	目的	- 48 -
3-2-2	方法	- 48 -
3-2-3	結果と考察	- 49 -
3-3	本調査：子どもへの関心尺度の作成	- 50 -
3-3-1	目的	- 50 -
3-3-2	方法	- 50 -
3-3-3	結果と考察	- 52 -
3-4	まとめ	- 60 -

第4章	子どもへの関心と子ども観および他者意識との関連	—子どもへの関心尺度の 更なる併存的妥当性の検証—	- 62 -
4-1	問題と目的		- 62 -
4-2	予備調査：子ども観尺度の因子構造の確認		- 63 -
4-2-1	目的		- 63 -
4-2-2	方法		- 63 -
4-2-3	結果と考察		- 64 -
4-3	本調査：子どもへの関心と子ども観および他者意識との関連		- 66 -
4-3-1	目的		- 66 -
4-3-2	方法		- 66 -
4-3-3	結果と考察		- 67 -
4-4	まとめ		- 73 -
第5章	子どもへの関心尺度の行動的・概念的妥当性の検証		- 75 -
5-1	問題と目的		- 75 -
5-2	調査1：子どもへの関心尺度得点と幼児画像への選好との関連		- 75 -
5-2-1	目的		- 75 -
5-2-2	方法		- 76 -
5-2-3	結果と考察		- 77 -
5-3	調査2：子どもへの関心と次世代育成力との関連		- 81 -
5-3-1	目的		- 81 -
5-3-2	方法		- 81 -
5-3-3	結果と考察		- 82 -
5-4	調査3：養護性と子どもへの関心との関連		- 85 -
5-4-1	目的		- 85 -
5-4-2	方法		- 87 -
5-4-3	結果と考察		- 88 -
5-5	まとめ		- 92 -

第 6 章 過去の乳幼児との接触経験と接触時の感情が子どもへの関心に及ぼす影響	- 93 -
6-1 問題と目的	- 93 -
6-1-1 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情を取り上げる理由	- 93 -
6-1-2 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情を測定する尺度を作成する必要性	- 93 -
6-1-3 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情を要因とした場合のモデル構築	- 95 -
6-2 予備調査：過去の乳幼児との接触経験尺度および接触経験時感情尺度の作成	- 97 -
6-2-1 目的	- 97 -
6-2-2 方法	- 97 -
6-2-3 結果と考察	- 98 -
6-3 本調査：過去の乳幼児との接触経験および接触時感情と子どもへの関心の関連	- 108 -
6-3-1 目的	- 108 -
6-3-2 方法	- 108 -
6-3-3 結果と考察	- 109 -
6-4 まとめ	- 120 -
第 7 章 子どもへの関心と子育ての社会化志向との関連	- 122 -
7-1 問題と目的	- 122 -
7-1-1 子育ての社会化志向を取り上げる理由	- 122 -
7-1-2 子育ての社会化に関する先行研究と子育ての社会化志向の定義	- 124 -
7-1-3 子育ての社会化志向尺度の併存的妥当性を確認する尺度	- 125 -
7-2 予備調査：子育ての社会化志向尺度の項目作成と精選	- 128 -
7-2-1 目的	- 128 -
7-2-2 方法	- 128 -
7-2-3 結果と考察	- 129 -
7-3 本調査：子育ての社会化志向尺度の作成および子どもへの関心との関連	- 132 -
7-3-1 目的	- 132 -

7-3-2	方法	- 132 -
7-3-3	結果と考察	- 133 -
7-4	まとめ	- 156 -
第8章	総合考察	- 157 -
8-1	子どもへの関心の構成概念	- 157 -
8-1-1	子どもへの関心の下位尺度	- 157 -
8-1-2	子どもへの関心尺度の併存的妥当性	- 159 -
8-1-3	子どもへの関心尺度の構成概念妥当性	- 160 -
8-2	子育ての社会化志向の構成概念	- 164 -
8-2-1	子育ての社会化志向尺度の下位尺度	- 164 -
8-2-2	子育ての社会化志向尺度の妥当性	- 165 -
8-3	子どもへの関心の要因と子育ての社会化志向との関連	- 166 -
8-3-1	子どもへの関心の要因	- 166 -
8-3-2	子どもへの関心が子育ての社会化志向に及ぼす影響	- 168 -
8-3-3	関係性のモデル	- 169 -
8-4	教育への応用可能性	- 170 -
8-4-1	中学・高校におけるふれあい体験学習への応用可能性	- 170 -
8-4-2	予防教育としての応用可能性	- 171 -
8-4-3	大学生のキャリア教育としての応用可能性	- 172 -
8-5	本論文で実施した研究の限界と今後の課題	- 176 -
8-5-1	子どもへの関心尺度について	- 176 -
8-5-2	過去の乳幼児との接触経験と接触時感情について	- 177 -
8-5-3	子育ての社会化志向尺度について	- 178 -
8-6	おわりに	- 180 -
8-6-1	リプロダクティブ・ライツと子育て	- 180 -
8-6-2	子育ての社会化を促す教育の可能性	- 181 -
8-6-3	人口減少社会において子どもへの関心を高め、子育ての社会化を促す意味	- 182 -

引用文献.....	- 185 -
謝 辞.....	- 199 -

はじめに 子どもを育む大人と若者を取り巻く現状

近年、若者の経済・雇用環境および価値観の変化といったライフスタイルの変化に伴い、未婚化や晩婚化、それに伴う晩産化により少子化が進行し、結婚しても子どもをもたない選択をする家庭が増加している。まず本章では、このことを各種のデータから読み解き、本論文の目的と構成について述べる。

はじめにー1 晩婚化・晩産化・少子化

厚生労働省（2016a）によると、平均初婚年齢は年々上昇し、2015年には夫31.1歳、妻29.4歳となり過去最高となった。これに伴い晩産化も進み、2015年の第1子出生時の母の平均年齢は30.7歳となり、過去最高となっている（厚生労働省、2016a）。我が国の合計特殊出生率は、1989年に丙午の年（1966年）よりも下回り1.57を記録した、いわゆる「1.57ショック」以降も低下を続け、2005年には1.26と過去最低となった。その後はわずかながら上昇に転じ、2016年には1.44となっている。（厚生労働省、2017）。ただし、出生数そのものは年々減少し続け、2016年の出生数は97万6979人で、1899年の統計開始以来、初めて100万人を割り込み、過去最低となった（厚生労働省、2017）。

また、15歳以下の児童がいる世帯の割合は、統計を開始した1986年では全世界帯のうち46.2%であったが、その後、減少し続け、1992年には4割を切り36.4%、2001年には3割を切り28.8%、最新の2015年には23.5%となっている（厚生労働省、2016b）。また、夫婦が理想とする子どもの数と実際の子どもの数の開きもある。夫婦に尋ねた理想とする子どもの数は、2010年では2.42人であった（国立社会保障・人口問題研究所、2011）。その一方、結婚からの経過期間が15～19年夫婦の平均出生子ども数であり、夫婦の最終的な平均出生子ども数とみなされる完結出生児数は、2010年に統計開始以来、初めて2を下回り1.96人、2015年にはさらに低下し、1.94人となった（国立社会保障・人口問題研究所、2016）。このように、若者の取り巻く環境やライフスタイルおよび価値観の変化や多様化により、子どもをもたないという選択が広まりつつある。その一方、子どもをもちたくても、もてない夫婦も増加していると推測される。

はじめにー2 今日の社会における子どもと子育て

他方、子どもをもっている、核家族世帯での子育てにおける親子の孤立、児童虐待認

知件数の増加、解消されない待機児童問題、子どもの声を騒音として行政や保育所等を訴える騒音訴訟、新規保育所建設における周辺住民の反対運動の頻発、貧困状態にある子どもの増加など、今日の日本社会には子どもや子育てを巡る多くの問題が存在しており、決して子育てがしやすい社会とは言えない。実際、内閣府政策統括官（2009）が海外での子育て経験があり、現在日本に居住している母親を対象に実施した調査では、多くの人が海外の方が子育てしやすかったと回答している。

また、内閣府政策統括官（2012）によれば、都市部よりも地方の方が両親（子どもから見て祖父母）からの子育て支援を多く受けており、両親からの支援が多いほど、子育てがしやすく、出生率も高い。特に都市において地方の両親と離れて暮らし、核家族を形成するライフスタイルが確立されつつある今日において、子育てを夫婦のみが担うという旧来のモデルには多くの課題があるといえよう。2005年の国民生活白書において、親世代だけでなく、同世代の友人、会社の同僚、近隣に住む人々など、社会全体で何らかの子育てに参加する、あるいはそれができる仕組みを構築していくこと、子育てが家族の責任だけで行われるのではなく、社会全体によって取り組む、「子育ての社会化」が重要である（内閣府、2005）と指摘されたように、社会全体で子どもの育ちを支えていく仕組み、風土、意識の涵養がより一層求められる時期に来ているといえる。子育ての社会化を目指すためには、各個人が子どもに対して関心を持ち、社会を挙げて子どもを育もうとする姿勢や意識を持つことが重要である。

社会の中で子どもは、将来の社会を担う存在であり、文化や伝統、知識や技術を継承する存在であり、我々の命を次の時代、次の命へと繋ぐ存在である。子どもの数が減少している社会において、本来子どもは社会の多くの構成員から保護、養育、教育の対象となるべき存在である。しかし、子どもが社会から減り、日常において子どもを見かける機会が減少することで、子どもの存在が社会から見落とされやすくなっているのではないか。

本田（2007、2009）は、近代以降の日本における子ども観について概観し、近代化の中で、子どもは労働力から教育や保護の必要性がある経済的コストのかかる存在へと変化したと指摘している。それと同時に、子どもを学校や公園といった場所に囲い込むことで保護し、社会の一員として扱うのではなく、大人社会から排除される存在として扱うようになったとした。また以前は、子どもを産むことは「国の役に立つこと」という価値観が存在し、それが子どもを産むことを動機づけられていたが、近年はそうした価値観は消失し、産む・産まないは個人の選択へと変化したとしている。子どもを産むことが個人の選択に

委ねられるようになった結果、子育ては個人の私的な営みとなり、子どもは親の私物所有物に変化したとしている。そして、このことが子育てに他者の介入を許さない、あるいは介入を回避する風潮が出現したと指摘した。加えて、子どもとふれあう機会の減少により「子ども無知」、「子ども嫌い」の大人を出現させていることを指摘した。このような点から、子どもは社会の中で忌避される存在への変化したことを述べた。

一方、荒川（2005）は、1980年と比較して2005年の方が、子どもを「かわいい」と感じて親和的な態度を持つ者が増えていることを示した。これは本田（2007, 2009）の意見とは反する。子どもは今日の日本社会および個人の中で好意的な存在として受け止められているのであろうか、それとも忌避される存在として認識されているのであろうか。特に、近い将来、子育てを直接的にも間接的にも担う可能性が高い青年期後期の者は、子どもに対してどのような態度や意識を有しているのであろうか。

はじめにー3 青年期後期の若者と子ども・子育て

現在の青年期後期の者は、「1.57 ショック」以降に生まれ、すでに少子化が進んだ社会の中で育ってきた。子どもが少ない時代に育ってきた彼・彼女たちにとって、子どもとはどのような存在なのであろうか。2016年には選挙権年齢が18歳に引き下げられたことから、少子化社会を生きる青年期後期の若者であっても、主権者として子どもや子育てに関する問題に関心と意識を持つことが期待される。

青年期後期の者がおかれている状況に目を転じてみると、高校卒業者の大学進学率は年々上昇し、2015年には男性52.1%、女性56.9%となっている一方、高校卒業者の就職率は男性21.5%、女性14.1%となっている（総務省統計局、2017）。つまり、青年期後期の18歳の人々の過半数は就職せず大学に進学している。このことから、現代における大学生は青年期後期の者を代表する集団として捉えることができる。

大学生進学率の上昇と呼応するようにして晩婚化が進んでいる。上述のように、2015年の平均初婚年齢は夫31.1歳、妻29.4歳（厚生労働省、2016a）となっている。晩産化も進んでおり、第1子誕生時の平均年齢は2014年の調査で、男性32.6歳、女性30.6歳（厚生労働省、2015）となっている。一方で視点を変えてみると、大学を卒業するのが22歳とした場合、晩婚化・晩産化が進み、未婚率が上昇している現代であっても、平均的に見れば大学卒業後約10年以内には結婚と第1子の誕生を迎える。中学生や高校生にとって、結婚や出産は今まで生きてきた年齢の倍近い、あるいは倍以上の15年ほど先の出来事であり、

彼・彼女たちの時間感覚からすれば、それははるか先のことのように感じられるだろう。従って、中学・高校生は子どもや子育てに関する問題に対する関心は小さいか、関心があったとしても現実感を持ちにくいものであると考えられる。それに対して大学生は、年齢的に結婚や出産に近くなり、また、卒業後の人生設計を考え始めるなど、徐々に子どもや子育てについて現実感を持ち始めると考えられる。

一方で、大学生は中学・高校卒業後に就職した同世代の者とは異なり、フルタイムでの労働や納税をしていない。しかし、学生によっては一人暮らしを始める、アルバイトや就職活動などを通して多様な世代と交流し始めるなど視野が広がり、将来のライフイベントやキャリアについて考え始める時期でもある。すなわち、大学生は大人への過渡期に位置している。他方、大学生は弟妹やその友人である地域の子ども、親戚の子どもが成長し、子どもとの接点を持ちにくい年齢層でもある。大人への過渡期に位置するものの、実際の子どもや子育てからは少し遠い位置に存在する大学生を対象に子どもへの態度や意識を検討することは、近い将来における子どもや子育ての様相を予測することにつながる。

そこで本論文では、近い将来、子どもをもつ・もたないにかかわらず、子育てを直接的にも間接的にも担い、支える存在となる若者、特に大学生の子どもへの態度を検討し、子どもに対する意識やその要因について明らかにするものである。

はじめに-4 本論文の構成

以上の若者の子どもや子育てへの態度を検討するため、本論文では5つの研究を行った(表 はじめに-1)。そして、それらの研究結果を理解しやすく示すために、以下のような章立てで述べることとした(表 はじめに-2)。

表 はじめに-1 本論文で行った5つの研究

	目的	方法	測度(尺度)	初出の研究
研究1	子どもへの関心尺度の作成する。	質問紙法	子どもへの関心尺度, 対児感情尺度, 幼児との接触経験尺度	扇原・村井(2012)
研究2	子どもへの関心尺度の更なる併存的妥当性の検討する。	質問紙法	子どもへの関心尺度, 子ども観尺度, 他者意識尺度	扇原・上村(2013)
研究3	質問紙法により測定した子どもへの関心の程度と選好法により測定した子どもへの選好との関連の検討する。	質問紙法, 選好法	子どもへの関心尺度, 幼児画像への選好数	扇原・上村(2015)
研究4	①乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響を検討する。 ②子どもへの関心と次世代育成力の関連の検討する。	質問紙法	①子どもへの関心尺度, 乳幼児との接触経験尺度, 乳幼児との接触時感情尺度 ②子どもへの関心尺度, 次世代育成力尺度	①扇原・首藤(2016), 扇原(2017) ②扇原(2015)
研究5	①子育ての社会化志向の作成と子どもへの関心との関連の検討する。 ②子どもへの関心と養護性の関連の検討する。	質問紙法	子育ての社会化志向尺度, 社会的事象への無関心尺度, 社会考慮尺度, 「母性愛」信奉傾向尺度, 養護性尺度, 子どもへの関心尺度	①扇原(2016) ②未発表

表 はじめに-2 本研究の章立てとその内容

	章題	内容	含まれる研究
はじめに	子どもを育む大人と若者を取り巻く現状	本論文の導入として今日の社会における子どもと子育ての問題について概説する。	
第1章	子どもへの態度を巡る概念と先行研究	子どもへの態度に関する先行研究を概観し、先行研究での課題を整理する。	
第2章	子どもへの態度の研究手法	先行研究における子どもへの態度の研究手法について概観して整理し、本論文で用いる研究方法を選定する。	
第3章	子どもへの関心尺度の作成	「子ども」の年齢層を定義し、子どもへの関心尺度を作成する。	研究1
第4章	子どもへの関心と子ども観および他者意識との関連—子どもへの関心尺度の更なる併存的妥当性の検証—	子どもへの関心と子ども観、他者意識との関連を検討する。	研究2
第5章	子どもへの関心尺度の行動的・概念的妥当性の検証	尺度により測定した子どもへの関心と選好法により測定した子どもへの選好との関連を検討する。また、子どもへの関心と次世代育成力、上位概念である養護性との関連を検討する。	研究3, 研究4の一部, 研究5の一部
第6章	過去の乳幼児との接触経験と接触時の感情が子どもへの関心に及ぼす影響	過去の乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響を検討する。	研究4の一部
第7章	子どもへの関心と子育ての社会化志向との関連	子育ての社会化志向尺度を作成し、子どもへの関心との関連を検討する。	研究5
第8章	総合考察	子どもへの関心と子育ての社会化志向の構成概念、要因、教育への応用可能性等について述べる。併せて、今後の課題を述べる。	

まず、第1章では、子どもへの態度を巡る先行研究について概観し、子どもを目にした際に最初に生じる感情である子どもへの関心と、それに関連すると思われる要因を見ていく。この中で、先行研究における課題について整理する。

第2章では、従来、子どもへの態度の測定に用いられてきた方法と、その結果について概観し、各測定法の長所と短所、課題について整理する。その上で、本研究で用いる方法を決定する。

第3章では、これまで明確に定義されてこなかった「子ども」としてイメージされる年齢層を調査により定義し、それに従って子どもへの関心の程度を測定する尺度を作成するとともに、尺度の信頼性と併存的妥当性について検討する。

第4章では、子どもへの関心と関連する心理的要因について子ども観と他者意識を取り上げ、それらとの関連を見ることにより、子どもへの関心尺度の更なる併存的妥当性を検討する。

第5章では、子どもへの関心尺度と実際の行動との関連について、実験的な手法を用いて検討する。同時に、子どもへの関心の上位概念として位置付けられる養護性との関連を検討することで、子どもへの関心の構成概念妥当性について検討する。

第6章では、子どもへの関心の要因として乳幼児との接触経験と接触時の感情を取り上げ、それらとの関連を検討することで、子どもへの関心の要因を明らかにする。

第7章では、子どもへの関心と社会全体で子育てを支えようとする志向性である子育て

の社会化志向との関連を検討する。これにより、子どもへの関心の程度が近年課題となっている社会全体での子育てを目指す態度とどのような関連があるのか検討し、子どもへの関心尺度の応用可能性について検討する。

第8章では、以上の研究結果をもとに子どもへの関心、子どもへの関心と子育ての社会化志向の構成概念、要因、教育への応用可能性等について述べる。大学生の子どもへの関心を高めることの意義について心理学的、教育学的な観点から総合的な考察を加えると同時に、本研究を通して浮かび上がってきた課題について述べる。

以上の一連の研究を通して、少子化社会における若者、特に近い将来、社会に参画し、直接的にも間接的にも子育てに関与するであろう大学生における子どもへの態度について検討していく。そして、子どもへの態度の要因について明らかにするとともに、現代社会が抱える子どもや子育てに関する諸問題を解決するための示唆を得ることを試みる。

第1章 子どもへの態度を巡る概念と先行研究

1-1 子どもへの関心を内包する従来概念

大人が有する子どもへの態度を検討した研究は、古くは Lorenz (1943)に遡ることができる。Lorenz (1943)は、ヒトは子どもを見ると、その大きな目、ふっくらとした頬、広い額、ずんぐりむっくりとした体つきといった身体的特徴である「幼児図式 (baby schema ; kindchenschema)」に反応し養育感情が生起し、子どもへの関心が生じるとした。この反応は生得的解発機構の1つとされ、ヒトが子どもを目にした際に関心が生じるのは、ヒトが持つ原初的な反応の1つであるとされる。しかし実際には、子どもへの関心の程度には個人差が存在する。それでは、どのような要因が子どもへの関心の高低を規定しているのだろうか。そこで、まず以下では従来、子どもへの関心がどのような概念のもと、研究されてきたのか概説する。

従来、子どもへの関心を扱ってきた概念としては、養護性、親準備性(育児性)が存在する。子どもへの関心は、これら概念の一下位概念(下位尺度)として検討されてきた。「養護性」は、小嶋(1989)により「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」と定義したもので、その下位尺度には「赤ん坊・子どもへの興味・関心(共感性)」、「子どもをうまく扱える自信(技能)」、「積極的な養護的構え(技能)」があるとされる。そして、幼い子どもに興味を持ち、子ども好きであることは、子どもの相手をうまくできるという自信や子どもを育てようとする構えと結びついているとしている。すなわち、子どもへの関心が子どもを扱う技能を高めるとしている。小嶋(1989)を含む多くの養護性研究において、養護性の発揮対象は子どもが想定されている。しかし、本来の養護性の発揮対象は、子どもだけでなく、病人や障害者、高齢者や動植物を含む(小嶋, 2001)。つまり、養護性は年下の子どもだけでなく、有能さを失っている者やケアが必要な者に対して広く発揮される。ただし、上述のように、現実的には、多くの養護性研究において子どもを養護性の発揮対象としている(例えば、安積, 2008, 糊澤・福本・岩立, 2009 ; 中西・栗津, 1996 など)。これは小嶋(1989)が当初、養護性を日本において提唱して検討した際に、子どもを対象とした態度として検討がなされていたことや、現実的に養護性を発揮されやすい対象が子どもであることに起因すると思われる。

一方、養護性とは別に井上・深谷(1983)は「親準備性」を提唱し、その定義を「近い将来に親になろうとしている年齢段階、すなわち青年期における心理的「親」の準備状態」

とした。その後、井上・深谷（1986）では、より具体的な再定義がなされ、親準備性を「ある個人に、情動的にも態度的にも、そして知識的にも、親の役割を果たすために、十分なレディネスができていくかどうか」と定義した。ほぼ同時期に大日向（1988）は、母性に代わる概念として「育児性」を提唱した。このほか、中西・牧野（1989）が「親になることへの準備状態」、伊藤（2003）が「親性準備性」を提唱するなど、親準備性と類似した概念が様々提唱されている。しかし、鈴木・清水・伊藤（2005）は、いずれも概念的には共通しているとし、育児性という名称を用いた上で、その定義を「将来親になる準備としての子どもへの関心と子どもに関わる姿勢」とした。

以上のように、養護性と親準備性（育児性）はともに子どもを対象とした態度であり、その下位尺度には子どもへの共感性（関心）と子どもを扱う技能（効力感）の2つが含まれている。従って、両概念は子どもを対象にしているという面において、非常に類似した概念であるといえる。両概念を図式化すると、図1-1のようになる。

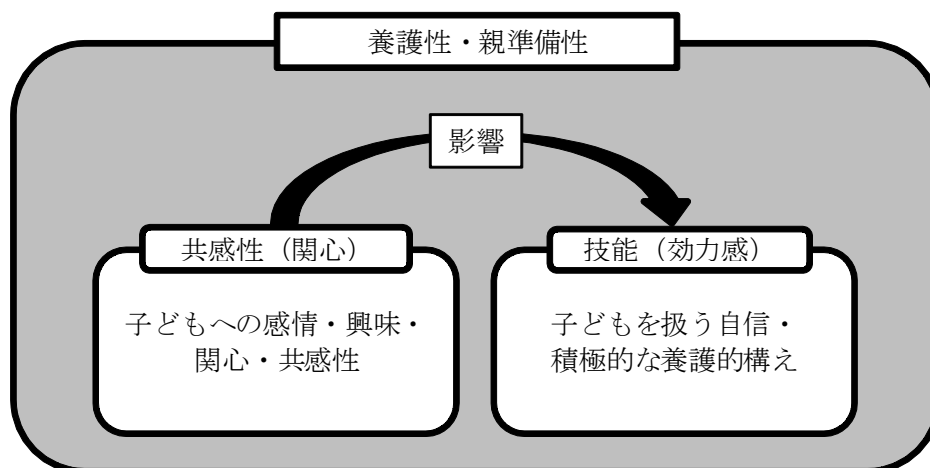


図1-1 養護性と親準備性の概念構造のモデル

しかし、上述のように、養護性はその対象が本来的には子どものみならず病人や障害者、高齢者や動植物にも及ぶなど、ケアをする対象は幅広い。多くの先行研究では、養護性の対象は子どもとなっているが、養護性の本来の発揮対象から考えれば、その「子ども」とは必ずしも自分の子を指していないと解釈できる。一方、親準備性は、将来的に生物学的な親となり、自分の子を育てることを前提としたレディネスの1つとして解釈できる。

先述の通り、晩婚化やライフスタイルの多様化により子どもをもたないという選択の広

まり、あるいは子どもをもちたくても、もてないという状況が存在する今日において、近い将来、子育てを担うであろう青年期後期の者を対象とした研究を行う場合、生物学的な親となり、実の子どもだけを育む態度を研究するのみでは、今日の複雑化した子育て環境へのレディネスや子育ての社会化志向を的確に検討できないといえる。すなわち、養護性の視座に立った、社会の全ての子どもに対する態度を検討するアプローチが必要である。そして、子どもへの態度のうち、最も原初的な反応の1つである子どもへの関心を検討することが、社会の全ての子どもへの態度を評価する第1歩になるといえる。

1-2 子どもへの関心に焦点を当てる理由

以上より本研究では、子どもへの態度を捉える養護性のうち、特に子どもへの関心の部分に焦点を当てる。この理由は次の5つに基づく。

第1は、Lorenz (1943)が指摘したように、子どもへの関心はヒトが子どもを見た際に生じる原初的な反応の1つであり、子どもへの態度の基礎的部分を成していると考えられるためである。

第2は、小嶋 (1989) が、実際の養育への自信や構えといった養護性の技能面の出現には子どもへの関心が先行して出現するという概念モデルを提唱しているためである。

第3は、小嶋 (2001) によれば、青年期においては幼いものへの関心の出現が養護性発達の指標とされており、後の子どもを育てるという成人期へと続く発達課題の1つに位置付けられているためである。

第4は、養護性や親準備性の2下位尺度である「共感性 (関心)」と「技能 (効力感)」は、先行研究において構成概念的に異なるものである可能性が指摘されており、分離して検討する必要があるとされているためである。

青木 (1988) は、母性準備性についてレビューする中で、母性準備性の構成要素として、「幼い子どもへの感情」と「養育への積極性」の2つが存在するとしている。前者は「共感性 (関心)」に、後者は「技能 (効力感)」にそれぞれ相当すると考えられる。青木 (1988) によれば、「幼い子どもへの感情」は個人が子どもに対して抱く感情を意味しており、「養育への積極性」は実際の養育行動を意味するとしている。そして、個人が抱く感情の側面と、どのように子どもと関わろうとしているかという行動や動機の側面は、それぞれ相互作用しながらも独立して機能しているのではないかと指摘し、両者を分離して検討する必要があるとしている。

同様に、榑澤（2009）も、養護性についてレビューする中で、養護性を構成する共感性と技能の2つを分離して検討する必要性を指摘している。榑澤（2009）は、この理由を説明するに当たり、正高（1995）の研究を引用している。正高（1995）の研究は、女子学生をきょうだいの有無により2群に分け、子ども向けの本を読んでもらう課題を与えるというものであった。その結果、きょうだいの有無により、子どもへの感情面（養護性という共感性）には差はなかったが、実際に本を読んでもらうという技能面において差が見られたとしている。すなわち、きょうだいがいる群では、読み方と音の高さに差が見られ、より子どもにとって心地よい読み方をしていた。榑澤（2009）は以上の結果を、共感性と技能が連動しながらも異なる様相を持つ事例として紹介し、共感性と技能を分けて検討することの意義を述べている。

以上のように、先行研究において、養護性や親準備性の「共感性（関心）」と「技能（効力感）」は互いに連動しつつも、別の概念である可能性が指摘されている。上述のように、小嶋（1989）は、養護性のうち子どもへの関心に相当する共感性が技能に先行して出現するモデルを提唱している。このことから、子どもへの関心は実際の養育行動やその自信に影響を及ぼす要素であり、養護性の出現に当たって、子どもへの関心が大きな役割を果たす可能性がある。従って、子どもへの関心を独立させて検討する必要があると考えられる。

第5は、養護性のうち、子どもへの関心を独立させて検討した場合、新たな下位尺度を見出せる可能性があるためである。実際に、養護性や親準備性のうち、子どもを育てる自信の部分については、菱谷・落合・池田・高木（2009, 2010）により「次世代育成力」として検討されており、いくつかの下位尺度が見出され、その要因について検討がなされている。しかし、子どもへの関心のみで特化した尺度の作成や要因については未検討である。次世代育成力と同様に、子どもへの関心についても尺度作成および要因の検討を行うことで、子どもへの態度のうち、原初的反応である子どもへの関心の詳細と要因について精緻な考察を加えることができる可能性がある。以上を踏まえ、本研究においては、子どもへの関心に特化した尺度の作成および要因の検討を行うこととする。

ここで、子どもへの関心について、本研究では以下のように定義する。すなわち、子どもへの関心とは、「社会に存在する自分の子ども以外の子どもと遭遇した際に生じる感情、認知、および子どもへの志向性」のことをいう。

また、これと関連して、子どもへの関心の高さが子育ての社会化志向にどのような影響を及ぼしているか検討する。これにより、子どもへの関心という子どもへの原初的な反応

の程度が、複雑化した今日の子どもや子育てに関する諸問題や社会を挙げて子どもを育てようとする態度にどのような影響を及ぼしているか検討するのである。すなわち、眼前にいる、もしくは心的表象としての子どもへの関心が、実際に社会全体で子どもを育む意識にどの程度影響を及ぼしているのか検討することが可能となる。

1-3 想定される子どもへの関心の関連・規定要因

1-3-1 乳幼児との接触経験と接触時の感情

従来、青年期以降の者の子どもへの養護性や親準備性、対児感情といった子どもへの態度の個人差要因は、過去の乳幼児との接触経験にあるとされ、接触経験を多く持った者ほど、肯定的な子どもへの態度を持つとされてきた(安積, 2008; 花沢, 1992; 小嶋, 1989)。養護性の下位尺度である子どもへの関心においても、先行研究と同様に、過去の接触経験が現在の子どもへの関心の程度に影響を及ぼしていると予想される。

しかし、子どもへの態度の要因として接触経験のみを取り上げるのは限界がある。なぜなら、乳幼児との接触時に抱いた感情により、その後の乳幼児への接近行動に違いが生じると考えられるためである。接触時に良い感情を抱けば、その後も乳幼児とふれ合おうとする動機づけがなされるが、嫌な感情を抱けば、接触に対して回避的になると推測される。岡田(2010)は、小児病棟施設で実習を行った保育系の学生は、子どもへの肯定的なイメージや親近感が低下することを示した。そして、この理由を小児病棟で闘病中の子どもを見たことで困惑や不安が生じたためではないかと推測した。また、伊藤(2004)が中学・高校生を対象に行った面接調査では、保育体験学習(ふれあい体験学習)後に子どもへの興味が高まった生徒は、学習をふり返った際に学習への満足感や子どもへの共感が多く語られるとされる。さらに、中学生を対象に、保育体験学習前後の子どもに対する好意度を測定し、学習前後で子どもに非好意的から好意的に変化した生徒の学習に対する感想文を分析した研究では、ふれ合ったことで子どものかわいさへの気づきや学習への満足感が記述されることを示している(中嶋・砂上・日景・盛, 2004)。こうした結果は、接触時の感情が子どもへの態度に影響を及ぼすことを示唆するものといえよう。しかし、従来の研究では、接触時の感情とその後の子どもへの態度との関連は、面接や感想文分析などの質的な研究手法では検討されているが、量的な手法により検討した研究は見られない。尺度を用いて検討することで、より客観的で、一般化可能な結果を得られるといえる。

以上より、子どもへの関心の規定要因としては、従来から子どもへの態度との関連が指

摘されてきた過去の乳幼児との接触経験および接触時の感情が想定される。

1-3-2 対児感情

対児感情とは、花沢（1992）が提唱した大人の乳児に対する感情のことを言い、好意的な感情（「接近感情」）と拒否的な感情（「否定感情」）から構成される。子どもへの関心の程度が高いということは、子どもに対して、より好意的な感情を有していると解釈することができる。従って、子どもへの関心と対児感情の間には関連が見られると考えられる。子どもへの関心と比較的近い概念であることから、子どもへの関心尺度を作成する際には、併存的妥当性を検討するために使用可能な概念であるといえる。

1-3-3 子ども観

子どもへのイメージである子ども観は、古くは「児童観」、「発達観」、「児童発達観」などと呼ばれ研究がなされてきた。小嶋（1982）は児童観について、社会学的、文化人類学的、民俗学的、歴史学的な一般化された集団水準でのマクロな視点と、心理学的な個人水準でのミクロな視点の双方を踏まえた包括的なレビューを試みた。この中で小嶋（1982）は、児童観を「広い意味での子どもの発達と教育に関して、人間が個人的にまたは集合的に抱いているある程度体系化された考え」と定義した。そして、ここでの「考え」に関連する過程には、狭い意味での知的過程に留まらず、それに伴う情意過程を含めて良いとしている。つまり、児童観には、子どもをどのように認知しているかという知的な側面のみならず、子どもに対してどのような感情を有しているかという情意的な側面も含むとした。従って、小嶋（1982）が提唱した児童観とは、子どもへのイメージという認知的側面のみならず、子どもへの肯定的・否定的感情や発達観を含む、子どもへの態度全般を指していることが分かる。その上で、小嶋（1982）は、児童観は子どもとの相互作用（子どもとの直接的、間接的接触の両方を含む）を通して常に修正され続けるとした。

さらに、小嶋（1982）は、児童観に影響を及ぼす要因としては、「社会的・文化的・歴史的的要因」、「おとなの生育歴」、「おとなと子どもとの相互作用」、「子どもの行動・発達」が存在するとした。そして、図 1-2 に示すように、社会的・文化的・歴史的的要因とおとなの生育歴の2つの要因は、おとなの児童観に影響を及ぼすと同時に、児童観と子どもとの相互作用、子どもの行動・発達とは相互影響関係を持つとした。

このように、小嶋（1982）の言う児童観とは、大人が持つ子どもへの態度全般を指すも

のである。そして、子どもへのイメージとしての狭義の子ども観は、児童観のうち知的過程に、子どもへの感情的・認知的側面としての子どもへの関心は、情意過程に含まれると考えられる。すなわち、子ども観と子どもへの関心は共に、児童観に包括される概念であり、近似した概念であるといえよう。従って、子ども観を子どもへの関心の要因として取り上げようとする際は、子ども観と子どもへの関心は相互に影響し合う関係にあると考えることが妥当であろう。よって、子ども観は子どもへの関心の関連要因であると想定される。同時に、子どもへの関心と概念的にも近い子ども観との関連を検討することにより、子どもへの関心尺度の併存的妥当性を確認できるともいえる。

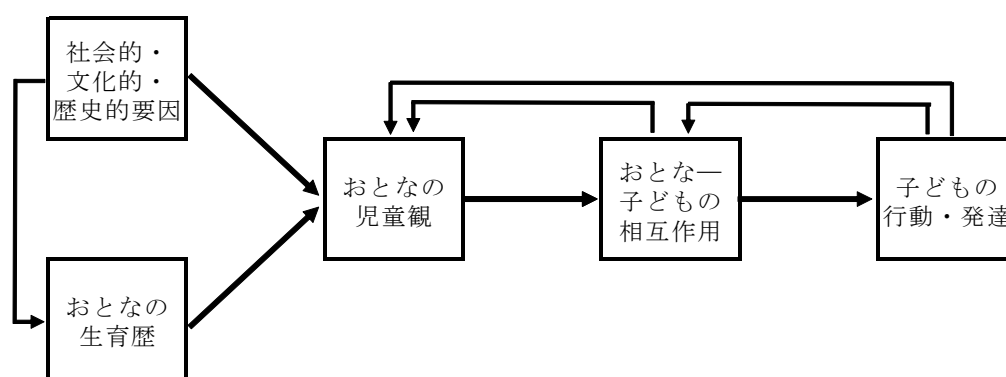


図 1-2 児童観に関する諸要因の相互規定的関係の図式 (小嶋, 1982)

1-3-4 他者意識

ヒトの乳児は、生後間もない頃から大人のみならず、他児を注視する、発声や微笑、手伸ばしをするといった行動が出現する (川井・恒次・大藪・金子・白川・二木, 1983)。そして、幼児期になると、自分よりも年少の者への養護性に基づく行動が見られるようになる (小嶋, 1989, 2001)。すなわち、ヒトは生まれながらにして他者全般への関心を有する存在であるが、成長とともに、自分よりも年少の他者にも関心の対象が広がっていくと考えられる。他者全般への関心が年少の子どもへの関心に分化していくのである。

他者への関心を表す概念としては他者意識が存在する。これは、辻 (1993) が「他者へ向ける注意、関心、意識などのこと」と定義したもので、行動や表情として表出された他者の気持ちや感情に対する関心である「内的他者意識」、他者の化粧や服装、体形といった外面への関心である「外的他者意識」、他者について考えたり空想を巡らせたりする傾向であ

る「空想的他者意識」の3下位尺度から構成される。藤後（2005）は、面接調査を通して子どもへの養護性が高い者は大人の他者に対しても関心が高いことを示唆している。また、郷式（1999）は、大学生と大学院生に1歳児が遊ぶ様子のビデオを見せ、その様子を記述させたところ、内的他者意識が高い者ほど子どもの心的状態の記述が多く、敏感であることを明らかにしている。従って、他者への関心が高い者は子どもへの関心も高いという相関関係があると予想される。以上より、他者意識は子どもへの関心の関連要因であると想定され、その関連を検討することは、子どもへの関心尺度の併存的妥当性を検討することにもつながるといえる。

1-3-5 次世代育成力

菱谷ら（2009）は、青年期において次世代を育成する心や能力という意味での世代性（generativity）の概念に注目し、次世代育成力を「次世代の子どもたちを育てることへの自信」と定義し、青年期の者における将来、次世代の子どもたちを育てることに対する自己についての肯定的な評価とした。そして、青年期における次世代育成力を測定する尺度を作成した。そして、下位尺度として、次世代の誕生を肯定できるという自信である「誕生を肯定することができるという自信」、次世代の育成を通じて自分が成長できるという自信である「自己成長できるという自信」、次の世代に伝えるものを上の世代から受け継ぎ、次の世代に伝えることができるという自信である「伝えるものを持っているという自信」、子どもを育てる時に地域社会の力を借りることができるという自信である「地域社会の力を借りることができるという自信」の4つを見出している。

ここでの次世代育成力は、子どもを育てていく上での自信や、次世代の誕生を肯定することへの自信の程度を意味しており、これは従来の養護性や親準備性において指摘されてきた2つの下位尺度のうち、技能面に相当する概念であるといえる。先述のように、小嶋（1989）は、子どもへの関心が子どもを育てる自信に影響を及ぼすというモデルを提唱していることから、子どもへの関心に影響を受けることが想定される。

1-3-6 子育ての社会化志向

「子育ての社会化」とは、内閣府（2005）によれば、子どもをもつ親だけでなく、その友人や同僚、近隣に住む人々など、社会全体で何らかの子育てに参加する、あるいはそれができる仕組みを構築していくことを指す。すなわち、子育てが家族の責任だけで行われ

るのではなく、社会全体で取り組む姿勢や仕組みのことを言う。特に都市部で育児の孤立や見えない化が進む今日において、社会の中に存在する子どもや子育てに関する社会的な問題を意識し、社会全体で子どもの育ちを支え、子育てを応援し、子育ての社会化を目指していく姿勢や意識および態度（子育ての社会化志向）は、少子化社会の日本において持続可能な社会を構築するという点においても非常に重要な態度の1つといえる。

それでは、子どもへの態度の原初的な反応の1つである子どもへの関心と、子育ての社会化志向との間にはどのような関連があるのであろうか。子どもへの関心は、個人が子どもに対して抱く感情や認知的な側面を指している。換言すれば、個人が実生活において子どもと遭遇した際に子どもに対して抱く関心、もしくは個人が心的表象として有している子どもに対する関心を意味する。これに対して子育ての社会化志向は、社会全体の中での子どもや子育てに対する感情や認知的側面を表している。子どもへの関心が高い、すなわち、子どもへの肯定的感情や子どもを見守ることへの肯定感が高ければ、社会全体で子どもを育もうとする意識も高い可能性があると予想される。すなわち、子どもへの関心が、子育ての社会化志向に汎化していく可能性があると考えられる。

これまで、子育ての社会化を目指す程度や意識する程度について尺度を用いて検討した研究としては、藤後（2006）の社会的子育て観に関する研究と、山口・尾形・樋口・松浦（2013）の子育ての社会化の構成概念を検討した研究が挙げられる。藤後（2006）は、中学生を対象に、コミュニティの中で地域の子どもを育む姿勢を社会的子育て観とし、それを測定する尺度を作成した。山口ら（2013）は、20～59歳の女性を対象に子育ての社会化を意識・行動する程度について尋ねる尺度を作成し、その構成概念を因子分析により検討した。しかし、いずれの尺度も地域の中での子どもや子育てに対する態度を検討しており、より広い、社会全体で子どもや子どもの育ちを支えるという視点は有していない。また、藤後（2006）の最終的な尺度の項目数は4項目と少ない。さらに、山口ら（2013）は、対象が女性のみに限られている。社会全体で子どもを育てるという視点に立つ場合、その担い手は女性のみならず男性も含まれて然るべきであろう。

そこで本研究では、地域のみならず社会全体、国という単位で子どもの育ちを支えることの意識という視点を加えた、新たな子育ての社会化を目指す意識の程度を測定する尺度（子育ての社会化志向尺度）を作成することとした。新たに尺度を作成するに当たり、その併存的妥当性を検討する尺度としては、榑澤ら（2009）の養護性尺度、久世・和田・鄭・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・内山・平石・大野（1988）の規範意識と私生活主義尺度

の下位尺度の1つである「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」（以下、「社会的
事象への無関心」）尺度、吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折（1999）
社会考慮尺度、江上（2007）の「母性愛」信奉傾向尺度を用いることとした（第7章で詳
述する）。そして、これと子どもへの関心との関連を検討することで、子どもへの関心とい
う子どもを目にした際に生じる原初的な反応の程度が、より高次の社会全体で子どもを育
む姿勢に与える影響について検討する。

1-3-7 本研究で取り扱う概念のまとめと図式化

以上のように、子どもへの関心について、その規定要因と関連要因および、上位概念で
ある養護性との関連について見てきた。本研究で取り上げる概念の関係性についてまとめ
たものが図1-3である。なお、本研究において作成する子どもへの関心尺度と子育ての社
会化志向尺度については、その併存的妥当性を検討するための関連要因である概念につい
ても同時に記した。影響を及ぼすと考えられる場合は片矢印で、相互に影響し合う相関関
係にあると考えられる両矢印で示した。

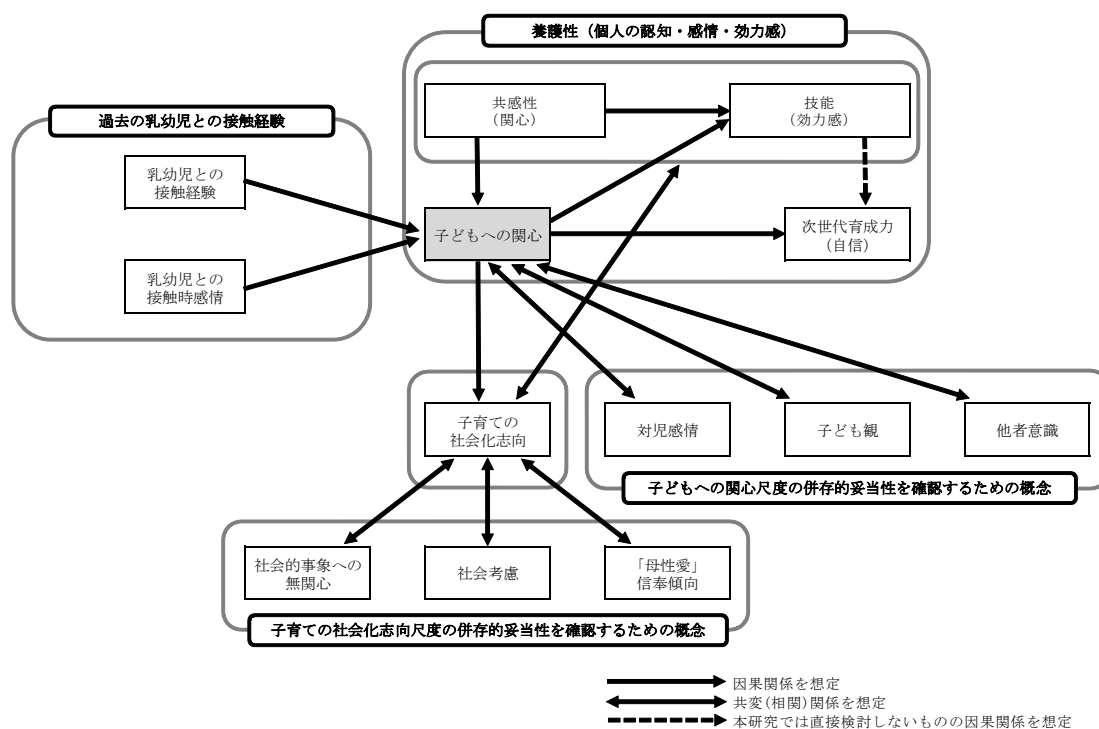


図1-3 本論文で用いる変数のモデル

第2章 子どもへの態度の研究方法

本章では、成人を対象とした子どもへの関心を含む子どもへの態度の測定手法として、従来、どのような手法が用いられてきたのか、また、どのような結果が示されてきたのか概観する。そして、各方法の長所と短所について述べ、本研究で採用する方法を決定する。

2-1 質問紙法

質問紙法は、成人を対象とした子どもへの態度の測定方法として最もよく用いられてきた方法である。質問紙を用いた子どもへの態度の測定には、リッカートスケールで回答する評定尺度法を用いるものと、SD（セマンティック・ディファレンシャル）法を用いるものの2つが存在する。前者は主に養護性や親準備性、対児感情などを測定する方法として多く用いられる。子ども観は前者が用いられることも多いが、子どもへのイメージの測定のため、SD法が用いられることもある。以下では、子どもへの態度の各概念について、質問紙法による測定方法を述べる。

2-1-1 質問紙法による養護性の測定

成人を対象とした養護性は、質問紙法により測定されることが多い。実際、養護性の提唱者である小嶋（1989）は、女子大学生を対象に養護性の程度を測定する尺度を作成している。ここでは、養護性の理論的枠組みをもとに、下位尺度として「赤ん坊・子どもへの興味」、「子どもをうまく扱える自信」、「積極的な養護的構え」の3つからなる尺度を作成し、尺度により測定した養護性と関連要因などについて検討を試みた。

その後、養護性本来の定義である「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」に基づき、子どもへの養護性に留まらず、多様な対象への養護性を測定する尺度の開発が試みられてきた。例えば、中西・粟津（1996, 1997）は、小嶋（1989）の3下位尺度に加え、「福祉活動への関心」、「子ども時代の追憶」、「動物に対する関心」、「植物に対する関心」、「母親像」、「父親像」などを加えた尺度を作成し、幼児を持つ母親や妊婦、大学生を対象に検討を加えている。しかし、中西・粟津（1996, 1997）では、小嶋（1989）が用いた子どもを対象とした養護性を測定する3つの下位尺度以外の結果については言及されていない。すなわち、1990年代までの養護性研究においては、理論的には、養護性は多様な対象への養護的心性とされながら、その測定は子どもを対象としたものに限られていた。加え

て、この時期の養護性尺度は、予め下位尺度を想定し、それに従って測定し、得点化するという方法を用いている。つまり、主成分分析や因子分析といった多変量解析を用いて養護性尺度を検討した研究は存在しなかった。

この流れに対して、2000年代に入り、養護性尺度を多変量解析に基づいて作成しようとする潮流が出現する。岩治（2009）は、中西・栗津（1997）の養護性尺度項目を援用し、子どもへの養護性に留まらない多様な対象への養護性を測定する尺度を作成した。そして、因子分析を行い、6因子を抽出した。すなわち、「子ども・赤ちゃんへの関心」、「親に対するポジティブな感情」、「将来の子育てに対するポジティブな予測」、「奉仕的な志向」、「将来の子育てに対するネガティブな予測」、「動物への関心・制作への喜び」である。そして、これらの因子間には一定の相関があることを示した。

多変量解析を用いた子どものみを対象とした養護性尺度の作成も始まった。糊澤ら（2009）は、養護性の定義に含まれる「相手」を「子ども」に焦点化した上で、養護性の「共感」と「技能」という点に注目した養護性尺度を作成した。彼女たちは中西・栗津（1996）の養護性尺度のうち、子どもへの養護性を測定する項目に養護性における共感性と技能の項目を新たに加えた尺度を作成した。そして、因子分析の結果、4因子を抽出した。すなわち、「幼い子どもに対する共感性」、「幼い子どもに対する技能の認知」、「親への準備性」、「子どもの非受容性」である。糊澤ら（2009）の尺度は、対象が子どもに限局されており、動植物や一時的に有能さを失っている人々といった養護性本来の対象は含まれていない。しかし、子どもに限られているものの、養護性の定義を十分に踏襲した理論的背景をもとに尺度作成がなされている。また、比較的高い内的整合性と併存的妥当性を有しており、心理尺度として頑強なものであると評価できる。

このように、養護性は評定尺度法により測定される測定されることが多い。これに対して蘆田（2010）は、養護性に則した行動が出現する具体的な状況と、そこで取り得る行動について、質問紙上で場面想定を行い、養護性の程度について測定しようとした。ここでは、例えば、「幼い子どもが、倒れています。その子どもは、自分で何とかすることは無理そうです」といった状況を呈示し、それに対してどの程度、援助行動を取り得るかを4段階評定で問う方法を用いている。従来の方法とは評定尺度法という点で同じではあるが、回答者に場面想定を促したうえで、具体的な対処行動を取る可能性を問うという点で、一般的な養護性尺度とは異なっている。

以上のように、養護性の測定方法としては評定尺度法が用いられることが多い。一部で

場面想定法による方法が用いられているが、これも最終的には評定尺度法に依拠した質問紙法により測定がなされている。

2-1-2 質問紙法による親準備性の測定

親準備性やそれに類する親としての素質に関する程度についても、養護性同様に評定尺度法により測定されることがもっぱらである。

親準備性よりも先駆的な概念である母性の測定については、青木・松井（1988）が存在する。彼女たちは女子短期大学生を対象に「母性準備性」を測定する尺度の開発をした。尺度作成に当たり、母性準備性の側面として、大別して乳幼児観と育児労働観の2つを想定し、乳幼児観はさらに「乳幼児への好意感情」、「乳幼児への拒否感情」、「乳幼児への興味・関心」の3つの領域を有し、育児労働観はさらに「育児労働に対する積極性」、「育児労働に対する抵抗感」、「育児労働の考え方」の3つの領域を有するという考えのもと、各領域に従って項目を作成した。そして、乳幼児観と育児労働観のそれぞれの観点に含まれる項目群が1因子構造をなすまで因子分析を行うという方法を用いて、2つの下位尺度を見出している。すなわち、「乳幼児への好意感情」と「育児への積極性」である。

青木・松井（1988）の尺度は多変量解析を用いている点で先進的ではある。しかし、今日的には、このような方法での因子分析と尺度開発は誤った方法であると思われる。今日では、先行研究のように、予め想定した項目群ごとに単一因子構造を確認するという方法は用いない。本来であれば、この場合は母性準備性を測定する全ての項目を因子分析の対象とし、複数の因子を抽出することで下位尺度を構成するという方法が適切である。加えて、青木・松井（1988）の研究では、単一因子構造となるまで、「項目を差し替えて繰り返し因子分析を行った」といった記述や、因子分析結果について「主成分」という語を用いていること、さらに、因子負荷量ではなく、構造係数を指標としている点で、十分に因子分析を用いた尺度開発を理解していない上で尺度化された可能性が否定できない。そのため、その結果の信頼性について一定の疑問があることを付言しておく。

ただし、この母性準備性尺度は、その後の研究において男性回答者に対しても使用する過程で「親性準備性尺度」として再検討されている（佐々木，2007）。佐々木（2007）は、青木・松井（1988）の尺度¹を用いて、青年期男女への使用が可能な親性準備性尺度を作成

¹ 実際には、様々な心理尺度が収録された片山・戸田（1994）の『心理尺度ファイル』より引用しているものの、項目内容は青木・松井（1988）と同様である。

した。そして、「乳幼児への好意感情」と「育児への積極性」の2下位尺度について、折半法による内的整合性(Cronbachの α 係数)を算出することを通しての信頼性の検討および、花沢(1992)の対児感情評定尺度との相関係数を算出することによる妥当性の検討を試みた結果、信頼性と妥当性を確認したとしている。

このほか、親になることへの素質を測定する尺度としては、牧野・中西(1989)の「親になることへの準備状態尺度」が存在する。この尺度は高校家庭科における保育教育の評価を行うために、高校生を対象に作成された尺度である。この尺度は乳幼児、子育て、親になることに対する態度を感情的領域、行動的領域、認知的領域から測定し、父性や母性といった親としての資質を測定するものとされている。項目は既存の研究で用いられているものを用いたとされる。多変量解析による項目検討はなされておらず、単一構造を想定して得点化がなされている。項目内容を見ると、「私は赤ちゃんをみているだけで楽しくなる」、「私は小さな子どもに興味がある」といった養護性尺度でも用いられている項目が多く見られる。

多変量解析を用いて親準備性の測定を行ったものとしては、岡本・古賀(2004)の尺度が存在する。ここでの親準備性は、子どもの養育役割としての側面だけでなく、家庭を支え、経営していくことの資質、家族の健康や家庭生活を維持できる家庭環境を整える家事労働や家族団らんや憩いの場を創り出すことの資質、老親との関わりや介護の資質も親準備性の構成要素に含んでいる点が特徴的である。そして、この資質について測定する尺度を作成し、因子分析の結果、4因子を抽出した。すなわち、「家族結合役割」、「家事労働役割」、「介護役割」、「養育役割」である。この尺度は、親準備性を家庭経営全般への準備性と捉え、測定している点で独創的なものであるが。「親」という言葉に、家庭経営や家事労働、介護役割までが含まれていると解釈するにはいささか直感的ではなく、別の言葉を用いた方が適当とも考えられる。

従来の親準備性、すなわち、子どもを育てることの資質について測定し、かつ、多変量解析を用いて作成された尺度としては、鈴木ら(2005)の育児性尺度が存在する。ここでは、従来の母性という言葉は育児の担い手が母親に限定されているという問題意識から、「育児性」という言葉を用いている。そして、育児性には、子どもへの関心と子どもに関わる姿勢の2下位尺度が存在することを仮定した。この尺度は女子高校生を対象に作成されたもので、因子分析の結果、想定通り、「子どもへの接近感情」と「育児不安」の2因子を抽出した。

2-1-3 質問紙法による対児感情の測定

花沢（1992）は対児感情を提唱し、その程度を測定する尺度を作成した。「対児感情評定尺度」と名付けられたこの尺度は、赤ちゃんに対する愛着的な感情と嫌悪的な感情を測定するものである。具体的には、「あたたかい」、「あかるい」などのポジティブな形容詞（接近項目）と、「よわよわしい」、「やかましい」といったネガティブな形容詞（回避項目）について、「そんなことはない」（0点）～「非常にそのとおり」（3点）までの4件法で尋ねるものである。採点は、接近項目の得点を合計した乳児への接近感情を表す「接近得点」、回避項目の得点を合計した乳児への回避感情を表す「回避得点」の2つがまず算出される。そして、接近感情と回避感情が葛藤している程度として、回避得点を接近得点で割り、100をかけた値が「拮抗指数」として算出される²。本尺度の信頼性については再検査法により確認されており、妥当性については田研式・親子関係診断テストとの関連により確認されている。

なお、多変量解析により対児感情評定尺度の構造を明らかにしようとした試みは、Sugawara, Toda, Shima, Mukai, Sakakura, & Kitamura (1997)によりなされている。上述の対児感情評定尺度の先駆版にあたる尺度（花沢, 1977, 1978, 1992）について、因子分析を行った結果、「天使のような赤ちゃんイメージ (Angel baby image)」、「弱い赤ちゃんイメージ (Vulnerable baby image)」、「赤ちゃんへの無関心 (Detachment from baby)」の3因子を抽出した。ただし、因子分析により得られた構造に基づいた得点化をもとに対児感情のていどが検討されることは稀であり、当初の花沢（1992）の採点方法に従って検討されることがほとんどである。

2-1-4 質問紙法による子ども観の測定

子ども観は後述のようにSD法により測定されることもあるが、評定尺度法により測定されることも多い。評定尺度法を用いた子ども観尺度としては、吉田・佐藤（1991）や永澤（1996）、嘉数・島袋・當山・喜友名・友利・廣瀬（1997）などがある。

吉田・佐藤（1991）の尺度は、教育学部の大学生を対象に教育実習による子ども観の変化を検討するために作成された。尺度については因子分析を行い、6因子を抽出している。すなわち、「自己中心性」、「創造性・積極性」、「公平さの要求」、「反抗的・現実的態度」、

² この拮抗指数の算出方法は成人を対象としたもので、中学・高校生を対象とした算出方法が別に存在する。詳しくは第3章参照。

「事実を見通す力」、「理解の困難さ」である。Cronbach の α 係数は、 $\alpha = .55 \sim .85$ で、概ね.65 前後であり、値はさほど高くない。

永澤（1996）の尺度は、母親を対象に作成されたもので、6 因子からなる。すなわち、「一個の人間」、「否定的な存在」、「愛しい存在」、「親の私物」、「不完全な存在」、「無知な存在」である。本尺度は各項目の共通性が高く、また、Cronbach の α 係数も「無知な存在」（ $\alpha = .49$ ）を除いて比較的高い（ $\alpha = .68 \sim .86$ ）。

永澤（1996）の尺度は、嘉数ら（1997）により、保育科の短期大学生を対象に再度検討がなされている。子ども観尺度は、研究ごとに独自に作成されることが多く、本尺度のように繰り返し、検討されることは少ない。しかし、嘉数ら（1997）においても、永澤（1996）と類似した 7 因子が抽出されている。すなわち、「いとおいしい存在」、「個性的存在」、「煩わしい存在」、「未熟な存在」、「親の所有物的存在」、「尊重すべき存在」、「教育すべき存在」である。

これらの評定尺度法を用いた測定に対して、SD 法も子ども観の測定に用いられてきた。SD 法による子ども観の測定は、評定尺度法よりも古い。例えば、深谷・麻生・馬場（1972）は、女子大学生・専門学校生、幼児を持つ母親、小学生の子を持つ母親を対象に、SD 法による子ども観の測定を行い、因子分析を行った。その結果、「明朗性」、「素直さ」、「社会化」、「健康」、「強靱性」、「精神テンポ」、「無邪気さ」の 7 因子を抽出している。深谷ら（1972）以降も、発達障害を有する子を持つ親の子ども観（深谷・馬場・麻生、1973）、父親や祖母の子ども観（深谷・馬場・麻生、1974）などが SD 法を用いて、因子分析をすることにより検討されている。

以上のように、子ども観を質問紙により測定する場合、評定尺度法または SD 法により測定されてきた。現在ではいずれの方法も多変量解析を用いて検討されることが多い。質問紙法は集団実施が可能で、一度の調査で多くの研究参加者から回答を得ることが可能である。また、得られたデータを量的に分析することが可能で、分析結果の一般化可能性も高い。しかし、特に評定尺度法により子どもへの態度を測定する際には、子どもの多様な姿を質問文から想像してもらう必要がある。具体的には、「子どもが遊んでいると自分も楽しくなる」、「子どもが泣いていると悲しい気分になる」といった項目のように、子どもが遊んでいる場面や泣いている場面を具体的に想像してもらい、その場面で自身を取り得る行動を評定してもらう必要がある。この場合、回答者にはそうした状況の子どもを十分に思い描ける能力が求められる。これは回答者のこれまでの子どもとの接触経験や、子ども

について学習するといった経験に依存する部分が大きいと考えられる。従って、質問紙法は集団実施が可能で一般化可能性が高いものの、質問項目に対して、その状況を想像できるか否かは、個々の回答者の能力や経験に依存する面があるという欠点があるといえる。

2-2 選好法・画像呈示法

子どもへの態度を測定する方法は質問紙法だけではない。古くから、Lorenz (1943)が提唱した幼児図式への反応を測定するために、実験法に似た手法が海外、特に北米で用いられてきた。具体的には、研究参加者に成人と子どもの写真を対呈示し、どちらの写真がより好ましいか尋ねる方法である。この方法に特定の名前は付けられていないが、成人と子ども2つの写真のうち、どちらを好むか尋ねるものであるため、本論文ではこの方法を「選好法」と呼ぶことにする。

また、単純に子どもやサル・霊長類の赤ちゃんの写真のみを呈示し、その際の参加者の反応を観察する、もしくはその魅力度の評定を求める、子どもや成人、モノなどの写真を複数呈示した後、一連の写真の中から最も気に入ったものを選ぶように求めるといった方法もある。この方法にも特定の名前は付けられていないが、本論文ではこれを「画像呈示法」と呼ぶことにする。

画像呈示法による研究としては以下に挙げるものがある。Harlow (1971)は、大学生を対象にアカゲザルの赤ちゃんの写真を呈示したところ、女性は無我夢中になって写真を見たが、男性は全く反応を示さなかったという観察結果を報告している。これを受けて、Berman, Cooper, Mansfield, Shields, & Abplanalp (1975)や Berman (1976)は、大学生を対象に赤ちゃんと成体のサルと霊長類の写真を呈示し、その魅力度の評定を求めた。その結果、Harlow (1971)と異なり、男女差は見られなかったが、同性のみ参加者グループで評定する場合と、男女混合の参加者グループで評定する場合とでは、魅力度評定が異なることを明らかにした。

Sternglanz, Gray, & Murakami (1977)は、大学生を対象に目の位置や幅、大きさが異なった複数の乳児の顔の絵を呈示し、それぞれの魅力度について評定を求めた。その結果、顔のパーツが顔の下の方に位置している絵（典型的な幼児図式の乳児顔）が最も魅力度が高いことを明らかにし、Lorenz (1943)の指摘が正しいことを実証した。

Glocker, Langleben, Ruparel, Loughhead, Gur, & Sacher (2009)は、乳児の顔の絵ではなく顔写真を用い、顔のパーツの大きさ・幅、顔の丸みなどを操作し、操作した複数の顔写真を

大学生に呈示した。その結果、幼児図式が強い顔写真は、よりかわいいと評定され、より世話したいと評定されることを示した。

Lehmann, Huist in't Velt, & Vingerhoests (2013)は、オンライン調査により10代から70代までを対象にヒトと動物の赤ちゃん、成人と成体の動物の画像を呈示し、それぞれの魅力度について評定を求め、パーソナリティ特性との関連を検討した。その結果、女性の方がヒトや動物の赤ちゃんへの魅力度が高く評定されること、自身の子どもがいる場合、ヒトの乳児への魅力度が高く評定されること、情動的共感性や所属欲求、対人関係の親密さの高さがヒトの乳児への魅力度の高さに影響することなどを明らかにした。

他方、選好法を最初に行ったのは、Beier, Izard, Smock, & Tougas (1953)によるものと思われる。ここでは、大学生を対象に、3つの年齢層（2～5歳、18～25歳、45～50歳）の人物写真について「好きな (liked)」か「嫌いな (disliked)」の2件法で回答を求めた。その結果、女性の方が幼児の写真を選好するという結果が得られている。

明確にLorenz (1943)の指摘に基づき、ヒトの写真を用いてそれを検証しようとした初めての研究は、Fullard & Reiling (1976)によるものである。ここでは、Lorenz (1943)の乳児が持つ「赤ちゃんらしい」身体的特徴（幼児図式）が大人の乳児に対する養育行動の発現を導くとする考えに基づき、2年生～12年生の児童・生徒と成人を対象に、乳児の写真と成人の写真、動物の赤ちゃんの写真と大人の動物の写真を、それぞれプロジェクターを用いて2秒間、対呈示し、どちらの写真を好んだか回答を求めた。その結果、年齢が高くなるほど、乳児への選好は増すこと、女性の方が乳児への選好が生じること、ヒトの赤ちゃんに対しても、動物の赤ちゃんに対しても、同程度の選好が生じるとした。そして、赤ちゃんへの選好は思春期前後に始まり、その発達には男女差があるとした。すなわち、女性の場合は6年生～8年生以降に赤ちゃんへの選好が高まるに対して、男性の場合はそれより2年遅れて選好が高まるとした。ただし、この発達の男女差が生物学的要因によるものなのか、社会的要因によるものなのかについては、サンプル数の少なさを理由にここでは明言を避けている。

Berman, Goodman, Sloan, & Fernander (1978)は、2年生～4年生および9年生～11年生の児童・生徒を対象に、調査対象者と同じ人種の乳児の写真と成人の写真を、冊子を用いて対呈示し、どちらの写真を好んだか回答を求めた。その結果、Fullard & Reiling (1976)と同様に、乳児への選好が生じる回数は女性の方が多ことを示したが、学年間で有意な差は見られなかったとしている。

Feldman, Nash, & Cutrona (1977)や Feldman & Nash (1978, 1979a, 1979b)は、参加者に乳児や成人、モノの写真を対呈示せずに1枚ずつ複数呈示し、その中から気に入った写真を5枚選ぶという課題を与え、同時に写真を見ていた時間を測定した。さらに参加者と面識のない赤ちゃんとその母親がいる実験室に参加者を6分間置いて赤ちゃんへの行動や反応を観察するという手法により、子どもへの関心の程度を測定した。参加者は高校生から孫がいる中年の者まで多岐に渡った。一連の研究の結果、高校生では女性の方が乳児への関心が高いが、大学生では差がなくなること、子をもつ母親や孫をもつ中年の者では関心が高いことが示された。

しかし、以上に挙げた研究は、乳児の写真と成人の写真のどちらを好んだかという回数をもとに、乳児への選好の程度を検討しているが、子どもが好きか嫌いかといった尺度を用いた言語的指標との関連は検討していない。そこで、Maestripieri & Pelka (2002)は、乳児と成人の写真を対呈示する手法を用いて乳児への選好の程度を測定した上で、尺度を用いて乳児への態度を測定し、両指標間の関連を検討している。この研究では、6歳～10歳の子ども、11歳～15歳の青年前期の子ども、19歳～35歳の若者、46～75歳の中老年者を対象に、乳児のシルエット画像と成人のシルエット画像、乳児の写真と成人の写真、動物の赤ちゃんのシルエット画像と成体の動物のシルエット画像、動物の赤ちゃん写真と成体の動物の写真をそれぞれ5ペアずつ、約5秒間対呈示し、どちらを好むか回答を求めた。その後、尺度を用いて、同じ部屋に見知らぬ赤ちゃんがいた場合に取りうる行動や、赤ちゃんが好きか嫌いかといったことを尋ね、選好法の結果との関連を検討した。その結果、選好法と質問紙の尺度得点との間には中程度の関連があることを明らかにした。

乳児への選好を生物学的な観点から明らかにしようとした研究も存在する。Goldberg, Susan, Blumberg, & Kriger (1982)や Maestripieri, Roney, SrBiasm Durante, & Spaepen (2004)は、乳児と成人の写真を対呈示し、乳児への関心と初潮の到来との関連を調べた。その結果、Goldberg et al. (1982)は、初潮前の女子よりも初潮後の女子の方が乳児への選好がより生じており、同年齢の男子よりも初潮後の女子の方が乳児への選好が生じるとした。一方、Maestripieri et al. (2004)は、乳児への選好は初潮の影響を受けないとした。Roney, Handon, Durante, & Maestripieri (2006)は、男子大学生を対象に乳児と成人の写真を対呈示し、乳児への選好の程度とテストステロンの量との関連を検討した結果、両者に有意な関連は見られないことを示した。このように、生物学的な影響については研究によって結果が異なっている。

以上に挙げた選好法は、成人と子どもの写真を研究参加者に呈示し、口頭でどちらを好むか尋ねるものである。従って、反応に歪曲が生じる可能性も考えられる。しかし、言語報告ではなく、写真への反応時間を用いて検討した研究においてもなお、同様の結果が示されている。Brosch, Sander, & Scherer (2007)は、ヒトの乳児と成人、動物（イヌ、ネコ）の赤ちゃんと成体の画像を画面上に 100 ミリ秒対呈示し、画像への反応時間によりどちらの画像がより注視されたのか検討した。その結果、乳児の画像の方がより注視されることを明らかにした。

このように、成人の画像よりも子どもの画像の方が好まれるという現象が多くの研究によって確認されており、Lorenz (1943)が提唱したヒトは幼児図式に反応する特性を持つとする理論は支持されている。しかし、この選好法や画像呈示法を日本において実施した研究は存在しない。従って、日本においても海外の研究と同様の結果が見られるかどうか検討することは、文化的普遍性を検討するという意味においても一定の意義があるといえる。

選好法や画像呈示法は、実際に乳幼児の姿に注目するかを検討することが可能で、子どもへの態度の基礎的な要素である子どもへの選好傾向を測定できるという利点がある。特に選好法は乳幼児と成人を対呈示することで、より直接的にどちらが選好されるか検討することができる。ただし、選好法にはいくつかの問題点がある。それは、乳児と成人の写真を対呈示しているため、試行数が重なるにつれ、調査対象者が研究の意図に気付く可能性がある点である。これを回避するためには、幼児の写真や成人の写真といった刺激以外にも、中性的な刺激として人工物や植物といったモノの写真を加えて検討する必要があるといえる。加えて、従来の研究では刺激の呈示時間が研究ごとに異なっており、呈示時間を設定しないものも存在するため、刺激を呈示する時間を一定に保ち、研究の信頼性を高めることも重要である。

2-3 観察法

実際の行動を観察することにより、子どもへの関心の程度を検討する試みは幅広い年齢の参加者を対象に行われている。幼児を対象に行われたものには、Berman, Monda, & Myerscough (1977)や Melson & Fogel (1982)がある。8歳の児童と14歳の青年前期の者を対象としたものには、Frodi & Lamb (1978)がある。10歳から15歳の女子を対象としたものには、Frodi, Murray, Lamb, & Steinberg (1984)がある。高校生から中年の者を対象としたもの

には、Feldman & Nash (1978, 1979a, 1979b)がある³。

Berman et al. (1977)は、保育所の一角（コーナー）にベビーサークルを設置し、サークル内に何も無い日、金魚がいる日、乳児がいる日で幼児の行動の違いを観察した。その結果、女兒の方がベビーサークル内に乳児が1名いる場合、その付近（コーナー）で過ごす時間が長かった。

Melson & Fogel (1982)やFogel, Melson, Toda, & Mistry (1987)は、実験室に面識のない乳児1名とその母親がいる状況に幼児を約10分間置いて行動を観察した。その結果、異性よりも同性の乳児に強い関心を持つこと、2～3歳の年少児は4～5歳の年長児と比べて実験室内で「何もしない」時間が長いことなどを明らかにした。

Frodi & Lamb (1978)は、実験室に面識のない乳児1名とその母親がいる状況に8歳と14歳の参加者を6分間置いて行動を観察した。その結果、全体としては女子の方が乳児への関心は高かったが、交互作用が見られ、男子では14歳より8歳の方が関心は高く、女子では8歳より14歳の方が関心は高かった。

Feldman & Nash (1978, 1979a, 1979b)は、実験室に面識のない乳児1名とその母親がいる実験室に参加者を6分間置いて行動を観察した。その結果、おおむね女性の方が乳児への関心は高かった。

Frodi et al. (1984)は、初潮の到来による乳児への行動の違いについて検討するため、実験室に面識のない乳児1名とその母親がいる実験室に10～15歳の女子を20分間置いて行動を観察した。その結果、初潮後の女子の方が乳児をより無視し、乳児に働きかける程度が低かった。

Blakemore (1998)は、より日常的な場面での子どもの乳児に対する行動を観察するため、複数の親に自身の子ども（3歳児と5歳児）が乳児と一緒にいる場面を観察するように依頼し、子どもが乳児と交流を持った時間の割合、乳児への関心の程度、養護的な行動の程度について評定を求めた。その結果、女兒の方が乳児と交流した時間や関心、養護的行動が多いことを示した。

中川・松村（2010）は、女子大学生を乳児（3～4か月）がいる部屋に入れ、乳児をあやそうように指示し、その様子を観察した。そして、過去の乳児との接触経験がある学生は、多様なレパトリーのあやし行動が見られ、あやし言葉も多く、乳児の気持ちや考えを代

³ これらの研究では、主に時間見本法を用いて特定の行動（乳児を見る、微笑みかける、話しかける、触れるなど）の有無を数えることにより、乳児への関心の指標としている。

弁するような言葉かけをすることを明らかにした。

母親の自分の子に対する敏感性を観察法により測定する試みは、福田（2004）が行っている。ここでは、食事場面と遊び場面における母親の子ども（6～7 か月）に対する敏感性に関して、シグナルに対する母親の気づき、それらに対する正確な解釈、それらに対する迅速な応答という 3 側面から 9 段階で評定するという手法が取られている。

福田（2004）の研究では、敏感性を評定する項目は実質的に 1 項目だけであったが、より多角的な項目に基づいて成人と子どもの相互作用場面を観察し、得点化する方法もある。福田・柳沢（2010, 2011）は、NCATS (Nursing Child Assessment Teaching Scale) という 1970 年代にアメリカで開発された母親と子どもの行動特性を観察するための尺度を用いて、大学生が乳幼児との相互作用を持つ場面を観察し、NCATS を用いて学生の行動を評定し、得点化している。

観察法は、実際の行動から子どもへの態度を把握することが可能であり、現実場面での行動傾向を最も適切に検討することができるという利点がある。しかし、これらの観察法は、さほど動き回ることがなく、発話も少ない乳児であるからこそ可能であったことである。より年齢が高い幼児の場合、部屋の中を動き回ったり、研究参加者に対して話しかけたりするなど、活発に行動する可能性がある。そのため、先行研究のような状況を設定し、観察することは困難であることが予想される。

2-4 文章記述法

子どもへの態度について、研究参加者に文章の記述を求めることにより、明らかにしようとした研究も存在する。

子ども観について文章記述法により検討したものとしては以下のようなものがある。吉田・梶山・草場・中島・田村（1993）は、文章完成法を用いて子ども観の検討を行った。具体的には、「私にとって子どもは」、「子どもと遊ぶのは」といった刺激文に続く文章の記述を求め、その結果について数量化Ⅲ類により分析した。星野・日潟・吉田（2008）は、大学生が子ども観について日頃感じているままに記述を求めるという完全な自由記述法により検討した。得られた記述について数量化Ⅲ類を用いて分析した結果、子どもとのかわりの体験によって異なる子ども観が見られたとした。吉澤・大瀧（2011, 2012）は、教員養成課程に在籍する大学生の子ども観について検討した。具体的には、子どもが好きか嫌い、子どもの頃と現在とで子どもが好きか嫌いに変化があったか、将来子どもが欲

しいかといった構造化された質問について、その理由と共に回答を求め、その結果をテキストマイニングにより分析している。

子どもとふれあう経験を通して子どもへの態度がどのように変化するか文章記述法により検討したのものとしては以下のようなものがある。金谷（2008）は、大学生に幼児との交流を経験させ、その前後で気持ちの変化の記述を求めた。そして、その結果について、特徴的な記述から幼児との交流の重要性を指摘している。

乳幼児とのふれあいによる子どもへの態度の変化について、高校生を対象に検討した者としては次のようなものがある。中嶋ら（2004）は、高校家庭科における保育体験学習に参加した生徒を対象に、体験前後の気持ちについて感想文を書かせ、その内容を乳幼児への感情が体験前後で変化した者や変化しなかった者に特徴的な記述について分析した。砂上・日景・中嶋・盛（2005）は、中嶋ら（2004）と同様に高校家庭科における保育体験学習に参加した生徒を対象に感想文を書かせ、その内容について、KJ法を用いてカテゴリー分けし、より構造的な分析を行っている。

中学生を対象とした研究としては次のようなものがある。石川・吉川（2012）は、ふれあい体験学習を経験した中学生に対して体験から得た事柄などについてレポートを提出させ、その内容について特徴的な記述を分析したものがある。また、藤井・今川・村上・掛・東・権田（2013）は、幼児とのふれあい体験学習経験した中学生に対して、学習の振り返り時に心に残っていることについて具体的な記述を求めた。そして、その結果をテキストマイニングにより分析した。

このように、子ども観や子どもとの交流に伴う子どもへの態度の変化について、文章記述法により、検討しようとする試みが存在する。しかし、特に子どもとの交流については、その内容が個々の状況に依存するため、一般化が難しいという難点がある。文章記述法は面接法を用いるよりも実施が簡便であり、集団実施も可能であるが、研究参加者への負担は構造化されたものでない限り、やや大きいといえよう。

2-5 面接法

面接法により子どもへの態度の測定を試みた研究も存在する。伊藤（2004）は、中学生は「技術・家庭」の教科、高校生は「保育」の教科で保育体験学習を経験した前後での子どもへの態度の変化について検討している。その中で、生徒に対して半構造化面接を実施し、保育体験学習への感想や印象深かった点などを尋ねた。そして、語られた内容として

特徴的な部分について検討を加えた。糊澤・岩立（2010）は、初産の妊婦が妊娠後期に養護性が低下する現象を解明すべく、初産婦と経産婦に半構造化面接を実施し、質問紙により測定された養護性との比較を行った。具体的には、語られた内容についてカテゴリーに分類し、そのカテゴリーに関する語りの有無により、質問紙による養護性の得点に違いが見られるかを検討した。

面接法、特に半構造化面接を用いた場合、1人の研究参加者が持つ子どもへの態度を多角的に検討することが可能となる。面接者が追加の質問を繰り返すことで、得られる内容も質問紙法や文章記述法と比べて、より豊かになることが最大の利点である。しかし、一度に大量の研究参加者を集めることに難があり、サンプル数が少ない傾向がある。そのため、一般化可能性に難があると言わざるを得ない。また、得られたデータについて、特徴的な語りにのみ注目する手法を取るか、カテゴリーに分類し、言及が存在したか否かをカウントする量的な手法により処理するかという問題もある。面接法により得られるデータは豊かで多面的なものであるが、その処理の仕方については難しい側面があるといえる。

2-6 IFEEL Pictures

IFEEL Pictures (Infant Facial Expression of Emotion from Looking at Pictures)とは、養育者が乳児から発せられる情緒シグナルに対して応答する能力（情緒応答性）を測定するために Emde, Osofsky, & Butterfield (1993)が開発したものである。具体的には、12か月の乳児の多様な表情写真30枚を呈示し、乳児の情緒の読み取りについて回答を求め、その回答をいくつかのカテゴリーに分類することで、情緒応答性の個人差について測定しようとするものである。日本人乳児の写真を使用し、新たに日本人における回答カテゴリーを作成した日本版 IFEEL Pictures (JIFP)は、井上・濱田・深津・滝口・小此木（1990）により開発されている。そして、うつ傾向との関連（井上ら、1990）や、情動共感性および育児困難感との関連（小原、2005）、母親と女子大学生における乳児の情緒の読み取りの差（長屋・濱田・井上・深津、2008）、小学生における情緒の読み取り傾向（山口・松村、2009）などが検討されている。

IFEEL Pictures の特徴は、多様な表情を示す乳児への応答性、換言すれば、共感性の高さを検討するものである。子どもの感情状態を研究参加者にイメージしてもらった場合、質問紙法では、質問文で感情状態を想像してもらったしか方法がなく、具体的に感情状態がイメージできるか否かは、研究参加者の想像力や、それまでの子どもとの関わり経験に依存す

る面がある。また、選好法は写真を呈示するという点において、IFEEL Pictures と類似しているように思われるが、選好法では中立的な表情の写真を用いることが多いため、子どもの感情の読み取りまでは検討できない。また、観察法は、実施時の乳幼児の状態に依存するため、感情の読み取り能力を適切に測定しにくい面がある。従って、IFEEL Pictures は、上記のような既存の子どもへの態度の測定手法が持つ欠点を補った手法であるといえる。

ただし、欠点もある。集団実施が困難であるという点や、構造化面接に近いものの、面接法的に乳児の情動の読み取りを尋ねていく手続きを取るため、研究者に一定の能力やスキルが求められるという点である。また、読み取られた感情状態の回答をカテゴリーに分類することについても習熟が必要である。すなわち、研究者が IFEEL Pictures の実施に十分熟達していないと用いることができないのである。実施が容易でなく、実施の簡便さに難があるといえよう。

2-7 映像呈示法

乳幼児を撮影した映像を研究参加者に呈示し、子どもへの態度を測定しようとする試みもある。

Frodi & Lamb (1978)は、8歳と14歳の児童・青年前期の者を対象に、乳児の泣きや笑いの映像を呈示し、その際の血圧、皮膚コンダクタンス、心拍数を測定した。その結果、これらの指標に男女差がないことを示した。また、Frodi, Lamb, Leavitt, & Donovan (1978)は、約9か月の子をもつ20~38歳の母親と父親を対象に最低血圧と皮膚コンダクタンスの測定を行った結果、乳児の泣きの映像は皮膚コンダクタンスを増加させる反面、笑いの映像では生理的変化は生じないことを示した。このほか、Frodi, Lamb, Leavitt, Donovan, Neff, & Sherry (1978)やFrodi, Lamb & Wille (1981)は、早産で生まれた乳児（早産児）と予定日通りに生まれた乳児（正期産児）の泣きの映像を母親や父親に呈示し、早産児の泣きや外見は、より強い生理的反応を生じさせ、不快と感じられるが、泣きに対しては同情的であることを示した。

郷式 (1999) は、大学生・大学院生に、子どもが遊んでいる場面の映像を呈示することで、子どもの感情や心的状態の読み取り能力を測定した。具体的には、1歳児が遊んでいる5つの場面を1~2分程度に編集し、刺激材料として呈示し、子どもの表情から分かる感情状態や、行動や状況から推測される意図や考え等の心的状態について記述するように求めた。そして、記述内容をポジティブ、ネガティブといったカテゴリーに分類し、各カテ

ゴリーについて、いくつ言及があったかをカウントし、子どもの感情や心的状態の読み取り能力とした。

篠原(2006)は、6～9か月児が家庭で母親と自由遊びする場面、乳児が1人で遊ぶ場面、母親との食事場면을撮影した映像を約30秒のビデオクリップに編集し、乳児を持つ母親に呈示した。そして、各ビデオクリップについて1対1の面接形式で「乳児がどんなことを思ったり、考えたり、感じたりしていると思いますか?」と尋ね、乳児の内的状態について言及した回数をいくつかのカテゴリー別にカウントし、mind-mindedness⁴得点とした。

これらの測定法は、現実的な乳幼児の日常場면을映像として呈示することにより、動的でリアリティーを持った乳幼児の姿を研究参加者に呈示することができ、研究参加者が子どもを思い描く際に生じるバイアスの問題や、それまでの乳幼児に関する知識不足から生じる十分に子どもの姿を思い描くことができないといった問題を回避できる。また、観察法と異なり、研究参加者には常に同一の刺激が与えられるため、一般化可能性も高い。しかし、どのような場面の、どのような感情を示している映像を切り取るかについては、郷式(1999)、篠原(2006)ともに細心の注意を払っているものの、偏りが生じる可能性がある。また、得られた回答をどのカテゴリーに分類するかについては、研究者によるバイアスが生じるおそれがある。すなわち、多様な表情や心的状態が反映されるように配慮したとしても、研究者によるバイアスの影響を完全に排除することは難しいといえる。

2-8 泣き声呈示法

乳児が発する泣き声を呈示し、その反応から子どもへの態度を測定しようとする研究も存在する。泣き声への反応については、質問紙法や生理指標の測定、神経科学的手法による測定により検討されてきた。

研究参加者に泣き声を聞かせて、その反応を検討する研究は海外において多く実施されている⁵。代表的なものとしてはSagi(1981)がある。ここでは、1児の母、2児の母、養育経験はあるが子どもを持たない女性、養育経験も子どももない女性を対象に、喚起状況の異なる3種類の泣き声を聞かせ、その原因を特定させる課題を行った。

同様の研究は日本でも行われており、足立・村井・岡田・仁平(1985)は、8か月以上

⁴ mind-mindedness (マインド・マインディッドネス)とは、養育者の特徴として、幼い子どもであっても既に心的世界を有した独立した存在であるとみなし、心的状態に目を向け、心を持った存在として扱い、関わろうとする傾向のことを言う(Meins, 1997)。

⁵ 海外の研究を概観したものとしては神谷(2002)がある。

の子を持つ母親，養育経験を持つ妊婦，養育経験のない妊婦，養育経験のある未婚女子短期大学生，養育経験のない女子大学生を対象に，生後4～5日の乳児の痛み刺激に対する泣き声を聞かせた。乳児の泣き声は，中枢神経系に何らかのストレスを受けたリスクがある乳児と，リスクが低い乳児から録音された。研究参加者は泣き声を聞いた後，「心地よいー耳障りな」，「鋭いー鋭くない」といった尺度による評定を行った。すなわち，発達にリスクがある乳児とリスクが低い乳児の泣き声の弁別能力を測定するものであった。足立ら（1985）は，女性を対象としたものであったが，男性を対象とした研究としては，神谷（2002）が存在する。

泣き声の弁別だけでなく，質問紙により測定された親性準備性との関連を検討したものもある。瀧川・中見・桂田（2012）は，大学生を対象に1歳6か月の男児の状況が異なる8つの泣き声を聞かせ，泣きが起きている状況の弁別や泣き声の受け止め方，泣き声を聞いた時にかまってあげたいと思うか，あやしてあげたいと思うか，さらに佐々木（2007）の親性準備性尺度との関連を検討した。その結果，親性準備性が高いほど，泣き声をポジティブに受け止めており，乳児への応答性も高いことを示した。

泣き声への反応について生理指標から検討したものとしては，次のようなものがある。高橋・桐田（2006）は，育児中の母親に3か月の乳児における空腹時の泣き声を聞かせ，泣き声聴取時の心拍数，皮膚コンダクタンス変化，拡張時血圧を測定した。その結果，泣き声を聞いていない安静時よりも泣き声を聞いている状況の方が心拍数は有意に低下することを見出した。そして，刺激に対して注意が向くと，心拍数が低下する（Lacey & Lacey, 1978）とされることから，母親は泣き声に対して注意を向けたことの表れであるとした。また，高橋・桐田（2011）は，同様の手続きで母親と父親の上記3つの生理指標の比較を行っている。その結果，父親と母親の間に生理的反応の差異はなかったとしている。

泣き声への反応について神経科学（脳科学）的指標から検討したものとしては，次のようなものがある。佐々木・小坂・末原・町浦・波崎・松木・定藤・岡沢・田邊（2010a）は，青年期の未婚男女を対象に，乳幼児との継続接触体験を経験させ，その前後で，乳児の泣き声を聞いている際の脳の活動についてfMRIを用いて評価した。その結果，体験後では，感情や注意，認知領域である両側の前部／後部帯状回，両側の中前頭回に有意な賦活を認めた。また，女性のみ体験後に感情や注意，認知領域である左側帯状回，両側中前頭回が有意に賦活したが，男性ではそれが見られなかったことが佐々木・小坂・末原・町浦・波崎・松木・定藤・岡沢・田邊（2010b）により示されている。

上述のように、乳児の泣き声をどのように認知するかという研究は、国内外問わず、古くから行われている。そして、実際に乳児の泣き声を聞かせた上で、質問紙や生理指標、神経科学的指標を用いて、泣き声の認知のあり様を測定されてきた。しかし実際には、乳幼児は泣くだけの存在ではなく、様々な感情を表出する。従って、泣き声への認知のみを検討するのでは、子どもへの態度を広く検討することは難しいのではないかと思われる。泣きは、乳児が大人に送る原始的なメッセージの1つであり、その認知のあり様を検討することは十分に意義があることであるが、子どもへの態度という、より広い概念を測定しようとする際には、泣きだけにこだわらないことが肝要であるといえよう。

2-9 海外における子どもへの態度の測定法のまとめ

以上のように、子どもへの態度の測定には様々な方法が用いられてきた。日本では子どもへの態度は質問紙法で検討されることが多く、対象も成人であることが多い。しかし、海外では1950年代から質問紙法ではない多様な方法により子どもへの態度が検討されてきた。特に選好法や観察法による子どもへの関心の程度の測定、映像呈示法を用いた生理的指標の測定などにより、子どもへの態度の程度を検討した研究が多く、研究対象も日本と異なり、幼児から高齢者に至るまで幅広い。そこで、以下では研究史を整理するという観点から、海外における子どもへの態度の測定法について、その方法、対象、刺激、指標というについて整理し、表としてまとめた(表2-1)。

なお、日本では子どもへの態度の要因(すなわち、個人差)を探る研究が多いが、海外ではBerman(1980)がレビューしたように、子どもへの関心や反応の男女差の検討に焦点を当てたものが多いことを付言しておく。また、泣き声呈示法を用いた研究には子どもへの態度以外にも、母子相互作用や養育行動などとの関連を検討した研究が多く存在する(神谷(2002)が概観している)ため、ここでは代表的なものとしてSagi(1981)のみを取り上げる。

表2-1 海外における子どもへの態度の研究

	対象					刺激	指標	備考
	幼児	小学生	中学生・高校生	大学生	成人前期			
Harbw (1971)				○		アカガザルの赤ちゃんの写真	なし	参加者の状態を観察
Berman et al. (1975)				○		サル・霊長類の赤ちゃんの写真	魅力度 (5件法)	
Berman (1976)				○		サル・霊長類の赤ちゃんの写真	魅力度 (5件法)	Berman et al. (1975)の追試
Stenganz et al. (1977)				○		顔のパーツの大きさや幅などが操作された乳児の顔の絵	魅力度 (7件法)	
Glocker et al. (2009)				○		顔のパーツの大きさや幅などが操作された乳児の顔写真	かわいいと思う程度 (5件法) 世話したいと思う程度 (5件法)	
Lehmann et al. (2013)		○	○	○	○	ヒトの乳児・成人の写真、動物の赤ちゃん・成体の写真	魅力度 (5件法)	
Beier et al. (1957)				○		幼児・大学生・中年の成人の写真	「好きな」「嫌いな」の2件法	
Fulard & Reiling (1976)		○	○	○		ヒトの乳幼児・成人の写真、動物の赤ちゃん・成体の写真	選好数	
Berman et al. (1978)		○	○			1歳児と中年の成人の写真	選好数	参加者と同じ人種の人物写真を呈示
Goldberg et al. (1982)			○			乳児 (10~14か月児)・参加者と同年齢の女子・成人 (大学生・30~50歳) の写真	選好数	参加者は7年生
Maestripietri et al. (2004)		○	○			乳幼児・成人の写真とシルエット、動物の赤ちゃん・成体の写真とシルエット	選好数	
Roney et al. (2006)				○		乳幼児の画像と成人の画像	選好数	
Brosch et al. (2007)				○		乳児と成人の画像、動物の赤ちゃんと成体の画像	画像への反応時間	
Berman et al. (1977)	○					乳児 (13か月児)	乳児のそばで過ごした時間	保育室の一角にベビーサークルを設置
Meldon & Fogel (1982)	○					乳児	乳児への働きかけ数・近寄った回数等	実験室で実施
Frodi et al. (1984)		○	○			乳児 (8~12か月児)	乳児への働きかけ数・近寄った回数等	実験室で実施
Fogel et al. (1987)	○					乳児 (6~8か月児)	乳児への働きかけ数・近寄った回数等	実験室で実施
Blakemore (1998)	○					乳児	乳児と交流した時間の割合・乳児への関心の程度・乳児への羨望的な行動の程度	対象となった幼児の親が各指標を評定

表2-1 海外における子どもへの態度の研究 (続き)

	対象					刺激	指標	備考
	幼児	小学生	中学・高校生	大学生	成人前期 成人後期			
Feldman et al. (1977)	○	○				選好法：乳児・成人・モノの写真 観察法：乳児 (6~10か月児)	選好法：乳児の写真を選んだ数・写真の注視時間 観察法：乳児への働きかけ回数・近寄った回数等	
Feldman & Nash (1978)					○	選好法：乳児・成人・モノの写真 観察法：乳児 (6~11か月児)	選好法：乳児の写真を選んだ数・写真の注視時間 観察法：乳児への働きかけ回数・近寄った回数等	
Feldman & Nash (1979a)		○				選好法：乳児・成人・モノの写真 観察法：乳児 (6~12か月児)	選好法：乳児の写真を選んだ数・写真の注視時間 観察法：乳児への働きかけ回数・近寄った回数等	
Feldman & Nash (1979b)					○	選好法：乳児・成人・モノの写真 観察法：乳児 (6~13か月児)	選好法：乳児の写真を選んだ数・写真の注視時間 観察法：乳児への働きかけ回数・近寄った回数等	
Maestripieri & Peika (2002)	○	○		○	○	選好法：乳幼児・成人の写真とシルエット、動物の赤ちゃん・成体の写真とシルエット 質問紙法：乳児への関心等	選好法：選好数 質問紙法：各尺度の得点	
Frodi... Donovan et al. (1978)				○	○	5か月児の泣きと笑いの映像	最低血圧・皮膚コンダクタンス	
Frodi... Sherry et al. (1978)				○	○	新生児 (早産児・正期産児) の泣きの映像	最低血圧・心拍数・皮膚コンダクタンス	
Frodi et al. (1981)				○	○	新生児 (早産児・正期産児) の泣きの映像	最低血圧・心拍数・皮膚コンダクタンス	
Frodi & Lamb (1978)	○	○				映像呈示法：乳児の泣きと笑いの映像 観察法：乳児 (10か月児)	映像呈示法：血圧・心拍数・皮膚コンダクタンス 観察法：乳児への働きかけ回数・近寄った回数等	観察の方法はFeldman et al.の一連の研究と同じ
Sagi (1981)				○	○	乳児の泣き声	泣き声の原因の正答数	

(注) 成人前期とは40歳未満を指し、成人後期とは40歳以上を指す。
研究対象となったことを示す○に添えた"m"は女性の参加者のみが対象であったことを示し、"m"は男性の参加者のみが対象であったことを示す。

2-10 先行研究での測定方法の長所と短所および総合的な有利さ

ここまで、子どもへの態度の測定法について、質問紙法、選好法、観察法、文章記述法、面接法、IFEEL Pictures、映像呈示法、泣き声呈示法の8つを取り上げ、その概要の説明と共に先行研究を紹介し、その長所と限界について示してきた。

以下では、上記の9つの方法の長所と短所を再整理し、本研究で用いるのに適当な方法を選定する。本研究で実施する方法を選ぶに当たり、重視した観点は以下の5つである。第1は、実施に当たって複雑な手順や技能の習得が少なく、手続きが容易さの程度である「実施の簡便さ」、第2は、1度の研究でより多くの研究参加者を得るのができる程度である「サンプル数確保の容易さ」、第3は、研究参加者への心身の負担の程度である「研究参加者の負荷」、第4は、得られた結果に対して研究者のバイアスが入り込む危険性の程度である「バイアス危険性」、第5は、得られた結果が一般化できる可能性の程度である「一般化可能性」である。それぞれの項目について他の測定法と比較して有利である・優れている場合を○、やや不利である・一部に難がある場合を△、不利である・実施において問題がある場合を×として表にまとめた(表2-2)。以下では測定法ごとに各観点の有利・不利を見ていく。

表2-2 各測定法の評価観点別に見た有利さ

	実施の 簡便さ	サンプル数 確保の容易さ	研究参加者 の負荷	バイアス 危険性	一般化 可能性
質問紙法	○	○	△	△	○
選好法・ 画像呈示法	△	△	○	○	○
観察法	×	×	×	△	×
文章記述法	○	○	△	△	△
面接法	△	×	△	△	×
IFEEL Pictures	×	△	○	○	△
映像呈示法	△	△	△	△	△
泣き声呈示法	△	△	△	○	△

注) ○：他の測定法と比較して有利・優れている，
△：他の測定法と比較してやや不利・一部に難がある，
×：他の測定法と比較して不利・問題がある。

2-10-1 質問紙法の長所・短所

質問紙法は、実施が比較的容易で、集団実施が可能であり、量的データを大量に収集できるため、一般化可能性が高い点が有利な点である。しかし、質問項目数が多くなるほど、研究参加者の負担が大きくなる。また、質問項目や尺度の選定に当たって、研究者のバイアスが入り込む余地がある点が他の手法と比較して不利な点となる。質問紙法により子どもへの態度を測定する場合、項目・尺度選定や項目数に注意が必要となるといえる。

2-10-2 選好法・画像呈示法の長所・短所

選好法と画像呈示法は、画面や冊子などに表示・印刷された大人と子どもの画像のうち、どちらが気になるか選択する手続きを繰り返す。これは、さほど認知的に大きな負荷のかかる課題ではないため、研究参加者の負担は小さい。また、複数の大人と子どもの画像を呈示し、それへの反応を検討するという単純な手続きであるため、研究者によるバイアスが入りにくい。そして、得られたデータは、量的なものとして分析できるため、一般化可能性が高い。一方で、画像を呈示する時間や方法などで一定の統制を行わなければ、信頼性が担保できないため、実施の簡便さはやや劣る。また、集団実施が難しいため、1度に大量のデータを集めることは関しては、やや難があるといえる。

2-10-3 観察法の長所・短所

観察法は、実際に乳幼児を前にした研究参加者の行動を観察するため、状況依存的であり、特に乳幼児の状態（例えば、泣いているか、笑っているか、無反応かなど）次第で研究参加者の行動は大きく変化する。また、実施に当たって、乳幼児を特定の場所に連れてこなくてはならない、もしくは、研究参加者に特定の場所へ出向いてもらわなければならない。そのため、実施は容易ではない。また、集団実施が困難であることから、サンプル数を多く確保することはできない。さらに、実際に乳幼児と関わる際の行動を検討することから、研究参加者に求められる作業や認知的負荷が大きく、負担が大きい。そして、得られたデータは状況依存的であるため、量的に分析できる形で処理したとしても一般化可能性は低い。また、データの分析に際して、観察中に得られた行動をカテゴリーに分類するといった処理を行う場合には、研究者のバイアスが入り込む可能性がある。ただし、一般化された評定尺度法などにより、行動を分析した場合はこの限りではない。

2-10-4 文章記述法の長所・短所

文章記述法は、質問紙法と同様に実施は比較的容易で、集団実施が可能である点有利である。しかし、質問紙法と同様に研究参加者に求められる認知的負荷が大きくなりがちであり、文章の記述を求める設問は研究参加者のバイアスが入る余地がある。また、得られた記述をカテゴリーに分類する、あるいは特徴的な記述を抽出するなど質的な手法によって分析する場合、一般化可能性に限界が生じてくる。ただし、得られた記述をテキストマイニングにより処理する場合や、カテゴリーに分類したうえで、量的に処理することができれば、一般化可能性は高まるといえる。

2-10-5 面接法の長所・短所

面接法は、特に半構造化面接や非構造化面接を用いた場合、質問紙法や文章記述法と異なり、研究参加者の回答を掘り下げて、より豊かな回答を得ることができる点有利である。しかし、実施に当たって、研究者には一定の「聴く」スキルが求められる。また、研究参加者には比較的長い時間、話題について語ってもらう必要があり、やや負担が大きい。また、何を、どのようなタイミングで聞くかといった点で研究者のバイアスが入りやすい。ただし、これらは、研究者が面接者としての技量を高めれば、ある程度は克服可能である。しかし、集団実施は困難で1度に多くの研究参加者を集めることは難しく、また、語られた内容は研究者が聞き出したものであるため状況依存的であり、得られた語りを分析する手法としては質的な方法に頼らざるを得ない。そのため、一般化可能性は低いと言わざるを得ない。

2-10-6 IFEEL Pictures の長所・短所

IFEEL Pictures は、研究参加者に呈示した多様な1歳児の表情写真に対して、1歳児がどのような状態であるか尋ねるといった課題を繰り返すため、選好法と同様に研究参加者の負担は少ない。また、一般化された表情写真を用いるため、研究者のバイアスが入り込む危険は少ない。集団実施は困難で個別実施となるが、観察法や面接法と比較すると研究参加者を集めることも容易である。ただし、IFEEL Pictures の実施に当たっては一般化された手法であるが故に特別な技能の習得が必要で、用いる表情写真も一般に公開されていないため、多くの研究者が実施可能とは言えず、再現性を確認する際に大きな問題点がある。そのため、IFEEL Pictures を用いた研究は少なく、知見の蓄積が少ないため、得られた結果を

先行研究と比較することは難しい。さらに、得られるサンプル数が少ない。従って、一般化可能性には限界があるといえる。

2-10-7 映像呈示法の長所・短所

映像呈示法は、状況依存的である観察法の弱点を補う点で有利である。ただし、まず刺激材料となる映像を作成し、その妥当性を検討する必要があることから、他の測定法と比較して実施の簡便さにやや劣る。また、集団実施は可能であるが、映像に集中するためには個別実施が望ましいため、1度に多くのサンプルを集めることは難しい。研究参加者は映像を注視する必要があるため、それへの反応を口頭または記述により示す必要があるため、やや負荷がかかる。さらに、刺激材料として選ぶ映像によっては、どのような状況の乳幼児の姿を呈示するかについて、研究参加者のバイアスが入り込む余地がある。従って、一般化可能性にはある程度限界があるといえる。

2-10-8 泣き声呈示法の長所・短所

泣き声呈示法は、一定の状況下での乳児の泣き声を呈示することから、研究者のバイアスが生じる危険は少ない。実施も泣き声を研究参加者に聞かせるのみで比較的簡便ではあるが、音量や音の出る方向、音を出す装置などに統制が必要であるため、やや煩雑な手続きを要する。また、集団実施も可能であるが、音量や音の出る方向を一定にするためには個別実施が不可欠であると考えられるため、一度に多くのサンプルを集めることは難しい。また、泣き声という聞き手に不快感情を呼び起こすおそれがある刺激を用いるため、研究参加者への負担は人によって大きくなる。サンプル数が多く集められないことから、一般化可能性には限界があるといえる。加えて、子どもの泣き声への態度だけを扱うことが子どもへの態度全般を反映しうるのかという点について大きな疑問があるといえる。

2-11 本研究で用いる手法

以上のように、各測定法の長所と短所について検討してきた。本研究では、子どもへの態度を量的に一般化可能な形で、どのような研究者であっても追試可能な方法により、幅広い子どもへの態度を捉えることを重視したい。そのため、実施の簡便さや、サンプル数確保の容易さ、一般化可能性を特に重視する。これらの観点を重視すると、量的に多くのサンプルを確保することができ、一般化可能性も高い質問紙法が第1の選択肢となる。

しかし、質問紙法のみでは具体的な子どもの姿をイメージしにくい場合もあると考えられるため、視覚的に子どもを捉えることができる手法も組み合わせることが必要である。視覚的に捉える方法としては、選好法・画像呈示法、IFEEL Pictures、映像呈示法の3つが存在する。選好法・画像呈示法は、子どもが呈している表情や行動への反応を測定することは出来ないが、他の2つの手法と比較して、刺激材料の作成が容易で、作成に当たり研究者のバイアスが生じる危険性が低く、実施に当たって特別なスキルの必要がなく簡便であり、追試の容易である。特に選好法は成人と子どもの画像を同時に呈示することで、より直接的にどちらの画像の方が選好されるのか知ることができる。このことから考えて、選好法が好ましいと考えられる。

以上の理由から、本研究では質問紙法と選好法により、子どもへの態度を検討することとする。また、質問紙法と選好法との関連の比較についても検討することで、子どもへの態度について、より広い視点から測定していくこととする。

第3章 子どもへの関心尺度の作成

3-1 問題と目的

本章では、大学生における子どもへの関心の程度を測定する尺度を作成することを目的とした。ただし、従来の子どもへの態度に関する調査研究においては、子どもの年齢を明確に定義してこなかった。すなわち、新生児から中学生までを一括して「子ども」と呼び、調査がなされてきた。子どもの年齢を十分に定義しないことにより、回答者によっては「子ども」として想定する年齢が異なる可能性があり、イメージする子どもの年齢によっては、回答が異なるおそれがある。従って、尺度作成に先立ち、「子ども」と聞いた時に最もイメージされる年齢層を調査し、「子ども」の定義を明確にするが必要である。

そこで本章では、まず予備調査において、大学生のイメージする「子ども」の年齢層を調査により明らかにして定義する。続く本調査において、その定義に基づいて大学生の子どもへの関心の程度を測定する尺度を作成し、子どもへの関心と関連する要因について探ることを目的とする。

3-2 予備調査：「子ども」の定義

3-2-1 目的

第1に、大学生が「子ども」と呈示された場合に最もイメージされる「子ども」の年齢層を調査し、「子ども」の定義を明確化すること、第2に、尺度の質問項目を作成するため、自由記述により子どもへの関心の向きやすい場面・状況を探ることを目的とした。

3-2-2 方法

(1) 調査対象・時期

埼玉県にある私立大学に在学し、保育学および心理学を専攻する大学生 115 名（男性 36 名、女性 79 名；保育学専攻 28 名、心理学専攻 87 名；平均年齢 19.79 歳、 $SD = 1.02$ ）を対象とした（有効回答率：100%）。実施時期は 2010 年 6 月であった。

(2) 質問紙

1) 「子ども」として最もイメージされる年齢層を尋ねる質問

「あなたにとって「子ども」とは、どの年齢層の子どもが最も強くイメージされますか」という質問に対し、「0～2 歳：乳児・赤ちゃん」、「3～6 歳：幼児・幼稚園児・保育園児」、

「7～9 歳：小学校 1 年生～小学校 3 年生・小学校低学年の児童」, 「10～12 歳：小学校 4 年生～小学校 6 年生・小学校高学年の児童」, 「13 歳～15 歳：中学生」の選択肢の中から 1 つを選ぶよう求めた。

2) 子どもへの関心が生じる場面・状況についての自由記述

子どもへの関心が生じる場面や状況を探り、本調査における尺度項目を作成するため、「あなたが日常で子どもをじっと見てしまう、子どもが気になる場面や状況として、どのようなものが思い浮かびますか。思いつく限り、できるだけ多く以下の回答欄にお書きください」と質問し、自由記述法により回答を求めた。

3-2-3 結果と考察

「子ども」としてイメージされる年齢層と調査対象者の専攻をクロス集計表としてまとめた(表 3-1)。これに対して χ^2 検定を行った結果、有意な連関が見られた ($\chi^2(4) = 12.67$, $p < .05$; $V = .33$)。そこで、残差分析を行ったところ、「幼児 (3～6 歳)」において、保育学専攻の方が有意に度数は多く、「小学校低学年 (7～9 歳)」において、心理学専攻の方が有意に度数は多かった。しかし、全体として見ると、「子ども」としてイメージする年齢層は「幼児 (3～6 歳)」が全体の 66.96% を占めていた。

表3-1 「子ども」としてイメージされる年齢層と専攻のクロス集計表 (単位は人数)

	乳児 (0～2歳)	幼児 (3～6歳)	小学校低学年 (7～9歳)	小学校高学年 (10～12歳)	中学生 (13～15歳)	全体
保育学専攻	1 (3.57%)	26▲ (92.86%)	1▽ (3.57%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	28
心理学専攻	2 (2.30%)	51▽ (58.62%)	25▲ (28.74%)	8 (9.20%)	1 (1.15%)	87
全体	3 (2.61%)	77 (66.96%)	26 (22.61%)	8 (6.96%)	1 (0.87%)	115

注) カッコ内は専攻ごとのパーセント

残差分析の結果より, ▲: 有意に多い, ▽: 有意に少ない ($p < .05$)

中嶋・中・林田・宮下・森藤・山下・本多 (2005) は、看護学を専攻する大学生および看護学校の学生に対して、「子ども」として「乳児」, 「幼児」, 「小学生」, 「中学生」のうち、どれを最もイメージするかを尋ねている。その結果、「子ども」のイメージは「幼児」とする者が最も多い(全体の 61.62%) と報告している。中嶋ら (2005) の研究では、年齢について直接の定義は行っていないものの、今回の予備調査においても「子ども」として「幼児 (3～6 歳)」をイメージする者が最も多く、先の研究と同様の結果が得られた。

従って、以下の本調査では「子ども」を「幼児 (幼稚園児・保育園児・3～6 歳の子ども)」

と、統一して表記するのが適切といえる。よって、以下では「子ども」を「幼児（幼稚園児・保育園児・3～6歳の子ども）」として扱い、「子ども」と「幼児」を同義語として扱う。

「子ども」の年齢が定義されたことから、第1章において定義した子どもへの関心の定義を以下のように修正する。すなわち、子どもへの関心とは、「社会に存在する自分の子ども以外の3歳から6歳の幼児と遭遇した際に生じる主観的な感情、認知、および幼児への志向性」のことをいう。

3-3 本調査：子どもへの関心尺度の作成

3-3-1 目的

大学生における子どもへの関心の程度を測定する尺度を作成し、それと関連する要因を探ることを目的とした。

3-3-2 方法

(1) 調査対象・時期

埼玉県にある私立大学に在学し、心理学と保育学を専攻する大学生266名を対象とした質問紙調査を実施した。このうち、予備調査を実施した学年・学科の学生、調査対象者が少なかった福祉学専攻の学生(3名)、回答内容に著しく不備のある者を除いた247名(平均年齢は18.93歳、 $SD = 1.85$)を分析対象とした(有効回答率：92.86%)。247名の学生の男女別と専攻の内訳をクロス集計表としてまとめた(表3-2)。これに対して χ^2 検定を行った結果、有意な連関が見られた($\chi^2(1) = 21.01, p < .01; V = .29$)。そこで、残差分析を行ったところ、心理学専攻において男性が有意に多く、保育学専攻において女性が有意に多かった。よって、男女別と専攻で回答者に偏りが見られた。実施時期は2010年7月であった。

表3-2 調査対象者の属性 (単位は人数)

	保育学専攻	心理学専攻	全体
男性	17 ▽ (25.00%)	51 ▲ (75.00%)	68
女性	105 ▲ (58.66%)	74 ▽ (41.34%)	179
全体	122 (49.39%)	125 (50.61%)	247

注) カッコ内は性別ごとのパーセント
残差分析の結果より、▲：有意に多い，▽：有意に少ない ($p < .05$)

(2) 質問紙

1) 子どもへの関心の程度を測定する項目

まず冒頭の教示文において、主語を「幼児」と統一して表記した上で、「幼児」とは「幼児（幼稚園児・保育園児・3～6歳の子ども）」を指すことを示した。

尺度の質問項目は、糊澤ら（2009）の養護性尺度から11項目（「幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう」など）、中西・栗津（1996）の養護性尺度から4項目（「遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる」など）、中西・栗津（1997）の養護性尺度から4項目（「幼い子どもに接する職業に関心がある」など）、牧野・中西（1989）の親になることへの準備状態測定尺度から8項目（「私は赤ちゃんをみているだけで楽しくなる」など）、桜井（1986）の児童用共感測定尺度から3項目（「だれとも遊べないで、ひとりぼっちでいる子を見ると、かわいそうになります。」など）を収集し、予備調査の自由記述をもとに作成した16項目を加えた計46項目から構成された。それぞれの質問項目の主語を「幼児」に統一し、文末表現等を一部変更した上で、6段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で回答を求めた。

2) 併存的妥当性を検討するための尺度

子どもへの関心尺度の併存的妥当性を検討するために、花沢（1992）の対児感情評定尺度28項目を4段階評定（0.「そんなことはない」、1.「少しそのとおり」、2.「そのとおり」、3.「非常にそのとおり」）で尋ねた。この尺度は、乳児に対して大人が抱く感情を、肯定的側面である「接近感情」と、否定的側面である「否定感情」に分けて測定するものである。質問項目例としては、接近感情を測定するものでは、「あたたかい」、「ほほえましい」、「たのしい」などがあり、否定感情を測定するものでは、「やかましい」、「はずかしい」、「めんどうくさい」などがある。信頼性と妥当性については花沢（1992）により確認されている。

対児感情評定尺度を妥当性検討のために用いた理由は、対児感情評定尺度の得点は赤ちゃんが好きである程度と強い相関を持つ（花沢，1992）ためであり、同時に子どもを「好き」と回答した者は、「好きではない」と回答した者よりも子どもへの関心の程度が高い（中西・栗津，1997）ためである。従って、対児感情評定尺度は子どもへの関心尺度と関連があると推測される。

なお、本来の教示文では「あなたは“赤ちゃん”と頭に浮かべた時に、どのような感じがしますか。」とされているが、本研究では子どもへの関心尺度との整合性を保つために「赤

ちゃん」の部分を「幼児（幼稚園児・保育園児・3～6歳の子ども）」と置き換えて表記した。

3) 幼児との接触経験尺度

幼児との接触経験を測定するために、花沢（1992）の乳児接触体験質問紙より幼児との接触経験を測定するに当たって適当な10項目を選抜し、2段階評定（1.「ある」0.「ない」）で尋ねた。この尺度においても、教示文で「赤ちゃん」とされている部分を「幼児（幼稚園児・保育園児・3～6歳の子ども）」と置き換えて表記した。なお、一部の質問項目については幼児を対象とするには不適切な名詞や表現が含まれていたため、修正を加えた（脚注を参照のこと）。質問項目は次の10項目である。1.「体をさわったこと」、2.「抱っこしたこと」、3.「服を着替えさせたこと」⁶、4.「お風呂に入れたこと」、5.「おんぶしたこと」、6.「おもちゃで遊んだこと」、7.「添い寝をしたこと」⁷、8.「あやしたこと」、9.「ご飯を食べさせたこと」⁸、10.「手を握ったこと」

3-3-3 結果と考察

(1) 子どもへの関心尺度の因子構造

まず、子どもへの関心尺度46項目について、各質問項目の得点が高いほど、子どもへの関心の程度が高くなるように得点化（逆転項目も同様に処理）した。

その上で、子どもへの関心尺度46項目について因子分析（重みづけのない最小2乗法・Promax回転）を行った。因子数はスクリープロット、固有値の変化および、解釈可能性を考慮して4因子として分析した。各項目の因子負荷量が1つの因子に.40以上、かつ他の因子への因子負荷量が.40未満であること、共通性は.30以上であることを基準に繰り返し分析を行った結果、4因子30項目が抽出された（表3-3）。

第1因子は、「幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう」、「幼児を見ているだけで楽しくなる」、「母親に出来事を一生懸命に話している幼児を見るとかわいいと思う」などの14項目で構成されており、幼児を見た際にかわいいと感じて選好する程度や、幼児に対する志向性の程度を表していることから、「好意的注目」と命名した。これは、幼児への好

⁶ 花沢（1992）では、「着物を着せ替えたこと」であったが、より現代的な表現とした。

⁷ 花沢（1992）では、「添い寝をしたこと」であったが、より読みやすくするため、送り仮名を追加した。

⁸ 花沢（1992）では、「ミルクを飲ませたこと」であったが、幼児を対象とするため、改めた。

意的感情に基づく関心の一種であると考えられる。子どもへの好意的感情に関する因子は、従来の子ども観や親準備性を測定する尺度においても度々抽出されてきた（例えば、嘉数ら（1997）の子ども観尺度の「いとおしい存在」、中西・牧野（1989）の親になるための準備状態尺度の「子ども好き」など）。子ども観や親準備性と子どもへの関心は概念的に異なるため、一概に比較はできないが、本研究においても先行研究と同様の傾向が示された。

表3-3 子どもへの関心尺度の因子分析結果

	第1因子 好意的 注目	第2因子 同情	第3因子 好奇心	第4因子 寛容性	共通性
幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう	.95	-.11	.07	-.08	.77
幼児が遊んでいるのを見るのはおもしろい	.95	-.10	-.04	.02	.76
幼児に興味がある	.88	-.11	.12	.05	.84
幼児が好きなのだと思う	.84	.04	-.08	.16	.84
幼児と遊ぶのが好きだ	.76	.12	.03	.08	.85
幼児を見ただけで楽しくなる	.69	.24	.08	-.05	.82
幼児を見ても別にかわいいと感じない*	.68	.13	-.17	.21	.67
幼児が遊んでいるのを見てると楽しくなる	.64	.23	.09	.02	.80
幼児を見ると自分も笑顔になっている	.62	.19	.11	.05	.77
母親に出来事を一生懸命に話している幼児を見るとかわいいなと思う	.59	.29	-.02	.08	.72
将来、幼児に接する職業につきたいと思うことがある	.55	.01	.20	.21	.71
保育園や幼稚園の前を通りかかると、中を覗きたくなる	.52	.19	.21	-.03	.64
寝ている幼児を見ると心が安らぐ	.47	.38	.11	-.08	.66
幼児の瞳にひきつけられるものを感じる	.45	.16	.21	.02	.54
誰とも遊べない一人ぼっちの幼児を見ると、かわいそうになる	.05	.72	-.07	-.10	.44
病院などで体調の悪そうな幼児がいると、とても心配になる	-.07	.71	.02	.11	.54
ケガをしそうな遊びをしている幼児を見ると居ても立ってもいられない	.08	.71	.01	-.09	.52
繁華街に一人でいる幼児を見ると、どうしたのだろうと思う	-.01	.56	.06	.09	.41
幼児が泣いていると何とかしてあげたいと思う	.12	.53	.20	.16	.76
幼児が不安そうな顔をしているときは、不安を取り除いてあげたい	.24	.50	.17	.11	.75
元気のない幼児を見ると心配になる	.15	.40	.25	.03	.52
親に怒られている幼児がいると、なぜ怒られているのかわかりたくなる	-.03	-.01	.82	.01	.64
幼児同士が会話をしていると、その内容が気になる	.25	-.13	.77	-.04	.71
ケンカをしている幼児がいると、何があったのだろうと思う	-.16	.18	.76	.09	.67
テレビに幼児が出てくると興味を持って見る	.38	-.01	.48	.02	.62
新聞などの幼児に関連する記事をよく読む	.11	.09	.42	.06	.36
幼児の声がすると、その声のした方へふり向いてしまうことがある	.28	.25	.41	-.12	.59
幼児の泣き声を聞くとイライラする*	.10	-.07	.06	.85	.83
幼児がうるさくしているとイライラする*	.04	-.05	.04	.84	.74
遊んでいる幼児の歓声をうるさいと感じる*	.07	.09	-.06	.79	.74
他の因子の影響を因子から取り除いた後の因子の分散	2.97	1.47	1.44	1.45	
Cronbachの α 係数	.97	.89	.88	.91	
因子間相関		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子 好意的注目	1.00				
第2因子 同情	.67	1.00			
第3因子 好奇心	.64	.63	1.00		
第4因子 寛容性	.60	.50	.41	1.00	

注) *逆転項目

第2因子は、「誰とも遊べない一人ぼっちの幼児を見ると、かわいそうになる」、「病院などで体調の悪そうな幼児がいると、とても心配になる」、「幼児が泣いていると何とかしてあげたいと思う」などの7項目で構成されており、不安そうにしていたり、悲しんでいたりする幼児への同情的な関心の程度を表していることから、「同情」と命名した。これは、

幼児が弱っていたり、何かしら危機的な状況や困難な状況に置かれていたりする幼児を目にした際に喚起される関心の一種であると考えられる。街中で何か困り事がありそうな大人がいると、一種の共感性の発現として、その人物に目が向く、つまり、関心が生じるということがある。その困っている人物が幼児であれば、ヒトが本来子どもに対する志向性が高いことから考えて、より一層関心が喚起されやすくなると考えられる。従って、「同情」という側面が存在していると考えられる。

第3因子は、「親に怒られている幼児がいると、なぜ怒られているのか知りたくなる」、「幼児同士が会話をしていると、その内容が気になる」、「テレビに幼児が出てくると興味を持って見る」などの6項目で構成されており、幼児の会話や生活等に対して抱く好奇心の程度を表していることから、「好奇心」と命名した。これは、日常場面で見かける幼児について、より知りたいと思う動機であり、マスメディアに登場する子どもへの興味であると考えられる。子どもに関心がある場合、子どもの文化や生活などを知りたいという気持ちが生じる、もしくは子どもを見かけた際に、その様子に注目するというのとは一般的に見られる反応であると考えられる。従って本研究においても、このような因子が抽出されたのであろう。

第4因子は、「幼児の泣き声を聞くとイライラする」、「幼児がうるさくしているとイライラする」、「遊んでいる幼児の歓声をうるさいと感じる」の3項目で構成されており、第4因子に属する全項目が逆転項目であることに留意すると、幼児の泣きや声、騒々しい行動への寛容さを表していることがわかる。従って、第4因子は「寛容性」と命名した。これは、幼児の声や行動に対する非好意的・嫌悪的感情の一種であると考えられる。この因子も「好意的注目」と同様、従来の研究において見出されてきた因子の1つ（例えば、棚澤ら（2009）の養護性尺度の「非受容性」、嘉数ら（1997）の子ども観尺度の「煩わしい存在」など）であり、「寛容性」と同様の意味内容を持つものであると考えられる。

因子間相関については、各因子間で中程度の正の相関が見られた。よって、子どもに関心を有している場合、多様な関心が同時に生起している可能性が示された。

各下位尺度について信頼性係数（Cronbachの α 係数）を算出したところ、 $\alpha = .88 \sim .97$ であり、高い内的整合性が示された。従って、当該下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

(2) 調査対象者の属性別に見た基本統計量

1) 子どもへの関心の男女差および専攻差

子どもへの関心尺度の各下位尺度得点について平均値を算出し、男女別、専攻別にも算出した（表3-4）。

表3-4 子どもへの関心尺度の平均得点（男女別・専攻別）

		全体	男性 n = 68	女性 n = 179	t (df)	d	保育学専攻 n = 122	心理学専攻 n = 125	t (df)	d
好意的注目	平均	67.47	60.88	70.05	4.23 ***	0.61	77.22	58.19	12.05 ***	1.53
	標準偏差	15.68	15.37	15.07	(240)		7.51	15.81	(177.69)	
同情	平均	30.17	28.91	30.65	1.78	0.25	33.26	27.15	7.78 ***	0.98
	標準偏差	6.88	6.86	6.85	(243)		5.24	6.97	(228.19)	
好奇心	平均	22.89	19.72	24.10	4.70 ***	0.67	26.57	19.27	9.94 ***	1.27
	標準偏差	6.81	5.95	6.74	(244)		5.07	6.37	(233.92)	
寛容性	平均	12.92	12.54	13.07	0.95	0.14	14.67	11.22	7.88 ***	1.00
	標準偏差	3.87	3.99	3.82	(245)		2.69	4.08	(215.07)	

*** $p < .001$

まず、男女別で平均値差について検討した結果、「好意的注目」と「好奇心」では、女性の方が得点は高かった。しかし、「同情」と「寛容性」では男女間に差は見られなかった。「好意的注目」は、幼児に対する好意的感情に基づく子どもへの関心の一側面である。花沢（1992）は、乳幼児への肯定的感情は中学・高校生においては、男子より女子の方が高いとしている。本研究においても、「好意的注目」は女性の方が得点は高く、先行研究と同様の結果が見られた。また、「好奇心」は、安積（2008）の女性の方が子どもに対する興味が高いとする結果と同様であった。

一方、「同情」と「寛容性」では男女差は見られなかった。まず、「同情」において男女差が見られなかった点については、青年期の共感性について検討した登張（2003）の結果と反する。登張（2003）は、多次元的共感性尺度を作成し、その下位尺度に、他者の困難や苦痛といった感情への関心の程度を示す「共感的関心」を見出している。「共感的関心」は、他者の状況や感情体験について自分も同じように感じる程度を表しており、定義的にも質問項目内容的にも本研究における「同情」と近いものである。そして、登張（2003）は、中学、高校、大学のいずれの年齢段階においても、女性の方が共感的関心は高いと報告しており、本研究の結果はこれと一致しなかった。ただし、本研究の「同情」の対象は幼児であり、登張（2003）の共感性の対象は他者全般であるという違いがある。幼児が泣きや不安を示すといった様子を見て何も感じないという態度を表明することは、男女に関

係なく、今日の社会が求める幼児への望ましい態度に反すると思われ、そうした態度を表明することは避けられるのではないかと考えられる。すなわち、「同情」において男女差が見られなかった理由としては、社会的望ましさの影響が考えられる。

続いて、「寛容性」において男女差が見られなかった理由を考える。この下位尺度は前述の通り、幼児の言動や行動に対する非好意的・嫌悪的感情に基づく子どもへの関心の一つである。糊澤ら（2009）は養護性の下位尺度に「非受容性」を見出している。これは本研究の「寛容性」と類似した質問項目を持つものであり、糊澤ら（2009）では男女差はないと報告されている。よって、本研究においても先行研究と同様の傾向を示したといえる。

次に、専攻別の平均値差について検討した結果、全ての下位尺度において、心理学専攻より保育学専攻の方が得点は高かった。保育学を専攻する学生は子どもへの関心がそもそも高いため、保育学を専攻したと考えられる。また、保育学の専門教育を受ける中で子どもへのイメージが肯定的かつ多角的になるという先行研究での指摘（菅，2002）も踏まえると、保育学を専攻する学生は日々の教育を受ける中で子どもへの関心を高めていたともいえる。

ただし、保育学を専攻する学生の多くは女性であり（調査対象者の属性については表 3-2 参照）、全体で男女差や専攻差が見られたとしても、各専攻の男女比の偏りによる影響を排除できない。もし、男女別に関係なく心理学専攻より保育学専攻の方が一貫して各下位尺度の得点が高い、あるいは専攻に関係なく男性より女性の方が一貫して各下位尺度得点が高いなら、男女別と専攻で 2 要因分散分析を実施しても交互作用は見られないはずである。そこで、各下位尺度の得点を従属変数として、男女別（2）×専攻（2）の 2 要因分散分析を行った結果、全ての下位尺度で専攻の主効果が有意であり、いずれも心理学専攻より保育学専攻の方が得点は高かった（「好意的注目」： $F(1, 238) = 83.43, p < .001$ ；「同情」： $F(1, 241) = 30.95, p < .001$ ；「好奇心」： $F(1, 242) = 46.92, p < .001$ ；「寛容性」： $F(1, 246) = 39.37, p < .001$ ）。また、「好奇心」では男女別の主効果が有意であり、女性の方が得点は高かった（ $F(1, 242) = 7.03, p < .01$ ）。しかし、いずれの下位尺度においても交互作用は有意ではなかった。従って、予想通り交互作用はなく、専攻の男女比に関係なく一貫して保育学専攻の方が子どもへの関心は高く、女性の方が関心は高かった。

2) 出生順位

出生順位により子どもへの関心に差があるか検討するため、出生順位別に各下位尺度得点の平均値を算出し、1 要因 4 水準の分散分析を行った（表 3-5）。

その結果、「好意的注目」の主効果が有意であり、多重比較（Tukey法）の結果、一人っ子より長子・中間子・末子の方が得点は高かった。また、「同情」の主効果が有意であり、多重比較（Tukey法）の結果、一人っ子より長子の方が得点は高かった。さらに、「寛容性」の主効果が有意であり、多重比較（Tukey法）の結果、一人っ子より長子・中間子・末子の方が得点は高かった。「好奇心」に関しては有意な主効果は見られなかった。

表3-5 出生順位別に見た子どもへの関心尺度の平均得点

		長子 n = 99	中間子 n = 30	末子 n = 91	一人っ子 n = 27	F (df)	η^2	多重比較 (Tukey法)
好意的注目	平均	68.91	68.69	68.90	56.30	5.43 ***	.07	長・中・末 > 一*
	標準偏差	14.46	14.74	14.43	20.51	(3, 238)		
同情	平均	30.94	31.10	30.08	26.46	3.20 *	.04	長 > 一*
	標準偏差	6.93	6.37	6.22	8.44	(3, 241)		
好奇心	平均	23.12	23.80	23.28	19.74	2.27	.03	
	標準偏差	6.73	5.73	6.71	8.00	(3, 242)		
寛容性	平均	13.25	13.43	13.23	10.11	5.68 ***	.07	長・中・末 > 一*
	標準偏差	3.47	3.76	3.81	4.57	(3, 243)		

* $p < .05$, *** $p < .001$

糊澤（2008）は、弟妹のいる長子は、特に一人っ子よりも子どもへの関心が有意に高いと報告している。そして、その理由を長子は弟妹に対して関心を持つように周囲から期待され、また自ら、そうでなければならぬと意識し、さらに、実際に弟妹の世話する経験が多いため、関心が高まるとしている。本研究においても、「好意的注目」「同情」「寛容性」において、一人っ子は弟妹がいる長子や中間子より得点が低かった。

ただし、本研究においては、「好意的注目」と「寛容性」においては、長子や中間子に加え、末子も一人っ子より得点は高かった。糊澤（2008）と同じく、長子や中間子では弟妹の世話をする経験が多いと考えられるため、子どもへの関心は育まれやすいと考えられる。しかし、自分より年下のきょうだいがいない末子でも、一人っ子より両下位尺度の得点が高かったのはなぜだろうか。それは、糊澤ら（2009）も指摘するように、兄姉から世話をしてもらった経験を持つことで、末子は兄姉を子ども（この場合、弟妹である自分）に関心を示すモデルとして捉え、さらに兄姉へのあこがれも加わり、自らも子どもへの関心を示そうとする姿勢が現れるためであると推測される。つまり、兄姉が子どもへの関心を示す様子をモデルとし、末子も他の子どもにはそのように接しようと考えられる。従って、両下位尺度において末子の方が一人っ子より得点が高かったといえる。

(3) 子どもへの関心尺度の併存的妥当性

子どもへの関心尺度の併存的妥当性を検討するため、花沢（1992）の対児感情評定尺度を用いた。これは大人が乳児（本研究では幼児）に抱く感情を測定するもので、肯定的な接近感情は「接近得点」、否定的な回避感情は「回避得点」として算出され、接近得点と回避得点が個人内でどの程度拮抗（葛藤）しているかを示す指標として、回避得点を接近得点で除し、100 をかけた値の「拮抗指数」が算出される。ただし、花沢（1992）によれば、この式による拮抗指数は成人向けであり、測定対象が中学・高校生である場合、拮抗指数が、理論的に超えないとされる 100 を超えるケースが多々発生し、群間比較が困難になるという問題点が存在するため、中学・高校生向けの拮抗指数算出式も開発されている（下記）。この式では接近得点と回避得点が最も拮抗している場合の拮抗指数は 50 となり、拮抗指数が 50 以下の場合、回避感情より接近感情の方が強いことを表し、50 以上の場合、接近感情より回避感情の方が強いことを表す。

$$\text{拮抗指数} = \frac{\text{回避得点}}{\text{接近得点} + \text{回避得点}} \times 100$$

本研究においても、花沢（1992）に従ってまず、成人向けの式で拮抗指数を算出したが、100 を超える者が続出したため、中学・高校生向けの式を用いて拮抗指数を算出した。なお、接近得点と回避得点の信頼性係数（Cronbach の α 係数）を算出したところ、接近得点は $\alpha = .88$ 、回避得点は $\alpha = .82$ であり、高い内的整合性が示された。

その上で、対児感情評定尺度の各得点・指数の平均値および、子どもへの関心尺度の各下位尺度得点との相関係数を算出した（表 3-6）。その結果、各下位尺度の得点は対児感情評定尺度の接近得点とやや弱いから中程度の正の相関を、回避得点とはやや弱いから中程度の負の相関を、拮抗指数とは中程度の負の相関を有していた。

対児感情評定尺度の得点および指数は、幼児に対する「感情」を測定するため、子どもへの関心尺度が測定する「関心」とは概念的に若干異なるものの、上述のように子どもが好きである程度と対児感情評定尺度の得点との間には強い相関があり（花沢, 1992）、かつ、子どもが好きである場合は子どもへの関心が高い（中西・栗津, 1997）という先行研究の結果を踏まえれば、両尺度間には関連があると推測される。本研究において、子どもへの関心尺度と対児感情評定尺度の間に一定の相関が見られたことは、子どもへの関心尺度の

併存的妥当性を支持するものであるといえる。

表3-6 子どもへの関心尺度の各下位尺度得点と対児感情評定尺度および幼児との接触経験尺度との相関係数

	接近得点	回避得点	拮抗指数	幼児との接触経験
平均	22.41	9.30	28.14	7.09
標準偏差	8.09	6.24	15.84	2.50
好意的注目	.61 ***	-.37 ***	-.65 ***	.43 ***
同情	.55 ***	-.28 ***	-.53 ***	.35 ***
好奇心	.53 ***	-.27 ***	-.46 ***	.41 ***
寛容性	.32 ***	-.55 ***	-.65 ***	.26 ***

*** $p < .001$

(4) 幼児との接触経験尺度との関連

幼児との接触経験尺度の各質問項目に対し、経験がありに1点、経験なしに0点を与え、10項目の合計得点をもって接触経験得点とした。なお、接触経験尺度の信頼性係数(Cronbachの α 係数)を算出したところ、 $\alpha = .83$ であり、高い内的整合性が示された。

続いて、幼児との接触経験尺度得点の平均値および、子どもへの関心尺度の各下位尺度との相関係数を算出した(表3-6)。その結果、子どもへの関心の各下位尺度とは、やや弱いから中程度の正の相関が見られた。花沢(1992)は、子どもとの接触経験が多いと子どもへの肯定的感情が高まるとし、安積(2008)は、子どもとの接触経験が多いほど子どもへの興味が高まるとしている。本研究の幼児を見た際にかわいいと思うことによる関心の「好意的注目」と、幼児のことを知りたいと思う「好奇心」は、上記の幼児への肯定的感情と興味に該当すると考えられる。よって、本研究は先行研究と同様、幼児との接触経験が多いほど、幼児への関心は高まるという関連が見られた。

(5) 重回帰分析結果

対児感情評定尺度および幼児との接触経験尺度と子どもへの関心尺度に関連が見られたことから、幼児への感情と接触経験が子どもへの関心に及ぼす影響を検討するため、対児感情の各得点と接触経験を説明変数、子どもへの関心の各下位尺度を独立変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った(表3-7)。なお、以下の分析においてVIFはい

ずれも2未満で、多重共線性はないと判断した。

表3-7 対児感情と幼児との接触経験が
子どもへの関心に及ぼす影響の重回帰分析結果

	接近得点	回避得点	拮抗指数	幼児との 接触経験	R ²
好意的注目	.41 ***	—	-.45 ***	.22 ***	.64 ***
同情	.40 ***	-.29 ***	-.35 ***	.15 **	.47 ***
好奇心	.52 ***	—	—	.14 ***	.45 ***
寛容性	.40 ***	-.61 ***	—	—	.47 ***

注) 値は標準偏回帰係数で有意なもののみ記載。

** $p < .01$, *** $p < .001$

その結果、対児感情では、接近得点が子どもへの関心の全下位尺度に正の影響を与えていた。回避得点が「同情」と「寛容性」に負の影響を与えていた。そして、拮抗指数が「好意的注目」と「同情」に負の影響を与えていた。幼児との接触経験では、「寛容性」を除く子どもへの関心の程度に弱いながらも正の影響を与えていた。

以上より、幼児に対して好意的な感情を有していることは子どもへの関心全体を高め、否定的な感情を有していることは子どもへの同情的な関心や子どもの泣き声や大声への寛容さを低めることが示された。また、拮抗指数が「好意的注目」と「同情」に負の影響を与えていたことから、幼児への感情が拮抗せずに（葛藤なく）回避的な感情が強いほど、幼児を目にした際にかわいいと感じて注目する傾向や、幼児への同情的な関心が低くなることが示された。さらに、幼児との接触経験が弱いながらも子どもへの関心の一部を高める効果が見られた。しかし、対児感情の標準偏回帰係数と比較すると値は低く、接触経験が及ぼす影響は先行研究で指摘されているほど強くない可能性も同時に示された。

3-4 まとめ

本章では、まず、従来の調査研究において十分に定義されてこなかった「子ども」の年齢層を調査により定義することを試みた。その結果、大学生が「子ども」として最もイメージする年齢層は、3～6歳の幼児であることが分かった。続いて、「子ども」とは「3～6歳の幼児」と定義した上で、子どもへの関心の程度を測定する尺度を作成し、因子分析を行った。その結果、「好意的注目」、「同情」、「好奇心」、「寛容性」の4因子が抽出された。

そして、子どもへの関心には男女差や専攻差、出生順位差があることが示された。以下では、男女差が見られた理由について、さらに考察を加える。

子どもへの関心尺度の下位尺度のうち、「好意的注目」と「好奇心」では、女性の方が得点は高かった一方、「同情」と「寛容性」において、男女差は認められなかった。これは上述のように、社会的望ましさの影響も考えられるが、別の角度から見れば、一般的に考えられているほど、男性は女性よりも子どもへの関心が低くはないとも解釈できる。これは、昨今、男性の積極的な育児参加が社会的に奨励されていることなどの影響や、待機児童問題や育休問題に代表される子どもや子育てに関する諸問題がマスメディア等で取り上げられる機会が増えたことなど影響が考えられる。こうした影響により、男性も女性と同等に得点が高かったために、有意な男女差が見られなかった可能性がある。

また、「同情」と「寛容性」は、幼児が泣いていたり、大声を上げていたりするなど、大人に対して何らかのシグナルを発している状況での幼児への注目のしやすさを測定していると考えられる。女性の方が「好意的注目」と「好奇心」の得点が高かったことも踏まえると、女性は男性より平時の状態にある幼児に対して目が向きやすい一方、大人からの応答が求められる状況や状態の幼児への関心の向けやすさに男女差はないといえる。これは、幼児の泣きや大声といった危機的な、あるいは子どもから何らかのシグナルが発せられている状況においては、男女で反応に差はなく、男女に関係なく関心が生じるともいえよう。

第 4 章 子どもへの関心と子ども観および他者意識との関連 —子どもへの関心尺度の更なる併存的妥当性の検証—

4-1 問題と目的

前章では、子どもへの関心尺度を作成し、その併存的妥当性について対児感情評定尺度との関連から検討した。しかし、対児感情評定尺度は子どもに対する肯定的・否定的感情の程度とその拮抗の程度を測定するものである。しかし、子どもへの関心尺度の下位尺度には、「好意的注目」に代表される子どもへの感情的態度のほかにも、「好奇心」といった子どもへの認知的態度も含まれていた。従って、子どもへの感情的態度である対児感情との関連を検討するのみでは、子どもへの関心尺度全体の併存的妥当性を検証するには不十分である。そこで本章では、子どもへの関心尺度の併存的妥当性について認知的態度という側面から追加検証する。ここでは認知的態度として、子ども観と他者意識を取り上げる。以下では、この2つを取り上げた理由を述べる。

まず、子ども観を取り上げた理由としては、第1章でも取り上げた小嶋（1982）が提唱した児童観（子ども観）に含まれる情意過程と知的過程の考え方に基づく。小嶋（1982）は、子ども観の中には、感情的な側面である情意過程と、子どもに関する知識に関する陳知的側面である知的過程が含まれるとした。そして、この2つが体系化されることで、子ども観が構成されるとした。つまり、子ども観とは、子どもへの感情的、知識的双方の概念を含む態度そのものを表すといえる。子どもへの関心と子ども観との関連を検討することにより、子どもへの関心の感情的側面のみならず、認知的側面との関連も包括的に確認できるといえる。

しかし、従来の子どもの観を測定する尺度は、研究ごとに測定され、繰り返し用いられた尺度は非常に少ない。その中でも永澤（1996）の子どもの観尺度は、嘉数ら（1997）により再度検討されている。ただ、その因子構造は永澤（1996）が6因子、嘉数ら（1997）は7因子としており一貫していない。これは、前者は母親、後者は保育科の短期大学生を対象としており、対象の母集団が異なったためと考えられる。本研究では先行研究と母集団が異なる4年制の大学生を対象とするため、因子構造が異なる可能性がある。そこで、事前に予備調査を行い、永澤（1996）の尺度を再検討する必要がある。

次に、他者意識を取り上げる理由としては、藤後（2005）の養護性が高い者は、大人や子どもに限らず、他者全般への関心が高いという面接調査による示唆に基づく。また、郷

式（1999）は、大学生と大学院生に1歳児が遊ぶ様子のビデオを見せ、その様子を記述させたところ、他者の気持ちや感情への関心である内的他者意識が高い者ほど、子どもの心的状態の記述が多く、子どもの心的状態に敏感であることを明らかにしている。従って、他者への関心が高い者は、子どもへの関心も高いという関連があると推測される。他者意識という他者に対する志向性や関心の高さが、子どもへの関心の高さにも汎化しているのか検討するのである。

以上を踏まえ、本章では、子どもへの関心と子ども観および他者意識との関連を検討する。これにより、子どもへの関心尺度の併存的妥当性について更なる検証を加える。まず予備調査において、永澤（1996）の子ども観尺度の構造を確認し、本調査において、子どもへの関心と子ども観および他者意識との関連について検討する。なお、本章においても「子ども」を「3～6歳の幼児」と定義する。

4-2 予備調査：子ども観尺度の因子構造の確認

4-2-1 目的

母親を対象に作成された永澤（1996）の子ども観尺度について、4年制の大学生を対象とした場合の因子構造を確認する。これにより、大学生にも適用可能な尺度とすることを目的とする。

4-2-2 方法

(1) 調査対象・時期

埼玉県にある私立大学に在学し、心理学と医療関連学を専攻する大学生129名を対象とした質問紙調査を実施した。このうち、回答に著しい不備が見られた1名を除いた128名（男性48名、女性80名；平均年齢20.12歳、 $SD = 1.49$ ）を分析対象とした（有効回答率：99.23%）。実施時期は2011年12月であった。

(2) 質問紙

永澤（1996）の子ども観尺度45項目を5段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「どちらともいえない」、4.「あてはまる」、5.「非常にあてはまる」）で尋ねた。質問項目の主語は「子ども」の定義と一致させるため、「幼児（3～6歳の幼児・幼稚園児・保育園児）」に統一して表記した。

4-2-3 結果と考察

子ども観尺度 45 項目について得点が高いほど、その項目のイメージが強くなるように得点化し、因子分析（重み付けのない最小 2 乗法・Promax 回転）を行った。因子数はスクリープロット、固有値、解釈可能性から 4 因子とした。各項目の因子負荷量が 1 つの因子に .40 以上、かつ他の因子への因子負荷量が .40 未満であること、共通性が .30 以上であることを基準に繰り返し分析を行った結果、4 因子 28 項目が抽出された（表 4-1）。なお、「幼児は、いやな存在だ」、「幼児は、憎い存在である」の 2 項目は、初回の因子分析において最も因子負荷量が高い項目に対して負の負荷量を示したため、逆転項目であるとみなし、得点化と分析を行った。

第 1 因子は、「幼児は、かわいい存在である」、「幼児は、愛おしい存在である」、「幼児は、天使のようだ」などの 8 項目で構成されており、幼児をかわいく愛らしい存在としてイメージする程度を表していることから、「愛らしさ」と命名した。

第 2 因子は、「幼児は、素晴らしい力をもっている」、「幼児は、あらゆる可能性をもっている」、「幼児は、創造していく力がある」などの 10 項目で構成されており、幼児を可能性や将来性のある存在としてイメージする程度を表していることから、「可能性」と命名した。

第 3 因子は、「幼児は、手間がかかる」、「幼児は、わがままだ」、「幼児は、自己中心的だ」などの 7 項目で構成されており、幼児を手のかかる面倒な存在としてイメージする程度を表していることから、「面倒」と命名した。

第 4 因子、「幼児は、大人に口答えしてはならない」、「幼児は、無能である」、「幼児は、親の思うとおりに動くものだ」の 3 項目で構成されており、幼児を大人や親の言うことを聞くべき存在とみなし、統制される存在としてイメージする程度を表していることから、「被統制」と命名した。

因子間相関については、「愛らしさ」と「可能性」の間に中程度の正の相関が見られた。そのほか、「可能性」と「面倒」の間に弱い正の相関、「被統制」と「愛らしさ」および「可能性」の間に弱い負の相関が見られた。

各下位尺度の信頼性係数（Cronbach の α 係数）は、第 1 因子から第 3 因子で $\alpha = .79$ 以上であり高い内的整合性が示された。第 4 因子は $\alpha = .65$ とやや低い値であったが、これは項目数が 3 項目と少なかったことに起因すると考えられる。

表4-1 子ども観尺度の因子分析結果

	第1因子 愛らしさ	第2因子 可能性	第3因子 面倒	第4因子 被統制	共通性
幼児は、かわいい存在である	.88	.04	.01	-.07	.84
幼児は、いとおしい存在である	.83	.01	.04	.02	.68
幼児は、愛らしい存在である	.82	.07	.05	-.05	.75
幼児は、いやな存在だ*	.77	-.14	-.10	-.26	.65
幼児は、天使のようだ	.74	.08	-.03	.18	.59
幼児は、憎い存在である*	.55	.01	-.01	-.24	.42
幼児は、目に入れても痛くない	.53	.12	-.27	.27	.45
幼児は、素直だ	.41	.25	.11	.13	.35
幼児は、素晴らしい力をもっている	.12	.78	-.06	.11	.67
幼児は、あらゆる可能性をもっている	.02	.72	-.03	-.15	.58
幼児は、創造していく力がある	-.03	.70	.03	-.02	.49
幼児は、発想が豊かである	-.03	.65	-.09	.12	.38
幼児は、それぞれ個性をもっている	-.02	.64	.09	-.07	.45
幼児は、幼児なりの世界をもっている	-.12	.63	-.04	-.20	.39
幼児の、能力は無限である	.15	.61	-.12	.03	.47
幼児は、常に前へと進んでいく力がある	.04	.53	.19	-.16	.45
幼児は、純粹である	.18	.47	.21	.16	.41
幼児は、人間として尊重されなければならない	.21	.40	-.05	-.21	.38
幼児は、手間がかかる	-.05	-.02	.77	-.02	.59
幼児は、一人では生きていけない	.16	-.01	.65	-.21	.49
幼児は、大人の保護がなければ生きていけない	.17	.07	.62	-.19	.49
幼児は、わがままで	-.13	-.08	.61	.22	.46
幼児は、自己中心的だ	-.19	-.01	.59	-.05	.40
幼児は、生意気だ	-.25	.09	.57	.14	.44
幼児は、未熟である	.35	-.01	.49	.32	.39
幼児は、大人に口答えしてはならない	-.13	.01	-.01	.63	.45
幼児は、無能である	-.04	.01	.10	.61	.40
幼児は、親の思う通りに動くものだ	.14	-.11	-.11	.58	.36
他の因子の影響を因子から取り除いた後の因子の分散	3.11	2.70	2.65	1.73	
Cronbachの α 係数	.89	.88	.79	.65	
因子間相関		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子 愛らしさ	1.00				
第2因子 可能性	.51	1.00			
第3因子 面倒	-.06	.23	1.00		
第4因子 被統制	-.19	-.17	-.01	1.00	

注) *逆転項目

本研究で用いた子ども観尺度を提唱し、検討を行った永澤(1996)は、「一個の人間」「否定的な存在」「愛しい存在」「親の私物」「不完全な存在」「無知な存在」6因子構造を見出

している。永澤（1996）の因子構造と本研究で抽出された因子を項目内容から比較すると、「愛おしい存在」は「愛らしさ」に、「一個の存在」は「可能性」に、「親の私物」は「被統制」に対応すると考えられる。また、「否定的な存在」「不完全な存在」「無知な存在」の3つは「面倒」に集約されていた。本研究では永澤（1996）の6因子構造が4因子構造へと変化した。先行研究と異なる構造や解釈が可能な因子は抽出されなかったことから、今回再検討した子ども観尺度を本調査において用いることに大きな問題はないと考えた。

4-3 本調査：子どもへの関心と子ども観および他者意識との関連

4-3-1 目的

子どもへの関心と子ども観および他者意識との関連について検討することを通して、子どもへの関心尺度の併存的妥当性について更なる検証を加えることを目的とした。

4-3-2 方法

(1) 調査対象・時期

埼玉県にある私立大学に在学し、心理学を専攻する大学生 234 名を対象とした質問紙調査を実施した。このうち、年齢が 25 歳以上の者と回答に著しい不備がある者の 5 名を除いた 229 名（男性 76 名、女性 153 名、平均年齢 19.21 歳、 $SD = 1.04$ ）を分析対象とした（有効回答率：97.86%）。実施時期は 2012 年 5 月～7 月であった。

(2) 質問紙

1) 子どもへの関心尺度

子どもへの関心尺度 30 項目を 6 段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

2) 子ども観尺度

予備調査において因子構造を確認した子ども観尺度 28 項目を 5 段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「どちらともいえない」、4.「あてはまる」、5.「非常にあてはまる」）で尋ねた。

3) 他者意識尺度

辻（1993）の他者意識尺度 15 項目を 5 段階評定（1.「全くちがう」、2.「ちがう」、3.「どちらともいえない」、4.「そうだ」、5.「全くそうだ」）で尋ねた。

この尺度は、他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定する尺度である。他

者の気持ちや感情といった内面の情報を理解しようとする意識・関心を表す「内的他者意識」（項目例：「他者の心の動きをいつも分析している」、「人の考えを絶えず読み取ろうとしている」など7項目）、他者の外面の特徴への注意や意識・関心を表す「外的他者意識」（項目例：「人の外見に気をとられやすい」、「他者の服装や化粧などが気になる」など4項目）、他者について考えたり空想を巡らせたりしながら、その空想的なイメージに注意を向ける傾向を表す「空想的他者意識」（項目例：「人のことをよく空想する」、「人のことをあれこれと考えていることが多い」など4項目）の3下位尺度からなり、信頼性と妥当性が確認されている。

4-3-3 結果と考察

まず、各下位尺度に属する各質問項目について、得点が高いほど、当該下位尺度が表す事柄の程度が高くなるように得点化（逆転項目も同様に処理）した。次に、各下位尺度の信頼性係数（Cronbachの α 係数）を算出した（表4-2）。その結果、全体としては $\alpha = .80$ 以上と高い内的整合性が見られたが、子ども観の「被統制」と他者意識の「外的他者意識」でやや低い値であった。「被統制」に関しては、上述のように項目数の少なさに起因すると思われる。「外的他者意識」は、辻（1993）においても $\alpha = .78$ であり、他の2下位尺度が $\alpha = .88$ 以上と高い値を示していたのに比べて低い値となっていた。よって、先行研究と同様に、他者意識の他の2下位尺度より低い値になったと考えられる。

(1) 各尺度の平均得点および男女差

子どもへの関心尺度、子ども観尺度、他者意識尺度の各下位尺度得点について平均値を算出した。男女別にも算出し、男女間で得点に差が見られるか平均値の差の検定を行った（表4-2）。その結果、まず、子どもへの関心尺度では、前章での結果と同じく「好意的注目」と「好奇心」で女性の方が得点は高かった。

子ども観尺度では、「愛らしさ」で女性の方が得点は高かった。よって、男性より女性の方が、子どもは愛らしく、かわいい存在であるというイメージを有していることが示された。金井・入戸野（2015）は、大学生を対象に調査を行い、女性の方が人間の赤ちゃんに対して「かわいい」という感情を抱く程度が高いことを示している。先行研究は赤ちゃんに対するイメージであり、本研究では3~6歳の幼児であり、イメージする対象の年齢層が異なるものの、女性の方がかわいらしいものへの敏感さが高いという点において、先行研究と同様の結果を示したといえる。一方、子ども観尺度の他の下位尺度では男女間で有意

差は見られなかった。

次に、他者意識尺度では、いずれの下位尺度においても男女間で有意差は見られなかった。他者意識尺度を開発した辻（1993）は、他者意識の各下位尺度得点について男女差で有意差は見られなかったとしており、本研究の結果はこれと一致した。

表4-2 各尺度の信頼性係数と平均得点および男女別の平均得点

		全体	男性	女性	<i>t</i> (<i>df</i>)	<i>d</i>
子どもへの関心						
好意的注目 ($\alpha = .96$)	平均	56.13	50.64	58.83	3.87 ***	0.55
	標準偏差	15.38	14.71	15.02	(222)	
同情 ($\alpha = .88$)	平均	27.66	26.57	28.17	1.73	0.25
	標準偏差	6.51	7.19	6.12	(222)	
好奇心 ($\alpha = .80$)	平均	18.79	17.27	19.53	2.90 **	0.41
	標準偏差	5.60	5.41	5.56	(222)	
寛容性 ($\alpha = .86$)	平均	11.45	11.99	11.19	-1.69	0.24
	標準偏差	3.38	3.31	3.39	(225)	
子ども観						
愛らしさ ($\alpha = .86$)	平均	29.96	28.76	30.56	2.46 *	0.35
	標準偏差	5.25	5.10	5.24	(226)	
可能性 ($\alpha = .87$)	平均	40.95	40.55	41.14	0.79	0.11
	標準偏差	5.33	5.65	5.16	(226)	
面倒 ($\alpha = .80$)	平均	27.00	27.24	26.89	-0.61	0.09
	標準偏差	4.05	4.18	4.00	(227)	
被統制 ($\alpha = .57$)	平均	6.63	6.92	6.49	-1.56	0.22
	標準偏差	1.99	2.01	1.97	(226)	
他者意識						
内的他者意識 ($\alpha = .86$)	平均	25.80	25.57	25.91	0.51	0.07
	標準偏差	4.85	4.73	4.92	(226)	
外的他者意識 ($\alpha = .68$)	平均	13.63	13.24	13.83	1.43	0.20
	標準偏差	2.96	2.87	2.99	(227)	
空想的他者意識 ($\alpha = .82$)	平均	13.89	13.64	14.02	0.84	0.12
	標準偏差	3.20	2.98	3.30	(226)	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(2) 子どもへの関心尺度と子ども観尺度および他者意識尺度の相関係数

子どもへの関心尺度と子ども観尺度および他者意識尺度との関連を検討するため、相関係数を算出した（表4-3）。

表4-3 各尺度間の相関係数

		子ども観				他者意識		
		愛らしさ	可能性	面倒	被統制	内的 他者意識	外的 他者意識	空想的 他者意識
好意的注目	全体	.78 ***	.53 ***	-.07	-.27 ***	.29 ***	-.01	.24 ***
	男性	.83 ***	.64 ***	.11	-.21	.33 **	.11	.49 ***
	女性	.75 ***	.48 ***	-.15	-.27 ***	.28 ***	-.11	.13
同情	全体	.62 ***	.55 ***	.08	-.22 ***	.30 ***	.02	.25 ***
	男性	.67 ***	.62 ***	.24 *	-.28 *	.38 **	.06	.30 *
	女性	.59 ***	.51 ***	.01	-.18 *	.26 ***	-.02	.23 **
好奇心	全体	.50 ***	.39 ***	.06	-.13	.29 ***	.03	.25 ***
	男性	.45 ***	.33 **	.17	-.05	.27 *	.15	.35 **
	女性	.50 ***	.41 ***	.02	-.14	.29 ***	-.06	.21 **
寛容性	全体	.56 ***	.44 ***	-.28 ***	-.38 ***	-.03	-.07	-.05
	男性	.49 ***	.39 ***	-.22	-.26 *	-.13	-.02	.09
	女性	.63 ***	.49 ***	-.32 ***	-.46 ***	.02	-.08	-.10

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

1) 子ども観との関連

子ども観尺度との全体の相関では、「愛らしさ」と「可能性」は子どもへの関心の全下位尺度と中程度から強い正の相関を有していた。「面倒」は「寛容性」やや弱い負の相関を有していた。「被統制」は「好意的注目」、「同情」、「寛容性」とやや弱い負の相関を有していた。よって、子どもに対して愛らしさやかわいさ、可能性や将来性のあるイメージを有しているほど子どもへの関心は高かった。一方、子どもは面倒であるイメージを有しているほど、子どもの泣き声や大声への寛容さは低かった。同様に、子どもは親や大人の言うことを聞くべきとするイメージを持っているほど、子どもへの関心は低かった。

男女別に見ると、まず、「面倒」と「同情」で男性は正の相関を有していたのに対し、女性では無相関であった。また、「面倒」と「寛容性」で女性はやや弱い負の相関が見られたのに対し、男性は有意な相関が見られなかった。また、「被統制」と「好意的注目」で女性ではやや弱い負の相関が見られたのに対し、男性では有意な相関は示されなかった。そして、「被統制」と「寛容性」では、女性の方がより強い負の相関を示した。よって女性は、子どもは親や大人の言うことを聞くべきというイメージを持つことが子どもへの不寛容さや拒否感に関連するが、男性は女性ほど強い関連はなかった。以上をまとめると、子どもの愛らしさや可能性といったポジティブなイメージの高さは男女関係なく、子どもへの関心の高さに関連する一方、女性は子どもの未熟さや大人に従うべきといった子どもに対する

るネガティブなイメージや大人の支配下に置かれるべきとするイメージが強いほど子どもへの関心が低かった。しかし、男性では、子どもの未熟さに関するイメージの高さは同情的な関心の高さと関連していることが分かった。

2) 他者意識との関連

他者意識との相関では、「内的他者意識」および「空想的他者意識」が「好意的注目」、「同情」、「好奇心」とやや弱い正の相関を有していた。

男女別に見ると、「内的他者意識」および「外的他者意識」と関心とでは男女間に大きな差は見られなかったが、「空想的他者意識」と「好意的注目」では、男性は中程度の正の相関が見られたのに対し、女性は無相関であった。よって、男性のみ他者に関して空想的に思いを巡らすことと、子どもをかわいいと感じて関心を抱く程度との間に関連が見られた。

子どもへの関心は、その上位概念である養護性において、「子どもへの共感性」とも呼ばれる（小嶋，1989；糊澤ら，2009）。また，第3章の尺度作成において記述したように，子どもへの関心尺度の一部の項目は共感性を測定する尺度の項目を一部援用しており，特に「同情」は共感性の要素が強いものである。このように，子どもへの関心は概念的にも項目内容的にも共感性の要素を有する近似した概念であるといえる。辻（1993）は，Davis（1980）の共感性尺度を用いて他者意識との関連を検討している。その結果，共感性の下位尺度のうち「同情」および「視点取得」と「内的他者意識」の間に中程度の正の相関，「視点取得」と「空想的他者意識」の間に弱い正の相関を見出し，共感性と他者意識には一定の関連があるとした。本研究においても，「内的他者意識」と「空想的他者意識」において，子どもへの関心と関連が見られたことは，先行研究と同様の結果を示したといえる。

他者の内面への関心や他者について考えたり思いを巡らせたりする傾向が高い者は，子どもへの関心も高いという以上の結果は，藤後（2005）の子どもへの養護性が高い者は他者への関心も高いという面接調査に基づいた示唆とも一致していた。また，郷式（1999）の「内的他者意識」が高い者は，子どもの遊ぶ場面の映像を見た際に子どもの心的状態に関する記述が多く，子どもの心的状態に敏感であるという結果と同様の傾向を示すものである。以上より，他者全般への関心が高い者ほど，子どもへの関心が高いという当初の予想と一致した結果が得られた。

(3) 子ども観と他者意識が子どもへの関心に及ぼす影響

子ども観および他者意識と子どもへの関心との間に関連が見られたことから，以下では

子ども観と他者意識が子どもへの関心に及ぼす影響についてステップワイズ法による重回帰分析により検討した（表 4-4）⁹。また、男女間で相関のあり方に違いが見られたことから男女別にも重回帰分析を実施した。なお、VIF はいずれも 2 未満で、多重共線性はないと判断した。

表4-4 子ども観と他者意識が子どもへの関心に及ぼす影響の重回帰分析結果

		子ども観				他者意識			R ²
		愛らしさ	可能性	面倒	被統制	内的 他者意識	外的 他者意識	空想的 他者意識	
好意的注目	全体	.76 ***	—	—	—	.12 **	—	—	.64 ***
	男性	.75 ***	—	—	—	—	—	.18 *	.71 ***
	女性	.73 ***	—	—	—	.18 **	-.14 *	—	.62 ***
同情	全体	.41 ***	.26 ***	—	—	.20 ***	—	—	.45 ***
	男性	.46 ***	.29 *	—	—	—	—	—	.48 ***
	女性	.42 ***	.24 **	—	—	—	—	.22 **	.41 ***
好奇心	全体	.46 ***	—	—	—	.20 **	—	—	.29 ***
	男性	.44 ***	—	—	—	—	—	—	.20 ***
	女性	.33 ***	.21 *	—	—	.29 ***	-.15 *	—	.34 ***
寛容性	全体	.41 ***	.17 *	-.26 ***	—	—	—	—	.38 ***
	男性	.56 ***	—	—	—	-.31 **	—	—	.32 ***
	女性	.52 ***	—	-.18 **	-.17 *	—	—	—	.47 ***

注) 値は標準偏回帰係数で有意なもののみ記載。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

1) 子ども観の影響

まず、子ども観の影響について全体の結果について述べる。子ども観では、「愛らしさ」は子どもへの関心の全下位尺度に正の影響を与えていた。「可能性」は「同情」と「寛容性」に正の影響を与えていた。「面倒」は「寛容性」に負の影響を与えていた。従って、子どもをかわいい存在とするイメージや可能性のある存在とするイメージする強さが子どもへの関心を高めていた。一方、子どもを面倒な存在としてイメージする強さは子どもへの寛容さを低めていた。

次に、男女別の結果では、男女とも「愛らしさ」と「可能性」が子どもへの関心を高めていたが、女性のみ「面倒」と「被統制」が「寛容性」を低めていた。よって、男女とも

⁹ 尺度間の相関係数を検討するだけでも子どもへの関心尺度の併存的妥当性は検討できるものの、子どもへの関心の定義にある構成要素のうち、認知と志向性の側面が子どもへの関心の各下位尺度とどのような影響関係にあるのか探索的な検討を加え、尺度の併存的妥当性について、より深い知見を得るために重回帰分析を実施した。

子どもへのポジティブなイメージは子どもへの関心を高める効果を持つが、女性のみネガティブなイメージが子どもへの寛容さを低める効果が見られた。これは、女性の方が子どもに対するネガティブなイメージが子どもへの関心に影響しやすいことを示している。女性は男性のようにポジティブなイメージのみが影響するという単純なものではなく、ポジティブ、ネガティブ双方のイメージが影響するということであり、子ども観が子どもへの関心に及ぼす影響が多様であることを表しているといえる。

2) 他者意識の影響

まず、他者意識の影響について全体の結果について述べる。他者意識では、「内的他者意識」が「好意的注目」、「同情」、「好奇心」に正の影響を与えていた。よって、他者の気持ちや感情への関心が高さは、子どもへの関心も高めることが示された。郷式 (1999) は、「内的他者意識」が高い者ほど、子どもが遊んでいる場面のビデオ映像を視聴した場合に、子どもの心的状態に関する記述が多く、子どもの心的状態に敏感であることを明らかにしている。本研究においても「内的他者意識」の高さが子どもへの関心の高さを規定していたことから、先行研究と同様の結果が見られた。

次に男女別の結果では、男性は「内的他者意識」が「寛容性」を低め、「空想的他者意識」が「好意的注目」を高めていた。女性は「内的他者意識」が「好意的注目」と「好奇心」を高め、「外的他者意識」が「好意的注目」と「好奇心」を低め、「空想的他者意識」が「同情」を高めていた。

男性において「内的他者意識」が「寛容性」を低めていた理由としては、他者の気持ちや感情への関心の高さは、子どもが苦痛状態にある時に過剰に関心を喚起し、自らも苦痛を経験する可能性が考えられる。つまり、他者の気持ちや感情に敏感であるほど、子どもが何らかの理由で泣いていたり大声を出していたりする時に、必要以上に子どもの内面について考えてしまい、それが認知的負荷となり泣き声や大声へのイライラに結びつく可能性が考えられる。一方、女性においては「内的他者意識」が「好意的注目」と「好奇心」を高めており、他者の気持ちや感情への関心は子どもを目にした際にかわいいと感じて選好する傾向や好奇心に結びついていた。

辻 (1993) は、他者意識尺度と Davis (1980)の共感性尺度との関連について検討している。その結果、「内的他者意識」は共感性のうち「同情的関心 (empathic concern)」と「視点取得 (perspective taking)」と正の相関が見られるとしており、「個人的苦悩 (personal distress)」とは無相関であるとしている。これに従えば、「内的他者意識」は子どもへの関

心の「同情」と関連が見られなければならない。男性において「内的他者意識」の高さが子どもの泣き声や大声への認知的負荷を高めるとするなら、「寛容性」とは無関連でなければならない。全体の結果において、「内的他者意識」の高さが「同情」を高めており、これは先行研究と一致していた。しかし、男性のみ「内的他者意識」の高さが「寛容性」を高めていたことは先行研究の結果と反する。

この理由としては、辻（1993）では、男女別に相関が検討されていないことが考えられる。すなわち、実際には男性は「内的他者意識」が「個人的苦悩」を高め、女性は低めていた可能性があるが、男女合わせた場合に相殺された可能性が考えられる。そのため、先行研究では「内的他者意識」と「個人的苦悩」に関連が見られなかったのである。実際、本研究においても、男女を合わせた全体の結果では、「内的他者意識」が「寛容性」を低める効果は見られなかった。先行研究との不一致は、本研究において男女別に分析したからこそ得られた新たな知見である可能性があるといえよう。

また、女性のみ「外的他者意識」が「好意的注目」と「好奇心」を低めていたが、男性では「外的他者意識」は子どもへの関心に影響を及ぼしていなかった。この理由は、「外的他者意識」が他者の化粧や服装、体形などへの関心の程度を尋ねる質問項目により構成されており、様々な化粧を行い、多様な服を着るのは主に成人である。そして、一般的に女性の方が他者の化粧や服装、体形といった外見への関心は強いと思われる¹⁰。従って、「外的他者意識」は成人の他者における外見への関心を想定しているためと思われる。つまり、「外的他者意識」が高い女性は、成人の他者の外見に関心があり、子どもよりも成人の外見の方に関心が向きやすいのではないかと考えられる。そのため、女性のみ「外的他者意識」が子どもへの関心のうち、子どもへの選好傾向を表す「好意的注目」や子どもの会話などへの関心である「好奇心」に負の影響を与えていたと推測される。「外的他者意識」が高い女性は、子どもよりも成人の他者の外見の方に興味があるのである。

4-4 まとめ

本章では、子どもへの関心尺度の併存的妥当性について、子どもへの認知的態度である

¹⁰ 表4-2で見たように、「外的他者意識」得点に有意な男女差は見られないが、わずかながら女性の方が得点は高かった。牛田・高木・神山・阿部・辻・房岡（2002）が大学生と社会人1148名を対象にした大規模な調査では、女性の方が有意に「外的他者意識」が高いことが示されている。従って、本研究ではサンプル数の少なさから有意な男女差が見られなかっただけで、本来は女性の方が「外的他者意識」は高い可能性がある。

子ども観との関連および、他者への関心である他者意識との関連を通して更なる検証を試みた。その結果、子ども観、他者意識ともに子どもへの関心と関連が見られた。

子ども観との関連では、子どもに対してポジティブなイメージを有しているほど、子どもへの関心が高く、ネガティブなイメージを多く有しているほど、子どもへの関心は低くなっていた。重回帰分析の結果からも、ポジティブな子ども観は子どもへの関心を高める効果が見られた。ただし、男女差が見られ、男性はポジティブなイメージのみが子どもへの関心を高める効果を持ち、女性はポジティブなイメージが関心を高めるとともに、ネガティブなイメージは関心を低めていた。このことから、女性の方が子どもへの関心に対して子ども観の影響がより多様である可能性が示された。

他者意識との関連では、他者の内面への関心や他者について思いを巡らす程度の高さといった、他者の心的状態への関心の高さが「寛容性」を除く子どもへの関心の高さと関連していた。重回帰分析の結果からも、「内的他者意識」の高さが子どもへの関心の高さを規定していた。ただし、男女差が見られ、男性は「内的他者意識」の高さが子どもへの関心のうち「寛容性」を低め、女性では反対に「好意的注目」と「好奇心」を高めていた。また、女性のみ「外的他者意識」が「好意的注目」と「好奇心」を低めていた。しかし、全体として見れば、他者への関心の高さは子どもへの関心を高めるという関連が見られ、これは当初の予想と一致していた。

以上のように、子どもへの関心と子ども観および他者意識との間には一定の関連が見られたことから、子どもへの関心尺度の併存的妥当性が確認され、本章の目的は達せられたといえる。

ここまで、子どもへの関心尺度と他の類似した概念の尺度との相関を見ることを通して、尺度の妥当性について検証してきた。しかし、こうした方法のみでは、尺度の妥当性を検討するには不十分であるといえる。なぜなら、子どもに関心ある者は、実際に子どもと遭遇した際に目が向きやすい、つまり、選好するという傾向が高いと考えられるためである。また、子どもへの関心は概念的には養護性の下位尺度であるが、同じく養護性の下位尺度である養育への自信とは、どのような関連が見られるのであろうか。また、上位概念の養護性との関連は確かなものなのであろうか。次章では、子どもへの関心の高さと実際の子どもへの選好の程度との関連、および養護性のもう1つの下位尺度および養護性そのものとの関連について検討し、子どもへの関心の構成概念妥当性について検証することとする。

第5章 子どもへの関心尺度の行動的・概念的妥当性の検証

5-1 問題と目的

第3章および第4章では、子どもへの関心尺度を作成し、その併存的妥当性を確認した。本章では、尺度の妥当性について、実際の行動的側面および、概念的な側面から多角的に検討する。

まず、調査1では、これまで日本では十分に検討されてこなかった選好法により測定された子どもへの関心の程度と質問紙法により測定された子どもへの関心の程度との関連を検討する。選好法の実施に当たっては、子どもと成人の人物画像のほかに、モノ画像を追加する。これにより、子どもへの関心尺度の得点が高い者は、実際に子どもの画像を選好する傾向があるのか検討する。

続いて、調査2では、子どもへの関心の上位概念である養護性を提唱した小嶋（1989）の、子どもへの関心は、子どもの相手をうまくできるという自信および、良い養育者になろうとする構えと結びついているという理論モデルを検討するため、「次世代の子どもたちを育てることへの自信」として定義される次世代育成力（菱谷ら，2009）と子どもへの関心との関連について検討する。その際に、小嶋（1989）の理論モデルに従い、子どもへの関心が次世代育成力に影響を与えるというモデルを想定し、質問紙法による調査を行う。

そして、調査3では、子どもへの関心は、そもそも上位概念である養護性とどのような関連が見られるのか、養護性の一下位概念として成立しているのか検討する。養護性が下位概念である子どもへの関心に影響を与えるというモデルを想定し、質問紙法による調査を行う。

以上の3つの研究を通して、子どもへの関心尺度の妥当性について、実際の行動的側面との関連および、上位概念である養護性で提唱されてきた理論モデルに基づき、子どもへの関心の概念的な妥当性について検討する。これらの検討を加えることで、子どもへの関心尺度の行動的な側面から見た妥当性および、構成概念妥当性について明らかにすることを本章の目的とする。

5-2 調査1：子どもへの関心尺度得点と幼児画像への選好との関連

5-2-1 目的

子どもへの関心尺度を用いて測定した関心の程度と、人物画像の魅力度を統制し、中性

的な刺激としてモノ画像を加えた選好法により測定した子どもへの選好の程度との関連について検討することを目的とした。また、日本では選好法は未検討の手法であるため、海外と同様に子どもへの選好が生じるかという点についても探索的に検討することとした。

5-2-2 方法

(1) 研究対象・時期

埼玉県にある私立大学に在学し、心理学を専攻する大学生 28 名（男性 7 名，女性 21 名；平均年齢 20.04 歳， $SD = 1.14$ ）を対象とした。実施時期は 2012 年 6 月～7 月であった。

(2) 質問紙

子どもへの関心尺度 30 項目を 6 段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

(3) 装置

ヒューレット・パッカード社製のノート型パーソナルコンピュータ ProBook 4720s（画面サイズ:17.3 インチ）を用いた。刺激呈示には Microsoft office PowerPoint 2010 を用いた。

(4) 刺激材料

幼児の顔画像 24 枚（男女 12 枚ずつ）、成人の顔画像 24 枚（男女 12 枚ずつ）、中性刺激として、モノ画像（観葉植物、家具、雑貨など）24 枚を用いた。画像は全てカラーで、同じ大きさ（画面上で 8cm の正方形）に加工した。

人物写真の採用基準としては、次の 7 点に留意し選択した。①胸から上の写真で顔が判別できる写真であり、ほぼ正面を向いている。②極端な感情や情動の表出を行っている写真でない。③明確なポーズをとっていない。④極端な美形もしくはその逆でない。⑤華美な服装や装飾品を身につけていない。⑥成人女性は派手な化粧をしていない。⑦人物写真の背景が色彩豊かであったり、雑貨等のものが存在したりしない。

各人物画像の魅力度について、教育学を専攻する大学院生 3 名が 5 段階評定（1.「全く魅力的でない」2.「あまり魅力的でない」3.「どちらともいえない（中程度の魅力）」4.「やや魅力的」5.「とても魅力的」）で評価した。年齢（幼児・成人）と性別（男性・女性）の 카테고리ごとに魅力度の平均評定値を算出した結果、値は 3 前後であった（表 5-1）。クラスカル・ウォリス検定を行った結果、有意差はなかった（ $H(3) = 6.18, n.s.$ ）。よって、画像の人物の魅力度は概ね中程度であり、魅力度による影響は小さいものと判断した。

表5-1 人物画像の魅力度平均評定値

	男児画像	女児画像	男性画像	女性画像
平均	3.11	3.44	2.75	3.22
標準偏差	0.21	0.25	0.30	0.34

(5) 手続き

まず、参加者は事前に質問紙に回答した後、選好法を実験室で個別に実施した。具体的な手続きは以下の通りである。

1. PC画面上に教示画面が表示される。2. 参加者はそれを読み、スペースキーを押す。3. 刺激画面（「幼児」、「成人」、「モノ」の3枚の画像が黒字背景に並列で表示）が6秒間表示される。4. 呈示から6秒後に表示された3枚の画像の中で一番気になった画像を手元の記録用紙に記入するよう促す画面に自動で切り替わる。記録用紙には当該刺激画面の試行番号と共に「左側」、「中央」、「右側」と書かれており、その試行で一番気になった画像の位置を示す選択肢を丸で囲む。5. 記録用紙への記入後、参加者は適時スペースキーを押し、次の試行に移る。

以上の過程を練習試行として4回、本試行として20回くり返した。各刺激画面は、「男児×男性×モノ」、「男児×女性×モノ」、「女児×男性×モノ」、「女児×女性×モノ」の4通りの組み合わせが練習試行で1試行ずつ、本試行で5試行ずつ存在し、各画像の位置（右側・中央・左側）はランダムに入れ替えて呈示された。手続きの過程を図5-1に、刺激画面例を図5-2に示す。なお、刺激呈示時の観察距離は約70cmであった。

5-2-3 結果と考察

まず、参加者別に各画像の選択回数を数えた。その際、モノ画像を全試行の80%以上選択し、試行終了後、モノ画像の異質性だけに注目し、人物画像を集中して見られなかったと報告した男性参加者1名については、全ての刺激を等しく見た上で気になった画像を選択できていなかったと判断し、その後の分析から除外した。なお、ディブリーフィングにおいて試行中に研究の目的に気付いたか確認したところ、気付いた者はいなかった。

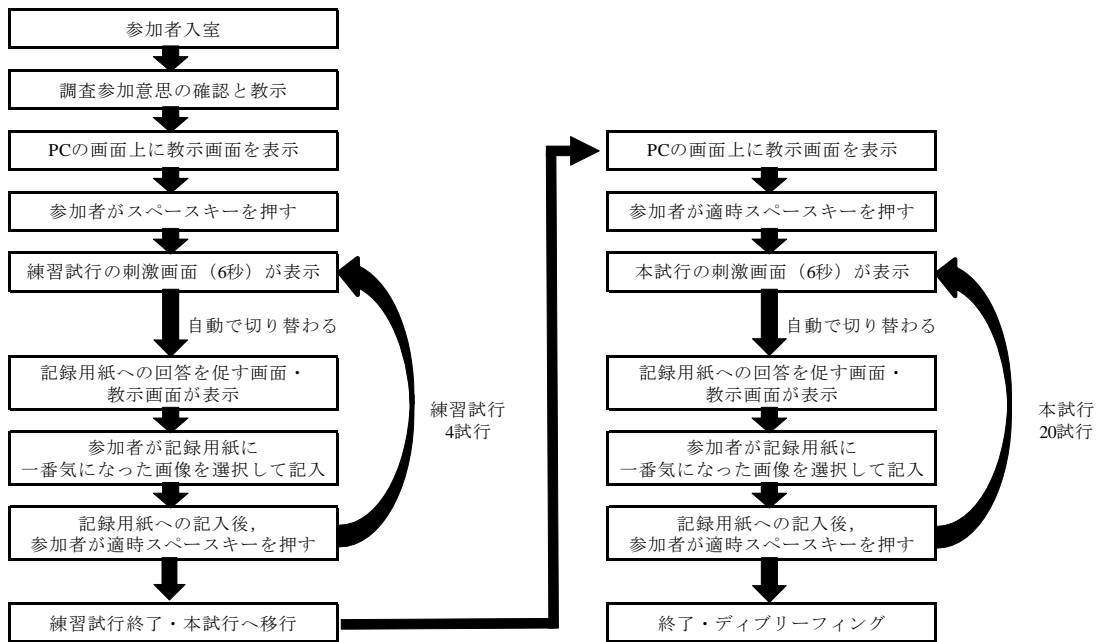
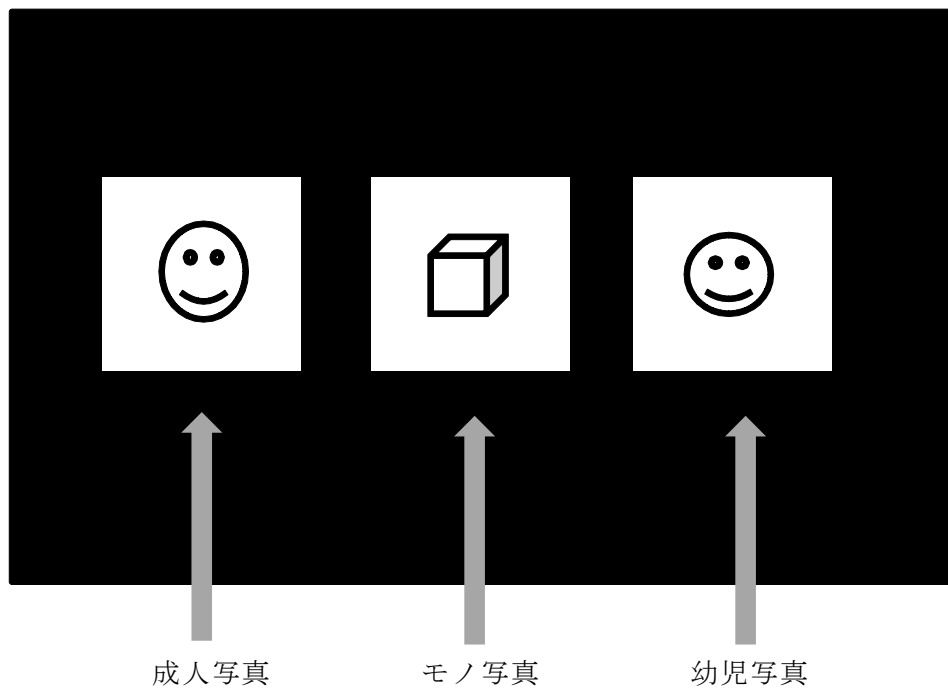


図 5-1 選好法の手続き



※画像の性別と組み合わせは均一かつランダムに入れ替えて呈示
画面上の画像の大きさは縦横8cmの正方形

図 5-2 刺激画面例

次に、各画像の平均選択回数を算出し、幼児画像と成人画像で呈示された画像の性別により選択回数に差が見られるか1要因4水準の分散分析を行ったところ、有意な主効果が見られた。そこで、多重比較（Bonferroni法）を行った結果、男児、女児画像は男性画像よりも、女児画像は女性画像よりも、女性画像は男性画像よりも多く選択されていた（表5-2）¹¹。よって、成人画像では被写体の性別により選択回数に違いが見られたが、幼児画像では性別の影響はなかった。また、男児、女児画像とも男性画像より多く選択され、女児画像は女性画像より多く選択されていたことから、幼児画像は成人画像より多く選択された可能性が示された。そこで、男児、女児画像および男性、女性画像をそれぞれ合計し、幼児画像および成人画像としてその平均選択回数を算出し、モノ画像とそれらで選択回数に差が見られるか1要因3水準の分散分析を行ったところ、有意な主効果が見られた。そこで、多重比較（Bonferroni法）を行った結果、幼児画像は成人画像より多く選択されていた（表5-3）。従来の選好法による検討でも、成人より乳幼児の画像の方がより選択され、選好されるとしている（Fullard & Reiling, 1976）。本研究でも先行研究と同様に、幼児の画像への選好が生じていた。

表5-2 人物画像への平均選択回数および分散分析結果（単位は回数）

	男児画像	女児画像	男性画像	女性画像	F (df)	η^2	多重比較 (Bonferroni法)
平均	3.89	4.93	1.96	3.41	11.16 ***	.30	男児・女児>男性*, 女児>女性*, 女性>男性*
標準偏差	2.12	2.34	1.51	1.85	(3, 26)		

* $p < .05$, *** $p < .001$

表5-3 各画像の平均選択回数および分散分析結果（単位は回数）

	幼児画像 (男児画像+女児画像)	成人画像 (男性画像+女性画像)	モノ画像	F (df)	η^2	多重比較 (Bonferroni法)
平均	8.81	5.37	5.81	4.72 *	.15	幼児>成人*
標準偏差	3.88	2.57	4.30	(2, 26)		

* $p < .05$

各画像の選択回数と子どもへの関心尺度の各下位尺度得点との相関係数を算出した結果、「好意的注目」および「好奇心」と幼児画像に正の相関が見られたが、「同情」および

¹¹ 画像の選択回数の差を分析するに当たり、各カテゴリーの画像選択回数を全試行に占める割合として算出し、分析することも可能であるが、本研究では、選択回数を便宜的に得点として扱い、分析した。つまり、選択された画像のカテゴリーに1点を与え、それ以外のカテゴリーは0点として得点化した。これは、分散分析および後述の相関分析を行うに当たり、選択回数を量的変数として扱う必要があったためである。

「寛容性」との間に有意な相関はなかった（表5-4）。Maestripieri & Pelka (2002)は、子ども画像の選好回数と質問紙で測定した乳幼児への関心には正の相関があるとしており、これを一部支持した。

下位尺度により相関の有無が分れた理由は、各下位尺度を構成する項目の特徴を見ると分かる。「好意的注目」は「幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう」、「好奇心」は「幼児同士が会話をしていると、その内容が気になる」など幼児への目の向けやすさを測る項目が並ぶ一方、「同情」は「誰とも遊べない一人ぼっちの幼児を見ると、かわいそうになる」、「寛容性」は「幼児の泣き声を聞くとイライラする（逆転項目）」など幼児への共感的・受容的態度を測る項目が並ぶ。選好法は、画像の幼児への注目のしやすさを測定するため、幼児の姿そのものへの注意の向けやすさである「好意的注目」や「好奇心」と関連が見られた一方、本研究の画像の表情は中立的なものであったため、幼児の泣き声や歓声などへの態度を測定する「同情」や「寛容性」とは関連が見られなかったと考えられる。

今後は、泣きや笑いなど多様な表情の画像を加えて検討することで、「同情」や「寛容性」との関連について、より明確にできるであろう。また、尺度得点と成人画像およびモノ画像との間に有意な相関が見られなかったことから、子どもへの関心尺度が幼児の姿への注目しやすさのみを測定していることが示された。

表5-4 各画像の選択回数と子どもへの関心尺度の各下位得点との相関係数

	幼児写真	成人写真	モノ写真
好意的注目	.44 *	-.25	-.24
同情	.33	-.11	-.23
好奇心	.41 *	-.13	-.30
寛容性	.08	-.34	.13

* $p < .05$

以上より、質問紙法により測定された子どもへの関心の程度の一部と、選好法により測定された子どもへの関心の程度に関連が見られることが明らかとなった。従って、子どもへの関心尺度の得点の高さが実際に子どもへの選好行動に関連している可能性が示唆され、尺度の妥当性の一端が示されたといえる。

5-3 調査2：子どもへの関心と次世代育成力との関連

5-3-1 目的

小嶋（1989）が提唱した子どもへの関心が養育への自信につながるという理論モデルを検討することを目的とした。養育への自信については、菱谷ら（2009）が提唱し、尺度化した次世代育成力尺度を用いて測定を行う。次世代育成力は、菱谷ら（2009）により「次世代の子どもたちを育てることへの自信」と定義される概念であり、次世代を育成する心や能力である世代性（generativity）の概念を基盤としている。

次世代育成力と子どもへの関心との関連および、子どもへの関心が次世代育成力に及ぼす影響について検討を行うことで、子どもへの関心が養育への自信につながるという小嶋（1989）の理論を検証することを目的とする。

5-3-2 方法

(1) 調査対象・時期

東京都および埼玉県にある国立・私立大学に在学し、心理学、教育学、社会科学、理工学を専攻する大学生 372 名を対象とした質問紙調査を実施した。このうち、年齢が 26 歳以上の者、回答内容に不備がある者の 22 名を除いた 355 名（男性 139 名、女性 215 名、無回答 1 名；平均年齢 19.93 歳、 $SD = 1.25$ ）を分析対象とした（有効回答率：95.43%）。実施時期は 2013 年 12 月～2014 年 2 月および、2015 年 1 月であった。

(2) 質問紙

1) 子どもへの関心尺度

子どもへの関心尺度 30 項目を 6 段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

2) 次世代育成力尺度

菱谷ら（2009）の次世代育成力尺度（短縮版）20 項目を 5 段階評定（1.「まったくあてはまらない」、2「ややあてはまらない」、3.「どちらともいえない」、4.「ややあてはまる」、5.「非常にあてはまる」）で尋ねた。

この尺度は、以下の 4 下位尺度（各 5 項目）からなる。第 1 は、次世代の誕生を肯定することができるという自信の程度である「誕生を肯定することができるという自信」（以下、誕生肯定）（項目例：「私は、子どもの誕生を考えただけで、幸せな気分になる」、「私は、

子どもの誕生を幸せだと感じる))、第2は、次世代の育成を通じて自分が成長できるという自信の程度である「自己成長できるという自信」(以下、自己成長)(項目例:「私は、子どもとの関係を作ることを通して、人間的に成長するだろう」、「私は、子どもとの関係を作ることを通して、自分の視野が広がると思う」)、第3は、次の世代に伝えるものを上の世代から受け継ぎ、次の世代に伝えることができるという自信の程度である「伝えるものを持っているという自信」(以下、伝達自信)(項目例:「私は、子どもに愛情を伝える方法を、上の世代から教わった」、「私は、時代を超えて伝わる大切なものを上の世代から受け継いでいる」)、第4は、子どもを育てる時に地域社会の力を借りることができるという自信の程度である「地域社会の力を借りることができるという自信」(以下、地域社会)(項目例:「私は、子どもが病気になったとき、近所の人に助けを求めるだろう」、「私は、子どもを育てるとき、近所の人に助けてもらおうだろう」)である。なお、短縮版の信頼性と妥当性は、菱谷ら(2009, 2010)により確認されている。

5-3-3 結果と考察

まず、各下位尺度に属する各質問項目について、得点が高いほど、当該下位尺度が表す事柄の程度が高くなるように得点化(逆転項目も同様に処理)した。次に、各下位尺度の信頼性係数(Cronbachの α 係数)を算出した(表5-5)。その結果、全ての下位尺度で $\alpha = .82$ 以上と高い内的整合性が示された。従って、各下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

表5-5 子どもへの関心尺度および次世代育成能力尺度の信頼性係数および各下位尺度の平均得点

	α 係数	平均	標準偏差
子どもへの関心尺度			
好意的注目	.96	63.71	15.71
同情	.86	30.51	6.61
好奇心	.87	22.23	7.15
寛容性	.87	13.24	3.30
次世代育成能力尺度			
誕生肯定	.89	19.97	4.16
自己成長	.86	21.32	3.41
伝達自信	.86	16.73	4.37
地域社会	.82	17.46	3.65

(1) 記述統計および相関係数

子どもへの関心尺度と次世代育成力尺度の各下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出した（表 5-5）。そして、子どもへの関心尺度の各下位尺度間、および子どもへの関心尺度と次世代育成力尺度間の相関係数を算出した（表 5-6）。

その結果、全ての下位尺度間でやや弱いから中程度の正の相関が見られた。特に、「好意的注目」は「誕生肯定」と「自己成長」に強い正の相関を有していた。また、子どもへの関心尺度の下位尺度間であっても、「好意的注目」と「同情」および「好奇心」や、「同情」と「好奇心」で強い正の相関が見られた。

表5-6 子どもへの関心尺度と次世代育成力尺度の各下位尺度間の相関係数

	好意的注目	同情	好奇心	寛容性	誕生肯定	自己成長	伝達自信	地域社会
好意的注目	1.00	.74 ***	.77 ***	.51 ***	.77 ***	.70 ***	.45 ***	.43 ***
同情		1.00	.70 ***	.34 ***	.59 ***	.56 ***	.33 ***	.42 ***
好奇心			1.00	.28 ***	.52 ***	.51 ***	.35 ***	.34 ***
寛容性				1.00	.51 ***	.38 ***	.28 ***	.29 ***

*** $p < .001$

(2) 重回帰分析

子どもへの関心尺度と次世代育成力尺度間に相関関係が見られたことを踏まえ、小嶋（1989）の子どもへの関心が養育への自信につながるという理論モデルを検証するため、子どもへの関心尺度の各下位尺度を説明変数、次世代育成力尺度の各下位尺度を目的変数とした強制投入法による重回帰分析を行った（図 5-3）。なお、VIF はいずれも 3 未満で、多重共線性はないと判断した。

まず、「好意的注目」は「誕生肯定」、「自己成長」、「伝達自信」に正の影響を与えていた。特に、「誕生肯定」に対する標準偏回帰係数が高かった。このことから、子どもをかわいいと感じて選好する傾向の高さは、子どもが生まれることへの肯定的態度を特に高めるほか、親になることが自己成長につながるという自信や、次世代に愛情や価値観、知識や技能といったものを伝えることの自信を高めるといえる。

次に、「同情」は「誕生肯定」、「自己成長」、「地域社会」に正の影響を与えていた。このことから、泣いていたり、不安そうにしていたりする子どもへの同情的な関心の高さは、子どもが生まれることへの肯定的態度や、親になることが自己成長につながるという自信、地域の中で子育てをしていくことへの自信を高めるといえる。第 3 章のまとめで述べた通

り、「同情」は項目内容から見て、日常や街中で子どもがいつもと違う様子を見せている状況への関心の高さを表していると考えられる。すなわち、他者の子どもであっても、その子に異変がないか気を配り、子どもの育ちを見守ろうとする姿勢を示しているといえる。このような子どもへの志向性の高さは、社会の中、とりわけ、身近な地域の子どもの育ちに関与しようとする姿勢に関係していると推測できる。このような姿勢を有していれば、将来的に自身が子育てをする際にも、地域の人々の子育て力を資源として活用しようと思う、あるいは活用できるという自信に結びついていると考えられる。そのため、「同情」は「地域社会」に含まれる地域の子育て資源を利用することへの自信の高さに影響を与えていたと推測される。

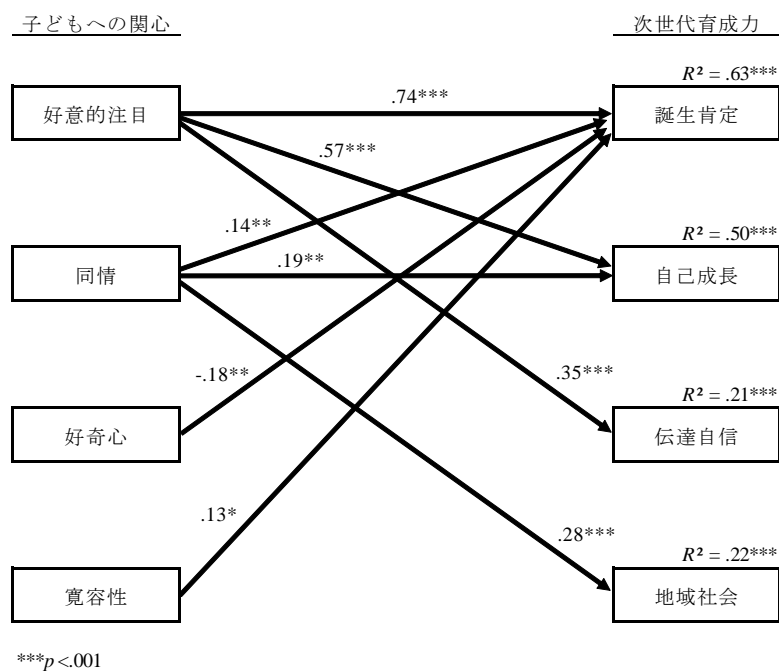


図 5-3 重回帰分析の結果

続いて、「好奇心」は「誕生肯定」に負の影響を与えていた。相関分析においては、両下位尺度間の相関係数は $r = .52$ と、正の相関であり、正と負の符号が逆転していた。従って、重回帰分析において抑圧が生じていたといえる。抑圧が生じた理由としては、第 1 に、説明変数間の相関係数の高さが影響と考えられる。表 4-5 から分かる通り、子どもへの関心尺度の下位尺度間の相関係数は高いものであった。特に「好奇心」は「好意的注目」や「同情」と強い正の相関を有していた。一般に、説明変数間の相関係数が高いと抑圧が生

じやすくなるとされる（古谷野，1988）。しかし，本分析において VIF は 3 未満であり，説明変数間の高さが影響する多重共線性は認められなかった。よって，説明変数間の相関係数の高さが影響した排除できないものの，それ以外の理由も存在すると考えられる。そこで以下では，相関係数と標準偏回帰係数で符号が逆転していた理由について，抑圧以外の理由を検証し，解釈を試みることにする。

「好奇心」は項目内容的に子どもの会話や生活への知的側面に基づく関心を表していることは第 3 章のまとめで述べた。子どもへの知的な関心が高い者は，将来的に子どもをもつことや子育てに関して知的な側面の関心から情報を収集しようとする傾向があると思われる。そして，多様な情報に触れる中で，今日の日本社会においては，子どもをもつことで大きな経済的・社会活動的負担がかかることや，子育てには様々な困難が伴うといった子どもや子育てに関するネガティブな情報を知る機会も増すと考えられる。子どもをもつことや子育ての困難を知識として有するがゆえに，子どもの誕生を素直に肯定できないという現象が生じている可能性がある。そのため，子どもへの好奇心の高さが，子どもが生まれることへの肯定的態度を低めるという一見矛盾した影響が見られたと考えられる。

最後に，「寛容性」は「誕生肯定」に正の影響を与えていた。標準偏回帰係数は小さかったが，子どもの泣き声や大声に寛容さは子どもが生まれてくることへの肯定的態度を高めるといえる。「寛容性」は項目内容から判断して，子どもとは泣いたり，大声を出したりする当然の存在であるとして受容する態度であると考えられ，子どもへの無条件な寛容的・受容的態度を表していると考えられる。そのため，子どもの存在を肯定的なものとして受け入れることから，「寛容性」の高さが「誕生肯定」の高さに影響していたといえる。

以上のように，子どもへの関心は，一部の例外を除き，概ね子どもを育むことへの自信である次世代育成力を高めるという正の影響が見られた。これは，小嶋（1989）が指摘した子どもへの関心の高さが養育への自信を高めるという理論モデルと合致する結果であった。よって，小嶋（1989）の養護性モデルを支持する結果が得られた。

5-4 調査 3：養護性と子どもへの関心との関連

5-4-1 目的

子どもへの関心について，その上位概念である養護性との関連を検討し，子どもへの関心が養護性の下位尺度として成立することを，尺度を用いて明らかにすることを目的とした。

養護性を測定する尺度は、小嶋（1989）や中西・栗津（1996）、岩治（2009）や糊澤ら（2009）により作成されているが、今回は、糊澤ら（2009）の養護性尺度を用いることとした。その理由は、第1に、養護性の定義に含まれる「相手への共感性と技能」のうち、「共感性」と「技能」の2下位尺度に基づいた因子分析を行った結果、実際に、その2下位尺度に即した因子が抽出されていることから、養護性の構成概念を的確に反映した尺度といえるためである。第2に、養護性の発揮対象が明確なためである。中西・栗津（1996）や岩治（2009）の尺度には、動植物への関心や福祉活動、奉仕的活動への関心や志向性といった多様な対象への養護性を測定する項目が含まれている。すなわち、養護性の対象が多岐に渡る。小嶋（1989, 2001）が述べたように、養護性は本来的には多様な対象に発揮されるものである。しかし、尺度を用いて作成する以上、その対象が多様である場合、何に対する態度であるのか曖昧となる。また、回答者も回答に際して対象への一貫したイメージを持ちにくくなり、回答態度や評定にブレが生じるおそれがある。すなわち、構成概念妥当性が疑わしくなるのである。その一方、糊澤ら（2009）の尺度は子どもへの養護性を測定するものであり、対象が一貫している。本研究では、子どもへの関心尺度は3歳～6歳の子ども（幼児）を対象としており、糊澤ら（2009）の養護性尺度と対象が近似している。従って、糊澤ら（2009）の養護性尺度との関連を検討することで、子どもへの関心と養護性との関連性について明確にできるといえる。

養護性の下位尺度について、小嶋（1989）の定義と糊澤ら（2009）で抽出された因子を対応させた上で、子どもへの関心とその上位概念である養護性との関連を整理すると、図5-4のようになる。

第1章でも述べたように、小嶋（1989）が定義し、提唱した養護性は、相手への「共感性（関心）」と「技能（効力感）」の2下位尺度から成る。糊澤ら（2009）では、養護性の因子として、子どもに対する共感や関心の程度である「幼い子どもに対する共感性（以下、共感性）」、子どもに対するスキルの自信の程度である「幼い子どもに対する技能の認知（以下、技能）」、将来的に親になって子どもを育てようと考えている程度である「親への準備性（以下、準備性）」、子どもへの否定的感情の程度である「子どもの非受容性（以下、非受容性）」の4つを見出している。小嶋（1989）の定義に照らしつつ、因子に含まれる項目から判断すると、「共感性」と「非受容性」は「共感性（関心）」に、「技能」と「準備性」は「技能（効力感）」に属すると考えられる。

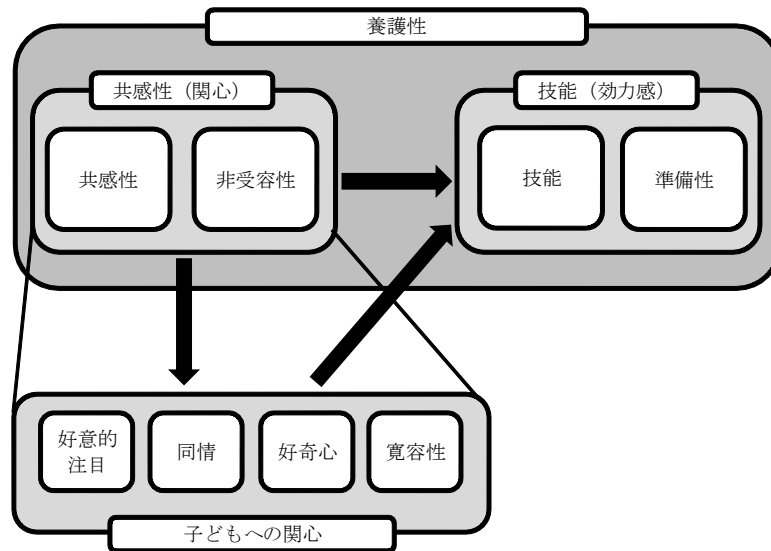


図 5-4 子どもへの関心とその上位概念である養護性との関連モデル

子どもへの関心は「共感性 (関心)」の下位尺度であるため、糊澤ら (2009) の因子では「共感性」と「非受容性」の下位尺度として位置付けられる¹²。小嶋 (1989) では、「共感性 (関心)」は「技能 (効力感)」に影響を及ぼすとしているため、糊澤ら (2009) の「共感性」と「非受容性」は、「技能」と「準備性」に影響を及ぼすという関係があるといえる¹³。同時に、子どもへの関心は、「共感性」と「非受容性」の下位尺度であるため、子どもへの関心の各下位尺度は、この2つの影響を受けると考えられる。そして、子どもへの関心の各下位尺度は養護性のうち、「共感性 (関心)」に属する側面であるため、「技能 (効力感)」，すなわち、糊澤ら (2009) の「技能」と「準備性」に影響を及ぼすと考えられる。そこで本節では、養護性と子どもへの関心の関係性について、以上の予想に基づき、検討する。

5-4-2 方法

(1) 調査対象・時期

東京都，埼玉県，新潟県にある国立・私立大学に在学し，心理学，社会科学，福祉学，教育学，医療関連学，理工学，言語学を専攻する大学生 693 名を対象とした質問紙調査を

¹² 正確には，子どもへの関心尺度は，糊澤ら (2009) で抽出された「共感性」と「非受容性」から更にいくつかの因子を抽出したものと見える。

¹³ 小嶋 (1989) の定義に基づけば，この関係性は検討されて然るべきであるが，糊澤ら (2009) では検討されていない。

実施した。このうち、年齢が26歳以上の者、回答内容に不備がある者の32名を除いた661名（男性277名、女性377名、無回答7名；平均年齢19.68歳， $SD = 1.18$ ）を対象とした（有効回答率95.38%）。実施時期は、2015年11月～2016年1月であった。

(2) 質問紙

1) 子どもへの関心尺度

子どもへの関心尺度30項目を6段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

2) 養護性尺度

糊澤ら（2009）の養護性尺度25項目を6段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

この尺度は、「共感性」（項目例：「幼い子どもが泣いていると何とかしてあげたいと思う」、「小さい子どもを見ると自分も笑顔になっている」など9項目）、「技能」（項目例：「幼い子どもの世話には自信がある」、「幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる」など7項目）、「準備性」（項目例：「自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている」、「自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする」など4項目）、「非受容性」（項目例：「子育てにはいろいろな煩わしいことが多いのではないかと思う」、「子どもがわがままなことをいっているのを見ると叩きたくなくなると思う」など5項目）の4下位尺度から成る。信頼性と妥当性については、糊澤ら（2009）により確認されている。

5-4-3 結果と考察

まず、子どもへの関心尺度と養護性尺度の各質問項目について、得点が高いほど、当該下位尺度が表す事柄の程度が高くなるように得点化（逆転項目も同様に処理）した。次に、各下位尺度の信頼性係数（Cronbachの α 係数）を算出した（表5-7）。その結果、全ての下位尺度で $\alpha = .75$ 以上と高い内的整合性が示された。従って、各下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

(1) 各尺度の平均得点および相関係数

まず、子どもへの関心尺度と養護性尺度について、各下位尺度の平均得点を算出し、同時に、各下位尺度間の相関係数を算出した（表5-7）。その結果、養護性尺度の「共感性」、

「技能」、「準備性」と子どもへの関心尺度の各下位尺度間に中程度から強い正の相関が見られた。また、「非受容性」と子どもへの関心尺度との間では中程度からやや強い負の相関が見られた。従って、子どもへの関心が高いほど、養護性の程度も高いことが示された。

表5-7 各下位尺度の信頼性係数，平均得点および各尺度間の相関係数

		共感性 ($\alpha = .91$)	技能 ($\alpha = .92$)	準備性 ($\alpha = .83$)	非受容性 ($\alpha = .75$)
平均		38.80	22.25	16.10	13.90
標準偏差		9.38	7.50	4.20	4.45
好意的注目 ($\alpha = .97$)	59.56 16.81	.92 ***	.64 ***	.60 ***	-.71 ***
同情 ($\alpha = .89$)	30.26 6.51	.78 ***	.52 ***	.57 ***	-.53 ***
好奇心 ($\alpha = .84$)	21.99 6.26	.78 ***	.53 ***	.45 ***	-.48 ***
寛容性 ($\alpha = .89$)	13.43 3.51	.58 ***	.43 ***	.40 ***	-.66 ***

*** $p < .001$

(2) パス解析

養護性のうち、「共感性（関心）」に相当する下位尺度が「技能（効力感）」に影響を与え、「共感性（関心）」が子どもへの関心に影響を与え、子どもへの関心が「技能（効力感）」に影響を与えるという図 5-4 のモデルを検証するため、パス解析を実施した（図 5-5）。なお、図において誤差変数の記載は省略した。

まず、養護性の「共感性（関心）」が「技能（効力感）」に与える影響を見ると、「共感性」から「技能」および「準備性」に正の影響、「非受容性」から「技能」および「準備性」に負の影響が見られた。このことから、養護性のうち、子どもへの共感性や関心は、実際に子どもを扱う技能の認知や、親としての準備性を高める一方、子どもへの否定的感情の強さは子どもを扱う技能の認知や親としての準備性の高さを低めることが示された。この結果は、子どもへの関心の高さが、実際に子どもを扱う技能や自信といった側面に影響を与えるという小嶋（1989）の理論モデルと一致しており、これが支持された。

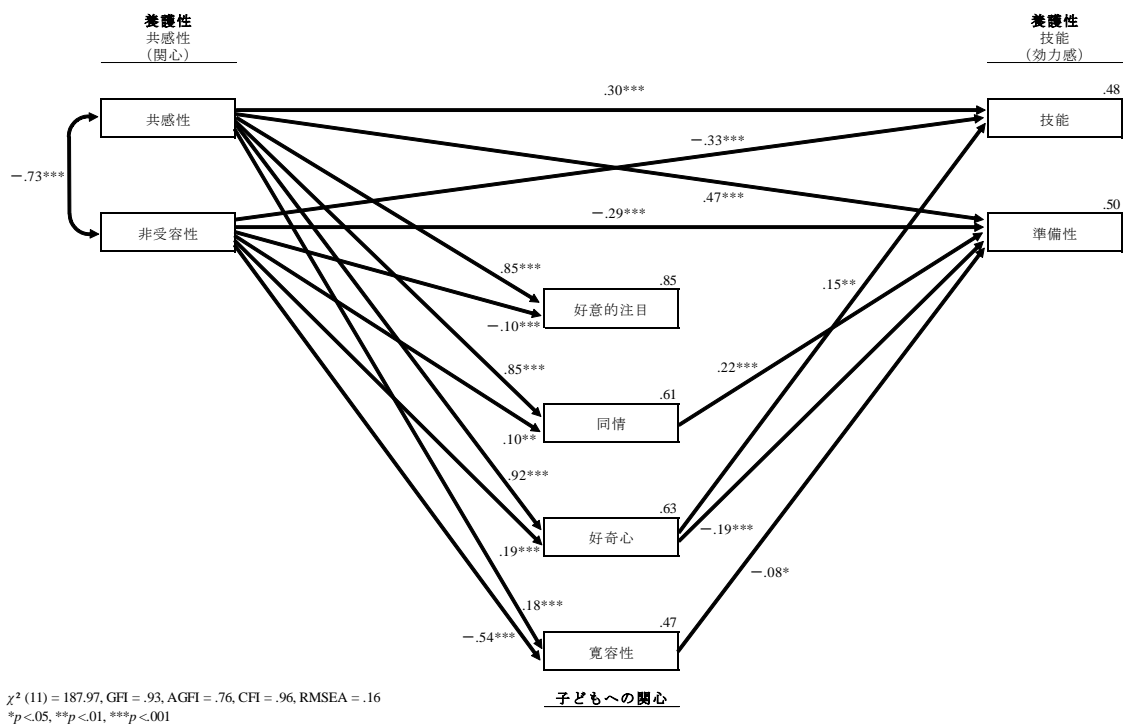


図5-5 養護性尺度と子どもへの関心尺度のパス解析結果

次に、養護性の「共感性（関心）」が子どもへの関心に及ぼす影響について見ると、「共感性」が子どもへの関心の各下位尺度に対して正の影響を与えていた。このことから、子どもへの関心尺度は養護性尺度のうち、子どもへの関心を特に表す「共感性（関心）」の影響を受けていた。これは、「共感性（関心）」の下位尺度であることを表しているといえる。「非受容性」は「好意的注目」と「寛容性」に負の影響を与えており、子どもを拒絶する姿勢の強さは子どもへの好意的な選好や子どもへの寛容さを減じさせていた。これも、子どもへの関心尺度が「共感性（関心）」の影響を受けることを表している。一方、「非受容性」は「同情」と「好奇心」に対して、やや弱いながらも正の影響を与えており、子どもへの否定的感情が強いことが子どもへの同情的な関心や好奇心の高さにつながっていた。これは、小嶋（1989）の理論モデルとは矛盾する結果である。

このような結果が見られた理由としては、「非受容性」に属する項目が、子どもへの否定的感情のほかに、将来的に子育てをする上での不安や、子どもへの苦手意識、子どもに接近したいが苦手意識からできないといった子どもに対するアンビバレントな心情を測定しているためであると考えられる。「非受容性」に属する項目は次の5つである。「子育てにはいろいろ煩わしいことが多いのではないかと思う」、「子どもがわがままなことをいっ

ているのを見ると叩きたくなると思う」、「幼児の遊び相手になる自信はない」、「小さな子どもを見ても別にかわいいと感じない」、「幼い子どもはあまり好きになれない」。

以上の5項目は、確かに子どもへの否定的感情の程度を測定するものであるが、項目の読み方によっては、子育てをする上での技能不足の認知や技能不足に起因する不適切な育児をしてしまうのではないかという懸念、子どもを扱うことへの自信のなさや苦手意識を問うている項目とも解釈できる。すなわち、「非受容性」は子どもへの否定的感情のほかに、子どもを扱う技能や自信のなさといった効力感の低さも同時に測定する下位尺度であると考えられる。個人によっては、将来の育児への自信のなさや子どもを扱うことへの苦手意識を自覚しており、かつ、それを克服しようという考えを有しているために、子どもが泣いていたり、不安を呈していたりする状況（「同情」が喚起されやすくなる場面）への敏感さが高まることもあるといえよう。また、育児への自信のなさや子どもへの苦手意識を補うために、子どもの生活や会話への好奇心が高くなる者も存在すると考えられる。このため、「非受容性」の高さが「同情」や「好奇心」に弱いながらも正の影響を与えていたと考えられる。

最後に、子どもへの関心が養護性の「技能（効力感）」に与える影響について見ると、まず、「同情」から「準備性」に、「好奇心」から「技能」に正の影響が見られた。これは、子どもへの関心の高さが実際の子どもの育てる上での技能の認知や親としての準備性が高いことに結びついていることを示すものであり、小嶋（1989）の理論モデルと一致する。

一方で、「好奇心」と「寛容性」から「準備性」に負の影響が見られた。まず、「好奇心」が「準備性」に負の影響を与えた理由を考察する。子どもへの好奇心が高いほど、子どもについて自主的に調べたり、情報を求めたりする機会が多くなると考えられる。その中で、子どもを育てることは楽しいことだけではなく、時に困難なこともあることや、今日の社会における子育てのしにくさを知ることも多くなると推測される。その中で、自身が将来的に育児をすることができるのであろうかと不安や疑問を感じることもあると思われる。そのため、「好奇心」の高さが「準備性」の低さに影響を与えていたと考えられる。

次に、「寛容性」が「準備性」に弱いながらも負の影響を与えていた理由を考察する。「寛容性」に属する項目は、子どもが泣いていたり大声を出していても、イライラしない程度を測定するものである。これは、子どもの泣きや大声を認知しても、否定的な感情を持たない傾向を捉えるものである。しかし、全く子どもに関心がない者の場合、子どもの泣きや大声を無視する傾向もあるのではないかと考えられる。全く子どもへの関心がな

く、泣き声や大声を聞いても関心のなさから気に留めない者の場合、育児への準備性も低いと推測される。子どもへの関心がないため、泣き声や大声を気にしない傾向の者も存在していた影響により、「準備性」に対して弱い負の影響が見られたと考えられる。

以上のパス解析より、全体的な傾向としては、養護性の「共感性（関心）」が「技能（効力感）」に影響を与えており、子どもへの関心は「共感性（関心）」の下位尺度として成立しており、子どもへの関心は「技能（効力感）」に影響を与えていることが示された。従って、小嶋（1989）が提唱した養護性の「共感性（関心）」が「技能（効力感）」に影響するという理論モデルが支持された。また、子どもへの関心尺度が養護性の一下位尺度であることが理論的枠組みを超え、尺度を用いた量的指標により確認されたといえる。

5-5 まとめ

本章では、子どもへの関心尺度の構成妥当性について、行動的側面および、従来の理論的枠組みに基づいた量的な指標の側面から検討した。

その結果、まず、行動的側面との関連では、選好法と質問紙法を用いた研究から、それぞれの手法により測定した子どもへの関心の程度に正の相関があることが示された。よって、尺度において子どもへの関心が高いと回答した者は、実際に幼児の画像が呈示されると、それを選好することが示された。従って、子どもへの関心尺度の行動的側面の妥当性を示すことができたといえる。

次に、小嶋（1989）の養護性のモデルに基づいて検討した結果、子どもへの関心は、子どもを育てることへの自信である次世代育成力に対して影響を及ぼす関係にあることが示された。この結果は、小嶋（1989）が想定した子どもへの関心が子どもを育む自信につながるという理論モデルの妥当性を示すものであると考えることができよう。

最後に、子どもへの関心とその上位概念である養護性の関連を検討した結果、子どもへの関心が養護性の一下位尺度として成立することが示された。すなわち、養護性の「共感性（関心）」の下位概念として子どもへの関心が存在し、子どもへの関心が養護性の「技能（効力感）」に影響を与えているというモデルが示された。このことから、子どもへの関心が養護性の下位尺度であることが量的指標により確認されたといえる。

以上の3つの結果から、子どもへの関心尺度の構成概念妥当性が示されたといえる。

第 6 章 過去の乳幼児との接触経験と接触時の感情が子どもへの関心に及ぼす影響

6-1 問題と目的

6-1-1 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情を取り上げる理由

本章では、子どもへの関心の具体的な要因として、過去の乳幼児との接触経験と接触時の感情を取り上げて検討する。

第 1 章でも述べたように、従来から、過去の乳幼児との接触経験が養護性や親準備性、対児感情といった子どもへの態度の要因とされ、過去に乳幼児との接触経験を多く持った者ほど、肯定的な子どもへの態度を持つとされてきた（安積，2008；花沢，1992；小嶋，1989）。しかし、従来の特に尺度を用いた量的研究では、乳幼児との接触時に抱いた感情が及ぼす影響については考慮されていない。他方、面接法や感想文分析といった質的な手法を用いて接触時の感情が子どもへの態度に及ぼす影響を検討した研究は存在する（例えば、伊藤，2004；中嶋ら，2004）ことから、接触時の感情が子どもへの態度に影響を与えていると推測される。

やや古典的な理論ではあるが、オペラント条件付けの観点から考えてみても、接触時にポジティブな感情を抱けば、それが報酬となり、より乳幼児への接触を試みる行動が強化されると考えられる。一方、ネガティブな感情を抱けば、それが罰となり、その後の接触行動は減少すると考えられる。その結果、接触経験の程度に高低が生じ、子どもへの態度に影響を及ぼしているかのように見える疑似相関が生じている可能性がある。この疑似相関の影響により、先行研究では接触経験と子どもへの態度との間に関連が見られたと考えることもできよう。

従って、子どもへの態度に及ぼす影響について、接触経験のみならず、接触時感情も同時に考慮することで、疑似相関が生じているのかという疑問や、接触経験そのものと接触時感情のどちらが子どもへの態度に対してより強い影響力を有しているのかといった疑問を検討することが可能になるといえる。

6-1-2 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情を測定する尺度を作成する必要性

しかしながら、過去の乳幼児との接触経験を多面的に測定する尺度および、接触時感情を測定する尺度は存在しない。

乳幼児との接触経験を測定する尺度自体は、いくつかの先行研究で作成されている（例えば、花沢，1992；星野ら，2008；野村・河上・長谷・藤原，2007）。しかし、従来の接触経験の程度を測定する尺度にはいくつかの問題点があり、経験の程度が適切に測定されていたとは言い難い。以下では、既存の接触経験尺度が有する問題について3点述べる。

第1の問題は、接触経験尺度の多くは研究ごとに別個に作成され、質問項目数や項目内容、評定段階数や頻度表現語などがそれぞれ異なる点である。特に、質問項目の評定方法は尺度により大きく異なる。従来の評定方法を大別すると、主に次の3つの方法が取られてきた。1つ目は、「1～2回したことがある」「そのことを3回以上たびたびしたことがある」というように、これまでの接触経験の積算回数を尋ねる方法である（例えば、花沢，1992）。2つ目は、経験の有無を「ある」「ない」などの2件法で尋ねる方法である（例えば、本論文の第3章で用いた方法）。3つ目は、具体的な回数を聞かずに「かなりしたことがある」などの頻度表現語を用いて経験の程度を尋ねる方法である（例えば、野村ら，2007）。

このように、評定方法は研究間に一貫性がない上、いずれの評定方法にも問題点がある。経験の積算回数を尋ねる方法や経験の有無を2件法で尋ねる方法では、その経験の継続性や頻度について検討することはできない。1日で「1～2回」経験した人もいれば、10年かけて「1～2回」経験した人もいと推測されるためである。花沢（1992）は、児童期以降に乳児との接触経験を多く持った者は愛着的な対児感情が強いとしている。しかし、接触回数だけの測定では経験の継続性や頻度について検討することは難しいといえる。接触の頻度も重要な指標である。しかし、頻度を測定する際に具体的な回数ではなく、「かなり」、「しばしば」などの頻度表現語を評定に用いた場合、回答者によって頻度表現語の解釈が異なり、程度の差について正確な測定できなくなるおそれがある。こうした問題に対しては、頻度を具体的な回数として頻度表現語に組み込むことで対処できると考えられる。すなわち、「しばしばあった（月に数回程度）」というような表現を用いて評定を求めらる。これであれば、従来の評定方法が持つ問題は解決できるであろう。

従来の接触経験尺度が持つ第2の問題は、多くの尺度において、直接的な接触経験のみが測定されることが多く、間接的な接触経験については測定されていない点である。接触経験尺度のうち、頻回に利用されるものとしては、花沢（1992）の乳児接触体験尺度や、野村ら（2007）の子どもとの接触体験尺度がある。しかし、これらの尺度は、乳幼児と遊ぶ、乳幼児の世話をするといった直接的な接触経験の程度についてのみを測定しており、乳幼児の様子について見たり聞いたりする、学習する、メディアを通して見るといった間

直接的な接触経験を尋ねる項目は存在しない。星野ら（2008）は、親準備性のうち、子どもが好きな程度や嫌悪感情は、直接的な接触経験以外にもメディアによる影響や間接的な接触経験の影響を受けることを示した。このことから、子どもの姿をメディアや日常生活を通して見たり聞いたりするといった間接的な接触経験もまた、子どもへの態度に影響を及ぼしているといえる。従って、直接的な接触経験と併せて間接的な接触経験の程度を測る項目も加え、経験の程度を多面的に測定できる接触経験尺度を作成する必要がある。

第3の問題点は、接触した時期によって接触経験の程度が異なる可能性を考慮していない点である。例えば、小学生の時は幼児とほぼ毎日遊んだが、中学生になると幼児と遊ぶ機会が減ったというような場合、従来尺度では、接触した時期を区別していないため、特に頻度表現語を用いた尺度において、回答者がいつの時期の経験の程度について評定すべきなのか苦慮するおそれがある。よって、最も接触経験が多かった時期を尋ねた上で、その時期における経験の程度を尋ねるという方法を取ることで、より回答しやすい尺度になると考えられる。そこで本研究では、最も接触経験が多かった時期を尺度の冒頭で尋ねた上で、その時期の経験の程度を尋ねるという方法を用い、接触経験の程度を測定することとする。

以上を踏まえ、乳幼児の接触経験について、直接的、間接的の両側面から測定できる尺度を作成できれば、接触経験が要因とされる子どもへの態度との関連について、より精緻な考察を加えられる可能性がある。そこで本研究では、まず乳幼児との接触経験を多面的に測定できる尺度の作成を試みる。

その一方で、乳幼児との接触時感情を測定する尺度はこれまでの研究では開発されておらず、接触経験と接触時感情が子どもへの態度（本研究では一貫して子どもへの態度として子どもへの関心を取り上げている）への影響を検討する際には、先に上記2つの尺度を作成する必要がある。従って、予備調査において過去の乳幼児との接触経験尺度および、乳幼児との接触時感情尺度の2つを作成する。

6-1-3 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情を要因とした場合のモデル構築

子どもへの関心の要因として、過去の乳幼児との接触経験と接触時感情を取り上げた場合に想定できるモデルは図6-1に示す3通りである。

モデル1は、接触経験が接触時感情に、接触時感情が子どもへの関心に影響を及ぼすという因果関係が直線的に連鎖することを想定したモデルである。

モデル2は、接触経験が接触時感情とともに子どもへの関心にも影響を及ぼし、接触時

感情は接触経験の媒介変数として子どもへの関心に影響を及ぼすというモデルである。

モデル3は、接触経験と接触時感情の間に因果関係は想定せず、両者とも子どもへの関心に影響を及ぼすことを想定したモデルである。

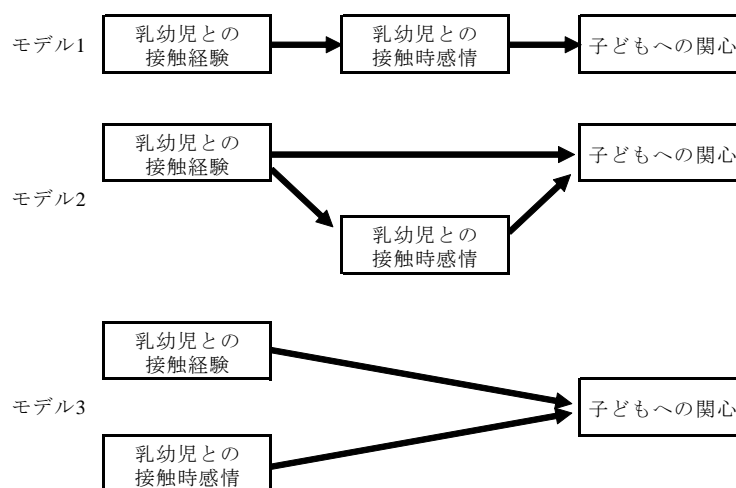


図 6-1 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響を
検討する場合のモデル

上記3つのモデルのうち、どれを採用するかという点においては、本研究における過去の乳幼児との接触経験と接触時感情を検討するという特質に注目する必要がある。

例えば、ふれあい体験学習のような1時点での接触経験とその際の感情が、子どもへの態度を変容させ得るか検討するような場合においては、モデル1あるいは2が適当である。しかし、本研究は過去の接触経験と接触時感情を同時に検討している。つまり、過去の接触経験が1回のみであった場合を除けば、複数の時点での接触経験と接触時感情が及ぼす影響について検討することになる。接触経験を持ち、感情を抱き、再び接触経験を持ち、感情を抱くというサイクルを複数回繰り返した後、子どもへの関心の程度が形成されていくと考えられる。そのように考えると、接触経験と接触時感情のいずれかに時間的な先行性を想定することは困難となり、両者間に因果関係を想定するのは困難である。この関係性を図として表したものが図6-2である。以上の推論から本研究では、過去の接触経験と接触時感情が同時に現在の子どもへの関心に影響を与えるというモデル3に基づいて検討を進めることとする。

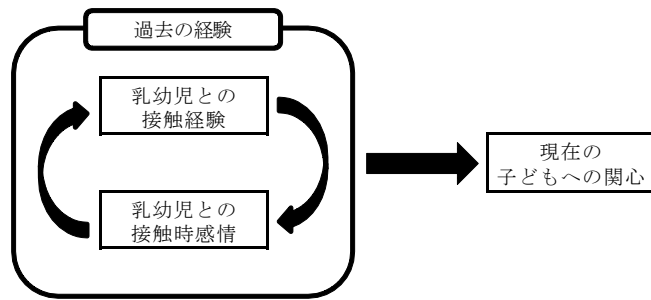


図 6-2 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情が現在の子どもへの関心に影響を及ぼす場合のモデル

6-2 予備調査：過去の乳幼児との接触経験尺度および接触経験時感情尺度の作成

6-2-1 目的

過去の乳幼児との接触経験および接触時感情について、多面的に測定できる尺度を作成することを目的とする。

6-2-2 方法

(1) 調査対象・時期

埼玉県にある国立・私立大学に在学し、心理学、教育学、社会科学、理工学を専攻する大学生 314 名を対象に質問紙調査を実施した。このうち、乳幼児との接触経験が全くないとした者、25 歳を超える者、回答内容に著しい不備がある者の 70 名を除いた 244 名（男性 75 名、女性 169 名；平均年齢 19.87 歳， $SD = 1.28$ ）を分析対象とした。実施時期は 2013 年 12 月～2014 年 2 月であった。

(2) 質問紙

1) 乳幼児との接触経験尺度

乳幼児との接触経験の程度を測定する尺度を作成するため、従来の接触経験尺度を参考に項目を作成し、一部は独自に作成した。具体的には、花沢（1992）の乳児接触体験尺度から 13 項目、野村ら（2007）の子どもとの接触体験尺度から 4 項目、中嶋ら（2005）の子どもへの接触体験尺度から 5 項目、関・丸山・亀田・島田・西村（2004）の子どもへの世話体験尺度から 1 項目、渡邊・工藤（2003）の乳幼児との接触経験尺度から 1 項目を参考に項目を作成し、これらに 15 項目を自作、追加した。よって、当初の項目数としては計

39項目が作成された。これらの項目を4段階評定（1.「全くなかった」、2.「まれにあった（年に数回程度）」、3.「しばしばあった（月に数回程度）」、4.「よくあった（月に数回以上）」）で尋ねた。これらの質問項目を尋ねる以前に、接触経験が最も多かった時期（最多接触時期）を「小学校期」、「中学校期」、「高校期」、「いずれの時期も全くなかった」の4つの中から選択し、その時期における経験の程度を回答するよう求めた。

2) 乳幼児との接触時感情尺度

乳幼児との接触時に抱いた感情の程度を測定する尺度を作成するため、先行研究を参考に項目を作成し、一部は独自に作成した。具体的には、高濱・野澤（2011）の2歳と3歳の母親の感情尺度より8項目、佐々木・末原・町浦（2009）の大学生が乳幼児と接触体験をした際の認識や感情についての自由記述から抽出された単語より21項目、金谷（2008）の大学生が乳幼児との交流前後に子どもに対する気持ちについて綴った自由記述の内容から11項目、独自に作成した4項目について、それぞれ表現を統一し、計44項目を作成した。これらの項目を4段階評定（1.「全く感じなかった」、2.「あまり感じなかった」、3.「やや感じた」、4.「とても感じた」）で尋ねた¹⁴。評定に際しては、上記の最多接触時期における接触時の感情について想起し、回答するよう求めた。

6-2-3 結果と考察

(1) 乳幼児との接触経験尺度の因子構造

乳幼児との接触経験尺度39項目について、各質問項目の得点が高いほど、接触経験の程度が多くなるように得点化した上で、因子分析（重みづけのない最小2乗法・Promax回転）を行った。因子数は、スクリープロット、固有値の変化、および解釈可能性から3因子として分析した。各項目の因子負荷量が1つの因子に.40以上、かつ他の因子への負荷量が.40未満であること、共通性が.30以上であることを基準に繰り返し分析を行った結果、3因子36項目が抽出された（表6-1）。

第1因子は、「一緒に遊んだこと」、「遊び相手をしたこと」、「おしゃべりをしたこと」などの20項目で構成されており、乳幼児と共に遊んだり、遊びの場を共有したり、双方向的な関係を持ったりする場面における接触経験の程度を表していることから、「遊びの共有」

¹⁴ 評定に用いる語として、「ときどき感じた」、「いつも感じた」といった頻度表現語を用いることも可能であるが、過去の接触経験が1回のみであった場合、頻度表現語であると回答が困難になると考え、このような程度表現語を用いた。

と命名した。

表6-1 乳幼児との接触経験尺度の因子分析結果

	第1因子 遊びの共有	第2因子 世話	第3因子 間接接触	共通性
一緒に遊んだこと	1.07	-.21	-.09	.81
遊び相手をしたこと	1.05	-.18	-.05	.83
おしゃべりをしたこと	1.04	-.22	-.03	.79
さわったこと	.96	-.08	-.09	.77
おもちゃで遊んだこと	.95	-.07	-.07	.77
一緒に運動やスポーツをしたこと	.90	-.09	-.07	.66
乳幼児が描いた絵を見たこと	.82	-.03	.14	.75
一緒に絵を描いたこと	.80	.08	-.10	.67
手を握ったこと	.72	.10	.07	.69
遊びや歌を教えたこと	.71	.14	-.01	.66
抱っこしたこと	.71	.26	-.14	.73
あやしたこと	.69	.20	-.05	.67
おんぶしたこと	.68	.23	-.08	.69
ほめたこと	.68	.11	.03	.61
絵本や本の読み聞かせをしたこと	.64	.09	.21	.69
泣いている乳幼児をなだめたこと	.60	.35	-.07	.73
乳幼児が作った粘土などの工作を見たこと	.59	.07	.24	.61
乳幼児向けの絵本や本を読んだこと	.57	.05	.35	.69
乳幼児が出ているテレビ番組を見たこと	.48	.12	.15	.43
散歩に連れて行ったこと	.43	.30	.03	.47
おむつをかえたこと	-.17	.97	-.03	.71
トイレの世話をしたこと	-.05	.88	.01	.71
ミルクや離乳食を作ったこと	-.14	.82	.02	.54
お風呂に入れたこと	.01	.82	-.16	.57
ミルクを飲ませたこと	.06	.80	-.01	.69
食事を食べさせたこと	.12	.74	.05	.74
乳幼児を寝かしつけたこと	.11	.68	.08	.64
服を着替えさせたこと	.35	.57	.01	.74
ほほずりやキスをしたこと	.37	.47	.05	.64
新聞や雑誌などで乳幼児に関する記事を読んだこと	-.14	-.07	.78	.50
街中で乳幼児の行動を意識して見ていたこと	-.01	-.06	.75	.52
乳幼児の成長や発達について学んだこと	-.06	-.17	.74	.44
街中で乳幼児の声や会話を意識して聞いていたこと	.06	.04	.66	.51
乳幼児に関する本を読んだこと	-.09	.09	.64	.42
乳幼児がいる人からの子育ての話を聞いたこと	.04	.06	.52	.33
テレビの子育て番組を見たこと	.07	.14	.47	.35
他の因子の影響を無視した因子寄与	18.35	15.36	7.63	
Cronbachの α 係数	.97	.94	.83	
因子間相関		第1因子	第2因子	第3因子
第1因子 遊びの共有	1.00			
第2因子 世話	.71	1.00		
第3因子 間接接触	.44	.49	1.00	

第2因子は、「おむつを替えたこと」、「お風呂に入れたこと」、「ミルクを飲ませたこと」

などの 9 項目で構成されており，乳幼児の世話や養育経験の程度を表していることから，「世話」と命名した。

第 3 因子は，「新聞や雑誌などで乳幼児に関する記事を読んだこと」，「街中で乳幼児の行動を意識して見ていたこと」，「乳幼児の成長や発達について学んだこと」などの 7 項目で構成されており，乳幼児の言動や様子を観察したり，学んだり，メディアを通して接触したりするといった間接的な接触経験の程度を表していることから，「間接接触」と命名した。

因子間相関については，「遊びの共有」と「世話」において強い正の相関が見られた。原田（2006）は，子どもとの接触経験について，小さな子どもを抱いたり，遊ばせたりした経験である「子どもとの接触経験」と，小さな子どもに食事を与えたり，おむつを替えたりした経験である「育児経験」の 2 つに分けて尋ね，その関係を検討した。その結果，両経験間には連関が見られたとしている。本研究における「遊びの共有」と「世話」の因子間相関の高さは，先行研究と同様の傾向を示したものであるといえる。

各下位尺度について，信頼性係数（Cronbach の α 係数）を算出したところ， $\alpha = .83 \sim .97$ であり，高い内的整合性が示された。従って，当該下位尺度に属する項目の合計得点をもって，各下位尺度得点とした。

(2) 幼児との接触経験の男女差および最多接触時期による差

乳幼児との接触経験尺度について，各下位尺度の平均得点を算出した。同時に，男女別，最多接触時期（小学校期，中学校期，高校期）別にも算出し，平均値差の検定を行った（表 6-2）。その結果，男女別では，女性の方が「遊びの共有」，「間接接触」経験が多かった。女性は，幼い時期から乳幼児と多くの接触機会を持つように周囲から期待され，接触することが動機づけられる傾向があるためと考えられる。

表 6-2 男女別および最多接触時期別に見た乳幼児との接触経験尺度得点の平均値と差の検定

		全体	男性 <i>n</i> = 75	女性 <i>n</i> = 169	<i>t</i> (<i>df</i>)	<i>d</i>	小学校期 <i>n</i> = 143	中学校期 <i>n</i> = 59	高校期 <i>n</i> = 40	<i>F</i> (<i>df</i>)	η^2	多重比較 (Tukey法)
遊びの共有	平均	48.51	44.28	50.40	-2.56 *	0.36	54.13	39.83	42.24	20.30 **	.15	小 > 中・高*
	標準偏差	17.05	16.04	17.19	(231)		17.01	12.51	15.67	(2, 228)		
世話	平均	13.92	12.93	14.36	-1.65	0.21	15.28	11.72	12.35	7.44 ***	.06	小 > 中・高*
	標準偏差	6.68	5.85	6.99	(168.96)		7.18	5.16	5.78	(2, 235)		
間接接触	平均	11.52	9.93	12.24	-4.28 ***	0.54	11.09	11.41	13.18	3.51 *	.03	高 > 小*
	標準偏差	4.42	3.48	4.62	(186.55)		4.21	4.06	5.36	(2, 234)		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

最多接触時期別では，全下位尺度において有意な主効果が見られたため，Tukey 法による多重比較を行った結果，「遊びの共有」と「世話」では，小学校期に接触経験が最多の者

の方が中学校期や高校期が最多の者よりも、それらの経験が多かった。一方、「間接接触」では、高校期が最多の者の方が、小学校期が最多の者よりも経験が多かった。直接的な接触経験である「遊びの共有」や「世話」は、より年齢が低い段階で経験が多く、間接的な接触経験は、より年齢が高い段階で経験が多くなることが示された。特に、「間接接触」において高校期に接触が多かった理由としては、高校の家庭科の授業内において、子どもの発達や保育について座学を中心に学習する内容が存在する（文部科学省，2008）ためであると考えられる。小学・中学校期において直接的な接触経験が少なくても、高校期に授業を通して間接的な接触経験が提供されたことで、高校が最多接触時期となった者も一定数存在するであろう。そのような回答者は、高校における授業内容を想起して回答したと考えられる。こうした回答者の影響を受け、高校期が最多接触時期の者では「間接接触」経験が多かったのではないかと思われる。また、将来の職業や進路を考える際に、子どもに関心がある者は乳幼児に関する職業を調べるなどして、間接的な接触経験を高めた者も存在するであろう。一方、高校期より下の年齢段階では、乳幼児について学習したり、意識的に観察したりすることは、さほど多くない経験であるとも解釈できよう。

(3) 乳幼児との接触時感情尺度の因子構造

乳幼児との接触時感情尺度 44 項目について、各質問項目の得点が高いほど、抱いた感情の程度が高くなるよう得点化した上で、因子分析（重みづけのない最小 2 乗法・Promax 回転）を行った。因子数は、スクリープロット、固有値の変化および、解釈可能性から 3 因子として分析した。各項目の因子負荷量が 1 つの因子に.40 以上、かつ他の因子への負荷量が.40 未満であること、共通性が.30 以上であることを基準に繰り返し分析を行った結果、3 因子 30 項目が抽出された（表 6-3）。

第 1 因子は、「うれしかった」、「楽しかった」、「癒された」などの 12 項目で構成されており、乳幼児と接触した際の喜びや楽しさといった快感情の程度を表していることから、「快感情」と命名した。

第 2 因子は、「戸惑った」、「難しかった」、「上手くできなかった」などの 11 項目で構成されており、乳幼児と接触した際の戸惑いや困惑、緊張の程度を表していることから、「当惑感情」と命名した。

第 3 因子は、「いらだった」、「がっかりした」、「いやだった」などの 7 項目で構成されており、乳幼児と接触した際の怒りや落胆といった不快な感情の程度を表していることから、「不快感情」と命名した。

因子間相関については、「当惑感情」と「不快感情」において中程度の正の相関が見られた。一方、「快感情」と「当惑感情」,「不快感情」との間の相関は弱かった。このことから、接触時に快感情を抱いた場面においては、同時に戸惑いや不快な感情は抱きにくい反面、戸惑いと不快な感情は同時に経験しやすいことが示唆された。

各下位尺度について、信頼性係数（Cronbach の α 係数）を算出したところ、 $\alpha=.85\sim.92$ であり、高い内的整合性が示された。従って、当該下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

表6-3 乳幼児との接触時感情尺度の因子分析結果

	第1因子 快感情	第2因子 当惑感情	第3因子 不快感情	共通性
うれしかった	.84	-.01	.03	.70
楽しかった	.83	-.11	.08	.67
癒された	.78	.01	-.08	.64
かわいかった	.77	-.05	-.03	.60
元気が出た	.75	-.03	-.02	.57
面白かった	.73	-.03	.05	.52
気持ち良かった	.73	-.09	.04	.52
あたたかかった	.69	.09	.07	.50
やわらかかった	.69	.13	.01	.50
飽きなかった	.67	.05	-.07	.47
ほほえましかった	.62	.09	-.08	.41
すごいと思った	.57	.21	.01	.39
戸惑った	-.04	.84	-.04	.67
難しかった	.11	.81	-.12	.62
上手くできなかった	-.05	.77	-.12	.53
緊張した	.00	.76	-.16	.50
不安を感じた	-.07	.68	-.06	.43
焦った	.11	.64	.08	.48
心配だった	.19	.59	.06	.43
精一杯だった	.15	.54	.03	.34
困った	-.02	.48	.29	.42
疲れた	-.01	.47	.35	.48
よくわからなかった	-.23	.46	.16	.35
いらだった	.16	-.08	.88	.72
腹が立った	.18	-.10	.83	.63
馬鹿にされたように感じた	-.04	-.12	.67	.41
がっかりした	-.01	-.07	.62	.36
いやだった	-.20	.12	.59	.48
悔しかった	-.03	.05	.58	.36
ゆううつに感じた	-.21	.19	.54	.47
他の因子の影響を無視した因子寄与	6.71	5.56	4.49	
Cronbachの α 係数	.92	.89	.85	
因子間相関	第1因子	第2因子	第3因子	
第1因子 快感情	1.00			
第2因子 当惑感情	.07	1.00		
第3因子 不快感情	-.10	.41	1.00	

(4) 乳幼児との接触時感情の男女差および最多接触時期による差

乳幼児との接触時感情尺度について、各下位尺度の平均得点を算出した。同時に、男女別、最多接触時期（小学校期、中学校期、高校期）別にも算出し、平均値差の検定を行った（表 6-4）。その結果、男女別では、女性の方が接触時に「快感情」を経験する程度が高く、「不快感情」を経験する程度も高い傾向が見られた。女性の方が大学入学以前の接触経験が多かったのは上述の結果の通りであるが、接触経験が多ければ、その分、経験する感情も多様で、その量も多くなると考えられる。そのため、女性の方が得点は高くなったのであろう。

最多接触時期別では、「不快感情」において有意な主効果が見られたため、Tukey 法による多重比較を行った結果、小学校期に接触経験が最多の者は、高校期が最多の者よりも「不快感情」を経験する程度が高かった。小学校期においては、遊びや日常生活の中で年少の乳幼児と接する機会が多いと推測される。小学生にとって接触対象の乳幼児は年齢的にも近く、弟妹であることも多いと思われる。そこでの相互作用の中では、年齢的な近さ故のいざこざやケンカが生じるなど、不快な感情を経験する機会も多いと考えられる。一方、乳幼児とは年齢的に離れた高校生では、子どもと青年という立場の違いへの気づきや意識もあり、不快な感情は抱きにくいと考えられる。そのため、小学校期に接触経験が最多であった者の方が「不快感情」をより経験しやすかったのであろう。

表6-4 男女別および最多接触時期別に見た乳幼児との接触時感情尺度得点の平均値と差の検定

		全体	男性	女性	<i>t</i>	<i>d</i>	小学校期	中学校期	高校期	<i>F</i>	η^2	多重比較 (Tukey法)
		<i>n</i> = 75	<i>n</i> = 169	<i>n</i> = 143			<i>n</i> = 59	<i>n</i> = 40	(<i>df</i>)			
快感情	平均	37.04	33.64	38.57	-4.85 ***	0.67	37.64	36.34	35.90	1.11		
	標準偏差	7.65	8.08	6.95			8.08	6.68	7.56			
当惑感情	平均	24.57	24.50	24.61	-0.11	0.02	23.93	25.98	24.68	1.95		
	標準偏差	6.75	7.18	6.57			6.39	6.91	7.55			
不快感情	平均	10.00	9.44	10.24	-1.78 †	0.25	10.45	9.51	9.23	3.22 *		小 > 高 †
	標準偏差	3.24	3.07	3.29			3.51	2.73	2.73			

†*p* < .10, **p* < .05, ****p* < .001

(5) 乳幼児との接触経験と乳幼児との接触時感情との関連

1) 全体の相関

乳幼児との接触経験と接触時感情との関連について検討するため、両尺度間の相関係数を算出した結果、全ての接触経験と「快感情」との間に中程度の正の相関が見られた（表 6-5）。また、「遊びの共有」および「世話」と「不快感情」、「間接接触」と「当惑感情」の間で弱い正の相関が見られた。よって、乳幼児との接触経験が多いほど、その際に肯定

的な感情を多く抱いていたことが示された。その一方、一緒に遊ぶ経験の多さは「快感情」のみならず「不快感情」とも関連が見られた。これは、遊びという相互作用を多く経験する中で、その楽しさだけでなく、自分の思い通りの遊びが展開できないことへの不快感や、遊びを巡る口論やいざこざ、ケンカなどが生じる場面での苛立ちや怒りなどの不快な感情を経験する機会も増えるためと推測される。また、乳幼児を世話する場面では、乳幼児に対して自分の思い通りの世話ができないことで不快な感情を抱くことが多くなるためと推測される。そのため、乳幼児との遊びや世話をする経験の多さは、快感情だけでなく不快な感情とも関連が見られたのではないかと考えられる。

また、乳幼児との間接的な接触経験が多いほど、「当惑感情」を多く抱いていたという関連が見られたことは、乳幼児について調べたり、学習したり、見聞きしたりする中で、乳幼児の発達の複雑さや、乳幼児を世話することへの困難さを知り、将来的に自分が子育てをすることへの戸惑いや不安感、困難感を抱いたためではないかと推測される。

表6-5 全体および男女別の乳幼児との接触経験尺度と乳幼児との接触時感情尺度との相関係数

		快感情	当惑感情	不快感情
	全体	.47 ***	.04	.20 **
遊びの共有	男性	.52 ***	.07	-.10
	女性	.42 ***	.02	.29 ***
世話	全体	.41 ***	.07	.15 *
	男性	.35 **	.07	-.10
	女性	.42 ***	.07	.23 **
間接接触	全体	.46 ***	.16 *	-.03
	男性	.37 **	.09	-.14
	女性	.45 ***	.19 *	-.04

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

以上のように、乳幼児との接触経験が多くなるほど、快感情だけでなく戸惑いや不快な感情も抱く傾向があることが示された。従来の乳幼児との接触時の感情について感想文や自由記述による質問紙を用いて検討した研究では、接触時の楽しさや嬉しさといった肯定的感情とともに、関わる上での困難さや戸惑い、不安などの否定的感情も同時に記述されることが明らかになっている（佐々木ら，2009；砂上ら，2005）。先行研究では、このよう

な接触時の快・不快感情の葛藤の様相が質的な分析から明らかになっていたが、本研究では、それを量的な側面から示すことができたといえよう。

2) 男女別の相関

乳幼児との接触経験と接触時感情に男女差が見られたことを踏まえ、男女別に相関係数を算出した(表6-5)。その結果、「遊びの共有」と「快感情」の間で、女性より男性の方が相関係数の値はやや大きかった。また、「遊びの共有」および「世話」と「不快感情」の間では、男性は有意な相関は見られなかった一方、女性ではやや弱い正の相関が見られた。同様に、「間接接触」と「当惑感情」の間でも、男性では有意な相関は見られなかった一方、女性では弱い正の相関が見られた。

「遊びの共有」との関連において、男性は「快感情」とのみ、より強い関連があった一方、女性は男性より「快感情」との関連が弱く、男性では見られなかった「不快感情」との関連があった。この結果は、遊びの質が男女間で異なることに起因すると考えられる。さわやか福祉財団(2011)が2010年度に小学生を対象に行った調査によると、一緒に遊ぶ人数は男女ともに「3~5人」が最も多かったが、次いで、男子では「6人以上」、女子では「2人」とする回答が多かった。また、よくする遊びでは、男女ともに「テレビ・携帯ゲーム」が最も多かったが、次いで男子では「サッカー」や「野球」、「鬼ごっこ」などのルールが厳格な運動遊びが多かった。一方、女子では、「読書・漫画」や「滑り台・ブランコ」「かくれんぼ」や「折り紙」など、外遊びも含まれるものの、男子よりも少人数で、言語的相互作用も密であると推測される遊びが多かった。日常場面において、年少の乳幼児と遊ぶ場合、特に接触時期が早いほど、その相手は弟妹が主になると推測される。上述の調査結果も踏まえると、男子ではさほど言語的相互作用が多くない運動遊びが展開されやすいが、女子では弟妹と2人きりで言語的やりとりが密な遊びが展開されることが多いと考えられる。そのため、女子の方が遊びを通じた接触経験が多いほど、多様な言語的相互作用の中で様々な感情を経験し、不快な感情を抱くことも多くなったと推測される。従って、女性は過去の乳幼児との遊びを通じた接触経験が多いほど、快感情だけでなく不快感情も同時に経験する傾向があったと考察される¹⁵。

続いて、女性において乳幼児を世話した経験が「不快感情」と関連していた理由として

¹⁵ 本研究の対象となった大学生が小学生であったのは2003年前後と推測されるため、2010年度に実施された先行研究の結果をそのまま当てはめることはできないが、小学生における遊びの様相や傾向と本研究の結果を大まかに対照させることは可能であると考えた。

は、世話をする中で多少なりとも不快感を抱いた際に、女性は将来、自身が主体となって養育役割を担い、育児をすることを意識し、育児への自信のなさや不適格感を抱き、不快感情が強化された可能性がある。その感情を大学生になっても強く記憶していたため、関連が見られたのであろう。

そして、女性のみ間接的な接触経験が「当惑感情」と関連が見られた理由としては、乳幼児について学んだり調べたりするほど、乳幼児の存在が現実的なものと認識され始め、将来的に母親となって子育てをする際の不安や心配が生じ、戸惑いを覚えたためであると考えられる。

以上の男女別関連の結果をまとめると、過去の乳幼児との接触経験が多いほど、男性は快感情が抱く傾向があり、乳幼児との接触は楽しいこととして記憶していた。一方、女性では、快感情とともに戸惑いや不快な感情も抱いていたことが示された。これは、今日の日本社会においてもなお、子どもが生まれた際に女性が養育役割を担うことへの期待が根強く、幼いうちから子どもを上手に扱うことへの周囲からの期待が大きいためであると考えられる。すなわち女性は、そのような母性愛神話的な期待を社会や周囲から感じ取る中で、想像していたよりも子どもを上手に扱えなかった際に、育児への自信喪失や不適格感を体験しやすいと推測される。そのため、快感情だけでなく、戸惑いや不快な感情とも関連が見られたと考えられる。

3) 最多接触時期別の関連

最多接触時期により乳幼児との接触経験と接触時感情に差が見られたことを踏まえ、最多接触時期別に相関係数を算出した（表 6-6）。その結果、小学校期が最多の者は、全ての接触経験が「快感情」と正の相関を有していた。中学校期が最多の者は、小学校期が最多の者よりはやや弱いものの、「遊びの共有」と「快感情」の間で正の相関が見られ、「間接接触」も「快感情」と正の相関を有していた。高校期が最多の者は、「間接接触」のみ他の時期が最多の者よりも「快感情」とやや強い正の相関を有していた。また、小学校期が最多の者のみ、「世話」と「当惑感情」の間で弱い正の相関が見られた。ただし、どの時期に接触経験が最多であっても、「不快感情」との間に有意な相関は見られなかった。

表6-6 最多接触別の乳幼児との接触経験尺度と
乳幼児との接触時感情尺度との相関係数

		快感情	当惑感情	不快感情
遊びの共有	小学校期	.56 ***	.07	.14
	中学校期	.38 **	.05	.15
	高校期	.24	.16	.17
世話	小学校期	.52 ***	.18 *	.11
	中学校期	.11	-.11	.09
	高校期	.13	.07	.18
間接接触	小学校期	.45 ***	.16	.05
	中学校期	.45 **	.06	-.17
	高校期	.63 ***	.27	-.03

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

つまり、最多接触時期の年齢が低いほど、遊びや世話といった直接的な接触経験と「快感情」に強い関連が見られる一方、年齢が上がるほど、「快感情」との関連が弱まる、あるいはなくなり、直接的な接触経験よりも乳幼児について学習したり調べたりする間接的な接触経験の方が、より「快感情」と強く関連するようになるといえる。この理由としては、小学校期に乳幼児と遊ぶ、世話をするとといった直接的な接触経験があった場合、乳幼児をリードし、相手をする事ができたことへの喜びが快感情を高めていたと考えられる。他方、年齢が上がると、リードできることは年齢差から考えて当然という認識が芽生え、うまく相手をする事ができたとしても喜びは小さくなり、「快感情」との関連が弱まるのではないかと考えられる。

一方、年齢が上がるほど、「間接接触」と「快感情」の関連が強くなるという結果は、実際に乳幼児とふれあうよりも、間接的な学習により乳幼児について知ることの方が肯定的な感情を持ちやすいことを示している。平成20年度改訂の学習指導要領（文部科学省，2008）では、中学校の家庭科において乳幼児とのふれあい体験学習を必修項目とし、高校の家庭科においても選択項目とした。本研究では、最多接触時期が中学校期の者は、乳幼児と遊ぶ経験の多さが、その際の快感情と関連していたことから、ふれあい体験学習の有効性を示唆する結果が得られた。しかし、間接的な接触経験もまた、快感情と強い関連があることから、実際にふれあうだけでなく、調べ学習や、乳幼児の様子を観察する、育児中の母親に子育てについて尋ねるといった学習も効果的である可能性が示唆された。澤

田・上手・奥野（2013）は、女子大学生を対象とした研究において、母子が参加する育児サークル活動の現場に参加するという体験中に母親から子育ての様子を聞くことで、子どもや子育てに関して肯定的な感情が芽生えることを明らかにしている。この先行研究は、対象や接触する時期が本研究と異なるが、乳幼児との間接的な接触が肯定的感情と関連があることを示唆するという点で一致している。間接的な接触経験も、乳幼児との接触時に抱く感情の大きな要因であることを示しているといえよう。

なお、小学校期が最多の者では「世話」が「快感情」とともに「当惑感情」とも関連が見られた。よって、乳幼児を世話することは小学生にとって、肯定的な感情を抱く体験である反面、難しい課題であり、戸惑いや困難さを認識する経験であるともいえる。中学校期以上では、有意な相関がなくなることから、困難さは特に感じられなくなるのであろう。

(6) まとめ

本節では、過去の乳幼児との接触経験および接触時感情のそれぞれについて測定する尺度を作成し、両尺度間の関連について検討した。その結果、接触経験には「遊びの共有」、「世話」、「間接接触」の3下位尺度、接触時感情には「快感情」、「当惑感情」、「不快感情」の3下位尺度が存在していた。そして、乳幼児との接触経験が多いほど、その際に抱いた快感情も多くなる反面、戸惑いや不快な感情も高まるという関連があった。すなわち、接触時に快感情だけでなく、当惑や不快といった多様な感情を経験していることが量的に示された。これらの結果を踏まえ、次節の本調査では、過去の乳幼児との接触経験および接触時感情が現在の子どもへの関心に及ぼす影響について検討する。

6-3 本調査：過去の乳幼児との接触経験および接触時感情と子どもへの関心の関連

6-3-1 目的

大学生における過去の乳幼児との接触経験と接触時の感情が現在の子どもへの関心に及ぼす影響を検討することを目的とした。これにより、接触経験と接触時感情のどちらがより子どもへの関心に及ぼす影響が大きいのか検討することができると考えられる。

6-3-2 方法

(1) 調査対象・時期

東京都および埼玉県にある国立・私立大学に在学し、心理学、教育学、社会科学、理工

学を専攻する大学生 372 名を対象とした質問紙調査を実施した。このうち、26 歳以上の者、回答内容に不備がある者の 22 名を除いた 355 名（男性 139 名、女性 215 名、無回答 1 名；平均年齢 19.93 歳， $SD = 1.25$ ）を分析対象とした。実施時期は 2013 年 11 月～2014 年 2 月、および 2015 年 1 月であった¹⁶。

(2) 質問紙

1) 乳幼児との接触経験尺度

前節の予備調査で作成した乳幼児との接触経験尺度を 4 段階評定（1.「全くなかった」、2.「まれにあった（年に数回程度）」、3.「しばしばあった（月に数回程度）」、4.「よくあった（月に数回以上）」）で尋ねた。尺度への回答以前に、接触経験が最も多かった時期（最多接触時期）を「小学校期」、「中学校期」、「高校期」、「いずれの時期も全くなかった」から選択し、その時期における経験の程度を回答するよう求めた。「いずれの時期も全くなかった」を選択した者は、本尺度と乳幼児との接触時感情尺度への回答は免除された。

2) 乳幼児との接触時感情尺度

前節の予備調査で作成した乳幼児との接触時感情尺度を 4 段階評定（1.「全く感じなかった」、2.「あまり感じなかった」、3.「やや感じた」、4.「とても感じた」）で尋ねた。評定に際しては、上記の最多接触時期での接触時感情について想起し、回答するよう求めた。

3) 子どもへの関心尺度

子どもへの関心尺度 30 項目を 6 段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

6-3-3 結果と考察

まず、子どもへの関心尺度と養護性尺度の各質問項目について、得点が高いほど、当該下位尺度が表す事柄の程度が高くなるように得点化（逆転項目も同様に処理）した。次に、各下位尺度の信頼性係数（Cronbach の α 係数）を算出した（表 6-7）。その結果、全ての下位尺度で $\alpha = .81$ 以上と高い内的整合性が示された。従って、各下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

¹⁶ 前節の予備調査においても質問紙には子どもへの関心尺度が含まれていたが、予備調査のサンプル数では因果関係を検討するには不十分であると考えたため分析せず、2015 年に追加調査を実施した。そのため、予備調査と実施時期が重複している。なお、追加調査で得られた回答者数は 58 名であった。

表6-7 各下位尺度の信頼性係数および男女別・最多接触時期別に見た各下位尺度の平均得点と差の検定

	全体	男女別				最多接触時期別					η^2	多重比較 (Tukey法)
		男性 n = 139	女性 n = 216	t (df)	d	小学校期 n = 168	中学校期 n = 72	高校期 n = 54	接触なし n = 58	F (df)		
乳幼児との接触経験												
遊びの共有	平均	48.51	44.73	50.62	-2.82 **	54.19	40.55	42.12	—	23.12 ***	.15	小>中・高*
($\alpha = .97$)	標準偏差	16.94	16.31	16.95	(278)	16.76	12.77	15.96	—	(2, 274)		
世話	平均	13.91	12.95	14.44	-1.98 *	15.24	12.01	12.43	—	8.13 ***	.05	小>中・高*
($\alpha = .93$)	標準偏差	6.52	5.77	6.87	(247.59)	7.09	5.07	5.61	—	(2, 287)		
間接接触	平均	11.33	9.98	12.10	-4.54 ***	10.95	11.39	12.48	—	2.70	.02	
($\alpha = .81$)	標準偏差	4.21	3.42	4.42	(261.84)	4.07	3.85	4.99	—	(2, 285)		
乳幼児との接触時感情												
快感情	平均	37.12	34.10	38.78	-5.16 ***	37.59	36.52	36.61	—	0.62	.01	
($\alpha = .93$)	標準偏差	7.75	8.17	6.98	(291)	8.09	7.10	7.55	—	(2, 287)		
当惑感情	平均	24.43	23.80	24.77	-1.18	23.73	25.96	24.58	—	2.75	.02	
($\alpha = .89$)	標準偏差	6.77	7.11	6.57	(292)	6.31	6.89	7.73	—	(2, 288)		
不快感情	平均	10.0	9.36	10.35	-2.54 *	10.43	9.74	9.13	—	3.82 *	.03	小>中・高*
($\alpha = .85$)	標準偏差	3.21	2.93	3.30	(292)	3.47	2.78	2.66	—	(2, 289)		
子どもへの関心												
好意的注目	平均	63.71	55.31	69.08	-8.83 ***	68.24	62.63	62.83	52.79	15.42 ***	.12	小>中*, 小・中・高>なし*
($\alpha = .96$)	標準偏差	15.71	14.25	14.19	(347)	14.28	15.15	14.85	16.14	(3, 342)		
同情	平均	30.51	28.29	31.94	-5.25 ***	31.98	29.90	30.20	27.71	6.90 ***	.06	小>なし*
($\alpha = .89$)	標準偏差	6.61	6.86	6.05	(352)	6.17	6.50	6.48	6.78	(3, 347)		
好奇心	平均	22.23	17.88	25.04	-10.54 ***	23.95	20.57	22.48	19.34	8.18 ***	.07	小>中・なし*
($\alpha = .87$)	標準偏差	7.15	6.04	6.37	(353)	6.93	7.12	7.32	6.36	(3, 348)		
寛容性	平均	13.24	13.19	13.28	-0.25	13.75	13.39	13.30	11.48	7.19 ***	.06	小・中・高>なし*
($\alpha = .87$)	標準偏差	3.30	3.51	3.16	(352)	3.08	3.44	3.01	3.51	(3, 347)		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(1) 各下位尺度の平均得点および男女差ならびに最多接触時期による差

各尺度の平均得点を算出し、男女別、最多接触時期別にも算出した（表6-7）。

まず男女別では、乳幼児との接触経験尺度の全下位尺度、乳幼児との接触時感情尺度の「快感情」と「不快感情」、子どもへの関心尺度の「好意的注目」、「同情」、「好奇心」において女性の方が得点は高かった。男性より女性の方が乳幼児との接触経験は多く、接触時に快感情とともに不快感情も経験するという結果は、前節の予備調査の結果と一致した。

次に最多接触時期別では、乳幼児との接触経験尺度の「遊びの共有」と「世話」で有意な主効果が見られ、多重比較（Tukey 法）の結果、小学校期が最多接触時期であった者の得点が高かった。乳幼児との接触時感情尺度の「不快感情」でも、小学校期が最多接触時期であった者の得点が高かった。小学校期において、乳幼児は年齢的にも近く、弟妹や親戚の子どもを通して接触する機会が多いと推測されることから、小学校期が最多接触時期であった者の接触経験が他の最多接触時期の者よりも多かったのであろう。また小学校期では、乳幼児との年齢的な近さから、遊びなどの相互作用場面においては、いざこざなどの不協和が生じやすいと推測される。そのため、中学・高校期が最多接触時期であった者よりも不快感情を経験しやすかったと考えられる。さらに子どもへの関心尺度においては、全下位尺度で有意な主効果が見られ、多重比較（Tukey 法）の結果、主に小学校期から高校期のいずれの時期においても乳幼児との接触経験が一切なかった者で得点が低かった。よって、花沢（1992）が指摘するように、大学生では過去の接触経験は子どもへの態度を肯定的なものとするのが示された。

(2) 各尺度の相関係数

各尺度間の相関係数を全体、男女別、最多接触時期別に算出した（表 6-8、6-9）。

まず、表 6-8 の全体の相関と男女別の相関を見ると、全ての接触経験は接触時の「快感情」と正の相関を有していた。同時に、間接接触は「当惑感情」、「遊びの共有」および「世話」は「不快感情」と正の相関が見られ、これは男女別では女性のみ関連が見られた。また、接触経験は子どもへの関心の全下位尺度と正の相関が見られた。接触時感情の「快感情」は子どもへの関心の全下位尺度と正の相関が見られたが、「寛容性」との相関では、女性のみ関連が見られ、男性では有意な相関はなかった。「当惑感情」と「不快感情」は「寛容性」と負の相関が見られた。よって、過去の乳幼児との接触時にネガティブな感情を抱いていたほど、大学生時点での子どもの泣き声や大声への寛容さは低かった。

表6-8 全体および男女別に見た各尺度の相関係数

		快感情	当惑感情	不快感情	好意的注目	同情	好奇心	寛容性
遊びの共有	全体	.48 ***	.04	.22 ***	.38 ***	.36 ***	.36 ***	.14 *
	男性	.52 ***	.08	.06	.46 ***	.39 ***	.32 **	.19
	女性	.42 ***	.01	.27 ***	.28 ***	.30 ***	.33 ***	.12
世話	全体	.41 ***	.10	.17 **	.27 ***	.30 ***	.29 ***	.13 *
	男性	.36 ***	.13	.03	.25 *	.26 **	.20 *	.09
	女性	.43 ***	.07	.22 **	.26 ***	.31 ***	.31 ***	.15 *
間接接触	全体	.45 ***	.17 **	-.02	.37 ***	.34 ***	.42 ***	.14 *
	男性	.40 ***	.10	-.05	.38 ***	.40 ***	.43 ***	.17
	女性	.42 ***	.19 **	-.06	.26 ***	.25 **	.33 ***	.14
		快感情	全体	.69 ***	.57 ***	.58 ***	.32 ***	
			男性	.60 ***	.47 ***	.42 ***	.11	
			女性	.69 ***	.59 ***	.58 ***	.49 ***	
		当惑感情	全体	-.03	.07	.10	-.25 ***	
			男性	-.01	.06	.14	-.30 **	
			女性	-.10	.05	.03	-.21 **	
		不快感情	全体	-.09	-.01	.09	-.34 ***	
			男性	-.15	-.07	.09	-.35 ***	
			女性	-.19 **	-.03	-.02	-.34 ***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

次に、表 6-9 の最多接触時期別の相関を見ると、小学校期が最多接触時期であった者は、乳幼児との遊びや世話といった経験が子どもへの関心と正の相関が見られたが、それ以外の時期が最多接触時期であった者では、有意な相関はなかった。また接触時感情との関連では、中学校期が最多接触時期であった者が接触時に「不快感情」を抱く程度が高いほど、

大学生時点での子どもへの関心が低いことが示された。

表6-9 最多接触時期別に見た各尺度の相関係数

	快感情	当惑感情	不快感情	好意的注目	同情	好奇心	寛容性
遊びの共有	小学校期	.56 ***	.06	.15	.42 ***	.43 ***	.35 ***
	中学校期	.44 ***	.04	.10	.19	.21	.21
	高校期	.32 *	.22	.31 *	.24	.15	.31 *
世話	小学校期	.53 ***	.19 *	.13	.33 ***	.36 ***	.33 ***
	中学校期	.15	-.10	.08	.13	.15	.19
	高校期	.18	.19	.28 *	.02	.11	.10
間接接触	小学校期	.45 ***	.17 *	.03	.29 ***	.34 ***	.32 ***
	中学校期	.41 **	.04	-.14	.46 ***	.30 *	.53 ***
	高校期	.55 ***	.29 *	.06	.59 ***	.48 ***	.68 ***
快感情	小学校期			.65 ***	.58 ***	.55 ***	.35 ***
	中学校期			.78 ***	.56 ***	.65 ***	.30 *
	高校期			.73 ***	.55 ***	.57 ***	.24
当惑感情	小学校期			-.06	.03	.09	-.31 ***
	中学校期			-.07	.12	.09	-.05
	高校期			.19	.23	.29 *	-.32 *
不快感情	小学校期			-.11	.01	.09	-.36 ***
	中学校期			-.32 **	-.32 **	-.14	-.33 **
	高校期			.05	.22	.24	-.41 **

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(3) 重回帰分析

本研究での仮説モデル（図6-1 モデル3）について検討するため、過去の乳幼児との接触経験と接触時感情の各下位尺度を説明変数、子どもへの関心の各下位尺度を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。なお、以下の分析においてVIFはいずれも3未満で、多重共線性はないと判断した。

1) 全体の重回帰分析結果

全体の重回帰分析結果を図6-3に示す。まず、過去の乳幼児との接触経験の影響について見ると、「間接接触」は「好意的注目」、「同情」、「好奇心」に正の影響が見られ、過去に乳幼児について見聞きしたり学習したりすることが、子どもへの関心のうち、子どもを目にした際に注目する傾向や子どもへの同情的な関心や知的好奇心に基づく関心を高めることが示された。一方、直接的な接触経験である「遊びの共有」と「世話」は大学生時点での子どもへの関心に影響を与えてはいなかった。

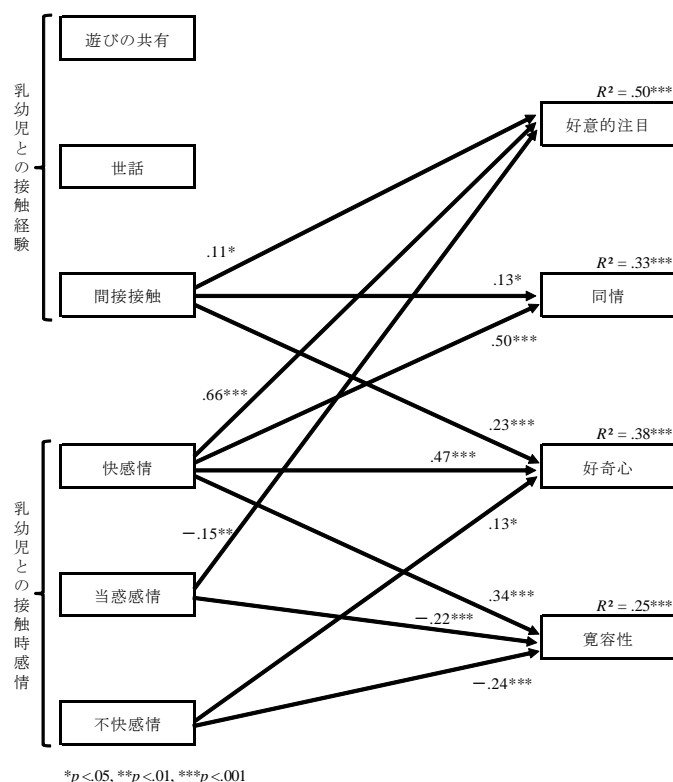


図 6-3 全体の重回帰分析結果

続いて、接触時感情が及ぼす影響について見ると、まず、「快感」は子どもへの関心の全下位尺度に正の影響を与えていた。よって、過去の乳幼児との接触時にポジティブな感情を抱いた、あるいはそれを強く記憶していると、大学生時点での子どもへの関心が高まることが示された。次に、「当惑感情」は「好意的注目」と「寛容性」に負の影響を与えていた。よって、過去の乳幼児との接触時に戸惑ったり緊張したりした経験や、そうした記憶が強いと、大学生時点での子どもを見かけた際にかわいいと感じて注目する傾向や子どもの泣き声や大声への寛容さが低くなることが示された。そして、「不快感情」は「好奇心」に正の影響、「寛容性」に負の影響を与えていた。よって、過去の乳幼児との接触時にネガティブな感情を抱いた、あるいはそれを強く記憶していると、子どもへの寛容さを低める反面、子どもをかわいいと感じて注目する傾向や子どもの日常や会話への好奇心を高めることが示された。

「不快感情」が「好奇心」を高める理由としては、以下の2つが考えられる。第1の理由は、ある程度多くの接触経験を有しなければ、不快感情は生じないと考えられるためである。「不快感情」は乳幼児との接触時に生じる苛立ちや嫌悪感といったネガティブな感情

であり、これは一定程度、乳幼児との相互作用を経験しなければ生じない感情であると考えられる。乳幼児との接触経験が多くあるからこそ、接触の中で不快な感情を経験することも増えるのである。実際、前節の予備調査において接触経験と接触時感情の相関を検討した結果、「遊びの共有」および「世話」と「不快感情」の間には有意な正の相関が見られた。すなわち、「不快感情」の高さは過去の乳幼児との接触経験の多さを反映している可能性が考えられ、疑似相関的に「不快感情」が「好奇心」に正の影響を与えていたと考えられる。

第2の理由は、過去の接触時に不快な感情を経験したが故に、それが子どものことをもっと知りたいと思うようになる可能性が考えられる。過去に年少の乳幼児との接触時に不快な感情を経験した場合、成長してからその時の記憶をふり返った際に、「なぜあの時、自分は不快に感じたのだろう」というように、不快に感じた理由を内省することもあると思われる。菅野（2001）は、母親が育児の中で経験する不快感情を面接法により検討し、不快感情を抱くことが自分の育児をふり返り、内省を深め、子どもとの関わり方を修正することに寄与すると指摘している。本研究の結果と対照させると、対象が自分の子ではない過去の接触経験であっても、先行研究での指摘と同様に、接触時の不快な感情がポジティブな働きをする可能性が考えられる。すなわち、過去の接触時の不快な感情もまた、その経験を回想する中で子どもへの好奇心につながり、関心を高める要因となることもあるのであろう。

ただし、接触経験と接触時感情を子どもへの関心の説明変数として同列に扱った場合、接触経験の影響は接触時感情と比較して相対的に少なく、接触経験よりも接触時感情の方が子どもへの関心に与える影響は大きいことが示された。従来の研究では、接触経験が子どもへの態度を規定するとされてきたが、本研究では、接触経験以外にも接触時感情も影響することを示すことができ、これは当初の予想と一致した結果であった。

2) 男女別の重回帰分析結果

男女別の重回帰分析結果を図6-4、6-5に示す。まず、過去の乳幼児との接触経験は男性では子どもへの関心に影響を与えていた。具体的には、「遊びの共有」は「寛容性」に正の影響、「間接接触」は「好意的注目」、「同情」、「好奇心」に正の影響が見られた。一方、女性では過去の乳幼児との接触経験は子どもへの関心に与える影響は見られなかった。

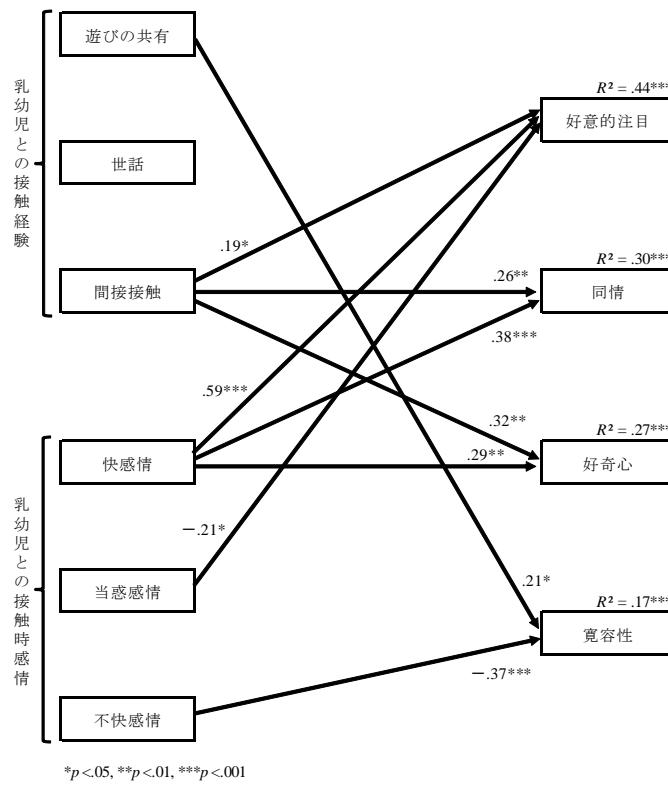


図 6-4 男性における重回帰分析結果

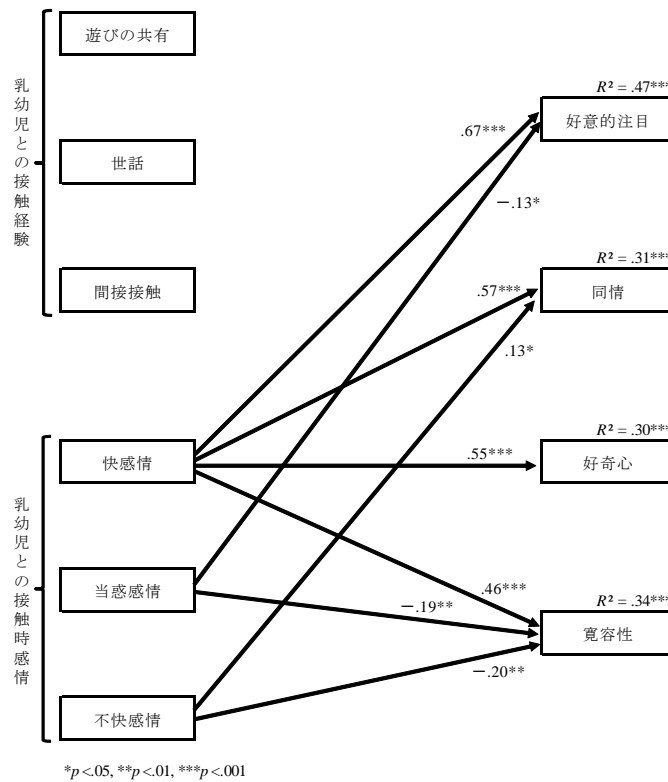


図 6-5 女性における重回帰分析結果

続いて、接触時感情が及ぼす影響では、男性は「快感情」が「好意的注目」、「同情」、「好奇心」に正の影響、「当惑感情」は「好意的注目」に負の影響、「不快感情」は「寛容性」に負の影響を与えていた。従って、過去の乳幼児との接触時にポジティブな感情を抱いた、あるいはそれを強く記憶していると大学生時点での子どもへの関心が高く、ネガティブな感情を抱いた、あるいは記憶していると子どもへの関心が低くなることが示された。一方、女性は「快感情」が子どもへの関心の全下位尺度に正の影響、「当惑感情」は「好意的注目」と「寛容性」に負の影響、「不快感情」は「同情」に正の影響、「寛容性」に負の影響を与えていた。女性の方が、接触時感情が子どもへの関心に及ぼすパスの本数が多く、より多様な子どもへの関心の側面に影響していることが示された。

以上より、男性は過去の乳幼児との接触経験と接触時感情が互いに現在の子どもへの関心に影響を与える一方、女性は接触時感情のみが影響を与えることが示された。すなわち、男性は接触経験も接触時感情も関心に影響を及ぼし得るが、女性は接触時感情の影響力が接触経験よりも相対的に高く、接触経験よりも、接触時にどのような感情を抱いたか、あるいはどのような感情が記憶に残っているかによって、現在の子どもへの関心が規定されていた。

このような差が見られた理由は、表 6-7 において示されたように、男性より女性の方が過去の乳幼児との接触経験が有意に多いこと、および女性の方が「快感情」と「不快感情」を抱いた経験が有意に多いことに起因していると考えられる。すなわち、男性は女性と比べて接触経験が少ないため、その際に経験する感情がさほど多様ではなく、接触経験のみでも子どもへの関心に影響を及ぼし得る。その一方、女性は接触経験の豊富さから、そこで経験した感情も多様で、接触経験と接触時感情の一体化が強くなり、接触時感情の程度も男性と比べて強くなるのである。実際、表 6-8 でも見た通り、女性は男性よりも接触経験と接触時感情の相関が高い傾向があった。そのため、接触経験と接触時感情の一体化が生じ、相対的に接触時感情の影響力は強くなったと推測される。これは、接触経験が多くなるほど、接触時感情の影響力が増すことを暗示しており、本研究において接触時感情を要因として取り上げたからこそ得られた知見であるといえよう。

また、「不快感情」が「同情」に正の影響があったことは、上述の通り、接触時の不快な感情も時間が経過すれば、肯定的に作用する可能性が示されたといえる。先にも引用した通り、菅野 (2001) は、母親が育児の中で不快感情を抱くことは、自分への内省を深め、子どもとの関わり方を修正することに寄与すると指摘し、育児において不快感情が生じる

ことの意義を述べている。本研究においても、過去の接触時の「不快感情」が、後の子どもへの同情的な関心の高さに影響していたことから、接触時の不快な感情は、後に否定的な影響を及ぼすだけでなく、肯定的な影響も与えることが示唆された。

3) 最多接触時期別の重回帰分析結果

最多接触時期別の重回帰分析結果を図 6-6~6-8 に示す。まず、乳幼児との接触経験が及ぼす影響では、小学校期では影響が見られなかったが、中学校期と高校期では「間接接触」が子どもへの関心の一部に正の影響を及ぼしていた。具体的には、中学校期では、「間接接触」は「好意的注目」と「好奇心」のみに影響を与えていたが、高校期ではその2つに加えて「寛容性」にも正の影響を与えていた。

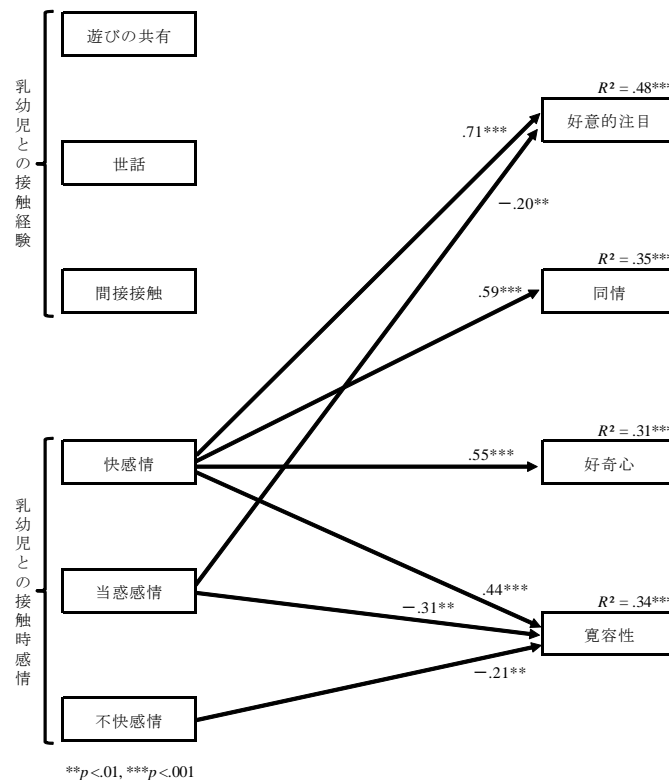


図 6-6 小学校期が最多接触時期であった場合の重回帰分析結果

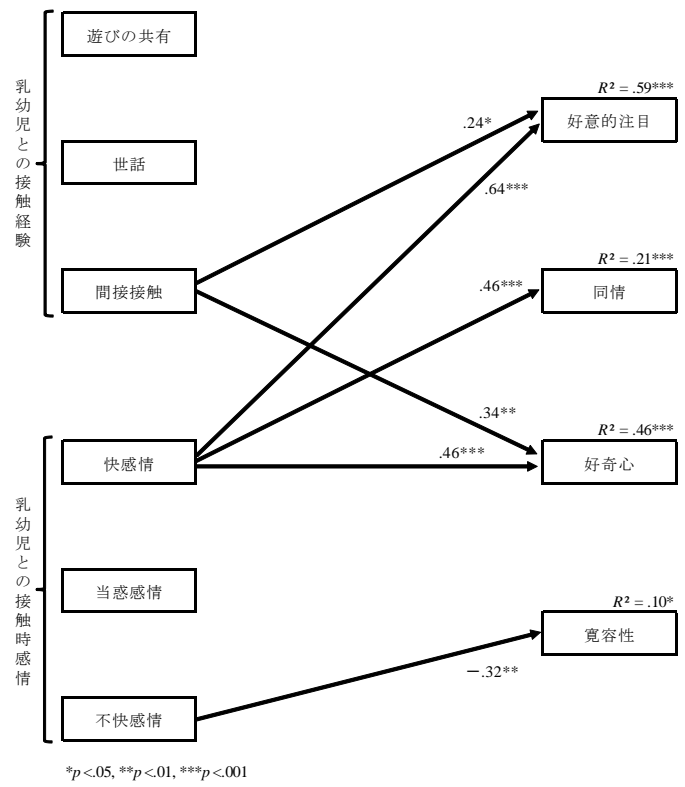


図 6-7 中学校期が最多接触時期であった場合の重回帰分析結果

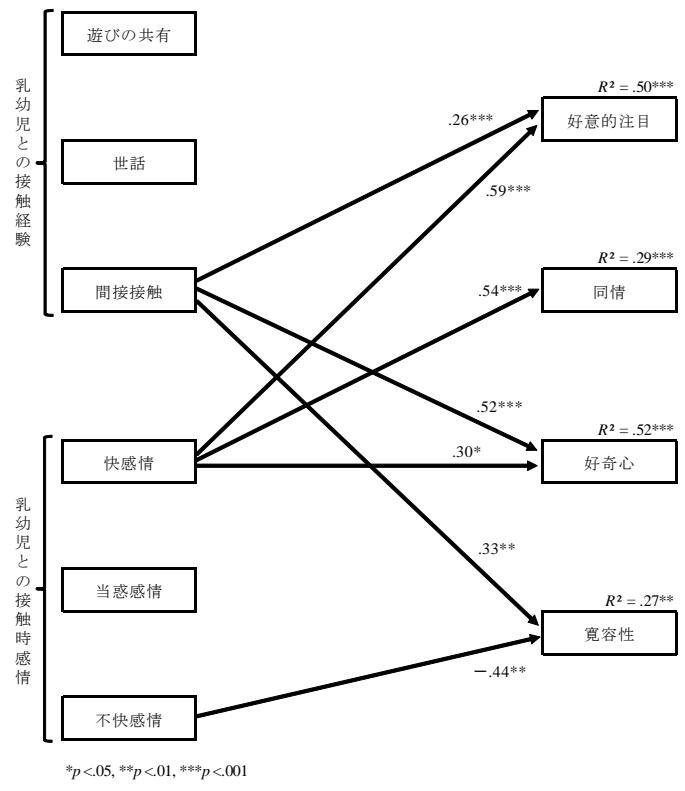


図 6-8 高校期が最多接触時期であった場合の重回帰分析結果

続いて、接触時感情が及ぼす影響では、年齢段階にかかわらず、「快感情」が子どもへの関心の一部または全部に正の影響、「不快感情」は「寛容性」に負の影響を与えていた。また、小学校期では「当惑感情」が「好意的注目」と「寛容性」に負の影響を与えていたが、中学校期と高校期では「当惑感情」の影響は見られなかった。このように、中学校期、高校期と比較して小学校期の方が、接触時感情の各下位尺度から子どもへの関心の各下位尺度に伸びるパスの本数が多く、年齢段階が低いほど、接触時感情が大きな影響力を持つことが示された。

小学校期において接触経験の影響が見られず、接触時感情の影響が強いという結果は、上述の通り、小学校期が最多接触時期であった場合、その他が最多接触時期であった場合よりも接触経験が多いという結果（表 6-7）に起因していると考えられる。これは、上述の男性より女性の方が接触経験は多く、接触時感情とのつながりが強いいため、相対的に接触時感情の影響力が高まるという結果と同様に、接触経験と接触時感情が一体化して経験されることが多く、相対的に接触時感情の影響力が強まったと考えられる。

ただし、特筆すべき点として、中学校期と高校期では、直接的な接触経験である「遊びの共有」と「世話」の影響は見られず、間接接触の影響が見られた点が挙げられる。これは、中学校や高校において、乳幼児について学んだり、調べたり、見聞きしたりするといった間接的な接触を授業に取り入れることで、後の子どもへの関心が高まる可能性があることを示唆している。一方で、直接的な接触経験は子どもへの関心に影響を及ぼしていなかった。先の学習指導要領（文部科学省，2008，2009）の改訂において、中学校では子どもと直接ふれあう体験学習が原則として必修化され、高校でも学校ごとの判断で導入できる選択必修となった。しかし、本研究の結果からは、直接的な接触経験のみでは子どもへの関心に与える影響は見られないことが示された。

その一方で、接触時感情の「快感情」が子どもへの関心を高め、「不快感情」が「寛容性」を低めることは中学校期、高校期ともに一貫していた。これらを踏まえると、実際に子どもとふれあう体験学習を実施する際には、ポジティブな感情をできるだけ多く経験できるような配慮をすることが必要であり、ネガティブな感情を抱くことがあったとしても、そのような気持ちをポジティブな感情として記憶できるように学習の振り返りにおいて意味づけをしていく必要があるといえる。ふれあい体験学習における振り返りの重要性は先行研究においても指摘されており（例えば、藤井ら，2013）、ネガティブな感情のみが強く残らないような配慮が必要であるといえる。また、直接的な接触と並行して、乳幼児につ

いて座学を通して学習する，乳幼児を観察するといった間接的な接触も子どもへの関心を高める効果がある可能性がある。

よって，学校現場における子どもとのふれあい体験学習においては，直接的な接触と間接的な接触の双方が経験できるように工夫し，子どもとのふれあいがポジティブな感情を抱く経験であったことを記憶に残り，印象付けることができるような配慮をする必要があるといえる。学校現場以外においても同様に，中学・高校生が年少の乳幼児と接触する際には，周囲の年長者はそれがポジティブな経験として記憶に残るようにいざない，適切な助言や励ましを与えることが大切であるといえる。

6-4 まとめ

本章では，過去の乳幼児との接触経験と接触時の感情が現在の子どもへの関心の程度に及ぼす影響を検討した。まず，予備調査において過去の乳幼児との接触経験の程度を測定する尺度および，接触時の感情の程度を測定する尺度を作成した。その結果，接触経験では「遊びの共有」，「世話」，「間接接触」の3因子，接触時感情では「快感情」，「当惑感情」，「不快感情」の3因子が抽出された。

続く本調査において，これらと子どもへの関心との関連を検討した。その結果，全体では，接触経験よりも接触時感情の方が子どもへの関心に及ぼす影響が大きいことが示された。また，「遊びの共有」や「世話」といった直接的な接触経験の影響は見られず，間接的な接触経験の影響が見られた。

男女別では，男性は接触経験の影響が見られたが，女性は接触経験よりも接触時感情の影響力が強いことが示された。この中で，「不快感情」が「同情」に正の影響を及ぼしていたことから，過去の接触時において不快な感情を抱いたり，現時点でもその感情の記憶が強く保持していたりしても，現時点の子どもへの関心の一部には肯定的に作用し得ることが示された。これは，過去の接触時のポジティブな感情が肯定的な子どもへの態度に，ネガティブな感情が否定的な子どもへの態度に結びつくのではないことを示しており，接触時感情が及ぼす影響の多様さを表しているといえる。

そして，最多接触時期別では，年齢段階が低いほど，接触時感情の影響が強く，年齢段階が上がると，乳幼児との間接的な接触経験の影響が強まることが示された。このことから，年齢が高くなるほど，乳幼児について学習したり，観察したりするといった経験も子どもへの関心を高める要因の1つであることが示された。よって，中学，高校の学校現場

において、座学を通して乳幼児について知識を得たり理解を深めたりする方法であっても、後の子どもへの関心を高める効果を持つといえる。

ただし、全体でも、男女別でも、最多接触時期別でも、「世話」の影響は見られなかった。これは、「世話」に含まれる質問項目が「おむつをかえたこと」など、身近に弟妹などの乳幼児がいれば日常的な手伝いとして行う可能性がある経験で構成されていたことが挙げられる。つまり、世話経験は日常行為の一部であり、子どもへの関心を高めるだけの特別な感情を生じさせるような経験ではなかった可能性がある。

これまでの研究では、過去の乳幼児との接触経験が直接的に子どもへの態度を規定するとされてきた（例えば、花沢，1992）。しかし、本章で示されたように、接触経験に加え、接触時感情も変数として組み込み、それを考慮した分析を実施した結果、接触経験自体の効果も見られたが、相対的に接触時感情の影響が強く見られた。従来、接触経験を持った際の感情は感想文分析や面接など、質的な方法により検討され、接触時の感情が子どもへの態度に影響を及ぼすことは示されてきた（例えば、伊藤，2004，中嶋ら，2004）。しかし、過去の接触時の感情について想起させた上で測定し、それが現時点での子どもへの態度に及ぼす影響について量的に検討した研究は、本研究が初めてである。接触経験のみならず、接触時感情も子どもへの態度に影響を及ぼすことを量的に示すことができたことは、過去の接触経験が子どもへの態度を形成する一過程を明らかにできたといえる。

第7章 子どもへの関心と子育ての社会化志向との関連

7-1 問題と目的

7-1-1 子育ての社会化志向を取り上げる理由

前章までは、子どもへの関心の関連要因および規定要因を検討してきた。すなわち、子どもへの態度の1つである子どもへの関心を従属変数として想定し、それに影響を及ぼす要因を探るという理論モデルを想定し、分析を行うというアプローチであった。このようなアプローチは、従来の対児感情や養護性、親準備性や子ども観といった子どもへの態度の研究と同様のものである（代表的な研究としては、花沢，1992；榭澤ら，2009；牧野・中西，1989；中嶋ら，2005）。

しかし、このアプローチには限界がある。なぜなら、過去の経験や各種パーソナリティ特性により形成された子どもへの肯定的あるいは否定的態度が、実際に社会の中に存在する子どもや、社会の中で営まれている子育てへの態度にどのような影響を及ぼしているのか検討できないためである。従来の対児感情や養護性、親準備性や子ども観といった子どもへの態度に関する多くの研究では、子どもへの態度を形成する、あるいは影響する要因を探ることのみに固執している。海外の研究においても主に男女差の研究に終始している（Berman, 1980）。すなわち、具体的に肯定的あるいは否定的な子どもへの態度が、実際の社会生活上、どのような役割を果たしているのかという点については考慮できていないのである。これまでの研究は、あくまで個人が有する子どもへの感情的、認知的表象・態度について心理学的な見地から検討したものであり、それが現実に子どもの育ちを支える態度につながっているかについては未検討である。

前章までは、子どもと遭遇した際に生じる原初的な反応の1つである子どもへの関心について、その要因を探ってきた。それでは、子どもへの関心が高い者は、社会における子どもや子どもの育ちを支える志向性も高いのであろうか。この点を明らかにできれば、子どもへの関心の高さが持つ意味について、より社会生活に即した知見を提供できる。

上述の通り、従来の研究の多くは、子どもへの態度を従属変数として想定し、子どもへの態度の個人差を規定する要因を検討した以上の示唆を得た研究は非常に少ない。肯定的あるいは否定的な子どもへの態度を有するからといって、それが社会における子どもや子育てへの態度にどのような影響や意味を持つのかという点については検討されていない。

そこで本章では、子どもへの態度の一部である子どもへの関心を独立変数の側に置き、

それが子育ての社会化志向に及ぼす影響を検討することとする。個人の感情的、認知的側面である子どもへの関心が、実際の子どもの育ちへの関心や問題意識、積極的な姿勢に結びついているか、あるいは汎化していくかを検討する。これにより、子どもへの関心の高さが子育ての社会化への志向性を促進させるものであるのか検討でき、子どもへの関心が持つ意味について明らかにできるといえよう。

社会全体で子どもの育ちを支えることは「子育て社会化」と呼ばれる。内閣府（2005）は、子どもを持つ親だけでなく、その友人や同僚、近隣に住む人々など、社会の構成員全体が何らかの形で子育てに参加する、あるいはそれができる仕組みを構築していく「子育ての社会化」を進めていくことの重要性を指摘している。

昨今、核家族化や地域コミュニティの希薄化により、特に都市部において育児の孤立や見えない化が進んでいる。そのような社会にあっては、本田（2007）が指摘するように、子育てが個人の私的営みとして行われ、社会からの干渉や介入を許さないものとなり、他者の子育てに対して不寛容であったり、干渉することを自重したり、避けたりする風潮が存在する。そのような今日の日本社会において、社会の中に存在する子どもや子育てに関する社会的な問題を意識し、社会全体で子どもの育ちを支え、子育てを応援し、子育ての社会化を目指していく姿勢や意識および態度（子育ての社会化志向）は、少子化社会の日本において持続可能な社会を構築するという意味で非常に重要な態度の1つといえる。特に近い将来、社会に参画して子育ての社会化に寄与する可能性が高い大学生は、社会の中の子どもや子育てにどのような態度を有しているのだろうか。

2016年には選挙権年齢が18歳に引き下げられたことから、少子化社会においては大学生も主権者として子どもや子育ての問題に関心と意識を持つことが期待される。発達的に見ても、青年期は子どもへの関心や養護的役割を担うことへの予期が現れ始める時期であり（小嶋，2001）、子どもや子育てに関心と意識が芽生える時期である。また、大学生は中学・高校卒業後に就職した同世代の者と異なり、フルタイムの労働や納税をしていない猶予期間にあるが、アルバイトや就職活動などを通して多様な世代と交流して視野を広げ、将来のキャリアについて考えるという、社会に出るための準備をしている立場にある。そうした近く社会人になる者の子育ての社会化への態度を検討することは、将来の社会における子育ての社会化の様相を予測することにもつながる。そこで本章においても、大学生に焦点を当ててこれを検討する。

7-1-2 子育ての社会化に関する先行研究と子育ての社会化志向の定義

従来、子育ての社会化については社会福祉学の見地から論述した研究が多い（例えば、井上，2012；森田，2000；山本，2016 など）。実証的研究としては相馬（2004）の家庭的保育者（保育ママ）への面接や、中島・秋葉・飯田・金澤（2015）の乳幼児の母親へのアンケート調査があるが、いずれも体系的な研究ではない上、子育ての社会化に関する姿勢や意識ではなく、保育所利用や育児の実態を検討したものである。子育ての社会化を目指す姿勢や意識について心理学的かつ量的に、特に尺度を用いて検討した研究としては、藤後（2006）の社会的子育て観に関する研究と、山口ら（2013）の子育ての社会化の構成概念を検討した研究が存在する。しかし、いずれの尺度にも以下のような問題点がある。

藤後（2006）は、地域コミュニティの中の子どもを育もうとする姿勢を社会的子育て観と呼び、中学生を対象にその程度を測定する尺度を作成した。下位尺度には、「無関心」（2項目）と「社会的子育て」（2項目）の2つがある。しかし問題点として、まず、尺度の項目数が4項目のみであり、多角的な測定ができておらず、構成概念妥当性に乏しい点が挙げられる。また、地域コミュニティという狭い範囲での子育てを支える態度を測定するものであり、子どもや子育てに関する社会的問題への関心や、子育ての社会化への姿勢や意識などを尋ねる項目はない。加えて、中学生を対象に尺度が作成されているため、大学生を対象とした本研究に当尺度を直接用いることはできない。

山口ら（2013）は、20～59歳の女性を対象に子育ての社会化を意識・行動する程度を測定する尺度を作成した。下位尺度には、「地域共同子育て意識」（6項目）、「子育て支援行動」（5項目）、「子育て交流意識」（5項目）、「ボランティア意識」（5項目）、「少子化対策意識」（3項目）、「子ども育成態度」（3項目）、「地域へのまなざし」（3項目）、「支え合い意識」（3項目）の8つがある。

しかし、この尺度は項目内容から判断して、子どもや子育てに関する問題への関心、意識、動機づけ、規範意識、行動の頻度など非常に多様な観点が含まれている。特に、本来は分割して測定すべき概念である態度の程度と行動の頻度を1つの尺度で同時に測定している¹⁷。そのため、子育ての社会化のどの側面を測定しているのか、曖昧かつ混沌として

¹⁷ 態度を測定する項目としては、「地域社会全体で子育てを支えていくことが大切だと思う」（地域共同子育て意識）、「子どもは地域の人との交流によって育つと思う」（子育て交流意識）などがある。行動の頻度を測定する項目としては、「近所の子どもを預かることがある」（子育て支援行動）、「地域の子どもによく声をかける」（子ども育成態度）などがある。

おり、構成概念妥当性に疑義がある。

加えて、山口ら（2013）の尺度も質問項目は主として地域社会を念頭に置いた子育ての社会化への意識や行動の程度を測定するものであり、より広い社会全体レベルでの子育ての社会化に関する態度に関する項目は少ない。身近な子どもや子育てと社会や世界の子どもや子育ての双方の問題に対する態度や意識を捉えられるような尺度を作成できれば、社会全体で子育てを支えるという子育ての社会化の理念とも一致した尺度になるといえる。

さらに、山口ら（2013）の調査対象は成人女性のみであった点も問題である。子育ての社会化への意識は女性だけでなく男性も持つことが望ましい。性別にかかわらず、子育ての社会化を目指す態度を測定できる尺度を作成する必要がある。

以上の通り、従来の2つの尺度は中学生や成人女性を対象に、主に地域社会における子どもや子育てへの態度を測定するものである。従って、大学生を対象に性別を問わず、地域社会よりも広い範囲を含めた子育ての社会化への意識や姿勢を測定する尺度はこれまで存在しない。そこで本研究では、社会全体という視点を加えた、新たな子育ての社会化を志向する程度を測定する尺度を作成する。

ここで、子育ての社会化志向を次のように定義する。子育ての社会化志向とは、「子どもや子育てに関する社会的問題を意識し、物質的にも精神的にも社会全体で子どもの育ちと子育てを支えることで子育ての社会化を目指そうとする態度」のことをいう。

7-1-3 子育ての社会化志向尺度の併存的妥当性を確認する尺度

子育ての社会化志向の程度を測定する尺度を新たに作成するに当たり、その併存的妥当性を確認する尺度として次の4つを用いることとした。久世ら（1988）の規範意識と私生活主義尺度の下位尺度の1つである「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」尺度、吉田ら（1999）の社会考慮尺度、江上（2007）の「母性愛」信奉傾向尺度、糊澤ら（2009）の養護性尺度である。以下では、各尺度とその概念の特徴および、それぞれの尺度を用いる理由について述べる。

(1) 身近な事象への関心・社会的事象への無関心尺度

久世ら（1988）の規範意識と私生活主義尺度は、青年における自己の意識、態度、価値観といった社会意識について測定するものである。久世ら（1988）によると、社会意識は大別して2つに分かれる。1つは規範意識であり、これは、多くの人々に共有されている価値基準と、その実現のために取られるべき行為の様式が内面化されたものとされる。も

う1つは、私生活主義であり、「私」の生活と利益を重視しようとする生活の構えである。私生活主義はさらに2つに分けることができ、1つは、自分自身と身近な事象への関心・社会的事象への無関心、もう1つは、自分の感覚や実感を重視する態度である。

そして、久世ら（1988）は以上の3つの態度に対応する下位尺度を有する青年の社会意識の程度を測定する尺度を作成した。それが規範意識と私生活主義尺度である。3つの下位尺度とはすなわち、家庭や学校での上下関係や伝統、慣習や礼儀を尊重する程度の「規範意識」、他者や社会、政治といった事柄に関する事象や問題への関心の低さ、および、社会に対する無力感や私生活を充実させることを重視する程度の「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」、自分の感情や考えを重視し、他者と同じことをせずに自分らしさを追求する程度の「自分の感覚や実感の重視」である。

以上の3下位尺度のうち、「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」（以下、「社会的事象への無関心」）は、社会への関心の程度を測定するものであり、子どもや子育てに関する社会的問題やそれに対する態度や関心、志向性を測定する子育ての社会化志向尺度と関連が見られると考えられる。従って、子育ての社会化志向が高い場合、社会的事象への無関心の程度が低いという関連が見られると予想される。

なお、「社会的事象への無関心」以外の下位尺度である「規範意識」と「自分の感覚や実感の重視」の2つは子育ての社会化志向とは関連がないと判断した。「規範意識」は伝統や慣習、礼儀といったものを尊重する態度を意味し、「自分の感覚や実感の重視」は、自己の感情や考えを重視する利己主義的態度を意味する。この2つは、子育ての社会化志向が測定しようとしている子どもや子育ての社会的問題への関心や志向性とは概念的に方向性が異なるものであるといえよう。そこで本研究では、久世ら（1988）の尺度のうち、特に関連が強いと考えられる社会的事象への無関心尺度を取り出して用いることとした。

（2）社会考慮尺度

「社会考慮」とは、個人の生活空間を「社会」として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度のことをいう（斎藤，1999）。すなわち、何らかの形で「社会」を意識している程度のことであり、「社会」というものを考え、「社会を構成するものとしての個人」を考慮する程度である（斎藤，1999）。この社会考慮の程度を測定する尺度は、斎藤（1999）により3項目からなる尺度が作成されているが、吉田ら（1999）は、それらに10項目を追加した13項目から成る尺度を作成した。吉田ら（1999）の社会考慮尺度は主成分分析により1因子構造が確認されている。尺度の信頼性と妥当性

については、吉田・元吉・北折（2000）により確認されている。

社会について意識し、関心を持つ程度である社会考慮と、子どもや子育てに関する社会の問題への関心や態度を検討する子育ての社会化志向とは関連が見られると予想される。すなわち、子育ての社会化志向が高い場合、社会考慮も高いと予想される。そこで本研究では、併存的妥当性を確認する尺度として社会考慮尺度を用いることとした。

（3）「母性愛」信奉傾向尺度

従来、「母性」あるいは「母性愛」は、母親が生得的に有する子どもへの態度とされ、「母性」や「母性愛」に満ちた育児が子どもにとって肯定的に作用するとされてきた（江上，2004）。その一方で、江上（2004）は、「母性」や「母性愛」に関する先行研究をレビューする中で、「母性」や「母性愛」の存在を否定する研究がいくつか提供されてきていることを指摘している。そして、江上（2005）は、「母性」や「母性愛」にとらわれた育児をすることが、かえって養育にネガティブに作用する可能性を指摘し、社会通念としての「母性愛」を受け入れて信じ込む傾向（「母性愛」信奉傾向）に焦点を当てて検討を行った。この中で、江上（2005）は、「母性愛」信奉傾向を「社会文化的通念として存在する伝統的性役割観に基づいた母親役割を信じそれに従って育児を実践する」傾向として定義した上で、その程度を測定する尺度の作成し、「母性愛」信奉傾向が養育に及ぼす影響について母親を対象に検討を行った。その結果、子どもの発達水準によって、「母性愛」がポジティブにもネガティブにも作用しうることを見出し、「母性愛」は「両刃の剣」とであると結論付けた。

「母性愛」信奉傾向尺度は、江上（2005）で当初作成された12項目に、江上（2007）で追加された1項目の計13項目から成る。江上（2005）によれば、本尺度は主成分分析の結果から1因子構造であることが確認されており、信頼性と妥当性が確認されている。

「母性愛」信奉傾向が高いということは、母親を主体とした母子密着型の社会に閉じた形での育児を志向とする、あるいは理想とする傾向を表していると考えられる。つまり、戦後の日本で確立されたような、母親が子どもの育児の責任を一手に担うというスタイルを信奉する傾向を表していると思われる。それに対して、子育ての社会化志向は、社会の構成員全体で子どもの育ちを支えようとする傾向を表す。このことから、子育ての社会化志向は高い場合、「母性愛」信奉傾向が低くなると予想される。そこで本研究では、併存的妥当性を確認する尺度として「母性愛」信奉傾向尺度を用いることとした。

（4）養護性尺度

糊澤ら（2009）の養護性尺度は、自分の子に限らず、社会全体の幼い子どもへの態度を

測定する尺度である。子育ての社会化志向は、社会の中の子どもや子育てに対して注意や関心を向ける態度であるため、養護性尺度とは相関が見られると予想される。具体的には、子育ての社会化志向が高いと養護性も高いという関連が見られると予想される。

養護性は子どもへの関心の上位概念であるものの、子どもへの態度を多面的に捉えることができる尺度である。そこで本研究では、併存的妥当性を確認するための尺度として養護性尺度を用いることとした。

7-2 予備調査：子育ての社会化志向尺度の項目作成と精選

7-2-1 目的

子育ての社会化志向尺度の項目を試作し、予備調査を実施して項目の不備および、修正または削除すべき項目の確認、項目の精選を行うことを目的とした。予備調査に当たっては、子育ての社会化志向が高いと考えられる乳幼児教育学を専攻する学生を対象に行い、その反応から尺度の妥当性について検討することとした。

7-2-2 方法

(1) 調査対象・時期

埼玉県にある国立大学に在学し、乳幼児教育学を専攻する3年生および4年生の学生50名¹⁸を対象とした質問紙調査を実施した。実施時期は2015年9月であった。

(2) 質問紙

質問項目は、子育ての社会化に関する書籍や新聞記事、子育てに関するインターネット上のコラムやブログ記事、テレビでの報道等を参考に、以下の13テーマから63項目を作成した。13テーマは、(1)「少子化」、(2)「保育園・待機児童問題」、(3)「育休」、(4)「働く親に関する問題」、(5)「子育て環境に関する問題」、(6)「子育てする親への態度」、(7)「子育て支援および子育てに関する財政」、(8)「児童虐待問題」、(9)「教育問題」、(10)「子どもや子育ての福祉・妊活」、(11)「子どもの貧困」、(12)「地域社会と子ども・子育て」、(13)「世界の子ども問題」であった。各テーマについて、それに対する関心、意識、態度、志向性の程度を測定する項目を3つから9つを作成した。

試作した子育ての社会化志向尺度63項目について、4段階評定(1.「全くあてはまらない」2.「あてはまらない」3.「あてはまる」4.「とてもあてはまる」)に加え、?。「わから

¹⁸ 予備調査の目的は、項目の精選および妥当性の確認であるため、専攻と学年のみを尋ね、年齢や性別といった回答者の属性については尋ねなかった。

ない・考えたことがない」を含めた5つの選択肢の中から回答を求めた。

質問紙の最後に「以上の質問項目に回答していて意味がわからない、わかりにくい、回答に困った項目がありましたら、以下の回答欄に項目番号とその理由をお書きください」と教示して回答が難しかった項目について自由記述による回答を求めた。

7-2-3 結果と考察

まず、「全くあてはまらない」に1点、「あてはまらない」に2点、「あてはまる」に3点、「とてもあてはまる」に4点を配した。「わからない・考えたことがない」には得点を配さずに欠損値扱いとし、その反応数をカウントした。その上で、全項目について Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .91$ であり、高い内的整合性が示された。

続いて、修正または除外を検討する必要がある項目を検討した。乳幼児教育学を専攻する学生は、子育ての社会化志向が高いと想定されるため、項目として適当なものは4段階評定の選択肢のうち、3.「あてはまる」と4.「とてもあてはまる」（逆転項目として想定した項目では1.「全くあてはまらない」と2.「あてはまらない」）に反応が偏るはずである。この前提を踏まえ、以下の3つの基準のいずれかに該当した項目は、本調査に向けて修正または削除が必要であると考えた。

(1) 項目への賛否が拮抗している項目

1.「全くあてはまらない」と2.「あてはまらない」を合わせた数と、3.「あてはまる」と4.「とてもあてはまる」を合わせた数を算出し、その割合を比較した。両者の割合が4対6（逆転項目と想定した項目では6対4）以上になった項目については、項目への賛否が拮抗していると判断し、どちらかの方向に回答が偏るはずであるという前提を満たしていない項目であるとみなした。従って、修正または削除を検討する必要がある項目とした。

(2) 内省可能性が低い項目

?.「わからない・考えたことがない」と欠損値を合わせた反応数が全回答者数の1割を超える6以上あった項目は、子育ての社会化志向が高いと想定される乳幼児教育学の学生であっても身近ではない内容の項目であると判断した。すなわち、内省可能性が低い項目であり、そうした項目は本調査において一般の学生に尋ねるのは不適切であると考えた。従って、修正または削除を検討する必要がある項目とした。

(3) 逆転項目として作成したがそのような反応が得られなかった項目

逆転項目として作成したが、3.「あてはまる」、4.「とてもあてはまる」に回答が偏った

反応があった項目は、逆転項目として機能しない項目であると判断した。従って、修正または削除を検討する必要があるとした。

以上の手続きに従って項目を分析した結果、7項目が問題のある項目として該当した。そこで、心理学を専門とする大学教員1名および、教育学を専攻する大学院生1名と協議し、項目内容について検討した。その結果、3項目については項目内容・表現を修正し、4項目については削除した。また、協議を通して新たに1項目を追加した。

なお、回答が難しかった項目について尋ねた自由記述では、1名から回答があり、「貧困に関する問題は身近ではなく、回答が難しかった」といった記述があった。しかし、子どもや子育て世帯の貧困問題は、今日の社会において社会的関心が高まり、また、社会を挙げて解決すべき問題であると考えられるため、本調査においても子どもの貧困問題に関する項目は修正または削除せずに用いることとした。

ただし、子育ての社会化志向の程度が多様であると想定される一般大学生に調査を実施するに当たり、項目内容について明確な態度が表明できなかつたり、理解できなかつたりする者が存在する可能性が考えられた。そこで本調査では、予備調査において用いた4段階評価ではなく、「どちらともいえない」を追加した5段階評価で尋ねることとした。これにより、項目に対して明確な態度を表明できない場合の心理的負担を減らすことができると考えられる。

また、程度表現語は予備調査での「あてはまらない」、「あてはまる」といった個人にどの程度、項目内容があてはまるかを尋ねる表現から、本調査では「そう思わない」、「そう思う」といった、より項目への態度や志向性が明確かつ自然に尋ねることができる表現に変更することとした。これにより、子育ての社会化志向の程度について、よりはっきりと尋ねることができると考えられる。

以上の結果を踏まえ、表7-1に示す60項目を本調査において用いる子育ての社会化志向尺度の項目とした。

表7-1 本調査で用いる子育ての社会化志向尺度全60項目

テーマ	項目
少子化	<p>1 *少子化により子どもの数が減っても、自分の生活には関係ない</p> <p>2 *今の社会では少子化になるのは当たり前なので、特に対策を取る必要はない</p> <p>3 少子化問題は国が一丸となって取り組まなければならない問題だ</p>
保育園・待機児童問題	<p>4 *保育園に入れない待機児童の問題は、子どもを持つ親だけの問題だ</p> <p>5 保育園に入れない待機児童の問題を解決するために、多くの税金が使われても納得できる</p> <p>6 *もし自宅のとなり保育園や幼稚園ができるとしたら、うるさくなるので嫌だ</p> <p>7 *0歳の乳児のうちから保育園に子どもを預けるのはおかしいと思う</p> <p>8 *子どもを保育園に長時間預けるのは子どもの発達に悪影響があると思う</p> <p>9 *子どもが幼いうちは保育園に預けず、親の手で育てるほうがよい</p>
育休	<p>10 就職活動をする時には、就職先の育休制度が充実しているか気にするだろう</p> <p>11 男性はもっと積極的に育休を取得すべきだ</p> <p>12 *就職して同僚が育休を取得したら、自分の仕事量が増えるので迷惑だ</p> <p>13 育休制度がもっと充実すれば、子育てしやすい社会になると思う</p>
働く親に関する問題	<p>14 共働きの親がどのように仕事と育児を両立させているのか興味がある</p> <p>15 就職して、子育てのために残業をしない同僚がいても許せるだろう</p> <p>16 *将来、子どもの病気が原因でよく休む同僚がいたら、自分の仕事量が増えるので迷惑だ</p> <p>17 *共働きの親の子どもはかわいそうだと思う</p> <p>18 *共働きは子どもと接する時間が少なくなるので良くない</p>
子育て環境に関する問題	<p>19 どうすれば子育てしやすい社会や環境になるのか考えることがある</p> <p>20 子どもは家庭だけでなく、社会全体で育てていかなければならないと思う</p> <p>21 ラッシュ時の電車の中にベビーカーが入ってきても気にしない</p> <p>22 *子どもの声がうるさいので、公園や保育園・幼稚園のそばには住みたくない</p> <p>23 電車やバスの中で子どもが泣いていても、「子どもは泣くものだ」と思って気にしない</p> <p>24 身近に子育てをしている人(友人、親戚など)がいたら、できるだけ協力したい</p> <p>25 子どもの声をうるさいと思う人が減れば、子どもはのびのび遊べると思う</p> <p>26 *公園で遊んでいる子どもの大声は騒音だと思う</p> <p>27 子どもは公園では大きな声を出して遊んでも良いと思う</p>
子育てする親への態度	<p>28 電車やバスの中で親が子どもの相手をせずにスマートフォンを使っているのは問題だ</p> <p>29 店などで子どもが騒いでいる時には、周りの大人が注意しても良いと思う</p> <p>30 *電車や店の中などで子どもが泣いているのは迷惑なので、親は早く泣き止ませるべきだ</p> <p>31 *子どもの問題行動(すぐカットとなる、じっとしてられない等)は親のしつけが最大の原因だ</p> <p>32 *親が子どものしつけをしっかりしないから、子どもがわがままになるのだと思う</p> <p>33 もっと子育てをしている親に優しく接する人が増えてほしいと思う</p> <p>34 電車やバスの中で泣き止まない子どもを迷惑そうにしている人を見ると、親は大変だと思う</p>
子育てで支援および子育てに関する財政	<p>35 *子どもがいる親に国から児童手当としてお金が支払われるのは納得できない</p> <p>36 子育てで支援を充実させるために消費税などの税金が高くなっても納得できる</p> <p>37 *専業主婦(主夫)の親は子育てに専念できるのだから、国や自治体の子育て支援をする必要はない</p>
児童虐待問題	<p>38 *児童虐待問題は自分にとって身近な問題ではない</p> <p>39 児童虐待問題に行政や児童相談所はもっと積極的に介入すべきだ</p> <p>40 近所に虐待されているかもしれない子どもがいたら、警察や児童相談所に通報すると思う</p>
教育問題	<p>41 *子どもの教育問題は子どもを持つ親だけが気にしていればよい</p> <p>42 国は子どもの教育にかける支出をもっと増やしたほうがよい</p> <p>43 子どもの教育を充実させるために税金が高くなったとしても受け入れる</p>
子どもや子育ての福祉・妊活	<p>44 子どもの福祉や人権の問題に関心がある</p> <p>45 児童養護施設の子どものように暮らしているのか興味がある</p> <p>46 国や自治体は児童養護施設で暮らしている子どもたちへの支援をしっかり行うべきだ</p> <p>47 *長期間、不妊治療を受けてまで子どもが欲しい人の気持ちはあまり理解できない</p> <p>48 *ひとり親(シングルマザー・ファーザー)の家庭に特別な子育て支援をするのは不公平だと思う</p> <p>49 *ひとり親(シングルマザー・ファーザー)の子どもはかわいそうだと思う</p> <p>50 *電車やバスに妊娠している人が乗ってきても、必ずしも席をゆずる必要はないと思う</p>
子どもの貧困	<p>51 *日本の子どもの貧困問題はさほど深刻な問題ではないと思う</p> <p>52 日本の子どもの貧困問題は社会をあげて解決する必要がある問題だ</p> <p>53 収入が低い家庭の子どもには特別な子育て支援をすることが必要だ</p>
地域と子ども・子育て	<p>54 *近所に住んでいる子どもの生活は自分の生活とは関係ないものだ</p> <p>55 *子どもを育てる責任は親にあり、子育てに地域や社会の人は干渉すべきではない</p> <p>56 小さいうちから子どもと近所の人が顔見知りになっておくことは大切だ</p> <p>57 子ども会などの子どもが関わる地域の活動に参加したい</p>
世界の子ども問題	<p>58 戦争や紛争が起きている国の子どもが、どのような暮らしをしているか知りたい</p> <p>59 戦争や紛争が起きている国の子どもも、先進国の子どもと同様に育ち、学ぶ必要がある</p> <p>60 *貧しい国で暮らす子どもは生まれた場所と運が悪かったのだと思う</p>

注) *は逆転項目として想定した項目

7-3 本調査：子育ての社会化志向尺度の作成および子どもへの関心との関連

7-3-1 目的

子育ての社会化志向尺度を作成し、その構造および尺度の併存的妥当性を確認することを第1の目的とした。そして、子どもへの関心が子育ての社会化志向に及ぼす影響について検討することを第2の目的とした。

7-3-2 方法

(1) 調査対象・時期

東京都、埼玉県、新潟県にある国立・私立大学に在学し、心理学、社会科学、福祉学、教育学、医療関連学、理工学、言語学、健康・スポーツ関連学を専攻する大学生 693 名を対象に質問紙調査を実施した。このうち、年齢が 26 歳以上の者、回答内容に不備がある者の 32 名を除いた 661 名（男性 277 名、女性 377 名、無回答 7 名；平均年齢 19.68 歳、 $SD = 1.18$ ）を分析対象とした（有効回答率 95.38%）。実施時期は、2015 年 11 月～2016 年 1 月であった。

(2) 質問紙

1) 子育ての社会化志向尺度

予備調査において作成した子育ての社会化志向尺度 60 項目について 5 段階評定（1.「そう思わない」、2.「あまりそう思わない」、3.「どちらともいえない」、4.「ややそう思う」、5.「そう思う」）で尋ねた。

2) 子どもへの関心尺度

子どもへの関心尺度 30 項目について 6 段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

3) 社会的事象への無関心尺度

久世ら（1988）の規範意識と私生活主義尺度の下位尺度である身近な事象への関心・社会的事象への無関心尺度 11 項目を 5 段階評定（1.「非常に反対」、2.「反対」、3.「賛成とも反対ともいえない」、4.「賛成」、5.「非常に賛成」）で尋ねた。質問項目には、「働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しみたい」、「自分ひとりが努力しても世の中はよくなるらない」、「社会問題は自分の生活とは全く関係ないことだと思う」などがある。

4) 社会考慮尺度

吉田ら（1999）の社会考慮尺度 13 項目を 5 段階評定（1.「まったくあてはまらない」、2.「ややあてはまらない」、3.「どちらともいえない」、4.「ややあてはまる」、5.「よくあてはまる」で尋ねた。質問項目には、「自分の行動がいかにか社会に影響を与えているのか考えることがある」、「自分が暮らす社会全体のことについて考えることがある」、「自分の暮らす社会で今なにが問題になっているのか気になる」などがある。

5) 「母性愛」信奉傾向尺度

江上（2007）の「母性愛」信奉傾向尺度 13 項目を 5 段階評定（1.「ぜんぜんそう思わない」、2.「あまりそう思わない」、3.「どちらともいえない」、4.「まあそう思う」、5.「まったくそのとおりだと思う」）で尋ねた。質問項目には、「子どものためなら、どんなことでもするつもりでいるのが母親である」、「子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいて母親が行うべきことである」、「子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである」などがある。

6) 養護性尺度

糊澤ら（2009）の養護性尺度 25 項目について 6 段階評定（1.「全くあてはまらない」、2.「あてはまらない」、3.「あまりあてはまらない」、4.「ややあてはまる」、5.「あてはまる」、6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

7) フェイスシート項目

性別、年齢、専攻、学年、身近に乳幼児が存在し関わる機会があるか否か、身近に小さな子どもの子育てをしている人が存在し話を聞く機会があるか否か、将来自分の子どもが欲しいか否か（「必ず欲しい」、「条件を整えば欲しい」、「欲しいとは思わない」の中から 1 つ選択）、出生順位などを尋ねた。

7-3-3 結果と考察

(1) 子育ての社会化志向尺度の因子構造

子育ての社会化志向尺度 60 項目について、各質問項目の得点が高いほど、子育ての社会化志向の程度が高くなるよう得点化した上で、因子分析（最尤法・Promax 回転）を行った。因子数は、スクリープロット、固有値の変化および、解釈可能性から 4 因子として分析した。各項目の因子負荷量が 1 つの因子に $|\geq 0.30|$ 以上、かつ他の因子への負荷量が $|\leq 0.30|$ 未満であること、共通性が ≥ 0.20 以上であることを基準に繰り返し分析を行った結果、3 因子 30

項目が抽出された(表 7-2)。なお、初回の因子分析の結果、最も因子負荷量が高い因子に対して負の負荷量を示した項目は逆転項目であると判断し、得点化した上で分析した。

表7-2 子育ての社会化志向尺度の因子分析結果

	第1因子 問題解決 志向	第2因子 忌避感	第3因子 家庭での 子育て志向	第4因子 税負担の 受容	共通性	平均	標準偏差
戦争や紛争が起きている国の子どもも、先進国の子どもと同様に育ち、学ぶ必要がある	.64	.05	.01	-.01	.37	4.11	0.91
国や自治体は児童養護施設で暮らしている子どもたちへの支援をしっかりと行うべきだ	.64	-.02	-.03	.01	.42	4.11	0.71
児童養護施設の子どものように暮らしているのに興味がある	.61	.08	.11	-.01	.34	3.81	0.99
日本の子どもの貧困問題は社会をあげて解決する必要がある問題だ	.57	-.02	-.07	.11	.40	3.91	0.90
日本の福祉や人権の問題に関心がある	.56	.07	.01	.13	.33	3.61	1.00
戦争や紛争が起きている国の子どもが、どのような暮らしをしているのを知りたい	.53	.09	.03	.11	.28	3.71	1.04
育休制度がもっと充実すれば、子育てしやすい社会になると思う	.53	-.03	.02	-.13	.27	4.21	0.84
児童虐待問題に行政や児童相談所はもっと積極的に介入すべきだ	.53	.02	-.03	-.04	.26	4.01	0.84
収入が低い家庭の子どもには特別な子育て支援をすることが必要だ	.51	.08	.03	.01	.23	3.81	0.88
就職活動をする時には、就職先の育休制度が充実しているか気にするだろう	.49	-.02	.08	-.05	.27	3.61	1.07
今の社会では少子化になるのは当たり前で、特に対策を取る必要はない*	.47	-.07	-.10	-.09	.26	4.11	0.89
小さいうちから子どもと近所の人が顔見知りになっておくことは大切だ	.47	-.10	.12	-.07	.27	4.21	0.76
子どもは家庭だけでなく、社会全体で育てていかなければならないと思う	.46	-.06	-.08	.11	.29	4.11	0.80
ひとり親(シングルマザー・ファザー)の家庭に特別な子育て支援をするのは不公平だと思う*	.45	-.09	-.10	-.07	.26	4.01	0.87
少子化問題は国が一丸となって取り組まなければならない問題だ	.45	.14	-.04	.17	.21	4.21	0.90
どうすれば子育てしやすい社会や環境になるのか考えることがある	.42	.03	.06	.12	.21	3.31	1.12
子どもが教育問題は子どもを持つ親だけが気にしていればよい*	.40	-.24	-.12	-.05	.34	4.11	0.92
子どもがいる親に国から児童手当としてお金が支払われるのは納得できない*	.38	-.23	-.06	-.05	.29	4.11	0.92
もともと子育てをしている親に優しく接する人が増えてほしいと思う	.36	-.27	.15	-.02	.32	4.21	0.80
長期間、不妊治療を受けてまで子どもが欲しい人の気持ちにはあまり理解できない*	.32	-.21	.01	-.09	.21	4.01	1.07
保育園に入れない待機児童の問題は、子どもを持つ親だけの問題だ*	.31	-.19	-.15	-.07	.22	3.81	0.98
もし自宅のとなり保育園や幼稚園ができたら、うらやまをさくなくなるので嫌だ	.23	.88	.05	-.11	.65	2.41	1.15
子どもの声がうるさいので、公園や保育園・幼稚園のそばには住みたくない	.21	.88	.03	-.08	.65	2.31	1.10
公園で遊んでいる子どもの大声は騒音だと思う	.04	.71	-.05	-.01	.46	2.01	0.97
将来就職して、子どもの病気が原因でよく休む回数がいたら、自分の仕事量が増えるので迷惑だ	-.11	.52	.02	-.12	.33	2.31	0.94
電車や店の中などで子どもが泣いているのは迷惑なので、親は早く泣き止ませるべきだ	-.07	.44	-.05	-.02	.24	2.91	1.08
将来就職して、同僚が育休を取得したら、自分の仕事量が増えるので迷惑だ	-.26	.41	.01	.13	.33	2.11	0.95
電車やバスの中で子どもが泣いていても、「子どもは泣くものだ」と思っただけでいい*	-.10	.36	-.05	-.15	.24	2.01	1.07
子どもの声をうるさいと思う人が減れば、子どもはのびのび遊べると思う*	-.15	.36	-.21	.02	.22	2.41	1.09
近所に住んでいる子どもの生活は自分の生活とは関係ないものだ	-.13	.35	.04	-.02	.20	2.61	1.05
共働きは子どもと接する時間が少なくなるので良くない	-.03	-.03	.66	-.04	.43	3.01	1.03
子どもを保育園に長時間預けるのは子どもの発達に悪影響があると思う	.03	.01	.64	.05	.41	3.01	1.11
0歳の乳児のうちから保育園に子どもを預けるのはおかしいと思う	-.04	-.03	.60	-.10	.37	3.01	1.26
子どもが幼いうちは保育園に預けず、親の手で育てるほうがよい	.05	-.05	.57	-.06	.32	3.21	1.09
共働きの親の子どもはかわいそうだと思う	-.09	.06	.55	.11	.34	2.51	1.11
子育て支援を充実させるために消費税などの税金が高くなっても納得できる	.02	.02	-.03	.82	.67	3.21	1.01
子どもの教育を充実させるために税金が高くなっても受け入れる	.07	-.09	-.01	.75	.65	3.41	0.97
保育園に入れない待機児童の問題を解決するために、多くの税金が使われても納得できる	.28	-.19	.01	.31	.34	3.61	0.93
回転後の負荷量平方和	7.04	5.67	2.14	2.42			
Cronbach's α 係数	.88	.81	.74	.73			
因子間相関							
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子			
第1因子 問題解決志向	1.00						
第2因子 忌避感	-.56	1.00					
第3因子 家庭での子育て志向	-.02	.18	1.00				
第4因子 税負担の受容	.29	-.23	.01	1.00			

(注) *逆転項目

第1因子は、「国や自治体は児童養護施設で暮らしている子どもたちへの支援をしっかりと行うべきだ」、「日本の子どもの貧困問題は社会をあげて解決する必要がある問題だ」、「子

どもの福祉や人権の問題に関心がある」などの 21 項目で構成されていた。子どもや子育てに関する福祉，人権，厚生，少子化問題，教育問題，貧困問題など，子どもや子育てに関する社会的問題への関心や，それらの問題を積極的に解決していこうとする姿勢の程度を表していると考えられることから，「子ども・子育て問題解決志向」（以下，「問題解決志向」と命名した。

第 2 因子は，「もし自宅のとなりに保育園や幼稚園ができるとしたら，うるさくなるので嫌だ」，「電車や店の中などで子どもが泣いているのは迷惑なので，親は早く泣き止ませるべきだ」，「将来就職して，同僚が育休を取得したら，自分の仕事量が増えるので迷惑だ」などの 9 項目で構成されていた。公共の場での子どもの声や泣き声をうるさいと思い拒否する程度や，同僚が子育てを理由に休み，自身の仕事量が増えることを迷惑と思う程度，地域の中の子どもを自身の生活とは関係のない存在として考える程度といった子どもや子育てへの迷惑感や拒否感，嫌悪感を表していると考えられることから，「子ども・子育てへの忌避感」（以下，「忌避感」と命名した。

第 3 因子は，「共働きは子どもと接する時間が少なくなるので良くない」，「子どもを保育園に長時間預けるのは子どもの発達に悪影響があると思う」，「子どもが幼いうちは保育園に預けず，親の手で育てるほうがよい」などの 5 項目で構成されていた。共働きにより親と子どもがふれあう時間が減少することへの懸念や，子どもを長時間保育園に預けることへの危惧といった子どもを家庭で育てることを重視し，尊重する程度を表していると考えられることから，「家庭での子育て志向」と命名した。

第 4 因子は，「子育て支援を充実させるために消費税などの税金が高くなっても納得できる」，「子どもの教育を充実させるために税金が高くなったとしても受け入れる」，「保育園に入れない待機児童の問題を解決するために，多くの税金が使われても納得できる」の 3 項目から構成されていた。子育て支援，待機児童問題，子どもの教育といった子どもや子育てに関する税負担を受け入れる程度を表していると考えられることから，「税負担の受容」と命名した。

因子間相関については，「問題解決志向」と「忌避感」の間で中程度の負の相関，「問題解決志向」と「税負担の受容」の間で弱い正の相関が見られた。このことから，子どもや子育てに関する社会的問題への関心や，問題解決への積極的な姿勢が強いほど，社会に存在する子どもや子育てへの忌避感が少なく，子どもや子育てに関する社会的問題を解決するための税負担を受容する程度が高いことが示された。また，「忌避感」と「家庭での子育て

て志向」の間に弱い正の相関、「忌避感」と「税負担の受容」の間に弱い負の相関が見られた。このことから、社会に存在する子どもや子育てに対する忌避感が強いほど、家庭での子育てを重視する傾向があり、社会全体で子育てを支援するための税負担に対して拒否的な傾向が見られた。

各下位尺度について、信頼性係数（Cronbach の α 係数）を算出したところ、 $\alpha=.73\sim.88$ であり、概ね高い内的整合性が示された。従って、当該下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

(2) 子育ての社会化志向尺度の平均値差の検定

1) 男女別の平均値

子育ての社会化志向尺度の平均得点を算出し、男女別にも算出した（表 7-3）。男女別の得点について平均値差の検定を行った結果、「問題解決志向」において女性の方が得点は高かった。一方、「忌避感」、「家庭での子育て志向」においては男性の方が得点は高かった。

表7-3 男女別および学年別に見た子育ての社会化志向尺度得点の平均値と差の検定

		全体	男女別		<i>t</i> (<i>df</i>)	<i>d</i>	学年別				<i>F</i> (<i>df</i>)	η^2	多重比較 (Tukey法)
			男性 <i>n</i> = 277	女性 <i>n</i> = 377			1年生 <i>n</i> = 301	2年生 <i>n</i> = 168	3年生 <i>n</i> = 118	4年生 <i>n</i> = 57			
問題解決志向	平均	82.77	78.83	85.59	-8.46 ***	0.68	84.19	81.79	80.84	82.91	3.59 *	.02	1年生>3年生*
	標準偏差	10.46	10.31	9.65	(632)		10.53	10.36	10.15	10.48	(3, 621)		
忌避感	平均	20.90	22.05	20.04	4.30 ***	0.34	20.43	21.92	20.89	19.86	2.82 *	.01	2年生>1年生*
	標準偏差	5.93	5.94	5.81	(644)		5.80	6.37	5.92	4.95	(3, 632)		
家庭での子育て志向	平均	14.63	14.99	14.32	2.17 *	0.17	14.50	14.94	14.65	13.86	1.15	.01	
	標準偏差	3.91	3.86	3.94	(645)		3.91	4.07	3.95	3.48	(3, 633)		
税負担の受容	平均	10.18	10.10	10.25	-0.78	0.06	10.12	10.31	9.91	10.60	1.35	.01	
	標準偏差	2.35	2.46	2.28	(651)		2.27	2.51	2.42	2.26	(3, 639)		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

女性の方が子育ての社会化志向が高いという結果は、女性の方が養護性は高いという先行研究の結果（安積，2008；榎澤ら，2009）と同じ傾向を示すものである。男性よりも女性の方が「税負担の受容」を除いて子育ての社会化志向が高かった理由としては、以下の2つが考えられる。

第1の理由としては、女性の方が結婚し、子どもをもつ年齢が女性の方が低いという男女間での結婚や第1子誕生の年齢差の影響が考えられる。平均初婚年齢は2015年の調査で男性31.1歳、女性29.4歳（厚生労働省，2016a）、第1子誕生時の平均年齢は2014年の調査で、男性32.6歳、女性30.6歳（厚生労働省，2015）であり、女性の方が男性より早く結婚し、親となる年齢も低い。そのため、女子大学生の周囲には、同級生や先輩、後輩などで親となった同性の友人や知人が存在する可能性も男子大学生より高くなると推測され

る。そうした友人や知人との交流を通して、子育てについて話を聞く機会もあると考えられる。つまり、女性の方が子どもや子育てがより身近な問題として捉えられやすく、将来の子育てへの準備が男性よりも早く発達するといえる。

加えて、大学生という年齢段階は大学卒業後の自身のキャリア形成を本格的に考え始める時期である。また、周囲には子どもを持つ親となった友人や知人も現れ始める時期である。特に、男子大学生よりも早く結婚や子どもの誕生・育児を経験し、働きながら子育てを主体的に担う可能性がある女子大学生は、自身が産む性ということも相まって、男子大学生よりも出産や育児を自身のキャリア形成上、身近なライフイベントとして認識している可能性がある。そのため、女子大学生の方が子どもや子どもに関する社会的問題を身近な問題として捉えており、そうした問題への意識や子育てへの準備がより早期に高まると推測される。他方、男子大学生の多くは大学卒業後、まずは就職することに主眼が置かれ、後述するように男性の子育てへの当事者意識の低さから、自身が近い将来、子育てに関与することまでは考えがなかなか及ばないのではないかと推測される。

第2の理由としては、男性における子育てへの当事者意識の低さの影響が考えられる。全国大学生生活協同組合連合会（2015）は、大学生を対象に男性は外で働き、女性は家事・育児をするという性別役割分業意識への賛否を尋ねた結果、男性の方が賛成とする回答が多かったとしている。実際に、家庭での育児の約8割を女性が担っており（国立社会保障・人口問題研究所、2015）、大学生も将来、女性は育児を主として担い、男性はそれを補助したいと考えている（後藤・奥田・平岡・呉・大森・前田、2010）。また、数見・土井・伊藤（2009）は、特別なジェンダーに関する講義を受けていない大学生に将来家庭を持った際の共働きに対する意識を尋ねた結果、「まだよくわからない」とする回答が女性は約10%であったのに対し、男性は約20%と2倍の開きがあったとしている。従って、男子大学生は女子大学生ほど子育てを身近な問題として捉えておらず、将来、自身が子育てに関わることへの現実感や当事者意識をまだ十分に有していないといえる。そのため、「問題解決志向」、「忌避感」、「家庭での子育て志向」に男女差が生じたといえる。つまり、女性ほど子育てが身近な問題ではないため、「問題解決志向」が低く、子どもや子育てを迷惑なものとして避ける「忌避感」や、子育ては社会ではなく、親が担うべきこととするような「家庭での子育て志向」が高かったのではないかと考えられる。

なお、「税負担の受容」には男女差がなかったことから、子どもや子育てに関する社会的問題に税金を投入することについては男女に関係なく受容される傾向が見られた。これ

は、男女とも子育てに公的財源による援助が必要であることが認識されていることの証左であろう。

これらの結果を先行研究と比較する。藤後（2007）が中学生を対象に社会的子育て観を測定し、その男女差を検討した結果、男子よりも女子の方が地域の子どもへの関心が高い傾向があることを報告している。本研究においても男性より女性の方が子育ての社会化志向が高い傾向にあったことから、先行研究と同様の結果を示したといえる。

2) 学年別の平均値

学年別に子育ての社会化志向尺度の平均得点を算出し、1 要因の分散分析を行った（表 7-3）。その結果、「問題解決志向」と「忌避感」で有意な主効果が見られたため、Tukey 法による多重比較を行ったところ、「問題解決志向」は3年生より1年生の方が高く、「忌避感」は1年生より2年生の方が高かった（表 7-3）。

この結果は、学年が低いほど子どもや子育てについて問題意識を持ち、寛容であることを示している。ただし、効果量が非常に小さいことから、大きな差があるとは言い難い。また、学年が上がるほど子育ての社会化志向が高まるという傾向は見られなかった。

3) 専攻別の平均値

調査参加者の専攻を教育、福祉、医療、文系（心理学、社会科学を含む）、理系、スポーツの6つに分類した。そして、専攻別に子育ての社会化志向尺度の平均得点を算出し、1 要因の分散分析を行った（表 7-4）。その結果、全ての下位尺度で有意な主効果が見られたため、Tukey 法による多重比較を行ったところ、「問題解決志向」は教育、福祉、医療が文系、理系よりも得点が高かった。「忌避感」は文系が教育、医療よりも得点が高かった。「家庭での子育て志向」は福祉、文系、スポーツが医療よりも得点が高かった。「税負担の受容」は教育が福祉、文系、スポーツよりも得点が高く、医療が文系よりも得点が高かった（表 7-4）。

表7-4 専攻別に見た子育ての社会化志向尺度得点の平均値と差の検定

		教育	福祉	医療	文系	理系	スポーツ	F	η^2	多重比較 (Tukey法)
		n = 141	n = 87	n = 57	n = 283	n = 49	n = 34	(df)		
問題解決志向	平均	86.83	84.98	87.96	80.09	76.17	81.88	16.79 ***	.12	教・福・医>文・理*
	標準偏差	10.40	9.94	9.45	9.82	8.85	9.79	(5, 625)		
忌避感	平均	18.92	20.58	19.00	22.38	21.06	20.44	8.26 ***	.06	文>教・医*
	標準偏差	4.96	6.03	5.68	6.21	5.79	4.65	(5, 637)		
家庭での子育て志向	平均	14.45	14.78	12.79	14.90	14.54	15.59	3.28 **	.03	福・文・ス>医*
	標準偏差	3.69	4.06	3.59	3.96	4.40	3.32	(5, 638)		
税負担の受容	平均	11.26	9.94	10.68	9.62	10.39	9.71	10.81 ***	.08	教>福・文・ス*, 医>文*
	標準偏差	2.15	2.24	2.21	2.39	2.15	2.18	(5, 644)		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

従って、全体的な傾向としては教育、福祉、医療といった対人援助職を目指す専攻の学生では、文系や理系といった大学卒業後の進路が対人援助職に限られない専攻の学生と比べて子育ての社会化志向が高かった。人への援助やサービスを対象とする学問を専攻しようという動機を持って大学に進学してきた学生は子どもや子育ての問題についても高い意識を有していると推測される。同時に、そうした学問を学ぶ中で、子どもや子育ての問題への意識を高めていると考えられる。そのため、教育、福祉、医療を専攻する学生は子育ての社会化志向が高いのであろう。

4) 身近に乳幼児または子育てをしている人が存在するか否かによる差

身近に乳幼児が存在し、その子と関わる機会があるか否か、および、身近に小さな子どもの子育てをしている人が存在し、話を聞く機会があるか否かによる子育ての社会化志向尺度の平均得点を算出し、平均値差の検定を行った（表7-5）。

表7-5 身近に乳幼児や小さな子どもの子育てをしている人の存在するか否かによる子育ての社会化志向尺度得点の平均値と差の検定

		身近に乳幼児				身近に子育てをしている人			
		いる <i>n</i> = 224	いない <i>n</i> = 437	<i>t</i> (<i>df</i>)	<i>d</i>	いる <i>n</i> = 218	いない <i>n</i> = 443	<i>t</i> (<i>df</i>)	<i>d</i>
問題解決志向	平均	85.22	81.52	4.30 ***	0.36	84.94	81.70	3.73 ***	0.31
	標準偏差	10.19	10.38	(639)		10.86	10.10	(639)	
忌避感	平均	19.68	21.51	-3.76 ***	0.26	19.74	21.46	-3.51 ***	0.29
	標準偏差	5.52	6.03	(651)		5.81	5.90	(651)	
家庭での子育て志向	平均	14.50	14.70	-0.61	0.05	14.50	14.70	-0.60	0.05
	標準偏差	4.04	3.85	(652)		4.16	3.79	(399.63)	
税負担の受容	平均	10.36	10.09	1.40	0.12	10.56	9.99	2.90 **	0.24
	標準偏差	2.30	2.38	(658)		2.41	2.31	(658)	

p* < .01, *p* < .001

まず、身近に乳幼児がいるか否かにより、子育ての社会化志向尺度の平均得点に差が見られるか検討した結果、「問題解決志向」において、身近に乳幼児がいる者の方が得点は高く、「忌避感」が低かった。身近に乳幼児が存在し、ふれあうことがある場合、子どもの育ちや、それを支える仕組みや制度への意識や関心が生じ、社会全体で子育てを支えるという視点を得る機会も増えると推測される。そのため、身近に乳幼児がいない者よりも子どもや子育ての社会的問題を解決しようとする志向性である「問題解決意識」が高まり、「忌避感」が低くなるのであろう。

次に、身近に子育てをしている人がいて、話をする機会があるか否かにより、子育ての社会化志向尺度の平均得点に差が見られるか検討した結果、「問題解決志向」と「税負担の

受容」において、身近に子育てをしている人がいる者の方が得点は高く、「忌避感」が低かった。「問題解決志向」と「忌避感」について、このような差が見られた理由は、上述と同様に、身近に子育てをしている人が存在し、話をする機会があれば、子どもの育ちや社会全体で子育てを支える仕組みや制度への意識や関心が高まるためであるといえる。加えて、身近に子育てをしている人が存在する者の方が「税負担の受容」が高いことが示された。子育てをしている人の話を聞く機会があれば、子どもや子育てに必要な経済的負担についての話を聞く機会も増えると推測される。そうした中で、社会全体で子育てにかかる経済的負担を担い、支えてようとする態度が高まるのであろう。

先行研究においても、乳幼児との接触経験が多い大学生は養護性が高いこと（安積，2008）、地域の育児サークル活動に参加し、育児中の母親と会話をした女子大学生は子どもや子育てへのイメージや態度が肯定的で豊かなものになること（澤田・上手・奥野，2013）が指摘されている。子育ての社会化志向においても、子どもや子育てをしている人との接触がそれを高めるといえる。

5) 将来自分の子どもが欲しいか否かによる差

将来自分の子どもが欲しいか否か（以下、子どもの希望）について、「必ず欲しい」、「条件を整えば欲しい」（以下、「条件次第」）、「欲しいとは思わない」（以下、「欲しくない」）の3つの選択肢の中から回答を求めた。この回答別に子育ての社会化志向尺度の平均得点を算出し、条件により差が見られるか、1要因3水準の分散分析を行った（表7-6）。

その結果、「問題解決志向」、「忌避感」、「税負担の受容」で有意な主効果が見られたため、Tukey法による多重比較を行ったところ、「問題解決志向」では、「欲しくない」よりも「必ず欲しい」と「条件次第」の方が得点は高かった。「忌避感」では、「必ず欲しい」よりも「条件次第」と「欲しくない」の方が得点は高く、「条件次第」よりも「欲しくない」の方が得点は高かった。「税負担の受容」では、「欲しくない」よりも「必ず欲しい」の方が得点は高かった。従って、全体的な傾向としては、将来自分の子どもが欲しい者の方が、欲しくない者よりも子育ての社会化志向が高かった。将来的に子どもが欲しい場合、社会に存在する子どもや子育てに関する問題や話題に対する関心や意識が高まり、そうした話題に敏感になると考えられる。そのため、子育てへの構えが高まり、子育ての社会化志向が高まると考えられる。

表7-6 子どもの希望別に見た子育ての社会化尺度得点の平均値と差の検定

		①必ず欲しい n = 318	②条件次第 n = 288	③欲しくない n = 53	F (df)	η^2	多重比較 (Tukey法)
問題解決志向	平均	85.01	81.21	77.55	17.67 ***	.05	①・②>③*
	標準偏差	9.74	10.68	10.19	(2, 637)		
忌避感	平均	19.95	21.36	24.22	13.23 ***	.04	②・③>①*, ③>②*
	標準偏差	5.57	5.94	6.67	(2, 648)		
家庭での子育て志向	平均	14.57	14.83	13.79	1.63	.01	
	標準偏差	4.06	3.65	4.37	(2, 649)		
税負担の受容	平均	10.32	10.18	9.40	3.54 *	.01	①>③*
	標準偏差	2.32	2.38	2.36	(2, 655)		

* $p < .05$, *** $p < .001$

(3) 各尺度との相関

1) 全体の相関

まず、社会的事象への無関心尺度、社会考慮尺度、「母性愛」信奉傾向尺度、養護性尺度、子どもへの関心尺度の各質問項目について、得点が高いほど、当該下位尺度が表す事柄の程度が高くなるように得点化（逆転項目も同様に処理）した。次に、各下位尺度の信頼性係数（Cronbachの α 係数）を算出した（表7-7）。その結果、 $\alpha = .75$ 以上であり、概ね高い内的整合性が示された。従って、各下位尺度に属する項目の合計得点をもって、各下位尺度得点とした。

次に、子育ての社会化志向尺度の併存的妥当性の確認および、子どもへの関心と子育ての社会化志向との相関について検討するため、各尺度間の相関係数を算出し、同時に各尺度の平均得点についても算出した（表7-7）。

はじめに、尺度の併存的妥当性について検討する。まず、社会的事象への無関心との間では、「問題解決志向」および「税負担の受容」で負の相関、「忌避感」で正の相関が見られた。従って、社会の様々な問題に対して無関心で、私生活を重視する傾向が強いほど、子どもや子育てに関する社会的問題への関心や志向性が乏しく、そうした問題を解決するための税負担に拒否的で、社会に存在する子どもや社会全体での子育てに忌避的であった。

表7-7 各尺度の信頼性係数，平均得点および子育ての社会化志向尺度との相関係数

			問題解決 志向	忌避感	家庭での 子育て志向	税負担の 受容
社会的事象への無関心 ($\alpha = .78$)	平均	33.24	-.39 ***	.34 ***	.07	-.21 ***
	標準偏差	6.21				
社会考慮 ($\alpha = .91$)	平均	43.12	.37 ***	-.18 ***	.01	.21 ***
	標準偏差	9.59				
「母性愛」信奉傾向 ($\alpha = .89$)	平均	40.13	.17 ***	-.02	.24 ***	.04
	標準偏差	9.02				
養護性						
共感性 ($\alpha = .91$)	平均	38.80	.55 ***	-.51 ***	.03	.31 ***
	標準偏差	9.38				
技能 ($\alpha = .92$)	平均	22.25	.24 ***	-.32 ***	.06	.18 ***
	標準偏差	7.50				
準備性 ($\alpha = .83$)	平均	16.10	.37 ***	-.32 ***	.09 *	.17 ***
	標準偏差	4.20				
非受容性 ($\alpha = .75$)	平均	13.90	-.34 ***	.48 ***	-.06	-.21 ***
	標準偏差	4.45				
子どもへの関心						
好意的注目 ($\alpha = .97$)	平均	59.56	.52 ***	-.51 ***	.04	.28 ***
	標準偏差	16.81				
同情 ($\alpha = .89$)	平均	30.26	.53 ***	-.41 ***	.03	.24 ***
	標準偏差	6.51				
好奇心 ($\alpha = .84$)	平均	21.99	.48 ***	-.37 ***	.01	.30 ***
	標準偏差	6.26				
寛容性 ($\alpha = .89$)	平均	13.43	.39 ***	-.67 ***	.03	.34 ***
	標準偏差	3.51				

* $p < .05$, *** $p < .001$

次に，社会考慮との間では，「問題解決志向」および「税負担の受容」で正の相関，「忌避感」で負の相関が見られた。従って，社会を意識し，考慮する程度が高いほど，子どもや子育てに関する社会的問題への関心や志向性が高く，税負担を受容する態度が見られ，社会に存在する子どもや子育てへの忌避感が低かった。

続いて，「母性愛」信奉傾向との間では，「問題解決志向」および「家庭での子育て志向」で正の相関が見られた。従って，母性や母性愛を信じる傾向が強いほど，子どもや子育てに関する社会的問題への関心や志向性が高く，社会全体よりも家庭での子育てを重視する傾向が見られた。「母性愛」信奉傾向は，質問項目の内容から考えて，母親による母子密着型の子育てスタイルを志向する程度であると考えられる。そのため，「家庭での子育て志向」との間に正の相関が見られたといえる。これは当初の予想通りの相関である。ただし，「問題解決志向」との間にも弱いながらも正の相関が見られたことは当初の予想と反する。「問題解決志向」は子どもや子育てに関する社会的問題への関心や志向性の程度を表すもので

あり、それが高いということは一定程度、親になることへの準備性が形成されていることを表していると考えられる。そして、母親による母性愛に満ちた子育てというのは、以前よりは弱まったとはいえ、望ましい子育てモデルの1つであると解釈できる。従って、「問題解決志向」も「母性愛」信奉傾向も、一種の子育てへの準備性の高さを表していると思われる。そのため、両者間で正の相関が見られたと考えられる。実際、後述するように、養護性の「準備性」と「家庭での子育て志向」との間に弱いながらも正の相関が見られ、「家庭での子育て志向」の高さが子育てへの準備性の一種である可能性が示された。

そして、養護性では、「共感性」、「技能」と「問題解決志向」、「税負担の受容」の間に正の相関、「忌避感」との間に負の相関が見られた。「準備性」との間では、以上の相関に加え、「家庭での子育て志向」と非常に弱いながらも正の相関が見られた。一方、「非受容性」では、「問題解決志向」および「税負担の受容」との間に負の相関、「忌避感」との間に正の相関が見られた。従って、当初の予想通り、養護性が高いほど、子育ての社会化志向が高かった。

以上の相関分析の結果は、概ね当初の予想と一致していた。すなわち、社会への関心や社会を考慮する程度、子どもへの養護的態度が高いほど、子育ての社会化志向が高く、反対に、社会的事象に無関心であるほど子育ての社会化志向は低かった。また、母性愛を信奉する傾向が強いほど、社会全体での子育てよりも家庭での子育てを志向する程度が強かった。各尺度と子育ての社会化志向尺度の間に関連が見られたことから、尺度の併存的妥当性が示されたといえる。

次に、子どもへの関心と子育ての社会化志向との相関について見てみると、子どもへの関心尺度の全下位尺度と「問題解決志向」および「税負担の受容」との間に正の相関、「忌避感」との間に負の相関が見られた。従って、子どもへの関心が高いほど子育ての社会化志向が高かった。ただし、「家庭での子育て志向」との間には有意な相関は見られなかった。

2) 男女別に見た子どもへの関心尺度と子育ての社会化志向尺度の相関係数

ここからは、子どもへの関心と子育ての社会化志向の関連について更なる検討を加えるため、回答者の属性別に両尺度間の相関を見ていく。まず、男女間で子育ての社会化志向尺度の得点に差が見られたことを踏まえ、男女別に子どもへの関心尺度と子育ての社会化志向尺度との間の相関係数を算出した（表7-8）。

その結果、全体として男性では両尺度間で概ね弱い相関が見られたが、女性では概ね中程度の相関が見られ、女性の方が両尺度間の関連が強い傾向にあった。また、男性のみ、

「好意的注目」および「寛容性」と「家庭での子育て志向」との間に弱いながらも正の相関が見られた。これは、上述のように、「家庭での子育て志向」が子育てへの準備性を反映している可能性があるため、このような相関が見られたと考えられる。女性ではこのような相関は見られなかったが、男性においては、子育てへの準備性の高さの現れとして、子どもへの関心の一部と子育ての社会化志向との間に相関が見られたといえる。

表7-8 男女別に見た子どもへの関心尺度と子育ての社会化志向尺度の相関係数

		問題解決 志向	忌避感	家庭での 子育て志向	税負担の 受容
好意的注目	男性	.35 ***	-.42 ***	.12 *	.17 **
	女性	.55 ***	-.54 ***	.04	.37 ***
同情	男性	.45 ***	-.32 ***	.05	.13 *
	女性	.54 ***	-.46 ***	.04	.34 ***
好奇心	男性	.28 ***	-.21 **	.07	.18 **
	女性	.53 ***	-.44 ***	.01	.39 ***
寛容性	男性	.36 ***	-.68 ***	.16 **	.27 ***
	女性	.40 ***	-.67 ***	-.05	.38 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3) 身近に乳幼児または子育てをしている人が存在するか否かによる相関係数

身近に乳幼児が存在するか否か、および、身近に子育てをしている人が存在するか否かにより子育ての社会化志向尺度得点に差が見られたことを踏まえ、それぞれの別に見た子どもへの関心と子育ての社会化志向との関連について検討するため、両尺度間の相関係数を算出した（表7-9）。

全体的な結果としては、身近に乳幼児が存在する、あるいは、子育てをしている人が存在する者の方が、相関係数が高い傾向が見られた。従って、身近に乳幼児が存在したり、子育てをしている人が存在したりする場合、子どもへの関心の高さと子育ての社会化志向との関連が強くなることが示された。

4) 子どもの希望別に見た子どもへの関心尺度と子育ての社会化志向尺度の相関係数

子どもの希望別で子育ての社会化志向尺度の得点に差が見られたことを踏まえ、子どもの希望別に見た子どもへの関心と子育ての社会化志向との関連について検討するため、両尺度間の相関係数を算出した（表7-10）。

表7-9 身近に乳幼児や小さな子どもの子育てをしている人の存在するか否か別に見た子どもへの関心尺度と子育ての社会化志向尺度の相関係数

		問題解決 志向	忌避感	家庭での 子育て志向	税負担の 受容
好意的注目	身近に乳幼児・いる	.62 ***	-.48 ***	.02	.32 ***
	身近に乳幼児・いない	.45 ***	-.50 ***	.05	.26 ***
	身近に子育て・いる	.60 ***	-.52 ***	.06	.30 ***
	身近に子育て・いない	.46 ***	-.49 ***	.03	.25 ***
同情	身近に乳幼児・いる	.60 ***	-.38 ***	-.01	.29 ***
	身近に乳幼児・いない	.48 ***	-.41 ***	.06	.21 ***
	身近に子育て・いる	.58 ***	-.39 ***	.05	.28 ***
	身近に子育て・いない	.48 ***	-.40 ***	.03	.20 ***
好奇心	身近に乳幼児・いる	.55 ***	-.32 ***	-.12	.31 ***
	身近に乳幼児・いない	.42 ***	-.38 ***	.07	.29 ***
	身近に子育て・いる	.57 ***	-.36 ***	-.06	.36 ***
	身近に子育て・いない	.41 ***	-.36 ***	.04	.25 ***
寛容性	身近に乳幼児・いる	.36 ***	-.55 ***	.06	.33 ***
	身近に乳幼児・いない	.38 ***	-.71 ***	.02	.33 ***
	身近に子育て・いる	.43 ***	-.60 ***	.05	.27 ***
	身近に子育て・いない	.36 ***	-.70 ***	.03	.35 ***

*** $p < .001$

表7-10 子どもの希望別に見た子どもへの関心尺度と子育ての社会化志向尺度の相関係数

		問題解決 志向	忌避感	家庭での 子育て志向	税負担の 受容
好意的注目	必ず欲しい	.45 ***	-.47 ***	.03	.21 ***
	条件次第	.53 ***	-.47 ***	.03	.33 ***
	欲しくない	.39 **	-.59 ***	-.03	.30 *
同情	必ず欲しい	.48 ***	-.36 ***	.06	.19 **
	条件次第	.51 ***	-.37 ***	.01	.26 ***
	欲しくない	.44 **	-.49 ***	-.05	.25
好奇心	必ず欲しい	.42 ***	-.35 ***	.01	.24 ***
	条件次第	.45 ***	-.31 ***	.01	.35 ***
	欲しくない	.50 ***	-.48 ***	-.08	.21
寛容性	必ず欲しい	.41 ***	-.61 ***	.10	.26 ***
	条件次第	.35 ***	-.69 ***	-.06	.38 ***
	欲しくない	.14	-.74 ***	-.05	.35 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

相関のあり方に顕著な違いが見られた点としては、「寛容性」と「問題解決志向」の関連が挙げられる。将来自分の子どもが「必ず欲しい」、「条件次第」では正の相関が見られたが、「欲しくない」では有意な相関は見られなかった。従って、将来子どもが欲しいと思っている者では、子どもの声への寛容さが高いほど、子どもや子育てに関する社会的問題への関心や志向性が高いが、子どもが欲しいと思わない者では関連が見られなかった。

(4) 重回帰分析

上述のように、子どもへの関心と子育ての社会化志向との間には関連が見られた。子どもと遭遇した際に生じる原初的な反応であり、個人が子どもに対して有する主観的な感情、認知的側面である子どもへの関心の高低は、より高次の社会という視点に立った時に生じる子育ての社会化志向にどのような影響を与えているのであろうか。子どもへの関心が子育ての社会化志向に汎化するということはあるのであろうか。これについて検討するため、子どもへの関心尺度の各下位尺度を説明変数、子育ての社会化志向尺度の各下位尺度を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。なお、以下の分析において VIF はいずれも 3 未満で、多重共線性はないと判断した。

1) 全体の重回帰分析結果

全体の重回帰分析結果を図 7-1 に示す。「問題解決志向」は、「好意的注目」、「同情」、「寛容性」から正の影響を受けていた。「忌避感」は、「好意的注目」、「寛容性」から負の影響を受けていた。「税負担の受容」は、「好奇心」、「寛容性」から正の影響を受けていた。一方、「家庭での子育て志向」は、子どもへの関心のいずれの下位尺度からも影響を受けていなかった。

以上の結果から、子どもへの関心の高さは、子どもや子育てに関する社会的問題への関心や志向性が高く、社会に存在する子どもや子育てへの忌避感が低く、子どもや子育てへの税負担を受容する傾向が高いことが明らかとなった。すなわち、個人内で生じる子どもへの感情的、認知的側面である子どもへの関心の高さが、実際に社会全体で子どもを育み、子育てを支えていこうとする態度や志向性を高めるといえる。

一方、「家庭での子育て志向」に対しては、子どもへの関心のいずれの下位尺度からも有意な影響はを受けていなかった。相関分析においても全体では有意な相関は見られなかったことから、子どもへの関心と「家庭での子育て志向」との間の関連が見られなかった。この理由は、家庭で子どもを育てることと、社会全体で子どもを育てることは、必ずしも対

立する概念ではないことを反映しているためであると考えられる。社会全体で子育てをすることも確かに大切であるが、その基盤として家庭での子育てもそれと同等か、それ以上に重要なことである。社会全体での子育てと家庭での子育てが相互に連携して機能することが、より良い子育てにつながるといえる。社会と家庭が相互に機能して子育てをするという考え方は、今日の社会に共有された望ましい子育てのあり方なのではないだろうか。そのため、子どもへの関心の高低とは関係なく、望ましい子育てのあり方として、社会全体での子育てと家庭での子育ての双方を重視する傾向が見られ、子どもへの関心との関連が見られなかったのであろう。

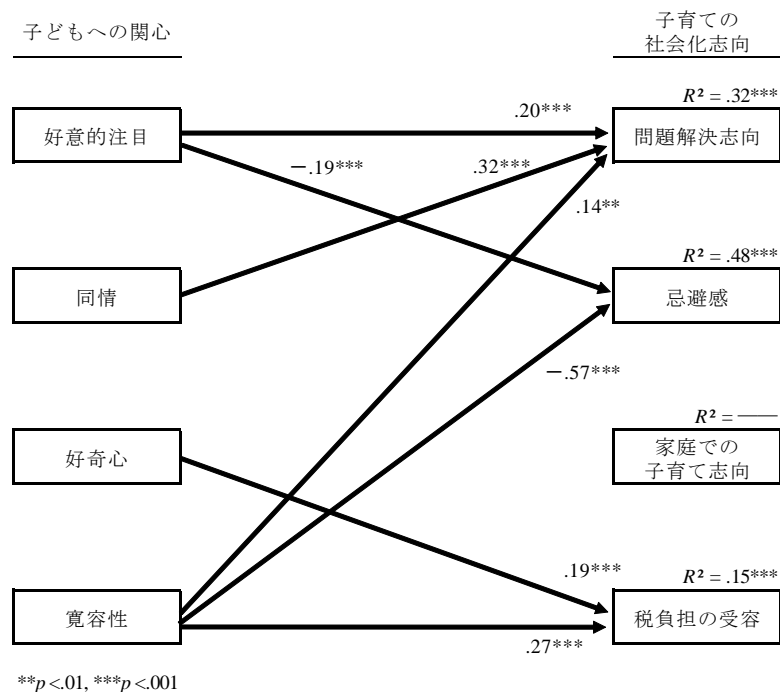


図 7-1 全体の重回帰分析結果

2) 男女別の重回帰分析結果

男女別に重回帰分析を行った結果を図 7-2, 7-3 に示す。「問題解決志向」, 「忌避感」, 「家庭での子育て志向」において男女間で影響のあり方に違いが見られた。

「問題解決志向」において、男性は「同情」と「寛容性」から正の影響を受けていた。女性は「好意的注目」と「同情」から正の影響を受けていた。「忌避感」においては、男性は「好意的注目」と「寛容性」から負の影響を受けていた。女性は「同情」と「寛容性」から負の影響を受けていた。「家庭での子育て志向」においては、男性は「好意的注目」か

ら正の影響を受けていたが、女性はいずれの下位尺度からの有意な影響は受けていなかった。「税負担の受容」については、男女とも「好奇心」と「寛容性」から正の影響を受けていた。

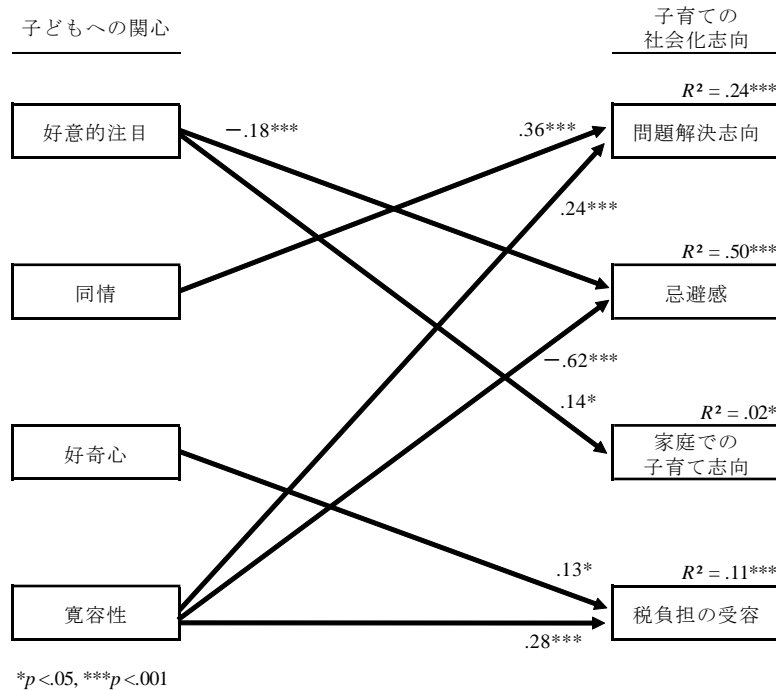


図 7-2 男性における重回帰分析結果

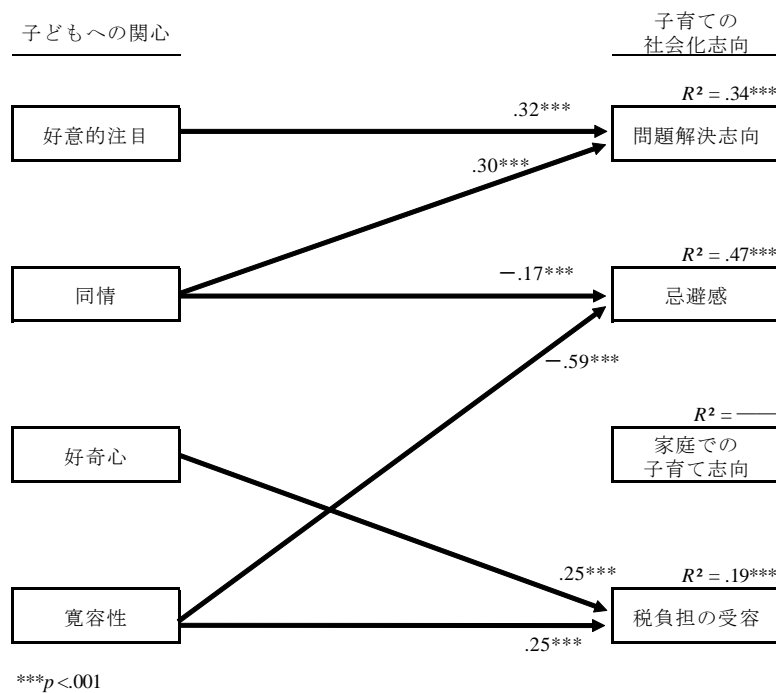


図 7-3 女性における重回帰分析結果

以上より、男女とも「同情」からの影響が見られたが、男性では「寛容性」からの影響が見られたが女性では見られず、女性では「好意的注目」からの影響が見られたが男性では見られなかった。このことから、男性は子どもの声への寛容さが「問題解決志向」を高めることが示された。一方、女性は子どもが泣いていたり、困っていたりする状況に遭遇した際に同情的な関心の程度がそれを高めていた。つまり、男性は子どもが泣いていたり大きな声を発していたりしても、「気にしない」で許容する程度が子どもや子育てに関する社会的問題への関心や志向性と結びついていた。一方、女性は子どもが泣いていたり困っていたりする状況で「かわいそう」と思う慈悲深い気持ちがそれに結びついていた。

「忌避感」においては、男女とも「寛容性」から負の影響が見られた。しかし、男性では「好意的注目」からの正の影響が見られたが女性では見られず、女性では「同情」からの影響が見られたが男性では見られなかった。このことから、男性は子どもを目にした際にかわいいと感じて注目する傾向が子育ての社会化志向を高め、女性は子どもへの同情的関心の高さがそれを高めることが示された。つまり、男性は子どもを「かわいい」と思う気持ちの強さが、女性は子どもへの同情的な関心の強さが、社会に存在する子どもや子育てへの忌避感を低めることに寄与することが分かった。

「家庭での子育て志向」においては、男性では「好意的注目」から弱い正の影響が見られたが、女性では影響は見られなかった。このことから、男性は子どもを目にした際にかわいいと感じ、注目する程度の強さが家庭での子育てを重視する態度に結びつくといえる。上述のように、男性においては「家庭での子育て志向」は子育てへの準備性への高さを反映していると考えられる。「好意的注目」が高いということは、それだけ子どもに対して親和的な感情を有しているということであり、子育てへの準備性の高さを反映しているとも解釈できよう。そのため、「好意的注目」から「家庭での子育て志向」への影響が弱いながらも見られたのであろう。一方、女性では、そうした影響関係はなく、家庭での子育てを重視する態度は子どもへの関心の高低の影響を受けないことが示された。

「税負担の受容」においては、男女とも「好奇心」と「寛容性」からの正の影響が見られたが、男性より女性の方が「好奇心」の影響がやや強かった。子どもの生活や会話への好奇心が強いほど、子どもや子育てに関する社会的問題について興味を持ったり、調べたりすることも多くなると考えられる。その中で、昨今の子育て世帯の貧困問題や待機児童問題といった子どもや子育てに関する公的財源の投入が求められる社会問題について知ることであると推測される。そのため、「好奇心」の高さが「税負担の受容」に結びついてい

たのであろう。そして、こうした子どもや子育てに関する社会問題は、将来的に現実として子育て役割を担う可能性がより高い女性において興味を引かれる事柄であると推測される。そのため、男性より女性の方が「好奇心」から「税負担の受容」への影響が大きかったと思われる。ただし、男女ともに正の影響が見られたことから、「好奇心」の高さが「税負担の受容」を高める効果は男女に関係なく存在するといえる。

3) 身近に乳幼児または子育てをしている人が存在するか否かによる重回帰分析結果

身近に乳幼児が存在するか否か別および、身近に子育てをしている人が存在しているか否か別に重回帰分析を行った結果を図7-4~7-7に示す。

「問題解決志向」においては、身近に乳幼児がいる場合は「好意的注目」と「同情」から正の影響を受けていたが、いない場合は、「同情」と「寛容性」から正の影響を受けており、「好意的注目」からの影響は見られなかった。身近に子育てをしている人がいる場合も身近に乳幼児がいる場合と同様に、「問題解決志向」は「好意的注目」と「同情」から正の影響を受けていたが、いない場合は、それらに加え「寛容性」からも正の影響を受けていた。ただし、身近に子育てをしている人がいない場合は、いる場合よりも「好意的注目」から受ける影響が小さかった。

「忌避感」においては、身近な乳幼児や子育てをしている人の存在にかかわらず「好意的注目」と「寛容性」から負の影響を受けていた。ただし、「好意的注目」からの影響では、身近に乳幼児がいる場合と、子育てをしている人がいる場合で大きかった。「寛容性」からの影響では、身近に乳幼児がいない場合と、子育てをしている人がいない場合で大きかった。よって、身近に乳幼児や子育てをしている人がいる場合は、子どもを目にした際にかわいいと感じて注目する傾向の強さが子どもや子育てへの忌避感を低め、身近に乳幼児や子育てをしている人がいない場合は、子どもへの寛容さの高さが忌避感を低めていた。

「家庭での子育て志向」においては、身近な乳幼児や子育てをしている人の存在にかかわらず、子どもへの関心からの影響は見られなかった。

「税負担の受容」においては、身近な乳幼児や子育てをしている人の存在にかかわらず「好奇心」と「寛容性」から同程度の正の影響を受けていた。

以上より、身近に乳幼児や子育てをしている人がいる場合は、「好意的注目」の影響が大きく、子どもを目にした際にかわいいと感じて注目する傾向が強いほど、子育ての社会化志向のうち、「問題解決志向」を高め、「忌避感」を低めていた。一方、身近に乳幼児や子育てをしている人がいない場合では、「寛容性」の影響力が大きく、子育ての社会化志向の

うち、「問題解決志向」を高め、「忌避感」を低めていた。

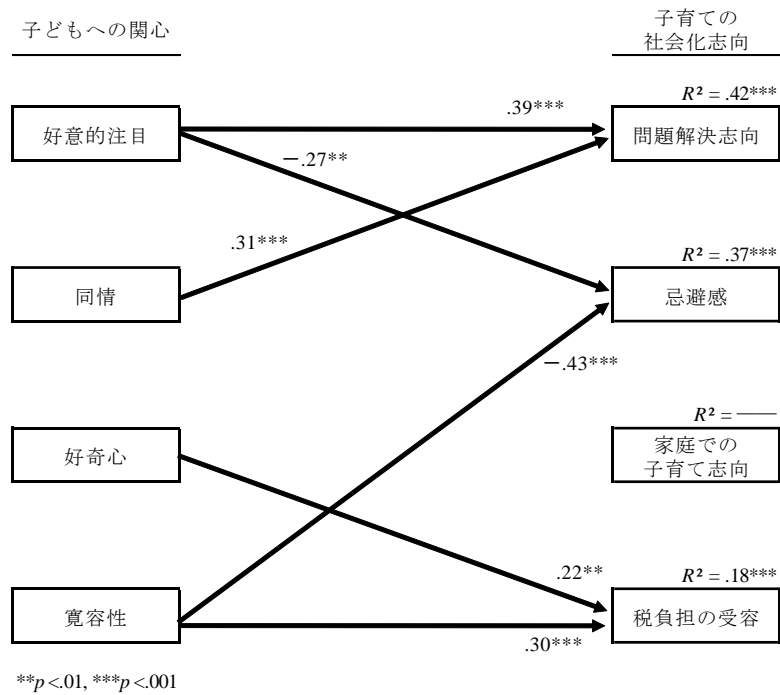


図 7-4 身近に乳幼児が「いる」場合の重回帰分析結果

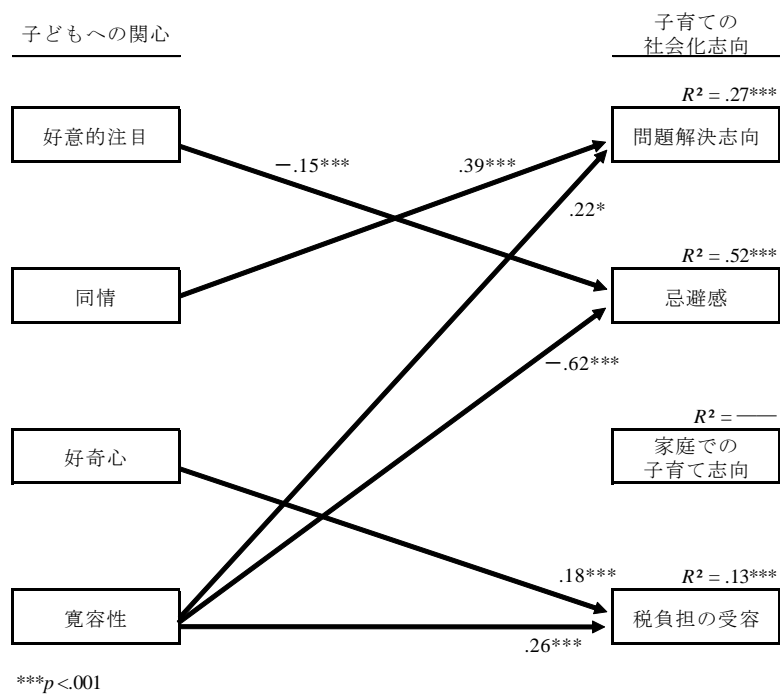


図 7-5 身近に乳幼児が「いない」場合の重回帰分析結果

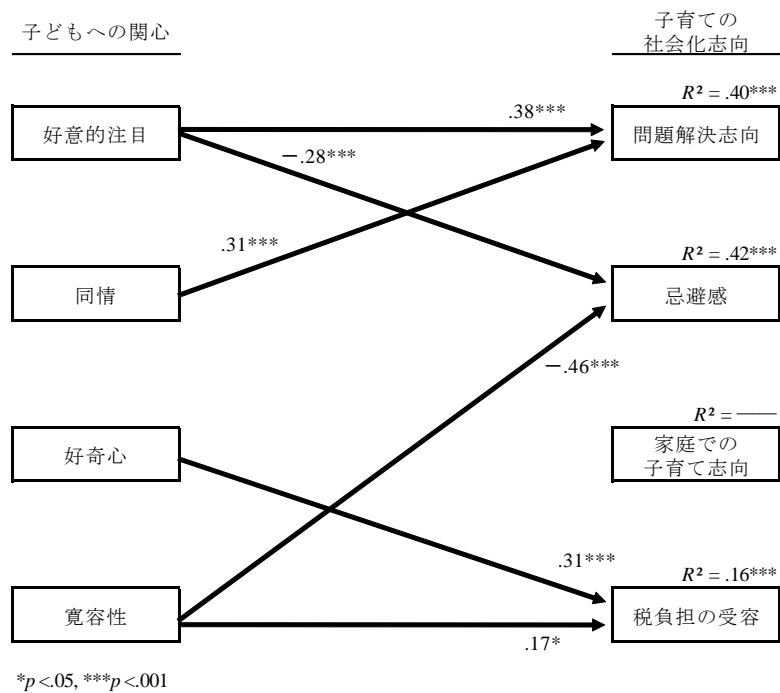


図7-6 身近に子育てをしている人が「いる」場合の重回帰分析結果

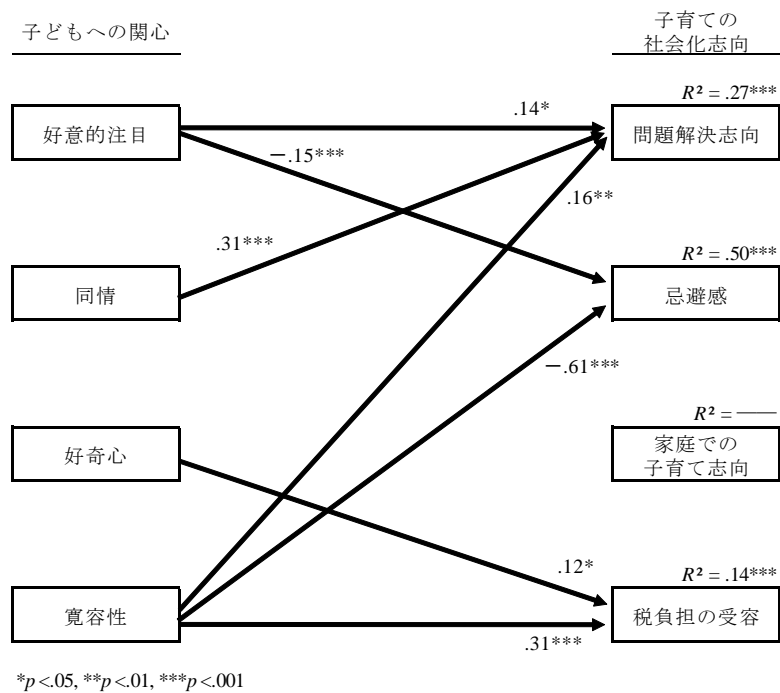


図7-7 身近に子育てをしている人が「いない」場合の重回帰分析結果

近年は、少子化や核家族化、地域コミュニティに希薄化等の影響により、身近に乳幼児が少なくなり、子育てをしている人と接触する機会が少なくなっていると推測される。し

かし、身近に子どもや子育てをしている人が存在しなくても、子どもの泣き声や大声への寛容さを高めることが、子育ての社会化志向を高めることが示された。

4) 子どもの希望別の重回帰分析結果

子どもの希望別に重回帰分析を行った結果を図7-8~7-10に示す。「問題解決志向」と「税負担の受容」において子どもの希望別により影響のあり方に違いが見られた。

「問題解決志向」においては、「必ず欲しい」では、「同情」と「寛容性」から正の影響、「条件次第」では、「好意的注目」、「同情」、「寛容性」から正の影響、「欲しくない」では、「好奇心」から正の影響を受けていた。将来子どもが「必ず欲しい」、あるいは「条件次第」の場合、いずれも「同情」と「寛容性」から影響を受けていたことから、子どもへの同情的な関心の程度や、子どもの泣き声や大声への寛容さが「問題解決志向」を高めるといえる。また、「条件次第」のみ「好意的注目」からの影響が見られたことから、子どもを目にした際にかわいいと感じて関心を抱く傾向が「問題解決志向」を高めるといえる。すなわち、将来子どもをもつこと希望している場合、子どもへの同情的な関心や寛容さが「問題解決志向」を高めるといえる。一方、将来子どもをもつことを希望しない場合であっても、子どもへの好奇心を有していれば、「問題解決志向」は高まるといえる。

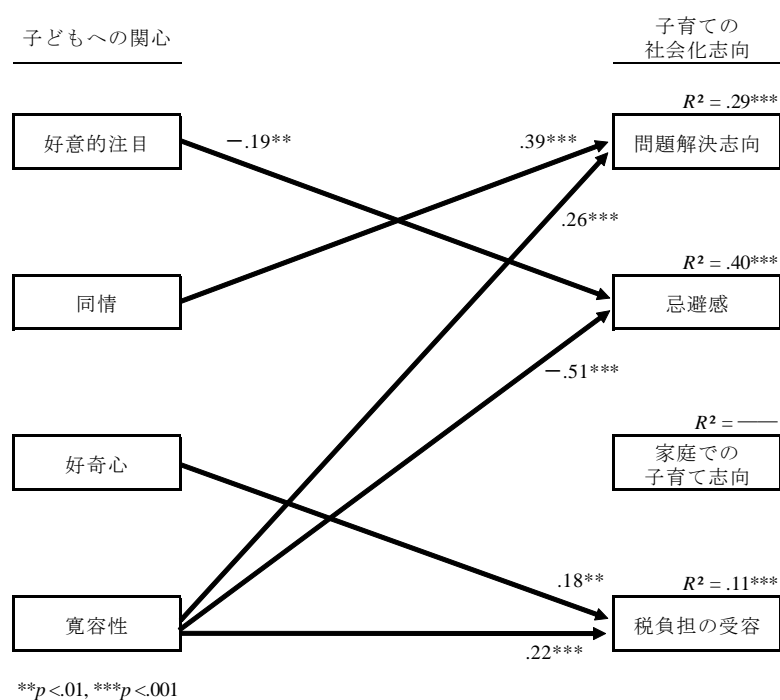


図7-8 将来自分の子どもの希望が「必ず欲しい」場合の重回帰分析結果

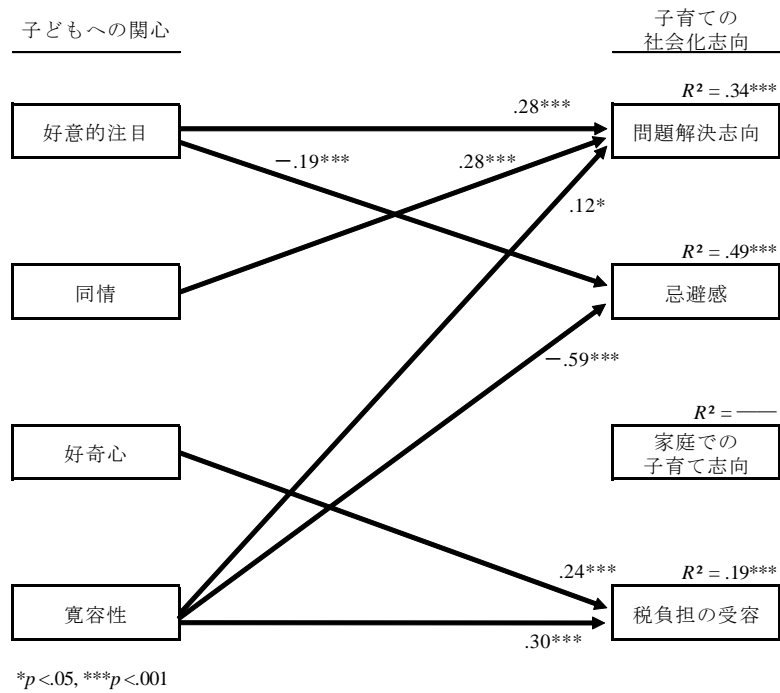


図 7-9 将来自分の子どもの希望が「条件次第」の場合の重回帰分析結果

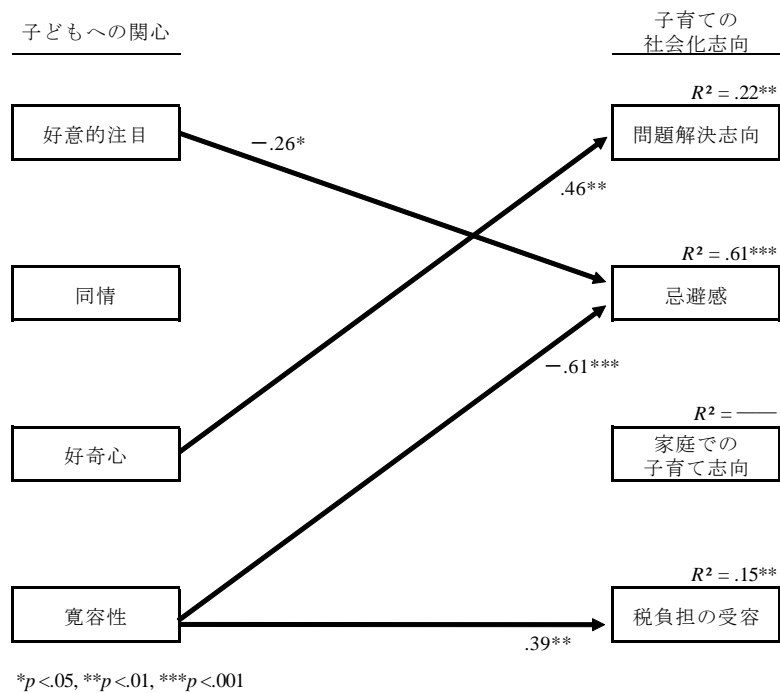


図 7-10 将来自分の子どもの希望が「欲しくない」場合の重回帰分析結果

「忌避感」においては、子どもの希望にかかわらず「好意的注目」と「寛容性」から負の影響を受けており、標準偏回帰係数も同程度であった。よって、将来子どもが欲しい・

欲しくないにかかわらず、子どもを目にした際にかわいいと感じて注目する傾向や子どもの泣き声や大声に対する寛容さが、子どもや子育てへの忌避感を低めるといえる。

「家庭での子育て志向」においては、子どもの希望にかかわらず、子どもへの関心からの影響は見られなかった。これは、上述のように、子どもへの関心の程度や子どもの希望にかかわらず、社会と家庭が相互に機能して子どもの育ちを支えることが重要であるという考えが存在していることを証左するものであるといえる。

「税負担の受容」において、「必ず欲しい」と「条件次第」では、いずれも「好奇心」および「寛容性」から負の影響を受けていた。「欲しくない」では、「寛容性」からのみ正の影響を受けており、「必ず欲しい」と「条件次第」よりも標準偏回帰係数が高かった。将来子どもを希望している場合、子どもに対する好奇心が生じ、子どもについて調べたり、実際に子育てをしている人の話を聞いたりするといった行動も多くなると推測される。そうした行動を通して、子育てには多くの経済的負担がかかることを知ることもあるだろう。そして、家庭にかかる経済的負担について、行政がそれを支援すべきと考え、その財源として税負担を受容しようとする意識が芽生えるのではないかと推測される。

他方、将来子どもを希望していない場合、子どもへの好奇心よりも子どもの声に対する寛容さが影響していた。子どもの泣き声や大声に寛容であるということは、公共の場であっても子どもが泣いたり、大声を出したりするのは当然のことであると認識し、許容すべきと思っているということである。すなわち、子どもが社会に中に存在することを当然視しており、子どもの存在に抵抗感がないため、子どもの泣き声や大声に対して寛容であると推測される。そのため、子どもが「欲しくない」場合でも、子どもへの寛容さが高ければ、子どもや子育てへの忌避感が低くなるといえる。また同時に、子どもの存在を当然視することから、子どもの育ちを支えるための財源投入も必要であると考え、そのための税負担も受容できるようになると推測される。

以上の結果をまとめると、将来自分の子どもを希望している場合は、子どもへの関心の高さが子育ての社会化志向の高さに結びつき、現時点で子どもが欲しくなくても、子どもへの好奇心や寛容さの高さが子育ての社会化志向の高さにつながることを示された。将来自分の子どもが欲しくない場合でも、子どもへの関心が高ければ、子どもや子育てに関する知識を得ようとする行動を取りやすくなると推測され、その結果として子育ての社会化志向を高める効果があることが示された。

7-4 まとめ

本章では、子どもと遭遇した際に生じる原初的な反応である子どもへの関心の程度が、社会的にどのような意味を持つのか検討するため、子育ての社会化志向を取り上げ、それを測定する尺度を作成した。そして、子どもへの関心と子育ての社会化志向の関連について検討した。

その結果、子育ての社会化志向尺度には4下位尺度が見出され、子どもへの関心の高さが子育ての社会化志向を高める効果が見られた。ただし、子育ての社会化志向のうち、家庭での子育てを重視する傾向である「家庭での子育て志向」は、子どもへの関心からの影響はほとんど見られなかった。このことから、子どもへの関心の高低にかかわらず、社会と家庭の双方が機能して子育てをすることが望ましいという認識が大学生に存在する可能性が示唆された。加えて、身近に乳幼児や子育てをしている人がいなくても、子どもへの寛容さを高めることが子育ての社会化志向を高めることが示された。そして、将来自分の子どもが欲しいとは思っていないなくても、子どもへの関心を高さが子育ての社会化志向を高めていた。このことから、子どもを望まないライフスタイルを追求する者であっても、子どもへの関心を高めることが社会全体で子どもを育み、子育てを支援することに寄与するといえる。

第8章 総合考察

本章では、本論文で実施した研究を通して得られた知見について、包括的に考察する。この中で、子どもへの関心が何を意味する概念であるのか、また、その要因は何であるのか論じる。そして、特に青年期において子どもへの関心を育むことの重要性や、子育ての社会化志向との関連から得られた示唆、その発展可能性について心理学的、教育学的な観点から考察する。

8-1 子どもへの関心の構成概念

8-1-1 子どもへの関心の下位尺度

まず本論文では、第1章において子どもへの関心を含む従来の概念をレビューした上で整理した。そして、子どもへの関心はヒトが子どもを目にした際に生じる原初的な反応であることを示し、これまで、子どもへの関心は養護性と親準備性の概念の中で扱われてきたことを示した。さらに、養護性と親準備性は「共感性（関心）」と「技能（効力感）」の2つの下位概念から構成されることを紹介した。

続いて、先行研究での指摘から、子どもへの関心のみを取り出して検討する必要性を述べた。具体的には、小嶋（1989）の子どもへの関心が実際の養育への自信につながるという理論モデル、青木（1988）の母性準備性のレビュー、糊澤（2009）の養護性のレビューにおいて、「共感性（関心）」と「技能（効力感）」は構成概念的に異なるものである可能性が指摘されていることを紹介した。そして、実際の養育行動や養育への自信の出現に寄与するとされる「共感性（関心）」である子どもへの関心に焦点を当て、それを測定する尺度を新たに作成し、更なる下位尺度を見出すことを目的とした研究を実施することを述べた。その中で、子どもへの関心を「社会に存在する自分の子ども以外の3歳から6歳の幼児と遭遇した際に生じる感情、認知、および幼児への志向性」と定義した¹⁹。

第3章では、子どもへの関心尺度を作成した。因子分析を行った結果、「好意的注目」、「同情」、「好奇心」、「寛容性」の4因子が抽出された。以下では、この4つの下位尺度が持つ意味について、質問項目内容も踏まえつつ、更なる考察を加える。

まず、「好意的注目」に含まれる質問項目を見ていくと、この下位尺度は幼児を見た際に

¹⁹ 第1章での定義で「子ども」としていた語は、第3章での調査結果から「3歳から6歳の幼児」として再定義された。

かわいいと感じて選好する程度や、幼児への志向性、幼児を見ることで生じる快感情の程度を表していると解釈できる。すなわち、子どもそのものへの肯定的な認知、感情を示すものであり、より接近したいという気持ちであるといえる。

次に、「同情」に含まれる質問項目を見ていくと、この下位尺度は泣いている、不安そうにしている、体調を崩しているといった幼児への志向性の程度を表していると解釈できる。また、日常や街中、地域で見かける子どもが、いつもと違う様子を呈している際に発現する関心の1つであるともいえよう。第3章で述べたように、この下位尺度は登張(2003)の多次元共感性尺度の下位尺度の1つである「共感的関心」と近いものである。また、Davis(1983)の多次元共感測定尺度の下位尺度の1つである「共感的配慮(empathic concern)」とも項目内容的に近い。従って「同情」は、子どもへの関心のうち、幼児への共感性の側面を特に強く反映した下位尺度であるといえる。

続いて、「好奇心」に含まれる質問項目を見ていくと、この下位尺度は幼児の会話や行動、テレビや新聞といったマスメディアを通してもたらされる子どもの姿に引きつけられる程度を表していると解釈できる。子どもへの関心の他の3下位尺度は、快や不快、感情的な共感や「かわいい」といった気持ちに基づいた感情的な関心の程度を表しているが、「好奇心」は、子どものことを知りたいと思う動機に基づいた知的で客観的な関心の一側面を表しているといえる。

そして、「寛容性」に含まれる質問項目を見ていくと、この下位尺度は逆転項目の処理以前では、幼児の泣き声や大声、騒々しさを伴った行動への否定的・拒否的態度を表していると解釈できる。ただし、この因子の解釈に当たって、留意すべき点がある。それは、子どもに対して全く関心がない場合、子どもに注意を向けることはないため、そもそもこうした感情は生じないと推測できる点である。子どもの泣き声や大声、騒々しい行動に遭遇した際に、否定的・拒否的感情が生じるということは、ネガティブではあるものの、子どもへの関心が生じているとも解釈できよう。一方、子どもへの無関心の程度が高い場合であっても、子どもの泣き声や大声等への無関心さから「寛容性」の得点が高くなるケースもあるといえる。「寛容性」の低さもまた、子どもの泣き声や行動への敏感さ、反応性の高さを反映している可能性があるとするれば、一概に「寛容性」が低いことが悪いことであると断言することはできない。特に、他の下位尺度の得点が高いにもかかわらず、「寛容性」の得点が低い場合は子どもに対して両価的な感情を有しているとも解釈できる。従って、個人の「寛容性」得点の高低の解釈に当たっては、他の下位尺度の得点にも留意する必要

があるといえる。

以上のように、子どもへの関心には4つの下位尺度が存在し、それぞれが異なる側面を有していることが明らかとなった。すなわち、「好意的注目」は子どもを目にした際、つまり、認知した際に生じる感情や動機づけ、行動的側面を含む概念であった。「同情」は、困難な状況にある子どもに対する憐れみと慈しみに基づく感情的側面であり、困難な状況にある子どもを「かわいそう」と思えるという共感的な要素が強い側面であった。「好奇心」は、子どもと遭遇した際に生じる、より客観的で知的な認知的側面であった。「寛容性」は、子どもの泣き声や大声を耳にしても、否定的な感情を抱かず、それを許容するという感情的かつ認知的側面であった。

子どもへの関心に、こうした多様な側面を見出すことができたのは、子どもへの関心のみに取り出して検討したことの成果であるといえる。従来、子どもへの関心は養護性や親準備性の1下位尺度として扱われ、その構成概念については深く検討されてこなかった。本論文では、その点について、より踏み込んだ考察を加えることができたといえる。

8-1-2 子どもへの関心尺度の併存的妥当性

子どもへの関心の定義には、幼児に対する「感情」、「認知」、「志向性」という3つの側面が含まれていた。そこで、既存の尺度と以上の3つの側面との関連を確認することで、子どもへの関心尺度の併存的妥当性を検討した。

まず、感情の側面として、花沢（1992）の対児感情評定尺度との関連を検討した。本来の対児感情評定尺度は大人の乳児に対する好意的な感情（接近感情）と拒否的な感情（回避感情）を測定するものである。本論文では、子どもへの関心尺度との整合性を保つため、質問文で「赤ちゃん」となっている部分を「幼児」に置き換え、幼児に対する感情を測定した。その結果、中程度の相関が見られた。また、重回帰分析の結果、接近感情の高さが子どもへの関心を高め、回避感情の高さが関心を低めていた。対児感情と子どもへの関心の間に関連が見られたことから、子どもへの関心における感情の側面の妥当性が確かめられたといえる。

次に、認知の側面として、子ども観との関連を検討した。子ども観尺度は永澤（1996）が作成した尺度を用いた。その際、先行研究とは対象が異なることから、因子構造を再検討した上で子どもへの関心との関連を検討した結果、相関が見られた。また、重回帰分析の結果、子どもへのポジティブなイメージが子どもへの関心を高め、ネガティブなイメー

ジが関心を低めていた。子ども観は、個人が子どもに対して有するイメージであり、子どもをどのような存在として捉えているかという認知的な側面に相当する。従って、子どもへの関心のうち、認知の側面の妥当性が確かめられたといえる。

さらに、志向性の側面として、辻（1993）の他者意識尺度との関連を検討した。他者意識は「他者へ向ける注意、関心、意識などのこと」と辻（1993）により定義されており、他者への志向性を表す概念であるといえる。志向性を発揮する対象については、辻（1992）では「他者」、本論文では「幼児」であり、発揮対象は異なるものの、ともに自分以外の他者に対する志向性であるという点において共通している。他者意識と子どもへの関心との関連を検討した結果、一定の相関が見られた。また、重回帰分析の結果、全体としては内的他者意識の高さが子どもへの関心を高めており、これは郷式（1999）の結果とも一致していた。従って、子どもへの関心のうち、子どもへの志向性の側面の妥当性が確かめられたといえる。

以上のように、子どもへの関心の定義にある、「感情」、「認知」、「志向性」の3つについて、外的基準との関連を検討した結果、いずれも関連が見られた。従って、子どもへの関心尺度の併存的妥当性が確認されたといえる。

8-1-3 子どもへの関心尺度の構成概念妥当性

続いて、子どもへの関心の構成概念妥当性について検討した結果をまとめる。構成概念妥当性の検討に当たっては、質問紙法と選好法により測定した子どもへの関心の程度の関連、次世代育成力と子どもへの関心の関連、子どもへの関心の上位概念である養護性との関連を見ることにより検討した。

(1) 幼児の画像への選好との関連

子どもへの関心尺度の得点が高い者は、実際に子どもを選好する傾向があるのだろうか。もしそうであれば、子どもへの関心尺度の行動的側面との間に関連が見られるはずである。そこで、質問紙法と選好法を組み合わせ子どもへの関心について検討した。その結果、正の相関が見られ、子どもへの関心尺度の得点が高い者は、実際に幼児の画像が呈示されるとそれを選好するという関連が見られた。

ただし、本研究では選好法の実施に当たり、複数の画像のうちどれが最も「気になる」か研究参加者に報告を求めるという手法を用いた。これは、Fullard & Reiling (1976)に代表される先行研究の手続きに倣ったためであり、先行研究と同様の結果が見られるか検証す

るためであった。しかし、本研究では実際にどの画像を「見た」という点については客観的な指標を用いて検討していない。客観的な指標を用いた研究としては、アイカメラを用いて乳児の画像の方が成人の画像より注視されることを明らかにした Brosch et al. (2007) 研究がある。しかし、乳児の画像を「見た」とからといって、それがすなわち乳児に対して好意的な感情を有していることの証左であるとはいえない。興味を引かれたから見ることもあれば、異質性への注目や危険であると感じたために注視するということもあるといえよう。

そこで本研究では、単に「見る」という行動ではなく、「気になる」という、より感情を揺さぶられた経験としての選好を指標とした。「気になる」か否かは研究参加者の内心に関わる問題であるため、研究参加者に報告を求める手続きを用いた。その結果、子どもへの関心が高い者は、実際に幼児の画像を「気になる」と回答していた。これは、子どもへの関心が高い者は、幼児の画像を見ると何らかの主観的な経験が生じ、「気になる」という経験がなされたこと意味し、画像への興味を反映しているといえる。よって、質問紙法と選好法との間に関連が見られたことは、子どもへの関心尺度の妥当性の一端を示すものであるといえる。

(2) 次世代育成力との関連

小嶋 (1989) は、幼い子どもに関心を持つことが、子どもをうまく扱い、育てることへの自信に結びつくとする養護性の発達モデルを提唱している。しかし従来の研究では、この関係性については未検討であった。本論文で作成した子どもへの関心尺度が、養護性の「自信」の側面を高めることを示せれば、子どもへの関心が養護性の 1 下位概念であることを示すことにつながると考えられる。

これまで、子どもを育てることへの自信を表す概念としては、菱谷ら (2009) が提唱した次世代育成力が存在する。菱谷ら (2009) によれば、次世代育成力は「次世代の子どもたちを育てることへの自信」と定義されるものであり、青年期の者における将来、次世代の子どもたちを育てることに対する自己についての肯定的な評価とされる。次世代育成力は世代性 (generativity) に基づいた概念であり、次世代の誕生を喜ぶという側面を持つ。

そこで本研究では、子どもへの関心と次世代育成力との関連を検討することで、子どもへの関心が子どもの養育への自信につながるか検討した。重回帰分析の結果、子どもへの関心が次世代育成力に影響を及ぼすというモデルが示された。このことから、小嶋 (1989) が提唱した子どもへの関心が養育への自信につながるというモデルが支持された。

ただし、小嶋（1989）の「自信」とは、現時点で子どもの相手をうまくできるかという自信であり、子どもの養育をする上での技能の認知や構えといった効力感を意味する。一方、次世代育成力は将来、次世代を育む上での自信を示している。従って、養護性における「自信」は現在が基準に評価されるものであるのに対し、次世代育成力は将来、自分が子育てをする時が基準となっており、将来の自分に対する期待であると解釈できる。従って、養護性における自信と次世代育成力は評価する時間軸が異なっている。そのため、次世代育成力が小嶋（1989）の想定した養護性の1下位概念の「自信」にそのまま相当するとはいえない。

しかし、次世代育成力の4下位尺度における質問項目内容を精査すると、「誕生肯定」と「伝達自信」は現時点での次世代を育むことへの自信を表し、「自己成長」と「地域社会」は将来、次世代を育むことへの自信を表していることが分かる。具体的に質問項目を見てみると、「誕生肯定」には、「私は、子どもの誕生を幸せだと感じる」、「私は、子どもの誕生についての話を、幸せな気持ちで聞くことができる」といった項目が含まれる。「伝達自信」には、「私は、子どもに愛情を伝える方法を、上の世代から教わった」、「私は、時代を超えて伝わる大切なものを上の世代から受け継いでいる」といった項目が含まれる。これらは、現時点で次世代を育むのに十分な構えや自信を有しているかを評価するものである。

一方、「自己成長」には、「私は、子どもとの関係を作ることを通して、人間的に成長するだろう」、「私は、子どもを通じて、新しい世界が広がると思う」といった項目が含まれる。「地域社会」には、「私は、子どもが病気になったとき、近所の人に助けを求めるだろう」、「私は、子どもにとってよい環境を作るために、地域活動を頑張るだろう」といった項目が含まれる。これらは、将来自分が親または親世代となり、次世代を育む際における自信や期待を評価するものである。

すなわち、菱谷ら（2009）の次世代育成力尺度には、次世代を育む自信を評価する時間軸が現在と将来とで混在している。しかし一方で、現在の状態について評価する項目も多く存在することも重視する必要がある。子どもへの関心と次世代育成力に関連が見られ、子どもへの関心が次世代育成力を高めていたという本論文での結果は、小嶋（1989）の理論を全面的に支持する結果とは言えないかもしれないが、一定程度、支持するものであると解釈することは可能であろう。また、逆説的ではあるが、養育への自信を評価する時間軸が現在であっても将来であっても、子どもへの関心が養育への自信に影響していたという結果は、小嶋（1989）が想定した以上の知見であり、養護性発達の新たな可能性を示す

ものであるともいえる。従って、子どもへの関心が子どもを育む自信につながるという本論文の結果は、従来の養護性の発達モデルを支持しつつ、新たな知見を提供できたといえ、子どもへの関心が養護性の下位概念であることを示すものであるといえる。

(3) 養護性との関連

子どもへの関心は養護性の下位概念である。これについて量的指標を用いて検討し、子どもへの関心が養護性の下位尺度として位置付けられるか検討した。養護性尺度としては、糊澤ら（2009）の幼い子どもに対する養護性を測定する尺度を用いた。パス解析の結果、養護性の「共感性（関心）」を反映すると考えられる「共感性」と「非受容性」の2下位尺度が子どもへの関心の各下位尺度に影響を及ぼすという関係が見られた。また、養護性の「技能（効力感）」を反映すると考えられる「技能」と「準備性」が子どもへの関心の一部の下位尺度から影響を受けていた。従って、子どもへの関心が養護性の下位尺度であることが量的に確認された。

しかし、糊澤ら（2009）の養護性尺度の質問項目の一部は中西・栗津（1996）の養護性尺度から引用して作成された。子どもへの関心尺度においても、質問項目の一部は中西・栗津（1996）から引用して作成している。質問項目の主語は、養護性尺度では「小さい子ども」や「幼い子ども」であったが、子どもへの関心尺度では「幼児」に統一したものの、糊澤ら（2009）の養護性尺度と子どもへの関心尺度には、非常に類似した質問項目が使われていたことは否定できない。質問項目の類似さ故に、両尺度間の相関や影響が強くなったと考えることもできる。

ただし、子どもへの関心尺度では、従来の養護性尺度のみならず、他の尺度からも質問項目を引用して作成した。具体的には牧野・中西（1989）の親になることへの準備状態測定尺度や、桜井（1986）の児童用共感測定尺度などである。確かに、養護性尺度と子どもへの関心尺度は一部の項目がほぼ同じものであるが、異なる項目も多分に存在していた。そして、それでもなお、パス解析により影響関係が見られたことは特筆に値する。すなわち、部分的には類似した尺度同士ではあるが、子どもへの関心が養護性の下位尺度として成立することを示したことには変わりないといえる。

以上のように、子どもへの関心尺度の構成概念妥当性について、行動的な指標との関連、従来の理論モデルに基づく量的指標との関連を検討することにより検討した。その結果、子どもへの関心尺度の得点が高い者は、実際に幼児の画像を「気になる」と評価し、次世代育成力が高く、養護性が高いことが明らかとなった。各測定手法に課題は残存するもの

の、一定程度、尺度の構成概念妥当性について確認できたといえよう。

8-2 子育ての社会化志向の構成概念

8-2-1 子育ての社会化志向尺度の下位尺度

本論文では、子どもへの関心が子育ての社会化を目指す態度にどのような影響を及ぼすのか検討することを目的の1つとした。第7章において、まず、既存の子育ての社会化を目指す態度を測定する尺度についてレビューし、その問題点を把握した。そして、子育ての社会化を目指す態度を「子育ての社会化志向」と命名した上で、次のように定義した。すなわち、子育ての社会化志向とは、「子どもや子育てに関する社会的問題を意識し、物質的にも精神的にも社会全体で子どもの育ちと子育てを支えることで子育ての社会化を目指すという態度」のことをいう。

以上の定義に基づき、子育ての社会化志向尺度の作成を行った。尺度の作成に当たっては、今日の日本社会に存在する子どもや子育てに関する問題に配慮しつつ、様々なテーマおよび観点から項目を作成した。

子育ての社会化志向尺度について因子分析を行った結果、「問題解決志向」、「忌避感」、「家庭での子育て志向」、「税負担の受容」の4因子が抽出された。以下では、この4つの下位尺度が持つ意味について、質問項目内容も踏まえつつ、更なる考察を加える。

まず、「問題解決志向」に含まれる質問項目を見ていくと、この下位尺度は子どもや子育てに関する様々な社会的問題への関心、そうした社会的問題を問題であるとして捉える意識、そうした問題を解決する必要があるという姿勢を表していると解釈できる。つまり、子どもや子育てに関する社会的問題を身近な問題として認識し、それに対して関心や問題意識を持ち、そうした問題を解決すべきものとして捉える態度を表しているといえる。

次に、「忌避感」に含まれる項目を見ていくと、この下位尺度は子どもの声や泣き声をうるさいと感じて避ける傾向、同僚が自分の子どもを理由に休むことにより自身の仕事量が増えることを迷惑と思う傾向、近所に住んでいる子どもの生活を自分にとって身近なものではないと切り離す傾向を表しているとして解釈できる。つまり、子どもの存在や子育てを自分の生活にとって関係がないもの、むしろ、迷惑なものとして認知する程度を表しているといえる。本田（2007, 2009）は、少子化により子どもの存在が身近ではなくなったことにより、「子ども無知」、「子ども嫌い」の大人を出現させたとしている。また、子育てが地域全体で行う公的な営みから、家庭の中だけで営まれる私的なものに変化したことで、子

育てに他者の干渉を許さない、他者が干渉を避ける風潮が出現したと指摘している。「忌避感」は、まさに本田（2007, 2009）が指摘した子どもや子育てを自分の生活とは関係ない、迷惑なものとして忌避する風潮を反映した下位尺度であるといえよう。

続いて、「家庭での子育て志向」に含まれる質問項目を見ていくと、この下位尺度は共働きや長時間保育、低年齢の乳幼児を保育園に預けることへの抵抗感や疑問を表しており、親の手で育てることを重視し、家庭での子育てが望ましいものとして志向する傾向を表していると解釈でき、家庭での養育を第一に捉える気持ちを反映しているといえる。

そして、「税負担の受容」に含まれる質問項目を見ていくと、この下位尺度は子どもや子育てを社会全体で支えるために必要な財政的負担を税金という形であっても受容しようとする態度を表していると解釈できる。ただし、ここに含まれる質問項目では、税負担を積極的に受容しようという姿勢なのか、社会を維持するために必要なものとして仕方なく受容しようという消極的な姿勢なのかまでは検討できない。単に、税負担を受容する態度の程度を測定しているのみである。日本の家庭において子育てにかかる経済的負担は大きい。ベネッセ（2015）によると、出産から子どもが22歳になるまでにかかる養育費は約1640万円、教育費は少なくとも1000万円以上かかると推計されている。こうした多額の養育費や教育費に対して公的財源をどの程度投入して支援するか、その財源としての税負担をどこまで受容するかという問題は、社会全体で子育てを支えるという考えを持った時に外すことのできない視点である。「税負担の受容」は、積極的か消極的かは判別できないが、この程度が高いということは、少なくとも社会全体で子育てにかかる経済的負担を支え合おうとする姿勢を表しているといえる。

以上のように、子育ての社会化志向には4つの下位尺度が存在し、それぞれが子育ての社会化に向けて肯定的な態度、否定的な態度の双方の側面を有していた。従来の子育ての社会化に関する程度を測定する尺度においては、地域の子どもや子育てとの関連を検討するのみであり、本論文で作成したような、より高次の国レベルでの子育ての社会化への態度を検討する尺度は存在しなかった。人口減少期を迎えた日本社会において、子どもは貴重な存在である。その子どもと子育てを社会全体で担っていく態度を測定する尺度を作成できたことは意義のあることであったといえよう。

8-2-2 子育ての社会化志向尺度の妥当性

本論文では、子育ての社会化志向尺度の作成に当たり、その妥当性を検討する方法とし

て既存の尺度との相関係数を求めることにより検討した。具体的には、社会への関心を問う程度を測定する社会的事象への無関心尺度(久世, 1988), 社会を考慮して生活する程度を測定する社会考慮尺度(吉田ら, 1999), 母性や母性愛を信じる傾向を測定する「母性愛」信奉傾向尺度(江上, 2007), 幼い子どもへの養護性の程度を測定する養護性尺度(糊澤ら, 2009)の4つである。これらの尺度との相関を検討した結果、概ね当初の予想通りの相関が見られた。このことから、子育ての社会化志向尺度の併存的妥当性が確認された。

また、身近に乳幼児が存在したり、身近に子育てをしている人がいて話を聞く機会が存在したりする者の方が、子育ての社会化志向が高いことが示された。身近に乳幼児がいたり、子育てをしている人がいたりすれば、子どもや子育てが身近に感じられるようになることから、子育ての社会化志向も高くなると予想され、実際にそのような結果が得られた。これらの結果も子育ての社会化志向尺度の妥当性の一端を示すものであるといえる。

8-3 子どもへの関心の要因と子育ての社会化志向との関連

8-3-1 子どもへの関心の要因

従来から、子どもへの態度の要因は過去の乳幼児との接触経験にあるとされてきた。例えば、花沢(1992)は、小学校期から高校期までに多くの乳児との接触経験を有した者は大学生時点において肯定的な対児感情を有するようになることを横断調査により明らかにした。この研究以降、子ども観や養護性などの他の子どもへの態度に関する研究においても、過去の乳幼児との接触経験が肯定的な態度に寄与するという結果が見出されてきた(例えば、安積, 2008; 野村ら, 2007)。

しかし本論文では、接触経験以外に接触時感情も影響を及ぼしているのではないかと予想し、検討した。そして、重回帰分析の結果、接触経験のほかに接触時感情も子どもへの関心に影響を与えており、接触時感情の方が標準偏回帰係数の値は大きかった。すなわち、接触時感情は接触経験以上に大きな影響力を有していた。特に、接触時に快感情を抱いた、あるいはそのことを現在も強く記憶していると、現在の子どもへの関心が高かった。また同時に、過去に乳幼児について学ぶ、乳幼児に関する話を聞くといった間接的な接触経験を多く持つほど、現在の子どもへの関心は高かった。その一方、乳幼児と一緒に遊ぶ、乳幼児の世話をするとといった直接的な接触経験の影響は見られなかった。

花沢(1992)に代表される過去の接触経験が現在の子どもへの態度に及ぼす影響を検討した研究では、直接的な接触経験が子どもへの態度を肯定的なものにするとされてきた。

本論文の結果は、こうした先行研究と反する。この理由としては、接触経験の程度や頻度よりも、その際に抱いた気持ちの記憶の方が強い影響を持つ可能性が考えられる。つまり、乳幼児とのふれあいにおいて、何をどの程度経験したかという量的なものの影響よりも、そこで印象に残った、特にポジティブなエピソードがある方が、後の子どもへの態度に及ぼす影響が大きいと推測される。

例えば、いくら頻回に乳幼児と接触していたとしても、1度だけでも乳幼児から「○○くん／ちゃんは嫌い」といったネガティブな言葉を浴びせられれば、一気に快感情は減少し、不快感情が強く記憶に残るエピソードとなり、現在に至るまで子どもへの関心を低めることもあると思われる。他方、過去の乳幼児との接触が1回だけであったとしても、そこで楽しい感情を多く抱き、それを現在に至るまで記憶していれば、子どもへの関心を高めることもあると推測される。すなわち、経験の量よりも質が重要である可能性がある。このため、接触経験よりも接触時感情の方が子どもへの関心に及ぼす影響が大きかったと推測される。

一方で、乳幼児と一緒に遊ぶ、乳幼児の世話をするとといった直接的な接触経験が子どもへの関心に与える影響は見られなかったものの、乳幼児のことを学ぶ、乳幼児に関する話を聞くといった間接的な接触経験の影響が見られた。この理由として、直接的な接触経験は、乳幼児との相互作用が伴うため、様々な感情が生じやすく、エピソードが記憶されやすい経験であるためと推測される。他方、間接的な接触経験は、ある程度成長してから学校現場や親戚の集まり、友人や知人との交流を通して経験されるものであるためと推測される。換言すれば、間接的な接触経験は直接的な接触経験ほど乳幼児との相互作用がないため、直接的な接触経験よりも客観的になり、強い感情を抱きにくいのではないかと考えられる。すなわち、直接的な接触経験は感情を引き起こしやすい経験であり、接触時感情との一体化が進むため、その影響が接触時感情に吸収される。一方、間接的な接触経験は感情から切り離されて客観的な体験として経験されるため、接触時感情との一体化がなされず、独立して子どもへの関心に影響を及ぼしていたと考えられる。

以上のように、過去の乳幼児との接触経験よりも接触時感情の方が子どもへの関心に与える影響が大きいという結果は、先行研究における接触経験が子どもへの態度を肯定的にするという関連が疑似相関であったことを示唆するものであるといえる。実際には、接触経験以外にも接触時感情が大きな影響力を有しており、この点において、本論文では新たな知見を得たといえる。

以上に加えて、本研究では探索的に、対児感情、子ども観、他者意識が子どもへの関心に及ぼす影響について検討した。重回帰分析の結果、好意的な対児感情や、子どもに対するポジティブなイメージ、他者の気持ちや感情への関心の高さが子どもへの関心を高めることが明らかとなった。これらの分析は、あくまで子どもへの関心尺度の併存的妥当性を確認するために行ったものであるが、子どもや他者に対する様々な感情的、認知的、志向的な側面、つまり、心理的な側面が子どもへの関心に影響を及ぼすことを示すことができたといえよう。

以上のように本論文では、乳幼児との接触経験という経験的側面、接触時感情、対児感情、子ども観、他者意識といった心理的側面の双方が子どもへの関心に影響を与えていることを明らかにできた。

8-3-2 子どもへの関心が子育ての社会化志向に及ぼす影響

本論文では、子どもへの関心の高低が社会的にどのような意味を持つのか検討するため、子育ての社会化志向という概念を取り上げ、第7章においてそれを測定する尺度作成し、子どもへの関心との関連について検討した。その結果、子どもへの関心の高さが子育ての社会化志向を高めていた。すなわち、子どもと遭遇した際に生じる原初的反応である子どもへの関心は、実際に社会に存在する子どもや子育てに関する社会的問題への関心や意識、社会全体で子育てをすることへの肯定感や志向性にまで影響を及ぼすものであることが分かった。

従来の研究では、子どもへの関心を含む子どもへの態度全般は、あくまで従属変数として扱われてきており、子どもへの肯定的な態度が社会的にどのような意味を持つのか明確ではなかった。つまり、子どもへの肯定的な態度を有することが良いこと、望ましいこととする考えに基づいた研究がなされ、それ以上の検討はなされてこなかったのである。しかし本論文では、子どもへの関心を独立変数の側に置いた研究を行ったことで、子どもへの肯定的な態度が社会を生きる上での意味を示すことができた。子どもへの関心が高さは、社会全体で子どもの育ちを支えていこうとする姿勢を高める役割を持つことが明らかとなった。

また第7章では、身近に子どもや子育てをしている人が存在しなくても、子どもへの関心が高ければ、子育ての社会化志向も高いという結果が示された。今日の社会においては、少子化や核家族化、地域コミュニティの希薄化により、子どもや子どもをもつ人物との交

流が難しくなっている」と推測される。そのような状況においても、子どもへの関心を育むことができれば、社会全体で子どもの育ちを支えていく姿勢を高めることができるという結果は、子育ての社会化を進めるに当たって、重要な点であるといえる。

そして、将来自分の子どもが欲しいと思っていなくても、子どもへの関心を高めれば子育ての社会化志向も高くなるという結果も得られた。子どもをもたない・もてないライフスタイルが台頭する今日において、子どもをもたなくても、社会全体で子どもの育ちを支えていく姿勢を育むには、子どもへの関心を高めることが重要であることが分かった。

以上のように、子育ての社会化志向を高めるためには、子どもへの関心を高めることが重要であることが本論文の結果より示された。これは、子どもへの態度である子どもへの関心を独立変数の側に置くことによって初めて分かったことである。

8-3-3 関係性のモデル

以上をまとめると、過去の乳幼児との接触経験の一部、接触時の主にポジティブな感情、対児感情、子ども観、他者意識が子どもへの関心を高め、子どもへの関心の高さが子育ての社会化志向を高めるという関係が見られた。この関係性をモデル化し、図としてまとめたものが図8-1である。

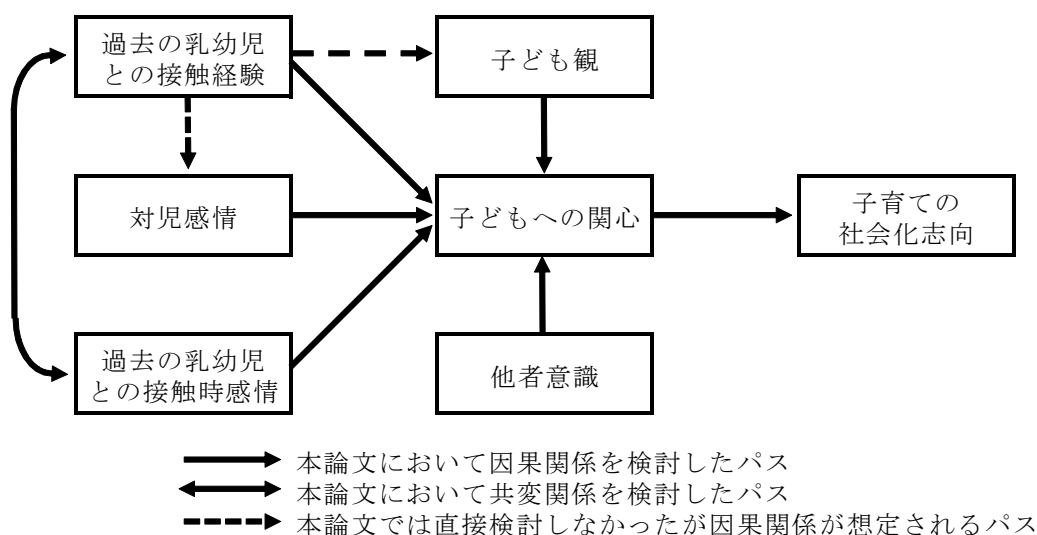


図8-1 本論文で明らかになった関係性モデル

すなわち、過去の経験としての乳幼児との接触経験と接触時感情が互いに影響しつつ、現在の子どもへの関心に影響を及ぼし、対児感情と他者意識も影響を与えている。さらに、子どもへの関心は子育ての社会化志向に影響を及ぼすというモデルである。なお、対児感情と子ども観は花沢（1992）や野村ら（2007）の指摘から考えて、過去の乳幼児との接触経験の影響を受けると推測されるが、本論文では直接的にそれらの関連について検討を行わなかった。これは子どもへの関心を主として検討したためである。

本論文では、尺度作成も並行して行ったこともあり、一度の調査で尋ねられる質問項目数の制約から、以上の関係性について因果モデルを立て、パス解析や共分散構造分析等により検討することはできなかった。しかし、逐次的な検討ではあったが、これまで従属変数に置かれることがもっぱらであった子どもへの態度の一部である子どもへの関心を媒介変数として想定し、個人の感情や認知、志向性である子どもへの関心が実際に社会の中に存在する子どもや子育てへの態度に対してどのような影響を及ぼしているのか検討でき、新たな知見を提供できたと考える。

8-4 教育への応用可能性

ここからは、本論文で実施した研究から得られた知見をもとに、教育への応用可能性について述べる。

8-4-1 中学・高校におけるふれあい体験学習への応用可能性

平成20年度改訂の学習指導要領（文部科学省，2008，2009）において、生徒が乳幼児と接触・交流する学習であるふれあい体験学習が中学校の家庭科において必修項目となり、高校の家庭科においても選択項目となった。平成29年に公示された新学習指導要領（文部科学省，2017）においても、ふれあい体験学習は引き続き中学校の家庭科の項目に盛り込まれている。

原田（2006）は、自分の子どもが生まれるまでに小さな子どもを抱いたり、遊ばせたりした経験がない母親は4人に1人、小さな子どもに食事を食べさせたり、おむつを替えたりした経験がない母親は半数以上に上ると報告している。さらに、小さな子どもの育児経験がよくあった母親の子どもは精神発達が良好であることや、子どもとの接触経験があった母親ほど、子どもが要求することへの理解度が高く、育児不安やストレスを低いことを報告している。そして、学校現場において子どもとふれあう機会を提供することが、将来、

親となったときの子育て支援，次世代育成支援，児童虐待を予防する方略として重要であると指摘している。

少子化により乳幼児との接触機会が減少している今日においては，学校という誰もが受ける教育の場において，人工的に乳幼児とふれあう機会を作る必要が生じているといえよう。ただし，単に生徒を子どもとふれあわせれば自動的に子どもへの態度が肯定的になるとはいえないことが，第6章の結果より示された。本論文では，過去の乳幼児と一緒に遊ぶ，乳幼児の世話をするといった直接的な接触経験のみでは，大学生時点での子どもへの関心を高める効果は見られなかった。しかし，接触時に快感情を抱く，あるいはそのことを強く記憶していることが子どもへの関心を高め，反対に，戸惑いや不快な感情は関心を低めていた。

このことから，単に乳幼児との接触機会を提供するのみでは不十分であることが分かる。乳幼児との接触がポジティブな感情を抱いた経験として思い出に残ることが重要である。そのためには，ふれあい体験学習後のふり返りが特に重要であると考えられる。生徒はふれあい体験学習中には乳幼児との交流に伴い，ポジティブ，ネガティブ双方の感情を経験すると思われる。もし，学習後のふり返りが十分に行われず，ネガティブな感情のみが記憶に残ることがあれば，それは後の子どもへの関心を低めることになりかねない。

しかし，ふり返りにおいては，ネガティブな感情を抱いたのであれば，なぜそのような感情を抱いたのか，乳幼児のどのような行動がそうした感情を引き起こすきっかけとなったのか，どのように対処すれば良かったのかといったことを教師やクラスメートが第3者の視点から分析し，助言し，フォローすることができる。そして，ネガティブな感情を抱いた理由の整理がつき，ネガティブな感情のみが強く残ることは少なくなると考えられる。また，教師やクラスメート，そして乳幼児との接触の様子を間近で見ていた保育者が，学習中の良かった点を指摘することも，学習の思い出をポジティブなものにするといえよう。

以上のように，ふれあい体験学習に関与した教師や保育者といった周囲の大人が体験について肯定的なフィードバックを与え，クラスメート同士で良かった点を指摘し合うことで，ふれあい体験学習がポジティブな感情を抱いた経験として記憶に残りやすくなり，後の子どもへの関心を高める効果を持つようになるといえる。

8-4-2 予防教育としての応用可能性

本論文では，第6章において過去の乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心

を高めることを示した。本節では、乳幼児とのふれあいが子どもへの関心を高めるのみならず、学校での不適応を減らし、予防教育として機能しうる可能性を検討する。

子どもへの関心は、その上位概念である養護性という対象への共感性にあたる。カナダの教育現場でのプログラムの1つに、乳幼児との接触機会を提供することが共感性を育み、学校でのいじめやキレるといった攻撃的行動を減らし、向社会的行動を増やすというものがある。この教育プログラムは「Roots of Empathy」（共感の根；共感教育）と呼ばれるもので、Gordon (2009)により提唱された。このプログラムは5歳から13歳（幼稚園から中学2年生）までが対象で、9か月間、週1回実施され、赤ちゃんについての学習、赤ちゃんとのふれあい、ふれあいについてのふり返りを通して、赤ちゃんや自分、他者の気持ちについて学ぶものである。Gordon (2009)によれば、このプログラムを経験することで、赤ちゃんのみならず、クラスメートを含むあらゆる人への共感性が高まり、学校における様々な不適応行動を減少させ、向社会的行動を増加するとされる。

日本の中学生を対象にこの教育プログラムを実施し、その効果を検証した研究としては、武田（2005）が存在する。研究の結果、プログラムに参加した生徒は赤ちゃんへの知識が増加し、向社会的行動が増え、自分や他者の感情がよくわかるようになったという報告が寄せられ、いじめ傾向が抑制されたとされる。つまり、日本においても効果的な教育プログラムであることが実証されている。

しかし、今日の教育現場において、9か月間、週1回をプログラムに割くというのは、時間的制約上、現実的ではない。そこで、すでに学習指導要領に組み込まれたふれあい体験学習を活用し、生徒に乳幼児との接触機会を提供するということが考えられる。学校現場において、乳幼児との接触機会を提供することは、長期的に見て、将来的な子どもへの関心や子育ての社会化志向を高める効果があるだけでなく、短期的な学校での不適応を減少させ、予防する可能性がある。すなわち、子どもへの関心を含む肯定的態度を育むことを目的としたふれあい体験学習には予防教育としての発展可能性も備えているといえる。

8-4-3 大学生のキャリア教育としての応用可能性

(1) 大学生における子育てを意識したキャリア教育の重要性

本論文では、一貫して研究対象を大学生としてきた。大学生を研究対象とした理由は、近い将来、子育てを直接的にも間接的にも担うようになる可能性が高く、子どもへの関心や子育ての社会化志向をそのための構えとして有しておく必要があると考えたためであった。

それでは、大学生にとって子どもへの関心や子育ての社会化志向を育むことは実際にどのような意義があるのでしょうか。本節では、大学生のキャリア教育という視点から、大学生において子どもへの関心や子育ての社会化志向を高めることの意味を考察する。

多くの大学生にとって卒業後の進路は就職であり、遅くとも大学3年生の時には、業界研究、企業研究、自己分析、企業説明会への参加といった就職活動とその準備を始める。大学によっては1年生の時からキャリア教育を行うところもある。また、アルバイトを行う学生も多くなる。つまり、大学生という年齢段階は、働くということがとても身近になる時期である。そして、卒業後の進路を考える際に、働くということがライフコースの一部として明確に位置づけられ、意識されるようになる。

しかし、就職活動や自己のキャリア形成に注意が向き、注力することは、働くことのみが卒業後の人生における主要な課題として意識されることにつながると思われる。つまり、卒業後に想定するライフコースの大部分を働くことが占めてしまい、やがて訪れる子育てがそこから抜け落ちてしまうこともあると推測される。そして、特にこの傾向は出産・育児が意識されにくい男子大学生で顕著な傾向であると考えられる。

働くことのみで意識が集中し、将来の子育てが意識から抜け落ちてしまえば、子育てが身近な事柄として感じられなくなり、子育ては自分にとって関係のないこととして認識されることもあるだろう。その結果、就職後、周囲で子育てをしている人がいても自分には関係ないことと考え、そうした人を支えることに関心が持てない、支援に積極的になれないという事態が発生すると思われる。同時に、周囲の子育てに関心が持てなければ、子どもや子育てに関する社会的問題への関心や意識も低くなるであろう。このことは、第7章において、身近に子どもや子育ての話聞ける人が存在しなければ、子育ての社会化志向が低かったという結果からも明らかである。

「はじめに」において述べたように、平均初婚年齢および第1子が生まれる平均年齢は年々高くなっている（厚生労働省、2015、2016a）。しかし、それでも平均的に見て大学卒業後、約10年以内には結婚し、子どもが生まれるのである。大学生にとって子育ては、決して遠い将来のことではないのである。しかし、近年の少子化や核家族化、地域コミュニティの希薄化、本田（2007）が指摘するような子育ての私的営み化による子育ての見えない化により、特に未婚の若者において子どもや子育てが身近なものではなくなっている。原田（2006）が指摘したように、半数以上の母親は自分の子どもが生まれて初めて育児を経験する。同様に、子どもをもって初めて、社会的な問題や状況を含めて子育ての現実を

知り、困惑したり困難の状況に陥ったりする者も多いだろう。しかし、子どもをもって初めて子育ての現実を知るのでは遅すぎると言わざるを得ない。実際の育児に直面する以前から子どもや子育てに関する知識を得ておく必要がある。そのためには、キャリア教育の一環として子どもとふれあったり、子育てをしている人々と話したりする機会を持つといったことが効果的であろう。こうした教育が将来、育児への移行をスムーズにさせ、育児と仕事の両立を促す可能性がある。また、女性のみならず男性も育児の当事者としての自覚と責任が芽生える機会になるといえる。

自分の子どもが生まれる前から、あるいは子どもをもつ意志がなくとも、子どもや子育てに関する現実や問題を知り、子育ての実情、社会的な問題を共有しておくことは、社会の構成員全体が子育てに何らかの形で参加し、支えるという子育ての社会化にもつながるといえる。子どもや子育てに関する知識を身に付けていれば、他者の子どもや子育てであっても、それが身近な存在となり、支援に積極的になるといえよう。

そして、子育ての社会化を目指す態度を高めるためには、乳幼児との接触経験を持ち、そこでできるだけ多くの楽しい経験を持ち、子どもに関心を持つようになることが大切である。乳幼児とふれあい、子どもへの関心を育むことが、子どもを知ることにつながり、他者の子どもや子育てに寛容で、支えようという態度につながり、子育ての社会化につながっていくのである。

(2) 働くことが目標のキャリア教育から子育ても踏まえたライフキャリア教育へ

大学生という年齢段階は、上述の乳幼児との接触が子どもへの関心を、子どもへの関心が子育ての社会化を高めるというプロセスを経験できる最後の教育機会の場である。つまり将来について、人生には働く以外に子育てをするという営みもあるということ、自分の子育てでなくとも他者の子育てに関与する、支えることがあることを知る最後の教育機会を得られる場なのである。

多くの大学生は、親に生活の援助をしてもらい、保護される立場にある。つまり、「育てられる者」としての存在である。そして、やがて親または周りの子育てをする人々の支え手となり、「育てる者」へと変化する。鯨岡（2002）は、子どもが生まれ、「育てられる者」から「育てる者」へと変化していく過程を「コペルニクスの転回」と呼び、人生の一大転換行事であり、生き方を大きく見直す契機となることを指摘している。金田（2003）は、まだ育てられている時代に、乳幼児とのかかわりの中から児童観、発達観、人間観を養い、命の重みを実感もって学ぶことは、将来、育てる側に回った時に大きな力になると述べて

いる。また、藤田（1999）は、教育学や保育学専攻ではない女子短期大学生に幼児の観察実習体験を持たせた結果、子どもとは違う大人としての自分の立場に気付き、大人としての視点から子どもと接することの重要性を認識するようになると指摘している。さらに、澤田ら（2013）は、託児・育児サークルに参加した保育者養成課程以外の女子大学生を対象に子ども観、子育て観の変化を検討した結果、子どもだけでなく、その親と交流し、子育ての話聞くことにより、子どもや子育て、結婚についての態度が多面的で身近なものに感じられるようになるとしている。

こうした先行研究から見ても、大学という年齢段階が「育てられる者」としての最後の段階であり、社会に出る前に子どもや子育てについての知識や見聞を広げておくことは、直接的も間接的にも子育てを担う側に回るために重要なことであるといえる。

大学生という年齢段階は、Levinson（1978）が指摘したように青年期後期に当たり、成人への過渡期に位置する。Erikson（1950）が述べたように、青年期はアイデンティティを確立することが主題の時期であり、大野（2010）が述べるように、将来のキャリアのためのスタートラインに立つ覚悟を決め、腹をくくる時期である。そうした時期に、将来の自身の仕事のことのみならず、次世代を育むことを学ぶことは、やがて訪れる子育てへの構えの涵養することにつながるといえる。将来のキャリア形成が明確に意識される時期であるからこそ、そのキャリアの一部として子どもと子育ての存在を組み込み、子どもへの関心を高め、子育ての社会化志向を高めることが、社会全体で子育てを支えるという子育ての社会化の実現に向かう初歩になるといえる。

専攻が多様化し、学習指導要領のような明確な教育ガイドラインが存在しない大学において、一律に子どもへの関心や子育ての社会化志向を高めるための教育プログラムを用意することは難しいかもしれない。しかし、就職活動支援などを通じて、卒業後は仕事をするだけでなく、直接的にも間接的にも子育て担うことがあるということを意識させるキャリア指導を行っていくことが子育ての社会化に向けて大きな意味を持つといえよう。就職し、働くことをゴールとしたキャリア教育だけではなく、子育ての支え手としての視点も含んだ人生を見渡すライフキャリア教育を行うことが大切なのである。これはワーク・ライフ・バランス向上のためにも重要といえる。

8-5 本論文で実施した研究の限界と今後の課題

8-5-1 子どもへの関心尺度について

本論文では子どもへの関心尺度を作成し、その信頼性と妥当性について検討した。妥当性については第3章での対児感情評定尺度との関連、第4章での子ども観尺度および他者意識尺度の関連、第5章での選好法により結果、次世代育成力尺度および養護性尺度との関連から、尺度の併存的妥当性と構成概念妥当性を多角的に検討できたといえる。

しかし、信頼性については信頼性係数のみを検討したのみであり、十分に検討したとは言い難い。子どもへの関心の上位概念である養護性は、大学生においては短い期間では変化しにくいことが岩治・井森（2011）で示されている。岩治・井森（2011）は、同一の女子大学生を対象に大学入学直後と2年生進級時において2回、岩治（2004）が作成した養護性尺度により測定した。その結果、両時期で尺度得点に大きな差はなかったことから、養護性尺度の信頼性を示されたとしている。よって今後は、子どもへの関心尺度についても再検査法や折半法等の手法を用いて、その信頼性を検討することが求められる。

ただし、再検査法により尺度の信頼性を検討する場合には留意点がある。糊澤・岩立（2011）は、養護性の尺度得点は高校期、大学期、妊娠期で変化すること、妊娠期においても初期、中期、後期では得点が増加することを示している。従って、再検査法により子どもへの関心尺度の信頼性を検討する場合には、1回目と2回目の測定の間子どもへの関心を特に高めるような出来事（例えば、乳幼児との頻繁な接触や特別なエピソードを伴う接触）がなかったかを考慮する必要がある。

また、本論文では、質問紙の作成過程で回答者が回答時に想起する子どものイメージを明確にする必要があったことから、大学生に「子ども」として最もイメージされる年齢段階を尋ねた。そして、3歳～6歳の幼児が最も「子ども」としてイメージされることを明らかにした上で、3～6歳の幼児に対する関心の程度を測定する尺度を作成した。

しかし、幼児に関心がある者は他の年齢層の子ども、例えば、乳児や小学校低学年の子どもにも関心があると推測される。幼児への関心の高低が、それ以外の年齢層の子どもへの関心の高低とどのような関連があるのかについては未検討である。3歳の幼児への関心が高ければ、1歳や2歳の歩き始めの時期の子どもへの関心も高いだろう。よって、多様な年齢層、特に未就学児全般への関心を測定できる尺度へと改訂していく必要があるといえる。そうすることで、多様な年齢層の子どもと子育てを対象とした子育ての社会化志向との関連を見る際に、より詳しい結果が得られるであろう。

本論文では、子どもへの関心が高いことが子育ての社会化志向を高めることを明らかにした。すなわち、子どもへの関心の高いことが社会全体での子育てを目指すに当たり望ましいという結果が得られた。しかし、本当に子どもへの関心を高めることが自他問わず、子育てを適応的なものにするのかという点について明らかになっていない。

子どもへの関心が高いために、子どもや子育てに関する肯定的な側面の情報のみに注目し、子どもや子育てを過度に理想化することもあるだろう。そうした理想とは異なる子どもや子育てと直面した時に、理想と現実の乖離から子どもや子育てに対してネガティブな感情が急激に高まることもあると思われる。子どもへの関心の高さが、実際に子どもとふれあったり、子育てに関わったりする際に適応的な行動や気持ちを導き得るのかという点については更なる検討が必要である。

8-5-2 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情について

本論文では過去の乳幼児との接触経験と接触時感情について検討する際に、回想法を用いて過去の接触頻度や感情について回答者に評定を求めた。よって、経験が過去のものであるほど、記憶が不明確になったり、忘却が起きたり、変容したりすることが想定される。特に、回想法は現在の自己の状態に基づいて評定されるため、接触時感情については記憶の変容の影響を受けやすいと思われる。

例えば、過去の主たる接触対象が弟妹であった場合、現在の弟妹との関係性から影響を受けることもあるといえる。従って、特に接触時感情については、実際に乳幼児と接触した後測定することが重要である。接触後の記憶が新鮮なうちに接触時感情を評定することは、尺度の信頼性や妥当性を高めることになる。また、子どもへの関心に対する影響について検討することで、例えば、乳幼児とのふれあいを効果的にする感情はどのようなものであるのかといった点について明らかにすることができよう。

このほかにも尺度の妥当性を検討する方法としては、過去の接触経験の評定においては、回答者の親といった近親者に回答者の過去の接触経験について評定を求め、回答者と近親者の回答を比較するといった方法により検討するといった方法も考えられる。

過去の乳幼児との接触経験と接触時感情は、現在の子どもへの態度に大きな影響を与えていることは先行研究からも、本論文の結果からも明らかである。接触経験と接触時感情を測定する尺度を、より精緻な、信頼性と妥当性が確かなものに高めていくことが、研究の信頼性を確立していくために必要である。

8-5-3 子育ての社会化志向尺度について

子育ての社会化志向尺度については、子どもへの関心尺度と同じく、その併存的妥当性は検討したものの、信頼性については信頼性係数を検討するのみであり、十分に検討できたとはいえない。本尺度についても再検査法や折半法等の手法により信頼性を確認する必要がある。

また、子育ての社会化志向尺度の実際の行動面との関連についても、本論文では検討しきれなかった。例えば、子育ての社会化志向が高い者では、実際に子どもに関するボランティアに参加する、街中で子連れの親子に親切にする、子どもや子育てに関する社会的問題への知識が豊富で、知識を得ることにも積極的であるというような「子育ての社会化行動」ともいべき行動をとる頻度が高いと予想される。子育ての社会化志向と実際に行動や知識の関連を検討することは、尺度の妥当性を高める1つの方法でとなりうる。

加えて、子育ての社会化志向の発達的变化についても本論文では未検討である。大学生時点での子育ての社会化志向の高さが、就職した後に子育て世代を含む多様な年齢層の人々と接する中で、子育ての社会化につながるような行動を見せるようになるのか、尺度の得点は変化するのかといった点を縦断調査により検討し、学生時代と社会人時代とでは子育ての社会化志向に変化が見られるのか検討する必要がある。また、学生、未婚者、既婚者、子どもがいる人々などにおける子育ての社会化志向の程度を検討することも大きな示唆を得ることにつながるだろう。すなわち、子育ての社会化志向を測定する年齢層を広げていくことが今後の課題となる。特に、中高年者における子育ての社会化志向を評価することは重要である。中高年者は多くの場合、すでに自身の子育てを終えている。孫が誕生する者もいる。そうしたライフステージの変化に伴う子育ての社会化志向の変化を検討していくことは、社会全体で子育てを支える社会の実現に向けて重要な示唆を得ることにつながるといえる。

しかし、本論文で作成した子育ての社会化志向尺度は大学生を対象として作成したため、項目の一部は幅広い年齢を対象とする場合には不向きなものもある。そこで今後、幅広い年齢の子育ての社会化志向を測定する際には、対象者の年齢と合うように項目を再検討、修正、精選することが必要となる。

さらに、本尺度を作成した2015年以降も以下に示すような子育ての社会化に関連する子どもや子育てに関する社会的な議論が次々と現れている。従って、子育ての社会化志向尺度も項目内容を時代に即した形に修正していく必要がある。

2015 年以降の子育ての社会化に関連する議論としては、育児の孤立化、待機児童問題、子育て支援への公的財源の投入に関する議論、子どもの貧困といったものが挙げられる。

育児の孤立化については、母親が育児や家事の全てを 1 人でこなすことを表す「ワンオペ育児」という言葉の広がりを見せ、人々の関心を集めている。藤田（2017）によると、この言葉が初めてツイッター上に現れたのは 2014 年 8 月とされ、2016 年にはポータルサイトの YAHOO!ニュースや毎日新聞で特集記事が組まれるなど、大きな反響を呼んだ。

待機児童問題については、2016 年のユーキャン新語・流行語大賞のトップ 10 に「保育園落ちた日本死ね」という一般の匿名投稿者がブログ記事に書き込んだ言葉が入ったことで世間の関心を集めた。この言葉については表現の過激さから否定的な捉え方をする人々も存在するが、多くの保護者や子育てに携わる人々の共感を得たからこそ、大きな広まりを見せたのであろう。また、この言葉の登場をきっかけに待機児童問題について多様な議論が巻き起こり、この問題が大きな社会問題であることを世間に印象付けた。そして、昨今は待機児童問題の解決には保育士不足や保育士の給与や労働時間などの処遇改善にも向き合う必要があるという議論がなされ始めている（待機児童や保育士の処遇問題については、前田（2017）が詳しい）。

子育て支援への公的財源の投入については、2017 年の衆議院議員総選挙において、2019 年に予定されている消費税の増税分を使い道の一部を保育・教育無償化に当てることの是非が焦点の 1 つとなった。今日、自治体によっては不妊治療にかかる医療費、出産費用、子どもの医療費の無償化など、公的財源の投入による様々な少子化対策事業・子育て支援が行われている。子どもや子育てに関わる問題に公的財源を投入するという議論は大きな政治的テーマになりつつある。

子どもの貧困対策については、地域の子どもや人々に対して無料または安価で食事を提供する「子ども食堂」が広がっている。また、東京都文京区は非営利団体（NPO）と連携して、子どものいる貧困世帯にフードバンク等を活用した「こども宅食」と呼ばれる食品の配送事業を行っており、その活動資金はふるさと納税を活用したクラウドファンディングにより賄われている（文京区、2017）。このように、地域住民が主体となったり、地域住民と行政が連携したり、全国の人々が活動資金を寄付したりすることによる子育て支援が広がりつつある。

以上のように、子どもや子育てに関する問題への社会の意識は日ごとに変化しており、年々人々の関心が高まりつつある。よって、子育ての社会化志向尺度についても時代に即

したものとなるように修正し続けていくことが必要といえる。

8-6 おわりに

8-6-1 リプロダクティブ・ライツと子育て

本研究では、一貫して「子ども」とは自分の子どもではなく、社会に存在する他者の子どもを意味し、子どもへの関心の定義においても、そのように規定してきた。

今日、若者を取り巻く環境は大きく変化している。非正規雇用の25歳から34歳の若者の割合は2000年以降上昇し続け、2002年には20.5%であったのが、2014年には28.0%に増えている（内閣府，2015）。経済的な理由から結婚はおろか異性との交際そのものをためらう状況が存在することは、原田（2015）においても指摘されている。実際、国立社会保障・人口問題研究所（2016）によれば、18～34歳の未婚者を対象とした調査で、未婚男性の69.8%、未婚女性の59.1%が異性の交際相手がいないと回答しており、過去最高となった。さらに、結婚意志がある未婚者に1年以内に結婚するとしたら何が障害になるか尋ねたところ、「結婚資金」とする回答が約4割で最も多かった。

結婚できたとしても経済的な不安定さや将来的な収入の見通しへの不透明さから子どもをもてない・増やせない状況が続くこともある。国立社会保障・人口問題研究所（2011）の調査によると、理想の子ども数を持たない理由として、第1に経済的理由が挙げられている。加えて、国立社会保障・人口研究所（2016）の報告のように、子どもをもたない生活を目指す夫婦も年々増加している。結婚から15年～19年の夫婦で子どもがいない家庭は、1977年には3.0%であったが、1997年には3.7%と微増し、2005年には5.6%とにわかに増え始め、2010年には6.4%にまで上昇した。2015年には6.2%と微減したが、代わりに出生子ども数が1人の夫婦が18.6%と過去最高となった。この理由としては、上述した通り経済的理由のほか、晩婚化に伴い、子どもをもつこと自体を諦める場合もあるだろう。このように子どもをもたない夫婦生活が世間的にも認知されつつあり、そもそも子どもをもたないという選択を積極的にする夫婦も存在すると思われる。つまり、子どもを消極的にも積極的にももたない選択をする夫婦が増えているのである。

子どもをもつ・もたないというのは夫婦の問題であり、選択の結果である。他者が容易に口をはさむべき問題ではないし、子どもをもたない生活が許容される風潮も見られるようになってきた。ただし、子どもをもちたくても社会経済的理由によりもてないのであれば、当然問題である。しかし、リプロダクティブ・ライツの観点から考えて、子どもをも

つ・もたないという判断は夫婦によって主体的になされるべきである。ライフスタイルが多様化している今日において、子どもをもつ・もたないは夫婦のライフスタイルに基づいて選択されるべきである。少子化問題がクローズアップされ、社会や国が一丸となって子どもを増やすことを規範化してしまうような社会は好ましくない。第2次世界大戦下において、国策として子どもを増やすことを半ば強制したような社会にはいけない。あくまで、子どもは夫婦の選択に基づいて、もつ・もたないが決められるべきである。その上で、子どもを望む夫婦が安心して子どもをもつことができる社会を目指すべきなのである。

8-6-2 子育ての社会化を促す教育の可能性

しかし、結婚しない、自分の子どもをもたないからといって、他者が行っている子育てに関心を示さず、子育てをしている人々を考慮せずに生活したり、同僚の子育てに対して無理解であったり、仕事を妨げるものとして忌避したりすることは問題である。

近年、電車内でベビーカーを畳むことの是非についてインターネット上で一般の人々も巻き込んで論争が繰り広げられることが度々ある。こうした世論を受け、国土交通省(2014)は、公共交通機関においてベビーカーを畳まずに利用できることを表す「ベビーカーマーク」を導入した。しかし、内閣府(2016a)の世論調査によると「ベビーカーマーク」の認知度は低く、マークの意味を知らない人は全体の64.0%に上る。

また、子どもの声を騒音として捉え、新規保育所の建設に地域住民から反対運動が起きたり、公園での子どもの声を騒音として認定するように求める裁判が起きたりすることもある。こうした流れを受け、東京都では2015年に都の騒音条例を改正し、子どもの声を数値規制の対象から外した。市民レベルでは、赤ちゃんが泣いても気にせず子育てを応援することの意思表示をするステッカーを配布する取り組みが自治体、企業、大学などの賛同を得て始まっている(エキサイト, 2017)。

自分は子育てをしない、あるいは自分の子育ては終わったからといって、子育てに関わりようとする姿勢が失われるというのであれば、子育ての社会化を目指すことはできない。自分の子育ても、社会全体での子育ても一体のものとして考えられるような社会を実現することが重要である。

そのためには、教育の力は欠かせないだろう。1999年の男女共同参画社会基本法の成立を機に、平成10年改訂の中学校学習指導要領(文部科学省, 1998)、平成11年改訂の高校学習指導要領(文部科学省, 1999)では、家庭科において家族のあり方や人間関係、男女

が相互に協力して、家族の一員としての役割を果たし、家庭を築くことの重要性について指導することになった。内閣府（2014）によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に賛成か反対かを問う質問には、反対とする者が年々増加しており、特に 20 代においては半数以上の 56.1%が反対としている。これは 50 代（反対 57.3%）に次いで多い。この結果は、教育が一定の成果を収めていることの証左であるとも解釈できよう。子育ての社会化に関しても同様に、教育において自他問わず子育てに関わること、支援することの重要性や、子育てを生活に密着した営みの 1 つとして指導していくことができれば、人々の意識を変えることができる可能性がある。

しかし、内閣府（2016b）は、少子化の原因を若者の雇用の不安定化にあるとして、幼児期から高等教育に至るまで一貫したキャリア教育が必要であるとしている。キャリア教育を中心に据えている以上、働くことが人生の中心であるという観念が植えつけられ、そこからは脱却できずに子育てという人生において重要なもう 1 つの営みに気付く機会を失うことにもつながりかねない。働くという意味でのキャリア教育も重要であるが、人生設計の 1 つとして、子育ても考慮に入れた教育を行っていくことが、仕事と子育ての両立、社会の中に子どもや子育てが存在することが当然のこととして受け入れられる社会の実現に向けて必要なことであるといえる。

8-6-3 人口減少社会において子どもへの関心を高め、子育ての社会化を促す意味

日本の人口は 2008 年をピークに減少に転じた。これから親になる世代、すでに親になった世代の一部は「1.57 ショック」以降に生まれ、すでに少子化が進行した社会に生まれ育ってきた人々である。親となることができる若者の人口が減少している以上、今後、劇的な社会的変化が生じない限り、子どもの数が大きく増えることはなく、人口は減少し続けるであろう。経済や雇用環境が年々不安定化している今日の日本において再びベビーブームが来ることは想定しづらい。もちろん、様々な子育て支援施策に工夫を凝らすことは重要である。その成果か、合計特殊出生率は 2005 年の 1.26 を底として緩やかな回復傾向が続いている。しかし、出生数そのものは減少し続けており、依然として少子化は深刻な社会問題であり続けている。すなわち、様々な子育て支援施策により少子化の速度を落とすことはできても、すでに子どもを産む世代が少ない以上、少子化を止め、再び子どもの数を大きく増やすことは今の日本社会では不可能に近い。

子どもが減るということは将来、この社会を維持していく者が減り、社会制度や経済に大きな影響を与えるということだけに留まらない。私たちとその祖先が受け継いできた文

化の荒廃と消滅を招きかねないのである。生産年齢人口が減少することは経済が停滞し、社会インフラの維持や増え続ける高齢者を介護する人材が不足するといった事態を招くだけではない。これまで受け継がれてきた文化や伝統、知識や技術も次世代に受け継がれにくくなっていくということである。実際、過疎化した地方では地域の伝統行事の維持が困難になっている。そして何より、子どもが減るということは我々がはるか昔から受け継いできた命のバトンを次の世代に渡すことができなくなるということの意味する。そうであるからこそ、子どもは貴重な存在であり、社会の大人みんなで育むべき存在なのである。

当然ではあるが、いまこの瞬間に生まれた子どもは大人である私たちより長く生きると予想される。私たち大人が生きることはないであろう 22 世紀を生きる存在となり、その先へと命をつないでいく存在である。すなわち、子どもとは私たちの未来そのものなのである。未来を託される子どもたちを育むために安心して子育てでき、子育てしやすい社会を実現するためには何が必要であるのかということ私たちは真剣に考える時期に来ている。

なぜ、私たちは子どもを見ると「かわいい」と感じて関心が生じ、養育感情が芽生えるのであろうか。微笑みかけたり、話しかけたり、世話を焼いたりしたくなるのであろうか。Lorenz (1943)が発見した、こうしたヒトが持つ生得的な子どもへの反応の意味を私たちは再考する必要がある。こうした一連の反応は、自分の子ども、他人の子ども関係なく子どもを育む能力や構えが私たちに本能的に備わっていることを表しているといえよう。根ヶ山 (2012) は、沖縄県の離島である多良間島に残る、小学生くらいの子どもの3歳くらいまでの幼児の面倒を見る「守姉」という風習に着目し、母親以外の子育て（アロマザリング）について考察を加えている。また、この島では子どもの多さから島民全体が子どもの育ちを支える、子どもに関連する行事に参加するといった習慣が多く残っていることを紹介している。日常的に他者の子どもや子育てとふれあっていれば、子どもの特性や子育ての実情を知ることにつながり、子どもや子育てへの関心や寛容さが高まるであろう。

今日の核家族化、都市化、地域コミュニティが希薄化した多くの日本の都市や地域においては、こうした地域全体で子どもを育てる、他者の子どもや子育てに積極的に関与する風習を再興することは難しいことかもしれない。しかし、境 (2014) が提言したような、働くことが主題の会社コミュニティを社会の中心とし、子育てをその周辺に追いやってしまった社会のあり方から、家庭や地域からなり、幅広い世代を巻き込んだ子育てコミュニティを社会の中心とし、その周辺に働くことをおく社会を形成していくことが、ワーク・ライフ・バランスの実現や子育ての社会化に大きな役割を果たすといえる。つまり、働く

ことが中心の社会構造を，子育てを中心としたものに変化させていくことで，多様な世代が子育てに関与することを促すのである。

人生の価値として働くこと以外に子育てを取り上げる教育を進めること，子育てを主体としたコミュニティを再構築すること，そして何より，子どもを目にした時の純粋な感情を大事にすることこそ，今日の社会で忘れられ，失われつつある子どもを社会全体で育むということを再び促すことにつながるであろう。

子どもとの接触やそこでの肯定的な感情を通して子どもへの関心を持つことで，自分の子どもに縛られず他者の子どもや子育てにも寛容となり，子育ての社会化を目指す姿勢を持てるようになる。これが子育てしやすい社会を実現し，子どもをもつことへの抵抗感や負担感を減らし，少子化の流れを弱めることに資するといえる。

子どもを育むことは，私たちの未来を育むことであるということを，多くの人が認識できる社会を実現できるようにしていくことが必要なのである。

引用文献

- 足立 智昭・村井 憲男・岡田 斉・仁平 義明 (1985). 母親の乳児の泣き声の知覚に関する研究 教育心理学研究, 33, 146-151.
- 青木 まり (1988). 母子関係の前段階——女子青年における「母性準備性」—— 心理学評論, 31, 76-87.
- 青木 まり・松井 豊 (1988). 青年期後期における女性性の発達Ⅱ——異性性と母性準備性の構造について—— 北海道教育大学紀要. 第一部. C, 教育科学編, 39, 85-94.
- 荒川 志津代 (2005). 子どものかわいさに関する子ども観の比較——1980年と2005年の場合—— 日本家政学会誌, 56, 729-736.
- 安積 陽子 (2008). 看護系・福祉系大学生の養護性形成に関する一考察——性別と乳幼児接触体験との関連から—— 甲南女子大学研究紀要創刊号 看護学・リハビリテーション学編, 1, 23-28.
- 蘆田 智恵 (2010). 多用な対象に向けられるナーチュランスに関する研究——親準備期と親期に注目して—— 広島大学大学院教育学研究科紀要, 59, 41-50.
- Beier, E. G., Izard, C. E., Smock, C. D., & Tougas, R. R. (1953). Response to the human face as a standard stimulus. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 126-131.
- ベネッセ (2015). 子育てにかかる費用のすべてを解説します ベネッセ教育情報サイト Retrieved from <http://benesse.jp/kosodate/201509/20150910-2.html> (2017年11月7日)
- Berman, P. W. (1976). Social context as a determinant of sex differences in adults' attraction to infants. *Developmental Psychology*, 12, 365-366.
- Berman, P. W. (1980). Are women more responsive than men to the young? A review of developmental and situational variables. *Psychological Bulletin*, 88, 668-695.
- Berman, P. W., Cooper, P., Mansfield, P., Shields, S., & Abplanalp, J. (1975). Sex differences in attraction to infants: When do they occur? *Sex Roles*, 1, 311-318.
- Berman, P. W., Monda, L. C., & Myerscough, R. P. (1977). Sex differences in young children's responses to an infant: An observation within a day-care setting. *Child Development*, 48, 711-715.
- Berman, P. W., Goodman, V., Sloan, V. L., & Fernander, L. (1978). Preference for infants among black and white children: Sex and age differences. *Child Development*, 49, 917-919.

- Blakemore, J. E. O. (1998). The influence of gender and parental attitudes on preschool children's interest in babies: Observations in natural settings. *Sex roles, 38*, 73-94.
- Brosch, T., Sander, D., & Scherer, A. R. (2007). That baby caught my eye... Attention capture by infant faces. *Emotion, 7*, 685-689.
- 文京区 (2017). 『こども宅食』プロジェクトにご協力ください。——子どもたちに笑顔をお届けよう—— 文京区
Retrieved from <http://www.city.bunkyo.lg.jp/kyoiku/kosodate/takushoku.html> (2017年11月7日)
- Davis, H. M. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology, 10*, 85.
- Davis, H. M. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology, 44*, 113-126.
- 江上 園子 (2004). 「母性愛」から「『母性愛』信奉傾向」へ——実り多き実証研究に向けた「母性」概念再考の試み—— 人間文化論叢, 7, 185-193.
- 江上 園子 (2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 発達心理学研究, 16, 122-134.
- 江上 園子 (2007). “母性愛” 信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響——職業要因との関連—— 心理学研究, 78, 148-156.
- エキサイト (2017). 「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクト ウーマンエキサイト Retrieved from <http://woman.excite.co.jp/welovebaby/> (2017年11月7日)
- Emde, R. N., Osofsky, J. D., & Butterfield, P. M. (1993). *The IFRRL pictures: A new instrument for interpreting emotions*. Connecticut: International Universities Press.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.
- Feldman, S. S., & Nash, S. C. (1978). Interest in babies during young adulthood. *Child Development, 49*, 617-622.
- Feldman, S. S., & Nash, S. C. (1979a). Changes in responsiveness to babies during adolescence. *Child Development, 50*, 942-949.
- Feldman, S. S., & Nash, S. C. (1979b). Sex differences in responsiveness to babies among mature adults. *Developmental Psychology, 15*, 430-436.
- Feldman, S. S., Nash, S. C., & Cutrona, C. (1977). The influence of age and sex on responsiveness

- to babies. *Developmental Psychology*, 13, 675-676.
- Fogel, A., Melson, G. F., Toda, S., & Mistry, J. (1987). Young children's responses to unfamiliar infants: The effects of adult involvement. *International Journal of Behavioral Development*, 10, 37-50.
- 藤井 志保・今川 真治・村上 かおり・掛 志穂・東 加奈子・権田 あずさ (2013). 幼児ふれあい体験学習における積極的対児行動を促す指導方法に関する研究(2)——生徒の振り返りレポートの分析から—— 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 41, 205-212.
- 藤田 文 (1999). 「幼児の観察実習」が女子短大生の子ども観におよぼす影響 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 37, 79-86.
- 藤田 結子 (2017). ワンオペ育児——わかってほしい休めない日常—— 毎日新聞出版
- 深谷 和子・麻生 明子・馬場 道子 (1972). 幼児のイメージ尺度作製の試み(その1) 教育相談研究, 12, 23-48.
- 深谷 和子・馬場 道子・麻生 明子 (1973). 幼児のイメージ尺度作製の試み(その2) 教育相談研究, 13, 33-46.
- 深谷 和子・馬場 道子・麻生 明子 (1974). 幼児のイメージ尺度作製の試み(その3) 教育相談研究, 14, 25-40.
- 福田 佳織 (2004). 母親の被養育経験と乳児への敏感性ととの関連 家族心理学研究, 18, 85-98.
- 福田 佳織・柳沢 志津子 (2010). 一般大学生の乳幼児への関与行動に及ぼす要因の探求Ⅰ 東洋学園大学紀要, 18, 63-73.
- 福田 佳織・柳沢 志津子 (2011). 一般大学生の乳幼児への関与行動に及ぼす要因の探求Ⅱ 東洋学園大学紀要, 19, 1-9.
- Frodi, A. M., & Lamb, M. E. (1978). Sex differences in responsiveness to infants: A developmental study of psychophysiological and behavioral responses. *Child development*, 49, 1182-1188.
- Frodi, A. M., Lamb, M. E., & Wille, D. (1981). Mothers' responses to the cries of normal and premature infants as a function of the birth status of their own child. *Journal of Research in Personality*, 15, 122-133.
- Frodi, A. M., Lamb, M. E., Leavitt, L. A., & Donovan, W. L. (1978). Fathers' and mothers' responses to infant smiles and cries. *Infant Behavior and Development*, 1, 187-198.

- Frodi, A. M., Murray, A. D., Lamb, M. E., & Steinberg, J. (1984). Biological and social determinants of responsiveness to infants in 10-to-15-year-old girls. *Sex Roles, 10*, 639-649.
- Frodi, A. M., Lamb, M. E., Leavitt, L. A., Donovan, W. L., Neff, C., & Sherry, D. (1978). Fathers' and mothers' responses to the faces and cries of normal and premature infants. *Developmental Psychology, 14*, 490-498.
- Fullard, W., & Reiling, A. M. (1976). An investigation of Lorenz's "babyness". *Child Development, 47*, 1191-1193.
- Glocker, M. L., Langleben, D. D., Ruparel, K., Loughhead, J. W., Gur, R. C., & Sachser, N. (2009). Baby schema in infant faces induces cuteness perception and motivation for caretaking in adults. *Ethology, 115*, 257-263.
- Goldberg, S., Blumberg, S. L., & Kriger, A. (1982). Menarche and interest in infants: biological and social influences. *Child Development, 53*, 1544-1550.
- Gordon, M. (2009). *Roots of empathy: Changing the world child by child*. New York: The Experiment.
- 郷式 徹 (1999). 子どもの心的状態を読みとる大人の能力の個人差について——障害児および1歳児についての記述の分析—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45, 149-461.
- 後藤 さゆり・奥田 雄一郎・平岡 さつき・呉 宣児・大森 昭生・前田 由美子 (2010). 青年期における「親になること」の教育的意義の検討 共愛学園前橋国際大学論集, 10, 207-218.
- 花沢 成一 (1977). 妊娠・育児による母性感情の推移——母性心理学研究 VII—— 日本教育心理学会総会発表論文集, 19, 452-453.
- 花沢 成一 (1978). 妊産時苦悩度と母性感情との関係——母性心理学研究 IX—— 日本教育心理学会総会発表論文集, 20, 138-139.
- 花沢 成一 (1992). 母性心理学 医学書院
- 原田 正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援——兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待防止—— 名古屋大学出版会
- 原田 曜平 (2015). 20代男女「恋人いない＝過去最高」の理由は？ 東洋経済 ONLINE Retrieved from <http://toyokeizai.net/articles/-/88966> (2017年11月7日)
- Harlow, H. F. (1971). *Learning to love*. San Francisco: Albion

- 菱谷 純子・落合 幸子・池田 幸恭・高木 有子 (2009). 青年期の次世代育成能力尺度の開発とその検討 母性衛生, 50, 132-140.
- 菱谷 純子・落合 幸子・池田 幸恭・高木 有子 (2010). 青年期の次世代育成能力尺度と親からの存在肯定メッセージとの関連 母性衛生, 50, 552-559.
- 本田 和子 (2007). 子どもが忌避される時代 なぜ子どもは生まれにくくなったのか 新曜社
- 本田 和子 (2009). それでも子どもは減っていく ちくま新書
- 星野 修一・日瀨 淳子・吉田 圭吾 (2008). 大学生における子ども観に関する一考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2, 33-42.
- 井上 寿美 (2012). 子育ての社会化における親による養育責任——子育てに関する責任の所在と担われ方の検討をとおして—— 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要, 16, 29-35.
- 井上 カーレン 果子・濱田 庸子・深津 千賀子・滝口 俊子・小此木 啓吾 (1990). 乳児の写真から情緒を認知する能力の測定 家族療法研究, 7, 30-40.
- 井上 義朗・深谷 和子 (1983). 青年の親準備性をめぐって 周産期医学 13, 2249-2252.
- 井上 義朗・深谷 和子 (1986). 親になること——現代青年の子ども意識・親意識—— 小林 登・小嶋 謙四郎・原 ひろ子・宮澤 康人(編) 新しい子ども学 2 育てる (pp.71-94) 海鳴社
- 石川 敦子・吉川 はる奈 (2012). 中学校「技術・家庭科」の乳幼児ふれあい体験学習における効果と課題 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要, 11, 153-160.
- 伊藤 葉子 (2003). 中・高校生の親性準備性の発達 日本家政学会誌 54, 801-812.
- 伊藤 葉子 (2004). 中・高校生の保育体験学習の教育的効果 乳幼児教育学研究, 13, 1-12.
- 岩治 まとか (2004). 青年期における養護性の検討 東京家政大学大学院文学研究科修士論文 (未公刊)
- 岩治 まとか (2009). 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要, 49, 133-142.
- 岩治 まとか・井森 澄江 (2011). 女子大学生における親準備性の発達(4) ——2年進学時の養護性について—— 東京家政大学研究紀要, 51, 121-128.

- 嘉数 朝子・島袋 恒男・當山 りえ・喜友名 静子・友利 久子・廣瀬 真喜子 (1997).
大学生の「子ども観」に関する研究 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部, 51,
207-213.
- 神谷 哲司 (2002). 乳児の泣き声に対する父親の認知 発達心理学研究, 13, 284-294.
- 金井 嘉宏・入戸野 宏 (2015). 共感性と親和感情による“かわいい”感情の予測モデル構築 パーソナリティ研究, 23, 131-141.
- 金谷 有子 (2008). 大学生と幼児との世代間交流の重要性についての探索的研究 埼玉
学園大学紀要 (人間学部篇) , 8, 119-127.
- 金田 利子 (2003). 乳幼児期から青年期までの「保育教育」 金田 利子 (編) 育
てられている時代に育てることを学ぶ (pp.36-43) 新読者社
- 片山 美由紀・戸田 弘二 (1994). 対人関係 堀 洋道・山本 真理子・松井 豊 (編)
心理尺度ファイル——人間と社会を測る—— (pp.350-399) 垣内出版
- 川井 尚・恒次 欽也・大藪 泰・金子 保・白川 園子・二木 武 (1983). 乳児—仲
間関係の縦断的研究 1——初期の発達の変化—— 小児の精神と神経, 23, 35-42.
- 数見 隆生・土井 豊・伊藤 常久 (2009). 宮城教育大学学生のジェンダー意識の現状
と課題——一般大学生との比較調査から—— 宮城教育大学紀要, 44, 109-123.
- 小嶋 秀夫 (1982). 児童観研究序説——児童観研究の意義と方法—— 三枝 孝弘・田
畑 治 (編) 現代の児童観と教育 (pp. 4-41) 福村出版
- 小嶋 秀夫 (1989). 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界
(pp. 187-207) 有斐閣
- 小嶋 秀夫 (2001). 心の育ちと文化 有斐閣
- 国土交通省 (2014). 「公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会」決定
事項の公表について 国立社会保障・人口問題研究所 Retrieved from
http://www.mlit.go.jp/report/press/sogo09_hh_000083.html (2017年11月7日)
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2011). 第14回出生動向基本調査 (結婚と出産に関す
る全国調査) 国立社会保障・人口問題研究所 Retrieved from
<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.asp> (2017年11月7日)
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015). 現代日本の家族変動——第5回全国家庭動向調
査—— 厚生労働統計協会
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2016). 第15回出生動向基本調査 (結婚と出産に関す

- る全国調査) 国立社会保障・人口問題研究所 Retrieved from
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp (2017年11月7日)
- 厚生労働省 (2015). 平成26年人口動態調査 厚生労働省 Retrieved from
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL71050103.do;jsessionid=31rLXvhH2DgvSrBJ0rGKsGS0pXhynqVwj2DfBhx56kY7ZBvq0t9d!-1367848011!1512348938?_toGL71050103_&listID=000001137964&forwardFrom=GL71050101 (2017年11月7日)
- 厚生労働省 (2016a). 平成27年人口動態統計月報年計(概数)の概況 厚生労働省
 Retrieved from
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai15/index.html> (2017年11月7日)
- 厚生労働省 (2016b). 平成27年国民生活基礎調査の概況 厚生労働省 Retrieved from
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/index.html> (2017年11月7日)
- 厚生労働省 (2017). 平成28年人口動態統計月報年計(概数)の概況 厚生労働省
 Retrieved from
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai16/index.html> (2017年11月7日)
- 古谷野 亘 (1988). 数学が苦手な人のための多変量解析がガイド 川島書店
- 鯨岡 峻 (2002). <育てられる者>から<育てる者>へ——関係発達の視点から——
 日本放送出版協会
- 糊澤 令子 (2008). きょうだいにおける養護性(nurturance)の差異 日本教育心理学会
 総会発表論文集, 50, 519.
- 糊澤 令子 (2009). 1985年から現在までの我が国の養護性nurturanceの研究動向 日本
 女子大学大学院人間社会研究科紀要, 15, 201-211.
- 糊澤 令子・岩立 志津夫 (2010). 妊娠後期における初産婦の養護性nurturance低下の
 原因——妊婦への面接調査を通して—— 家族心理学研究, 24, 54-66.
- 糊澤 令子・岩立 志津夫 (2011). 養護性(nurturance)における高校から, 大学, 妊娠
 期に至る発達変化と妊娠週数による相違 小児保健研究, 70, 291-297.
- 糊澤 令子・福本 俊・岩立 志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験
 が現在の養護性(nurturance)へ及ぼす影響 教育心理学研究, 57, 168-179.
- 久世 敏雄・和田 実・鄭 暁斉・浅野 敬子・後藤 宗理・二宮 克美・宮沢 秀次・

- 宗方 比佐子・内山 伊知郎・平石 賢二・大野 久 (1988). 現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋大学教育学部紀要・教育心理学科, 35, 21-28.
- Lacey, B. C., & Lacey, J. I. (1978). Two-way communication between the heart and brain: Significance of time within the cycle. *American Psychologist*, 33, 99-113.
- Lehmann, V., Huis in't Veld, E. M., & Vingerhoets, A. J. (2013). The human and animal baby schema effect: Correlates of individual differences. *Behavioural Processes*, 94, 99-108.
- Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. New York: Alfred A. Knopf.
- Lorenz, K. Z. (1943). Die angeborenen Formen möglicher Erfahrung. *Zeitschrift für Tierpsychologie*, 5, 235-409.
- 前田 正子 (2017). 保育園問題——待機児童, 保育士不足, 建設反対運動—— 中央公論新社
- Maestripieri, D., & Pelka, S. (2002). Sex differences in interest in infants across the lifespan: A biological adaptation for parenting? *Human Nature*, 13, 327-344.
- Maestripieri, D., Roney, J. R., DeBias, N., Durante, K. M., & Spaepen, G. M. (2004). Father absence, menarche and interest in infants among adolescent girls. *Developmental Science*, 7, 560-566.
- 牧野 カツコ・中西 雪夫 (1989). 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第1報) ——「準備状態」の測定尺度の作成—— 日本家庭科教育学会誌, 32, 51-53.
- 正高 信夫 (1995). ヒトはなぜ子育てに悩むのか 講談社現代選書
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex: Psychology Press.
- Melson, G. F., & Fogel, A. (1982). Young children's interest in unfamiliar infants. *Child Development*, 53, 693-700.
- 文部科学省 (1998). 中学校学習指導要領
- 文部科学省 (1999). 高等学校学習指導要領
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領
- 文部科学省 (2009). 高等学校学習指導要領
- 文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領
- 森田 明美 (2000). 子育ての社会化——今, これから—— 子供家庭福祉情報, 16, 50-54.

- 永澤 道代 (1996). 母親の子ども観と養育態度の関係 追手門学院大学心理学論集, 4, 11-21.
- 長屋 佐和子・濱田 庸子・井上 果子・深津 千賀子 (2008). 日本版 IFEEL Pictures の研究——関係性評価カテゴリー作成の試み—— 精神分析研究, 52, 18-29.
- 内閣府 (2005). 平成 17 年版国民生活白書 子育て世代の意識と生活 内閣府 国立印刷局
- 内閣府 (2014). 女性の活躍推進に関する世論調査 内閣府大臣官房政府広報室
Retrieved from <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-joseikatsuyaku/index.html> (2017 年 11 月 7 日)
- 内閣府 (2015). 平成 27 年版子ども・若者白書 (全体版) 内閣府
Retrieved from <http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27honpen/index.html> (2017 年 11 月 7 日)
- 内閣府 (2016a). ベビーカーマークに関する世論調査 内閣府大臣官房政府広報室
Retrieved from <http://survey.gov-online.go.jp/tokubetu/tindex-h27.html> (2017 年 11 月 7 日)
- 内閣府 (2016b). 平成 28 年版少子化社会対策白書 (全体版) 内閣府
Retrieved from
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2016/28pdfhonpen/28honpen.html> (2018 年 11 月 7 日)
- 内閣府政策統括官 (2009). 海外で普及している子育て製品・手法等に関する調査及びそれについての国内の潜在的ニーズに関する意識調査報告書
- 内閣府政策統括官 (2012). 都市と地方における子育て環境に関する調査 内閣府
Retrieved from
http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/cyousa23/kankyo/index_pdf.html (2017 年 11 月 7 日)
- 中川 愛・松村 京子 (2010). 女子大学生における乳児へのあやし行動——乳児との接触経験による違い—— 発達心理学研究, 21, 192-199.
- 中嶋 明子・砂上 史子・日景 弥生・盛 玲子 (2004). 高校家庭科における保育体験学習者の意識変容 (第 1 報) ——保育体験学習者の意識変容過程の構図化—— 日本家庭科教育学会誌, 46, 351-361.
- 中嶋 一恵・中 淑子・林田 りか・宮下 弘子・森藤 香奈子・山下 智美・本多 直

- 子 (2005). 小児看護初学者が子どもに抱くイメージの構造 県立長崎シーボルト大学 看護栄養学部紀要, 6, 49-58.
- 中島 美那子・秋葉 美奈子・飯田 裕香里・金澤 優 (2015). 「社会全体で子育て」は可能なのだろうか——母親の意識から—— 茨城キリスト教大学紀要, 49, 123-135.
- 中西 雪夫・牧野 カツコ (1989). 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第3報) ——「準備状態」の構成要素の分析と保育教育への示唆—— 日本家庭科教育学会誌, 32, 61-65.
- 中西 由里・粟津 幹子 (1996). 「養護性 (nurturance)」に関する一研究——幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較—— 椙山女学園大学研究論集, 27, 9-18.
- 中西 由里・粟津 幹子 (1997). 「養護性 (nurturance)」に関する一研究 (2) ——妊婦と未婚学生の比較—— 椙山女学園大学研究論集, 28, 81-89.
- 根ヶ山 光一 (2012). アロマザリングの島の子どもたち——多良間島子別れフィールドノート—— 新曜社
- 野村 幸子・河上 智香・長谷 典子・藤原 千恵子 (2007). 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 7, 169-180.
- 小原 倫子 (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連 発達心理学研究, 16, 92-102.
- 岡田 恵子 (2010). 医療保育科学生の入学から卒業までの各実習における子ども観の変化 川崎医療短期大学紀要, 30, 69-75.
- 岡本 祐子・古賀 真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, 4, 159-172.
- 大日向 雅美 (1988). 母性の研究 川島書店
- 大野 久 (2010). 青年期のアイデンティティの発達 大野 久 (編) エピソードでつかむ青年心理学 (pp. 38-76) ミネルヴァ書房
- 扇原 貴志 (2015). 大学生における過去の乳幼児との接触経験と現在の子どもへの関心および次世代育成力との関連——接触時の感情という視点を加えて—— 日本発達心理学会第26回大会発表論文集, p2-039.
- 扇原 貴志 (2016). 大学生における子育ての社会化志向尺度の作成——社会全体で子どもを育もうとする姿勢を測る—— 日本パーソナリティ心理学会第25回大会発表論

文集, 98.

扇原 貴志 (2017). 乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響
学校教育学研究論集, 36, 1-15.

扇原 貴志・村井 潤一郎 (2012). 大学生の子どもへの関心とその関連要因 子育て研
究, 2, 3-12.

扇原 貴志・上村 佳世子 (2013). 大学生の子どもへの関心とその規定要因 日本発達
心理学会第24回大会発表論文集, 98.

扇原 貴志・上村 佳世子 (2015). 子どもへの関心尺度の得点と幼児の画像への選好と
の関連 パーソナリティ研究, 24, 173-176.

Roney, J. R., Hanson, K. N., Durante, K. M., & Maestripieri, D. (2006). Reading men's faces:
women's mate attractiveness judgments track men's testosterone and interest in infants.
Proceedings of the Royal Society of London B: Biological Sciences, 273, 2169-2175.

Sagi, A. (1981). Mothers' and Non-Mothers' Identification of Infant Cries. *Infant Behavior and
Development*, 4, 37-40.

斎藤 和志 (1999). 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集, 24,
67-77.

境 治 (2014). 赤ちゃんにきびしい国で, 赤ちゃんが増えるはずがない。 三輪舎

桜井 茂男 (1986). 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, 34,
54-58.

佐々木 綾子 (2007). 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑
誌, 8, 41-50.

佐々木 綾子・末原 紀美代・町浦 美智子 (2009). 青年期男女の親性を育てる乳幼児
との継続接触体験の内容分析による評価 (第1報) 思春期学, 27, 270-282.

佐々木 綾子・小坂 浩隆・末原 紀美代・町浦 美智子・波崎 由美子・松木 健一・
定藤 規弘・岡沢 秀彦・田邊 美智子 (2010a). 親性育成のための基礎研究 (1)
——青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による
評価—— 母性衛生, 51, 290-300.

佐々木 綾子・小坂 浩隆・末原 紀美代・町浦 美智子・波崎 由美子・松木 健一・
定藤 規弘・岡沢 秀彦・田邊 美智子 (2010b). 親性育成のための基礎研究 (2)
——青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による

- 男女差の評価——母性衛生, 51, 406-415.
- 澤田 英三・上手 由香・奥野 雅子 (2013). 保育体験は女子大学生の子ども観・子育て観をどのように変えるのか? 安田女子大学紀要, 41, 103-114.
- さわやか福祉財団 (2011). 子どもの主体的な遊びにより人間力を育むための調査研究事業報告書 公益社団法人さわやか福祉財団 Retrieved from http://sawayakazaidan.or.jp/asobi_hiroba/data/report_2010.pdf (2017年11月7日)
- 関 秀俊・丸山 彩香・亀田 幸枝・島田 啓子・西村 真実子 (2004). 子どもに対する世話体験や触れ合い学習が青年期の対児感情や育児観に及ぼす影響 思春期学, 22, 520-526.
- 篠原 郁子 (2006). 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発——母子相互作用との関連を含めて—— 心理学研究, 77, 244-252.
- 相馬 直子 (2004). 「子育ての社会化」のゆくえ——「保育ママ制度」をめぐる政策・保育者の認識に着目して—— 社会福祉学, 45, 35-45.
- 総務省統計局 (2017). 第25章 教育 日本の統計2017 総務省統計局 Retrieved from <http://www.stat.go.jp/data/nihon/25.htm> (2017年11月7日)
- Sternglanz, S. H., Gray, J. L., & Murakami, M. (1977). Adult preferences for infantile facial features: An ethological approach. *Animal Behaviour*, 25, 108-115.
- 菅 眞佐子 (2002). 子ども観の形成に関する研究——専門教育を受けることで子どもイメージはどう変化するか—— 滋賀大学教育学部紀要. I, 教育科学, 52, 85-94.
- 菅野 幸恵 (2001). 母親が子どもをイヤになること: 育児における不快感情とそれに対する説明づけ 発達心理学研究, 12, 12-23.
- Sugawara, M., Toda, M. A., Shima, S., Mukai, T., Sakakura, K., & Kitamura, T. (1997). Premenstrual mood changes and mental health in pregnancy and the post partum period. *Journal of Clinical Psychology*, 53, 225-232.
- 砂上 史子・日景 弥生・中嶋 明子・盛 玲子 (2005). 高校家庭科における保育体験学習者の意識変容(第2報)——生徒の感想文にみる保育体験学習者の経験内容の分析—— 日本家庭科教育学会誌, 48, 10-21.
- 鈴木 幹子・清水 祥子・伊藤 裕子 (2005). 女子青年における育児性の発達 児童学研究: 聖徳大学児童学研究紀要, 7, 89-94.
- 高濱 裕子・野澤 祥子 (2011). 歩行開始期における親の変化と子どもの変化(量的ア

- ブローチ) 氏家 達夫・高濱 裕子(編) 親子関係の生涯発達心理学 (pp.141-174)
風間書房
- 高橋 有里・桐田 隆博 (2006). 乳児の泣き声が育児中の母親に及ぼす心理生理的影響
——育児ストレスとの関連—— 電子情報通信学会技術研究報告, 106, 69-74.
- 高橋 有里・桐田 隆博 (2011). 乳児の泣き声が父親・母親に及ぼす心理生理的影響 電
子情報通信学会技術研究報告, 110, 7-12.
- 武田 信子 (2005). 育児力の低下を防ぐ子育て教育・共感教育プログラム「共感の根」
の導入と効果の研究 平成 14 年度—平成 15 年度 文部科学省科学研究費補助金 基
盤研究 C2 研究結果報告書
- 瀧川 郁美・中見 仁美・桂田 恵美子 (2012). 大学生の親性準備性と乳児の泣き声に
対する反応 臨床教育心理学研究, 38, 1-6.
- 登張 真稲 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元視点による検討 発達心理学研究,
14, 136-148.
- 藤後 悦子 (2005). 子育て中の親の「他人の子ども」へのナーチュランス(養護性)と
その形成プロセスに関する研究 子ども環境学研究, 1, 86-95.
- 藤後 悦子 (2006). 中学生の「子どもへのナーチュランス」を促進するプログラム開発
コミュニティ心理学研究, 10, 53-68.
- 藤後 悦子 (2007). 「発達教育プログラム」が子どもへのナーチュランスと社会的子育
て観に及ぼす影響 子ども環境学研究, 3, 84-91.
- 辻 平治郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房
- 牛田 聡子・高木 修・神山 進・阿部 久美子・辻 幸恵・房岡 純子 (2002). 着
装規範に関する研究(第 10 報)——規範的着装行動に対する他者反応と着
装感情の関係とその個人差—— 繊維製品消費科学, 43, 739-748.
- 渡邊 彩子・工藤 五月 (2003). 中学生の乳幼児接触経験と保育に対する意識 群馬大
学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 38, 207-218.
- 山口 香織・松村 京子 (2009). 小学生の日本版 IFEEL Pictures に対する反応 小児保
健研究, 68, 39-45.
- 山口 のり子・尾形 由起子・樋口 善之・松浦 賢長 (2013). 「子育ての社会化」に
ついての研究——ソーシャル・キャピタルの視点を用いて—— 日本公衆衛生誌, 60,
69-78.

- 山本 由紀子 (2016). 「子育ての社会化」と子どもの育ち 太成学院大学紀要, 18, 83-88.
- 吉田 道雄・佐藤 静一 (1991). 教育実習生の児童に対する認知の変化——実習前, 実習中, 実習後の「子ども観」の変化—— 日本教育工学雑誌, 15, 93-99.
- 吉田 俊和・元吉 忠寛・北折 充隆 (2000). 社会的迷惑に関する研究 (3) ——社会考慮と信頼感による人の分類と迷惑行為との関連—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (人間発達科学心理学), 47, 35-45.
- 吉田 俊和・安藤 直樹・元吉 忠寛・藤田 達雄・廣岡 秀一・斎藤 和志・森 久美子・石田 靖彦・北折 充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 53-73.
- 吉田 由美・梶山 祥子・草場 ヒフミ・中島 登美子・田村 佳士枝 (1993). 看護学生の子ども観——子どもとの関係性の見方と接触経験の程度との関連—— 日本小児看護研究学会誌, 2, 39-47.
- 吉澤 千夏・大瀧 ミドリ (2011). 教員養成課程在籍学生の子ども観に関する一考察 上越教育大学研究紀要, 30, 221-233.
- 吉澤 千夏・大瀧 ミドリ (2012). 教員養成課程在籍学生の子ども観に関する一考察 (2) ——「かわいい」をめぐって—— 上越教育大学研究紀要, 31, 277-284.
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2015). 「2014年大学生の意識調査」概要報告 全国大学生生活協同組合連合会 Retrieved from <http://www.univcoop.or.jp/press/mind/report-mind2014.html> (2017年11月7日)

謝 辞

まず、研究にご参加いただいた多くの学生の皆様に深く感謝いたします。皆様のご協力があつて、本論文における一連の研究を実施することができました。

主指導教員および本論文の主査として多くのご助言とご協力を賜りました首藤敏元先生（埼玉大学）、副指導教員および副査として貴重なご指摘を多く賜りました岩立京子先生（東京学芸大学）、中下富子先生（埼玉大学）、副査として本論文をご審査いただき、中間発表会や最終発表会で多くのご意見を賜りました松寄洋子先生（千葉大学）、吉川はる奈先生（埼玉大学）に心より感謝申し上げます。先生方のご指摘・ご意見があつて、本論文をより学位論文として洗練されたものにすることができました。

本論文には、私の卒業論文研究および修士論文研究の一部が含まれており、それらの一部はいくつかの学会機関誌に論文として採択されました。卒業論文研究における指導教員であり、私が初めて学会機関誌に論文を投稿した際には多くのご指導・ご助言を賜りました村井潤一郎先生（文京学院大学）には、心理学の研究手法・論文執筆のいろはを教わりました。また、質問紙調査の際には貴重な授業時間内での調査をご快諾いただきました。深く感謝申し上げます。また、修士論文研究における指導教員であり、博士課程進学後も学会機関誌に論文を投稿する際には多くのご指導・ご助言を賜りました上村佳世子先生（文京学院大学）に深く感謝申し上げます。先生からは研究のことだけでなく、研究者としてのあり方、立ち振る舞いといった学問の世界で生きていくことの奥深さや厳しさ、そして楽しさを学びました。

本論文の一連の研究を実施するに当たり、多くの先生方、学生の皆様のご協力をいただきました。伊藤裕子先生（文京学院大学）には、質問紙調査の実施に際して心理学科以外でも調査が行えるようにご協力いただきました。先生のお力添えがあつて、幅広い専攻の学生に調査を行うことができました。文野洋先生（文京学院大学）には、複数回に渡って貴重な授業時間内での調査にご協力いただきました。寺菌さおり先生（埼玉大学）、小田倉泉先生（埼玉大学）、石本豪先生（新潟医療福祉大学）、高橋美登梨先生（東京学芸大学大学院）にも授業内での調査実施にご協力いただきました。さらに、埼玉大学教育学部乳幼児教育専修の学生の皆様には調査に回答していただける友人・知人の方々を多くご紹介いただきました。多くの先生方・学生の皆様のご協力を賜りましたことに深くお礼いたします。

また、一連の研究に様々な角度から、時には鋭いコメントをしてくれた友人・知人の皆様に感謝いたします。東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科というところは、同じ教育学でも様々な分野の研究をする学生で構成されています。修士課程までは心理学という限られた分野の殻の中で小さくまとまっていた私に彼・彼女たちは幅広い見地からコメントを寄せていただき、私の考えを大きく広げてくれました。様々な研究分野の皆様とお話することを通して、本論文をより学際性の高いものにすることができたと思います。

以上のように、本論文の執筆に当たって多くの先生方・皆様からご指摘・ご意見を賜りました。私の力量不足から全てのご意見を本論文に反映させることができなかったことには悔いが残ります。しかし、いただいたご意見は私の中にしっかりと取り込まれ、息づいています。この先の確かな土台となることは間違いありません。

最後に、ここまで私を辛抱強く支え、見守ってくれた両親と祖父母に深く感謝いたします。特に両親には長い学生生活の間、経済面・精神面の両面から多大な援助を受けました。時には学業を続けることについて意見が衝突することもありました。しかし、研究に行き詰まった時、将来への不安に苛まれた時、最も身近で支えてくれたのは他ならぬ両親です。また、研究に対して素人目線から鋭い指摘やコメントをくれたことも多々ありました。学問の世界は閉鎖的なものです。ただでさえ専門的で難解な用語や表現、理論は専門外の人々にはなおのこと伝わりにくいものです。研究のことを両親や祖父母と話していると、素朴な疑問や考えをたくさん話してくれました。これまでの経験を語ってくれたこともありました。いわば、「世の中代表」として多くのコメントをくれたのです。どのように書けば専門外の人々にも理解してもらえるか多くの示唆をもらい、考えさせてくれました。両親と祖父母の理解と支えがなければ、私がここまで研究を続けることは到底できませんでした。

多くの皆様のご協力をいただけたことは、とても幸運なことでした。私ひとりの力ではどうにもできないことを可能にしてくれたのは皆様の支えがあったからです。おかげさまで、一連の研究を1つの博士論文としてまとめることができました。重ね重ね深くお礼いたします。1つの研究にとことん向き合う時間と経験は苦しく辛いことも多かったです。いま思い返してみればとても幸せで大切なものでした。こうした機会を与えてくださったことに心から感謝いたします。ありがとうございました。

2018年3月21日

扇原 貴志